

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

鳥取県西伯郡名和町

門前上屋敷遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

鳥取県西伯郡名和町

門前上屋敷遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、名和町にある門前上屋敷遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡、溝によって整然と区画された中世前期の集落跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団
理事長 有田 博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取―島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

名和淀江道路は、西伯郡名和町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「名和中畝遺跡」、「名和飛田遺跡」、「門前上屋敷遺跡」、「門前第2遺跡」の4遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「門前上屋敷遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが「一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」として平成16年度に実施した^{もんぜんかみやしき}門前上屋敷遺跡調査報告書である。
2. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、以下のとおりである。
西伯郡名和町大字門前字若宮1304ほか
3. 本発掘調査では、2466m²を調査した。
4. 本報告書における方位、座標値は、公共座標第V系の座標値である。また、レベルは海拔標高を表す。
5. 本報告書に掲載した地図は、名和町発行の1/2,500地形図、および国土地理院発行の1/25,000地形図を縮小して使用した。
6. 本発掘調査にあたり、出土した鉄関連遺物の分類をたたら研究会委員 穴澤義功氏に、石材鑑定を遠藤勝壽氏にそれぞれお願いした。また、白石純氏、金原正明氏には玉稿を賜った。記して深謝いたします。
7. 本発掘調査にあたり、遺跡の航空写真、現地における基準点測量、出土した木器・炭化物の樹種同定、花粉化石分析、植物珪酸体分析、石器の実測・浄書の一部をそれぞれ専門業者に委託した。
8. 掲載した遺構図面は文化財主事および調査補助員が作成したものを整理作業員が浄書を行った。
9. 遺物の実測、浄書は文化財主事および整理作業員が行った。各段階で文化財主事が検討を行った。
10. 遺構および遺物の写真撮影は文化財主事および調査員が行った。
11. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、および出土遺物などは鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
12. 本報告書の作成は文化財主事および調査員が協議して行い、森本が編集した。文責は各項目の文末に記した。
13. 現地調査および報告書の作成にあたっては上記の方々ほかに、多くの方々からご指導、ご助言およびご支援いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

池澤俊幸（高知県教育委員会） 角田徳幸・守岡正司・宮本正保（島根県埋蔵文化財調査センター）
佐伯純也（米子市文化事業団） 高橋 学（立命館大学教授） 辻 信広（名和町教育委員会） 西尾
克己（島根県教育庁） 宮地淳子（奈良文化財研究所客員研究員） 百瀬正恒（前 京都市埋蔵文化財
研究所） 山上雅弘（兵庫県埋蔵文化財調査事務所） 深瀬亜紀

凡 例

- 遺跡の略称はMNKとした。
- 現場で採取した図面、写真などの記録類、遺物の注記にはすべて遺跡略称および調査時点の遺構番号を記載している。参照の際には下記に記載した新旧遺構対照表をご覧ください。
- 遺構の呼称は、遺構の呼称に付与すべき「跡」、「状遺構」を省略した。例えば「竪穴住居跡1」は「竪穴住居1」、「溝状遺構1」は「溝1」と表現した。
- 本報告書における遺物の縮尺は下記のとおりである。
番号のみ：土器、土製品 1/3または1/4
S：石器 1/1・1/2・2/3・1/3 F：鉄製品、鉄滓 1/3
C：青銅製品 1/3 W：木製品 1/6
- 本文中、挿図および写真図版の遺物番号は一致する。
- 遺物実測図のうち須恵器は断面を黒塗り、瓦質土器は網掛け、それ以外は白抜きで表した。
- 遺構、遺物の時期決定には下記の文献を参照した。
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』木耳社
森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
山本信夫 2000『大宰府条坊跡』XV 太宰府市教育委員会
乗岡 実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』
九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』

新旧遺構対照表

縄文時代

旧遺構名	新遺構名
SK27	土坑1
SK26	土坑2
SK10	土坑3
SK16	土坑4
SK17	土坑5
SK23	土坑6
SK22	土坑7

弥生時代中期

旧遺構名	新遺構名
SI3	竪穴住居1
SI2	竪穴住居2
SI7	竪穴住居3
SI6	竪穴住居4
SI1	土坑8
SK20	土坑9
SI4	土坑10
SI5	土坑11
SK21	土坑12

近世

旧遺構名	新遺構名
SK1	土坑33
SK2	土坑34
SK9	土坑35
SD5	溝19
SD3	溝20

中世

旧遺構名	新遺構名
SK18	土坑13
SK19・SD7	土坑14
SK3	土坑15
SK4	土坑16
SK5	土坑17
SK6	土坑18
SK8	土坑19
SK32	土坑20
SK34	土坑21
SK38	土坑22
SK29	土坑23
SK33	土坑24
SK36	土坑25
SK13	土坑26
SK11	土坑27
SK12	土坑28
SK37 (SK13-2)	土坑29
SK13上層①	土坑30
SK13上層②	土坑31
SK31	土坑32

中世

旧遺構名	新遺構名
SD11	溝1
SD10	溝2
SD9	溝3
SD1	溝4
SD6	溝5
SD4	溝6
SD2	溝7
SD12	溝8
SD8	溝9
SD24	溝10
SD20	溝11
SD21	溝12
SD13	溝13
SD14	溝14
SD23	溝15
SD22	溝16
SD16	溝17
SK28	溝18
ピット列	柵列1
SD17-1・2	柵列2
耕作痕	耕作痕

目 次

序・序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(西川)	1
第2節 調査の経過	(西川)	1
第3節 調査体制	(森本)	3

第2章 位置と環境

第1節 地質学的、地理的環境	(浜田)	4
第2節 歴史的環境	(浜田)	4

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

第1節 調査地の堆積	(森本)	7
1、調査地の地形		
2、調査地の堆積		
第2節 1区の調査	(森本)	12
第3節 縄文時代と時期不明の遺構・遺物		
1、概要	(森本)	13
2、検出した遺構・遺物	(西川・森本)	13
3、調査地内出土縄文土器	(森本)	17
遺物観察表(縄文時代)		18
第4節 弥生時代中期の遺構・遺物		
1、概要	(森本)	19
2、検出した遺構・遺物	(西川・森本)	19
3、調査地内出土弥生土器	(森本)	36
第5節 古墳時代から古代の遺物	(森本)	36
ピット計測表(1)		37
遺物観察表(弥生時代中期から古代)		40
第6節 中世の遺構・遺物		
1、概要	(森本)	47
2、検出した遺構・遺物	(西川・森本)	47
ピット計測表(2)		71
3、調査地内出土中世土器	(中森)	72
遺物観察表(中世)		75
第7節 近世の遺構・遺物		
1、概要	(森本)	80
2、検出した遺構・遺物	(西川・森本)	80
遺物観察表(近世)		81
第8節 調査地内出土石製品・鉄関連遺物	(森本)	83
石製品観察表		88
石製品構成表		88
鉄関連遺物観察表		91

第4章 特論

第1節 門前上屋敷遺跡から出土した木製品・炭化物の樹種	パリノ・サーヴェイ	94
第2節 門前上屋敷遺跡出土土器の胎土分析	白石 純	98
第3節 門前上屋敷遺跡における環境考古学分析	金原 正明	103
第4節 花粉分析・植物珪酸体分析	パレオ・ラボ	112
1、門前上屋敷遺跡の花粉化石群集		
2、門前上屋敷遺跡の植物珪酸体		

第5章 まとめ

第1節 中世前期の遺物について	中森 祥	120
第2節 門前上屋敷遺跡における集落の変遷	森本 倫弘	125

図版

挿図目次

- 図1 調査地位置図
- 図2 調査地周辺地名
- 図3 周辺の遺跡分布図
- 図4 遺跡周辺の地形
- 図5 4・7区土層断面図
- 図6 5・6区土層断面図
- 図7 1～4区土層断面図
- 図8 土坑1および出土遺物
- 図9 縄文時代遺構全体図
- 図10 土坑2・4～6
- 図11 土坑3および出土遺物
- 図12 土坑7
- 図13 土坑7出土遺物
- 図14 調査地内出土遺物（縄文時代）
- 図15 弥生時代中期遺構全体図
- 図16 竪穴住居1および出土遺物
- 図17 竪穴住居2
- 図18 竪穴住居2床面直上出土遺物
- 図19 竪穴住居3
- 図20 竪穴住居4b
- 図21 竪穴住居4a
- 図22 竪穴住居4出土遺物
- 図23 土坑8出土遺物
- 図24 土坑8
- 図25 土坑9
- 図26 土坑9遺物出土状況図
- 図27 土坑9底面直上出土遺物
- 図28 土坑9⑭層（焼土層）直上出土遺物
- 図29 土坑9出土遺物
- 図30 土坑10⑤層出土遺物
- 図31 土坑10出土遺物
- 図32 土坑10
- 図33 土坑11
- 図34 土坑11③層出土遺物
- 図35 土坑11出土遺物
- 図36 土坑12
- 図37 土坑12出土遺物
- 図38 P136出土遺物
- 図39 調査地内出土遺物（弥生時代～古代）
- 図40 中世遺構全体図
- 図41 土坑13
- 図42 土坑14および出土遺物
- 図43 B17～19グリッド周辺V層検出遺構平面図
- 図44 土坑15～19
- 図45 土坑16・18・19出土遺物
- 図46 土坑20～22
- 図47 土坑23および出土遺物
- 図48 土坑24および出土遺物
- 図49 土坑25および出土遺物
- 図50 土坑26および出土遺物
- 図51 土坑27
- 図52 土坑28
- 図53 土坑29
- 図54 土坑30
- 図55 土坑31および出土遺物
- 図56 土坑32および出土遺物
- 図57 B17～F22グリッド周辺V層検出遺構概念図
- 図58 溝1・2および溝1出土遺物
- 図59 溝3および出土遺物
- 図60 溝4および出土遺物
- 図61 B17～19グリッド周辺V層検出遺構概念図
- 図62 溝5
- 図63 溝6・7および出土遺物
- 図64 溝8および出土遺物
- 図65 溝9
- 図66 溝9遺物出土状況
- 図67 溝9出土遺物
- 図68 溝10
- 図69 溝11・12
- 図70 溝9出土鉄関連遺物
- 図71 溝14および出土遺物
- 図72 溝13および出土遺物
- 図73 溝13遺物出土状況図
- 図74 溝15および出土遺物
- 図75 溝16および出土遺物
- 図76 溝17
- 図77 溝18および出土遺物
- 図78 柵列1
- 図79 柵列2出土遺物
- 図80 柵列2
- 図81 耕作痕
- 図82 ピット出土遺物
- 図83 調査地内出土遺物（中世前期）
- 図84 調査地内出土遺物（中世後期1）
- 図85 調査地内出土遺物（中世後期2）
- 図86 溝19および出土遺物
- 図87 溝20
- 図88 溝20出土遺物
- 図89 B24・C24グリッド近世遺構全体図
- 図90 土坑33
- 図91 土坑34
- 図92 土坑35および出土遺物
- 図93 調査地内出土遺物（近世）
- 図94 調査地内出土石器（1）
- 図95 調査地内出土石器（2）
- 図96 調査地内出土石器（3）
- 図97 調査地内出土石器（4）
- 図98 調査地内出土鉄関連遺物
- 図99 鉄関連遺物構成図（1）
- 図100 鉄関連遺物構成図（2）
- 図101 弥生中期の各遺跡との比較（K-Ca）
- 図102 弥生中期の各遺跡との比較（Rb-Sr）
- 図103 中世土器の器種別による胎土比較（K-Ca）
- 図104 中世土器の器種別による胎土比較（Rb-Sr）
- 図105 中世土器（土師器）の各遺跡との胎土比較（K-Ca）
- 図106 中世土器（土師器）の各遺跡との胎土比較（Rb-Sr）
- 図107 門前上屋敷遺跡の3区溝9断面における花粉ダイアグラム
- 図108 門前上屋敷遺跡の3区溝9断面における主要珪藻ダイアグラム
- 図109 花粉化石分布図
- 図110 3区の機動細胞珪酸体分布図
- 図111 4区の機動細胞珪酸体分布図
- 図112 中世前期遺物変遷図
- 図113 弥生時代中期の遺構概念図
- 図114 中世前期遺構変遷図（第1～3段階）
- 図115 中世前期遺構変遷図（第4～6段階）

図版目次

- 1-1 遺跡周辺の地形 (南東から)
- 2 遺跡周辺の地形 (北から)
- 2 溝 9 礫出土状況 (東から)
- 3-1 B17~19グリッド周辺V層上面検出遺構群 (北から)
- 2 溝 8・9 (西から)
- 3 柵列 2 礎盤石出土状況 (北から)
- 4-1 中世前期貿易陶磁器
- 2 中世後期貿易陶磁器
- 5 調査地内出土遺物 (中世後期)
- 6 近世陶磁器
- 7-1 調査地周辺の地形 (北西から)
- 2 調査地周辺の地形 (東から)
- 8-1 調査地周辺の地形 (東から)
- 2 1区完掘状況 (南西から)
- 9-1 1区北壁土層断面 (南から)
- 2 2区完掘状況 (南から)
- 10-1 5区完掘状況 (南から)
- 2 3区完掘状況 (北西から)
- 11-1 4区完掘状況 (西から)
- 2 6区完掘状況 (南から)
- 12 7区完掘状況 (南西から)
- 13-1 土坑 1 (南西から)
- 2 土坑 1 礫出土状況 (南西から)
- 3 土坑 1 壁溝土層断面 (南から)
- 4 土坑 1 土層断面 (東から)
- 5 土坑 3 (南から)
- 6 土坑 3 検出状況 (南西から)
- 7 土坑 1・3 出土遺物
- 14-1 土坑 4 (南東から)
- 2 土坑 4 土層断面 (南東から)
- 3 土坑 5 (西から)
- 4 土坑 5 土層断面 (西から)
- 5 土坑 6 土層断面 (南東から)
- 6 土坑 7 (北から)
- 7 土坑 7 検出状況 (北東から)
- 8 土坑 7 土層断面 (西から)
- 15-1 土坑 7 遺物出土状況 (西から)
- 2 土坑 7 出土遺物
- 16-1 調査地内出土遺物 (縄文時代)
- 2 竪穴住居 1・2・4 出土遺物
- 17-1 調査地周辺の地形 (南東から)
- 2 調査地周辺の地形 (西から)
- 3 土坑 9・10・11 (南西から)
- 4 竪穴住居 1 (南西から)
- 18-1 竪穴住居 1 (北東から)
- 2 竪穴住居 1 土層断面 (南から)
- 19-1 竪穴住居 1 P 2 遺物出土状況 (南西から)
- 2 竪穴住居 1 P 2 炭化材 (炭 1) 出土状況 (南西から)
- 3 竪穴住居 1 P 2 炭化材 (炭 1) 出土状況 (南西から)
- 4 竪穴住居 1 P 2 完掘状況 (南から)
- 5 竪穴住居 1 P 1 土層断面 (北東から)
- 6 竪穴住居 1 P 1 遺物出土状況 (北東から)
- 7 竪穴住居 1 P 3・6 土層断面 (南から)
- 8 竪穴住居 1 P 5 土層断面 (南から)
- 20-1 竪穴住居 4 a (北から)
- 2 竪穴住居 4 b (北東から)
- 21-1 竪穴住居 4 土層断面 (北西から)
- 2 竪穴住居 4 P 2 土層断面 (南西から)
- 3 竪穴住居 4 P 1 出土遺物 (北西から)
- 4 竪穴住居 4 出土遺物
- 5 竪穴住居 2 (北から)
- 22-1 竪穴住居 2 土層断面 (西から)
- 2 竪穴住居 2 遺物出土状況 (南西から)
- 3 竪穴住居 3 P 4 土層断面 (北東から)
- 4 竪穴住居 3 (北から)
- 23-1 土坑 8 (東から)
- 2 土坑 8 土層断面 (南から)
- 3 土坑 8 遺物出土状況 (南から)
- 4 土坑 8 遺物出土状況 (北東から)
- 24 土坑 8 出土遺物
- 25 土坑 10 出土遺物
- 26-1 土坑 10 ⑤層遺物出土状況 (東から)
- 2 土坑 10 土層断面 (東から)
- 3 土坑 10 ④層炭化物出土状況 (北から)
- 4 土坑 10 出土遺物
- 27-1 土坑 11 遺物出土状況 (南から)
- 2 土坑 11 (北西から)
- 3 土坑 11 土層断面 (北東から)
- 4 土坑 11 遺物出土状況 (南西から)
- 5 土坑 11 炭化物 (炭 16) 出土状況 (南東から)
- 28-1 土坑 9・10 (北から)
- 2 土坑 9 焼土検出状況 (北西から)
- 29-1 土坑 9 炭化物 (炭 3・4・6) 出土状況 (北から)
- 2 土坑 9 炭化物 (炭 2) 出土状況 (北東から)
- 3 土坑 9 炭化物出土状況 (北東から)
- 4 土坑 9 炭化物出土状況 (北西から)
- 5 土坑 9 遺物出土状況 (東から)
- 6 土坑 9 土層断面 (南東から)
- 7 土坑 12 遺物出土状況 (北から)
- 30 土坑 9・11 出土遺物
- 31-1 土坑 12 出土遺物 (1)
- 2 土坑 12 出土遺物 (2)
- 3 土坑 12 出土遺物 (3)
- 32 調査地内出土遺物 (弥生時代中期~古墳時代)
- 33-1 土坑 14 (南東から)
- 2 土坑 14 遺物出土状況 (北から)
- 3 土坑 14 出土遺物 (1)
- 4 土坑 14 出土遺物 (2)
- 5 土坑 13 (北東から)
- 6 土坑 15 (東から)
- 7 土坑 16 (南から)
- 8 土坑 16 土層断面 (南から)
- 34-1 土坑 17 (東から)
- 2 土坑 17 土層断面 (東から)
- 3 土坑 18 (南から)
- 4 土坑 18 土層断面 (南から)
- 5 P 377 (南東から)
- 6 土坑 19 (北東から)
- 7 土坑 19 土層断面 (北東から)

- 8 土坑19 遺物出土状況 (北東から)
- 35- 1 土坑20 (北から)
- 2 土坑20 土層断面 (北から)
- 3 土坑21 (北から)
- 4 土坑21 土層断面 (北から)
- 5 土坑23 (北から)
- 6 土坑23 遺物出土状況 (北から)
- 7 土坑23 遺物出土状況 (北東から)
- 8 土坑23 土層断面 (西から)
- 36- 1 土坑24 (北東から)
- 2 土坑24 遺物出土状況 (東から)
- 3 土坑25 (東から)
- 4 土坑25 土層断面 (東から)
- 5 C 7・8 グリッド周辺遺構検出状況 (北西から)
- 6 土坑31遺物出土状況 (北西から)
- 7 土坑29 (北西から)
- 8 土坑29 土層断面 (北西から)
- 37- 1 土坑26 (北西から)
- 2 土坑26 遺物出土状況 (北西から)
- 3 土坑26 土層断面 (北から)
- 4 土坑28 (北から)
- 5 土坑28 遺物出土状況 (北から)
- 6 土坑28 土層断面 (北から)
- 7 土坑27 遺物出土状況 (北から)
- 8 土坑24・31出土遺物
- 38- 1 土坑 (中世前期) 出土遺物
- 2 溝20 (東から)
- 3 溝20 礫出土状況 (東から)
- 4 溝20出土遺物
- 39- 1 溝2・3 (北から)
- 2 溝2 (北から)
- 3 溝1 土層断面 (南東から)
- 4 溝1 検出状況 (南東から)
- 5 溝1 (南東から)
- 40 V層上面検出遺構群 (南から)
- 41- 1 B17~19グリッド周辺V層上面検出遺構群 (北から)
- 2 溝4 (北から)
- 3 溝6・7 (南から)
- 42- 1 溝5 (南から)
- 2 柵列1 (南から)
- 3 溝8 土層断面 (東から)
- 4 溝8 土層断面 (東から)
- 43- 1 溝8・9周辺の地形 (東から)
- 2 溝8・9 (西から)
- 44 溝9 (3区) 礫検出状況 (東から)
- 45- 1 溝9 (3区) (東から)
- 2 溝9 (7区) (西から)
- 3 溝9 (3区) 土層断面 (南西から)
- 4 溝9 (7区) 土層断面 (東から)
- 5 溝9 (7区) 検出状況 (西から)
- 46- 1 溝15 (東から)
- 2 溝16 (東から)
- 3 溝15 土層断面 (西から)
- 47- 1 溝13 (北から)
- 2 溝13 検出状況 (南東から)
- 3 溝13 遺物出土状況 (北から)
- 4 溝13 遺物出土状況 (南から)
- 5 溝13 自然木出土状況 (南東から)
- 6 溝13 自然木出土状況 (南東から)
- 7 溝13 土層断面 (北から)
- 8 溝13出土木製品
- 48- 1 溝1・3・4・6・9出土遺物
- 2 溝8出土遺物
- 3 溝9出土遺物
- 4 溝13・15出土遺物
- 5 溝13出土遺物 (1)
- 6 溝13出土遺物 (2)
- 49- 1 耕作痕 検出状況 (南東から)
- 2 耕作痕 土層断面 (南から)
- 3 耕作痕 (西から)
- 4 ピット (中世前期) 出土遺物
- 50- 1 柵列2 礎盤石出土状況 (北から)
- 2 柵列2 (北から)
- 3 柵列2 礫出土状況 (北から)
- 4 柵列2 礫出土状況 (北東から)
- 5 柵列2 P1土層断面 (北西から)
- 51- 1 柵列2 P2土層断面 (北から)
- 2 柵列2 P2土層断面 (北西から)
- 3 柵列2 P2土層断面 (北から)
- 4 柵列2 P2礎盤石出土状況 (北から)
- 5 柵列2 P1礫出土状況 (南西から)
- 6 柵列2 P1遺物出土状況 (東から)
- 7 柵列2 P1礎盤石出土状況 (南から)
- 8 柵列2出土遺物
- 52 調査地内出土遺物 (中世前期)
- 53- 1 土坑33 (西から)
- 2 土坑33 遺物出土状況 (東から)
- 3 土坑33・34 土層断面 (東から)
- 4 土坑34 (北西から)
- 5 土坑35 (西から)
- 6 土坑35 土層断面 (東から)
- 7 調査地内出土石器 (1)
- 8 調査地内出土石器 (2)
- 54- 1 調査地内出土石器 (3)
- 2 調査地内出土石器 (4)
- 3 調査地内出土石器 (5)
- 55- 1 調査地内出土石器 (6)
- 2 調査地内出土鉄関連遺物 (1)
- 3 調査地内出土鉄関連遺物 X線 (1)
- 4 調査地内出土鉄関連遺物 X線 (2)
- 2 調査地内出土鉄関連遺物 (2)
- 3 調査地内出土鉄関連遺物 (3)

特論図版

- 56 木材・炭化材 (1)
- 57 木材・炭化材 (2)
- 58 木材・炭化材 (3)
- 59 門前上屋敷遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵
- 60 門前上屋敷遺跡の珪藻
- 61 産出した花粉化石
- 62 門前上屋敷遺跡の植物珪酸体

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

門前上屋敷遺跡は、将来の山陰自動車道を想定した一般国道9号（名和淀江道路）の改築工事によって調査を実施した遺跡であり、鳥取県西伯郡名和町大字門前地内の道路ルート内に存在している。調査地は名和川左岸の河岸段丘上に位置しており、門前集落の中央部を東西に貫いている。遺跡の西側には、同じく本年度に調査を実施した門前第2遺跡があり、また、名和川を挟んだ対岸には昨年度から継続調査を行っている名和飛田遺跡が存在する。

一般国道9号（名和淀江道路）の改築工事に伴う発掘調査は、平成12年度から淀江町・大山町・名和町の3町にわたって実施され、報告書が順次刊行されている。

門前上屋敷遺跡は、周知の遺跡として登録が行われている所ではなかったが、分布調査の結果遺跡の存在が想定された。そのため、国土交通省倉吉河川国道事務所より埋蔵文化財の確認調査についての依頼を受けた名和町教育委員会が、国及び県の補助金を受けて平成11年度に試掘調査を実施したところ、中世および弥生時代を中心とする遺構・遺物が出土し、遺跡の存在が確認された。この結果を受け、鳥取県教育委員会事務局文化課と国土交通省倉吉河川国道事務所が協議を行ったが、遺跡の現状保存は困難との判断にいたり、国土交通省倉吉河川国道事務所は文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その上で、記録保存のための事前発掘調査の指示を受けた国土交通省倉吉河川国道事務所は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。そこで、財団法人鳥取県教育文化財団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法57条に基づく発掘届を提出し、当財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。（西川）

第2節 調査の経過

調査地は、調査着手前には水田及び畑地であった。門前集落部分は高架工法が採用されたために、調査地は橋脚部分のみを調査する予定であったが、調査準備の段階で側道部分も調査を実施することが決定した。

調査地は7つの小区に分かれるため、1区から7区の調査区番号を付け調査を実施したが、調査時点での遺構番号や遺物番号は調査地全体での通し番号とした。

調査は4月9日の調査前空中写真撮影の実施により始まった。その後、4月26日に作業員稼働及び重機による表土剥ぎを開始し、表土剥ぎの排土は場外搬出を行った。調査地には業者委託により基準杭を設置した。なお、調査地内には調査区の形状にあわせて、5mごとに方眼杭を調査員が設置した。

調査は調査区際にサブトレンチを掘り下げて、遺構面を確認し面的に下げていった。しかし、調査地西端は耕作に伴う削平を受けていた為、耕作土を除去すると近世の遺構面があり、極めて薄い包含層の下は最終遺構面であるローム土であり、中世及び弥生時代の遺構を同一面で検出した。

作業員の稼働は7月30日で終了した。その後も調査員が測量を継続し、8月22日には現地説明会を開催した。8月28日には調査後空中写真撮影を実施、8月31日に現地での調査を終了した。（西川）

第3節 調査体制

調査は、以下の体制で実施した。

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局 長 中村 登

埋蔵文化財センター

所 長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 竹内 茂

次長（専門） 加藤 隆昭

調 査 課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶 務 課

課長（兼次長） 竹内 茂

主 幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

○調査担当 名和調査事務所

所 長 國田 俊雄

班 長 西川 徹

文化財主事 中森 祥、浜田 真人（門前第2遺跡担当）

森本 倫弘（門前上屋敷遺跡担当）

加藤 裕一、木山 清貴（名和中畝遺跡担当）

北 浩明（名和飛田遺跡担当）

調 査 員 湯川 善一（門前第2遺跡担当）

日置 智（名和中畝遺跡担当）

三木 雅子（名和飛田遺跡担当）

調査補助員 遠藤万須美、中橋 智明、秦 美香、山本 宗昭

事務補助員 金田 かおる

○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

○調査協力 名和町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地質学的、地理的環境

大山山麓は幾本もの小川により放射状に開削されており、浸食され残った台地状の尾根と小溪谷が繰り返す地形をなしている。大山北麓の名和町門前上屋敷遺跡は、そのような川の一つ名和川に面し、遺跡の高位の部分はAT（始良丹沢火山灰）層を載せる段丘上にある。遺跡の低位の部分と対岸の名和飛田遺跡は完新世段丘上にある。谷の西側の尾根には門前第2遺跡が、東側の尾根には名和乙ヶ谷遺跡が隣接する。門前上屋敷遺跡および門前第2遺跡の基盤には、地山として御来屋砂礫層（約10万年前）とその上位にローム層の堆積がある。両遺跡ともにローム層の上層部にAT層を挟んでいる。台地を開削する小溪谷はヴェルム氷期（最終氷期）に形成されはじめたと考えられる（御来屋砂礫層の堆積以降また、ATの堆積以前）。縄文海進時の海岸線は、御来屋付近において山陰本線沿いや、名和神社付近にみられる約15mの比高を持つ波蝕崖である。（浜田）

第2節 歴史的環境

1、旧石器時代

名和小谷遺跡では黒曜石製国府型ナイフ形石器が出土している。門前第2遺跡（西畝地区）では、AT層より下層（約2万5千年以上前の地層）からナイフ形石器と黒曜石の破片を含む石器群が確認されている。

2、縄文時代

〈縄文時代草創期〉草創期頃のものと考えられる有舌尖頭器が、上大山、陣構で出土している。中山町や淀江町でも石器が発見されているが、この地域では遺構や土器は確認されていない。

〈縄文時代早期〉古御堂金蔵ヶ平遺跡、上大山第1遺跡、角塚遺跡、高田第4遺跡、高田第10遺跡で押型文土器、茶畑山道遺跡では撚糸文土器が出土している。門前第2遺跡（菖蒲田地区）では9基の配石群が検出され、押型文土器が出土した。これらの事実から、縄文時代早期から名和町域に人の居住があったことが示される。

〈縄文時代前期～晩期〉前期は大山町中高遺跡、中期は名和衣装谷遺跡で土坑や遺物が、名和乙ヶ谷遺跡で玦状耳飾が出土した。名和飛田遺跡では、砂礫層中から前期の土器が多量に出土し、大山町妻木法大神遺跡の旧河道からは多量の前期および後期の土器が出土している。これらのことから、名和川流域に前期集落遺跡の存在が、阿弥陀川流域に前期および後期集落遺跡が想定される。後期は古御堂遺跡や南川遺跡がある。南川遺跡では石組炉をもつ住居跡と磨消縄文の深鉢が確認された。晩期では大塚第3遺跡、高田第10遺跡、文殊領屋敷遺跡などで遺物・遺構が検出された。

3、弥生時代

〈弥生時代前期・中期〉前期は環濠集落の可能性のある大塚岩田遺跡、また大塚塚根遺跡や名和飛田遺跡で土器が出土している。中期の中葉から後葉にかけては集落数や集落の規模が増大する。茶畑山道遺跡では、独立棟持柱を持つ大型の掘立柱建物跡が検出され、線刻絵画土器等が出土している。茶畑第1、押平尾無、名和飛田、門前上屋敷、茶畑六反田などの各遺跡で竪穴住居跡等の遺構が検出されている。

〈弥生時代後期〉後期の集落跡は、大塚塚根、押平尾無、東高田、茶畑第2、茶畑六反田、古御堂笹尾山、古御堂新林、大山町の塚田の各遺跡がある。大山町から淀江町にかけての妻木晩田遺跡では多数の竪穴住居跡のほか、四隅突出型墳丘墓や環壕などが確認されている。

4、古墳時代

集落遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけて、ほとんどの遺跡で竪穴住居などの遺構数が増加する。大塚塚根遺跡・古御堂笹尾山遺跡・名和中畝遺跡では中～後期の竪穴住居跡、名和飛田遺跡では後期の竪穴住居跡と大型の掘立柱建物跡が検出されている。

ハンボ塚古墳は、径33mを測る中期後半の円墳で、円筒埴輪や人物形や水鳥形の形象埴輪が出土している。中山町の高塚古墳も同時期である。後期の古墳群として、茶畑古墳群、高田古墳群、門前古墳群、富長山村古墳群、坪田古墳群、豊成古墳群などがある。

5、奈良～平安時代

奈良時代には寺院の建立が各地で行われた。特異な伽藍配置や彩色壁画で注目される上淀廃寺や、上淀廃寺と同じ系統の瓦が出土した高田原廃寺、汗入郡正倉と考えられる長者原遺跡などがある。大塚屋敷遺跡では、7世紀後半から8世紀にかけての掘立柱建物群が検出されている。

平安時代には、各地で条里制が整備され淀江平野には顕著にみられる。阿弥陀川扇状地でも開発が進み、茶畑六反田遺跡で緑釉陶器や墨書土器を含む条里区画とみられる溝が検出され、小規模な区画の水田跡が確認されている。名和乙ヶ谷遺跡では鉄滓と鉄生産に関係すると推測される道路跡が確認されている。名和衣装谷遺跡では工房もしくは雑舎と考えられる大型の掘立柱建物跡と、緑釉陶器や灰釉陶器が検出されている。生産遺跡では、上寺谷遺跡で製鉄炉跡を確認している。

6、鎌倉～室町時代

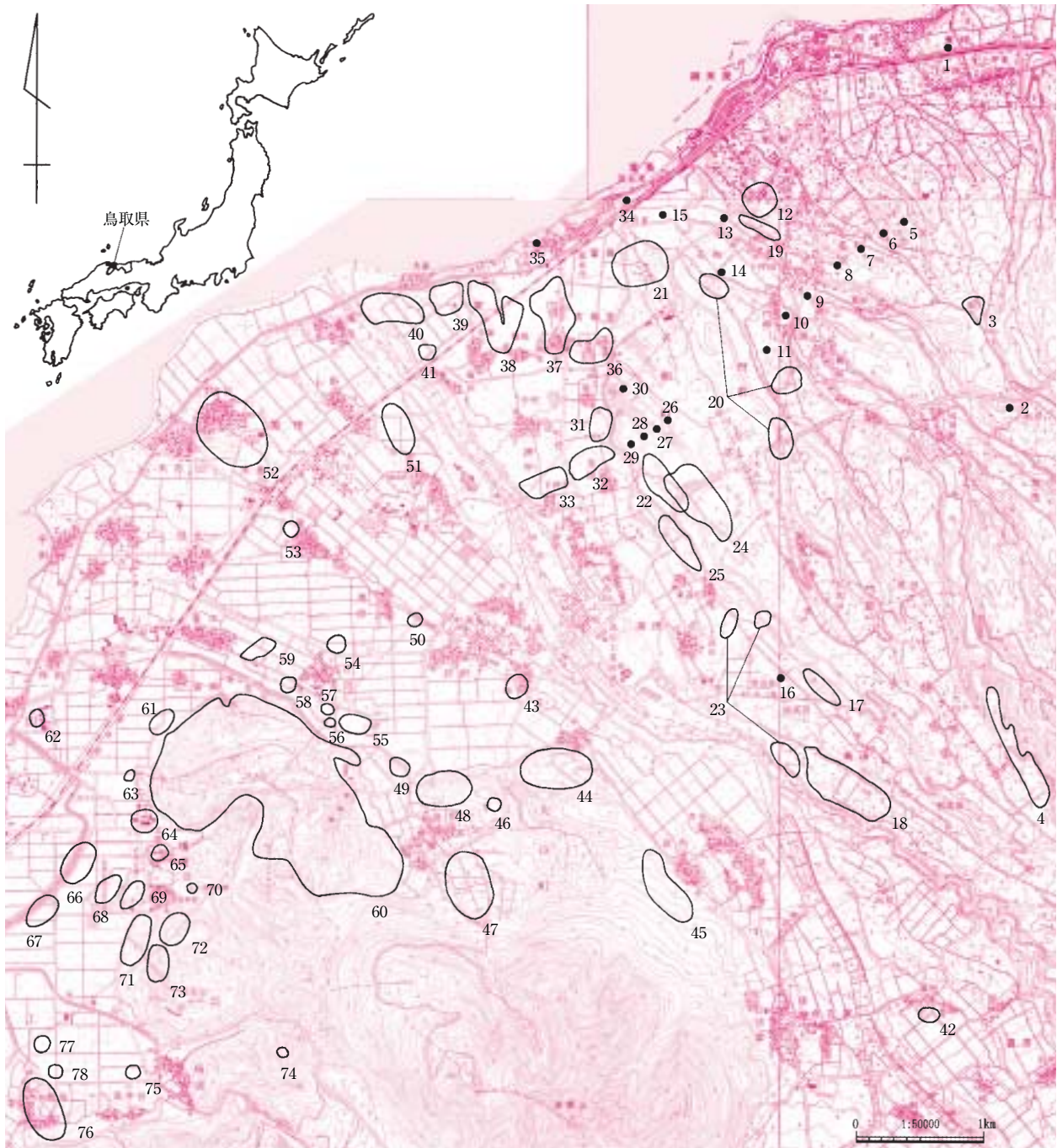
扇状地上に位置する茶畑六反田遺跡、文殊領屋敷遺跡、押平弘法堂遺跡が確認されている。これらは、いずれも鎌倉時代後半には集落が廃絶し、その後形成されたと思われる耕作痕跡が茶畑六反田遺跡や文殊領屋敷遺跡で検出されており、集落から畑作地へ土地利用の変換があったことが窺われる。押平弘法堂遺跡では、掘立柱建物跡のほか、土壙墓から青磁皿が出土している。

名和町には後醍醐天皇や名和長年ゆかりの伝承をもつ旧跡が多数存在するが、考古学的裏付けは今のところ確認されていない。海岸段丘上には名和氏に協力した荒松氏によって築かれたという伝承のある富長城跡や長野城跡が残っている。門前礎石群では礎石建物跡を検出、白磁・青磁・青花などが出土しており、中世以降の寺院跡の可能性が指摘されている。門前上屋敷遺跡では、堀と推測される大溝が検出されており、何らかの建物の存在を窺わせる。浜ノ坂遺跡では、室町期とみられる和鏡が土壙墓に副葬されている。

7、近世以降

寛永9（1632）年に池田光仲が鳥取藩主となり、明治維新まで池田氏の藩政が続く。本地域では近代以降集落と耕作地が固定され現代に至ると考えられる。御来屋は伯耆街道の宿駅で、藩倉も置かれ藩の運上米の積出港としても重要な位置を占め、汗入郡の中心地であった。昭和29年には御来屋村・光徳村・名和村・庄内村が合併し今日の名和町となった。2005年3月に中山町、大山町と3町合併し、新大山町として歴史を歩みだそうとしている。（浜田）

第2章 位置と環境



No. 1	龍光寺堀遺跡	No. 17	高田第4遺跡	No. 33	押平弘法堂遺跡	No. 49	客尾山古墳群	No. 65	下楚利遺跡・宮廻遺跡
No. 2	栃原窯跡	No. 18	高田第10遺跡	No. 34	荒田遺跡	No. 50	清原遺跡	No. 66	福岡遺跡
No. 3	角塚遺跡	No. 19	坪田古墳群	No. 35	富長城跡	No. 51	上野遺跡群	No. 67	井手勝遺跡
No. 4	上大山第1遺跡	No. 20	門前古墳群	No. 36	文殊領屋敷遺跡	No. 52	国信遺跡	No. 68	瓶山古墳群
No. 5	名和中畝遺跡	No. 21	富長山村古墳群	No. 37	古御堂遺跡	No. 53	唐王遺跡	No. 69	向山古墳群
No. 6	名和小谷遺跡	No. 22	茶畑古墳群	No. 38	大塚塚根遺跡	No. 54	新田原遺跡	No. 70	上淀廃寺
No. 7	名和衣装谷遺跡	No. 23	高田古墳群	No. 39	大塚岩田遺跡	No. 55	塚田遺跡	No. 71	彼岸田遺跡
No. 8	名和乙ヶ谷遺跡	No. 24	茶畑第2遺跡	No. 40	大塚第3遺跡	No. 56	荘田古墳群	No. 72	小枝山古墳群
No. 9	名和飛田遺跡	No. 25	東高田遺跡	No. 41	大塚屋敷遺跡	No. 57	原畑遺跡	No. 73	城山古墳群
No. 10	門前上屋敷遺跡	No. 26	古御堂金蔵ヶ平遺跡	No. 42	蔵岡第1遺跡	No. 58	大道原遺跡	No. 74	四十九谷横穴墓群
No. 11	門前第2遺跡	No. 27	古御堂笹尾山遺跡	No. 43	中高遺跡	No. 59	妻木法大神遺跡	No. 75	稲吉角田遺跡
No. 12	長者原遺跡	No. 28	押平尾無遺跡	No. 44	平古墳群	No. 60	妻木晩田遺跡	No. 76	中西尾古墳群
No. 13	ハンボ塚古墳	No. 29	茶畑第1遺跡	No. 45	宮内古墳群	No. 61	富岡播磨洞遺跡	No. 77	鮎ヶ口遺跡
No. 14	門前礎石群	No. 30	原3号墳	No. 46	徳楽方墳	No. 62	今津岸ノ上遺跡	No. 78	河原田遺跡
No. 15	南川遺跡	No. 31	茶畑山道遺跡	No. 47	源平山古墳群	No. 63	安原溝尻遺跡		
No. 16	高田原廃寺	No. 32	茶畑六反田遺跡	No. 48	長田古墳群	No. 64	晩田遺跡		

図3 周辺の遺跡分布図

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

第1節 調査地の堆積

1、調査地の地形

調査地は名和川左岸に位置する。調査区は河岸段丘による高低差があり、名和川側に位置する1区が一番低く、2・5区は中段に位置し、3・4・6・7区は最上段に位置する。地表面の標高は1区で約27.15m、2・5区は約29.20m、3・4・6・7区は約32.70m～34.30mである。調査前は各調査区とも水田または畑地で、耕作地として利用されていた。

調査は重機による表土剥ぎを行った後、堆積状況を確認するトレンチを設定し、掘り下げを行った。各調査区北壁または南壁の土層断面を記録した。調査地内から、縄文時代、弥生時代中期、中世前期、近世の遺構を検出し、縄文時代早期末から近世までの遺物が出土した。

2、調査地の堆積（図5～7）

調査地の堆積状況を下記に記す。包含層はローマ数字、地山はアラビア数字で表した。表土の土質・色調については省略したが、1区の表土のみa・b・cに細分して掲載した。

I層（①層）：灰褐色土

直径約0.5cmの小礫が混入する。またI層上面には鉄分がみられる。河岸段丘の上段にあたる3・4・6・7区に堆積する。後世の削平により一部途切れる部分があるものの、概ね約4cm～20cmの厚さで堆積する。近世後期の遺物が出土する。



図4 遺跡周辺の地形

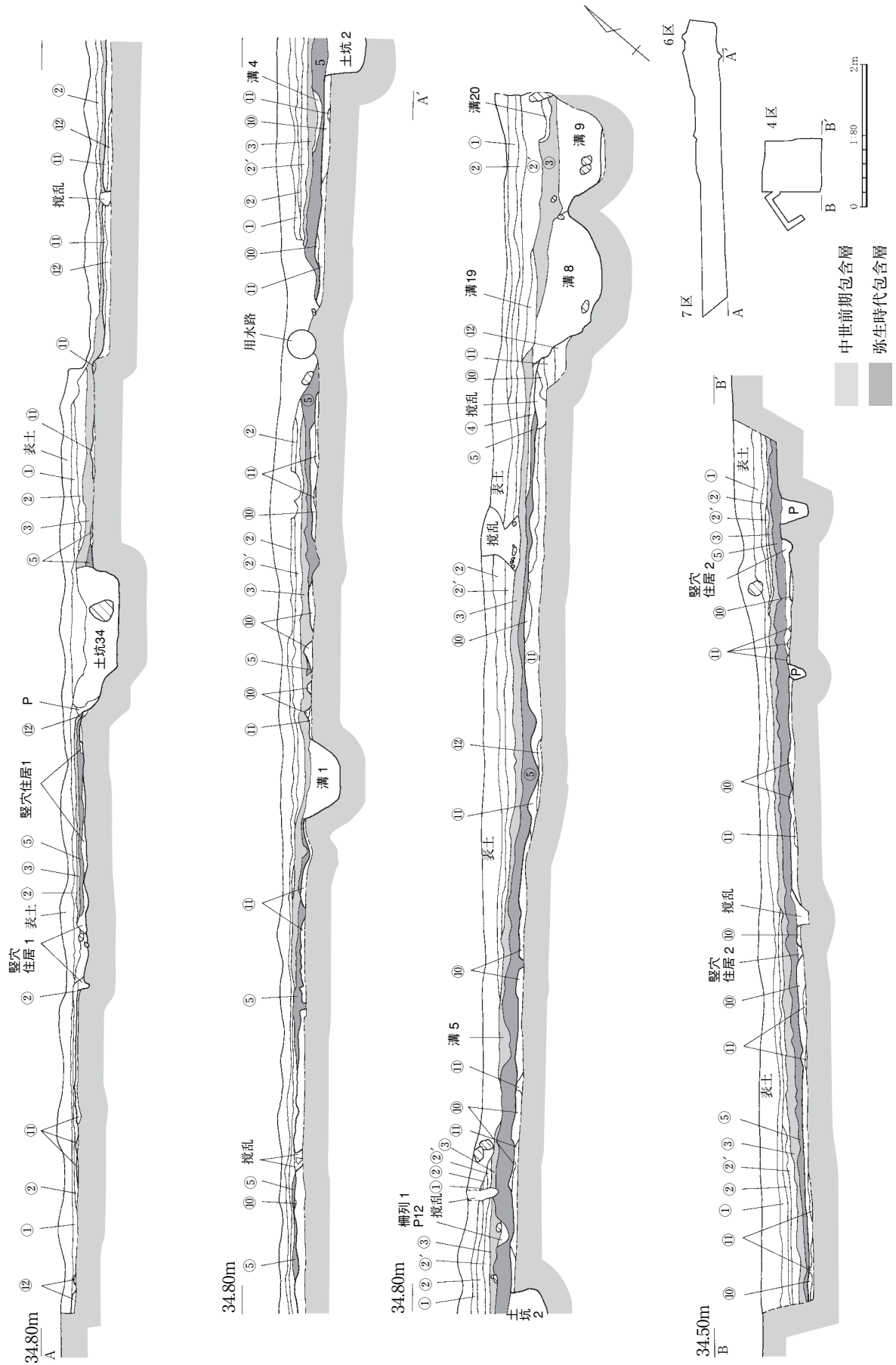


図5 4・7区土層断面図

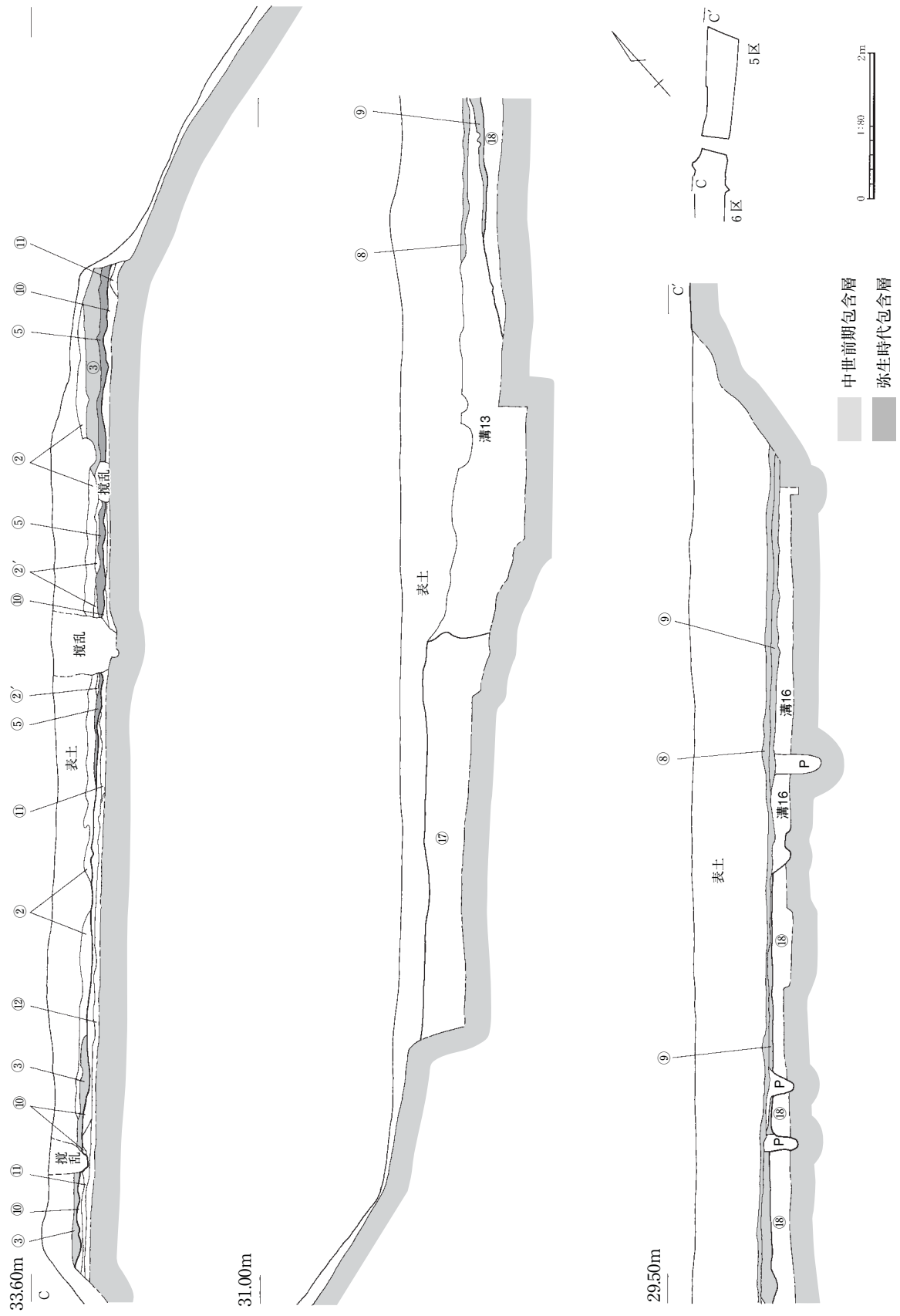


図6 5・6区土層断面図

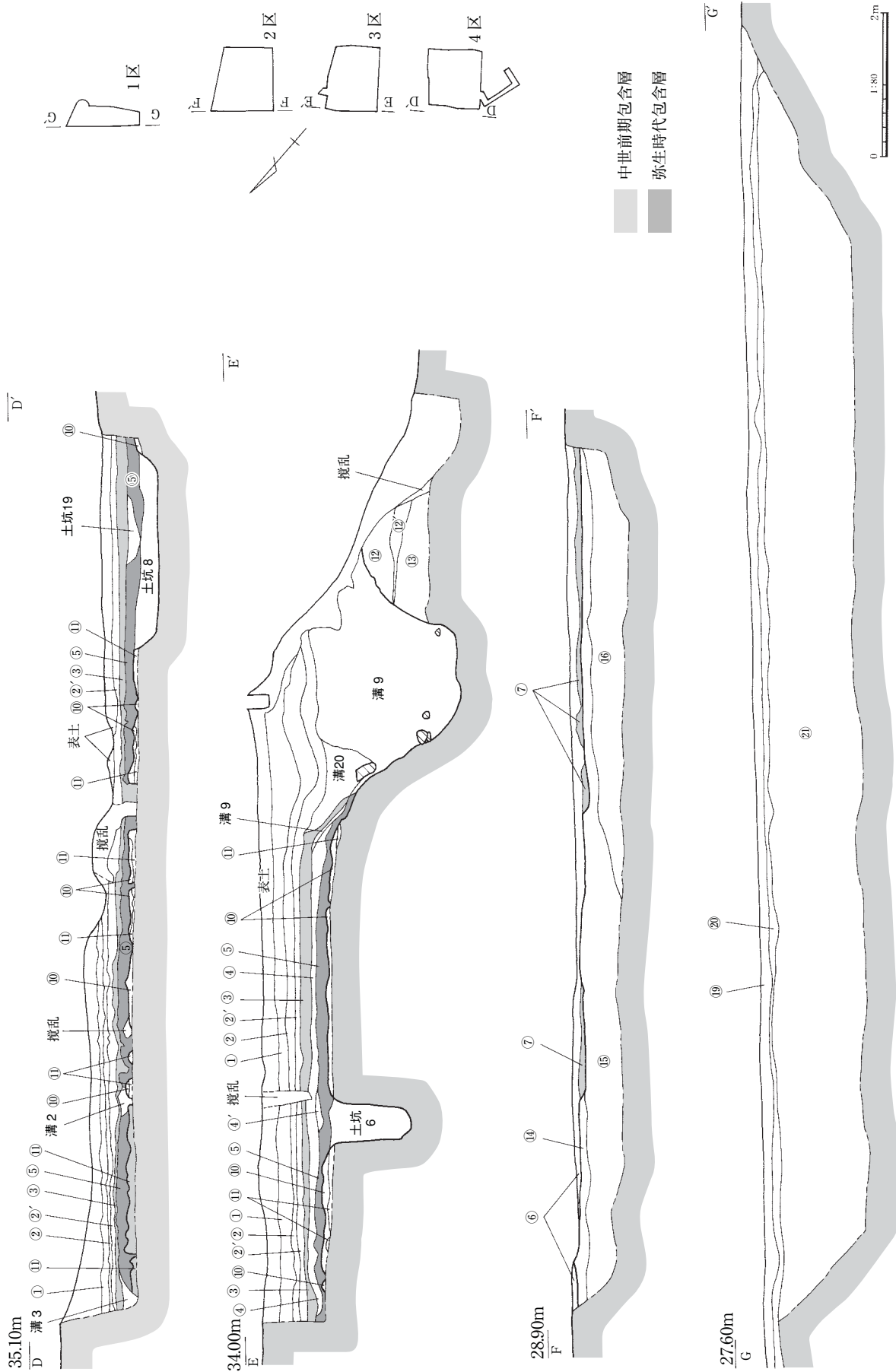


図7 1～4区土層断面図

Ⅱ層 (②層) : 橙灰褐色土

鉄分を含む。3・4・6・7区に堆積する。一部途切れる部分もあるが概ね約4cm～15cmの厚さで堆積する。

Ⅱ'層 (②'層) : 灰褐色土

直径約0.5cmの小礫と炭化物が混入する。上段にあたる3・4・6・7区に堆積する。後世の削平により一部途切れる部分があるものの、概ね約2cm～10cmの厚さで堆積する。溝19・20にⅡ'層が落ち込む。近世前期の遺物が出土する。

調査時にはⅡ層とⅡ'層は分層し層位的に調査を行ったが、本来的には同一の堆積と思われる。Ⅰ層同様堆積の上層に鉄分が沈着した部分がⅡ層、その下層がⅡ'層である。

Ⅲ層 (③層) : 灰褐色土

直径約0.5cmの小礫が混入する。②層よりやや暗い色調を呈す。3・4・6・7区に、約4cm～15cmの厚さで堆積する。3・4・6・7区で検出した主な遺構埋土には、Ⅲ層が落ち込む。中世前期の遺物が出土する。

Ⅳ層 (④層) : 暗褐灰色土

主に3・7区南東端に、約3cm～10cmの厚さで堆積する。標高の低い部分に厚く堆積し、Ⅳ層上面の標高は約33mで一定している。中世前期の遺物が出土する。

Ⅳ'層 (④'層) : 暗褐灰色土

主に3区南東側に、約4cmの厚さで堆積する。標高の低い部分に厚く堆積する。Ⅳ層よりやや暗い色調を呈す。中世前期の遺物が出土する。

Ⅴ層 (⑤層) : 黒褐色土

3・4・6・7区に、約8cm～20cmの厚さで堆積する。Ⅴ層上面では中世前期の遺構を検出した。Ⅴ層中からは、弥生時代中期の遺物が出土する。

調査時にⅤ層を分層することはできなかったが、弥生時代中期の土坑9をⅤ層掘削中に検出したことから、本来的にはⅤ層が細分でき、Ⅴ層中に弥生時代中期の遺構面が存在するものと思われる。

Ⅵ層 (⑥層) : 灰褐色粘質土

明黄褐色土(2層)ブロックと灰褐色砂質土が混入する。2区に、約10cmの厚さで堆積する。近世の遺物が出土する。

Ⅶ層 (⑦層) : 灰褐色粘質土

2区に、約8cmの厚さで堆積する。中世の遺物が出土する。

Ⅷ層 (⑧層) : 灰褐色粘質土

上部に鉄分が沈着する。5区に、約6cm～8cmの厚さで堆積する。中世の遺物が出土する。

Ⅸ層 (⑨層) : 灰褐色粘質土

直径約2cmの小礫が混入する。5区に、約10cmの厚さで堆積する。中世の遺物が出土する。暗褐色系の埋土をもつ遺構を検出した。

Ⅰ層 (⑩層) : にぶい褐色土

3・4・6・7区に堆積する。部分的に途切れるものの、概ね約3cm～7cmの厚さで堆積する。上面で縄文時代と弥生時代中期の遺構を検出した。

2層 (⑪層) : 明黄褐色土

3・4・6・7区に堆積する。部分的に途切れるものの、概ね約3cm～5cmの厚さで堆積する。AT火山灰もしくは、AT火山灰の2次的な堆積と思われる。後世の削平を受けたところでは、上面で縄文時代と弥生時代中期の遺構を検出した。

3層 (⑫層) : 明褐色土

3・4・6・7区で確認した。トレンチ等で部分的に確認したのみである。

4層 (⑬層) : 淡黄褐色土

3区で確認した。トレンチ等で部分的に確認したのみである。

5層 (⑭層) : 礫層

拳大から人頭大の礫層に灰褐色土が混入する。2区に約10cm～18cmの厚さで堆積する。

6層 (⑮層) : 灰褐色細砂層

2区に約10cm～50cmの厚さで堆積する。灰褐色砂質土を埋土にもつ中世の遺構を検出した。なお、6層上面に灰褐色砂質土が薄く堆積している部分があった。溝18からオーバーフローした堆積の可能性もある。

7層 (⑯層) : 砂礫層

淡灰褐色砂質土に拳大から人頭大の礫が多量に混入する。2区に約20cm～50cmの厚さで堆積する。

8層 (⑰層) : 明黄褐色土

拳大から人頭大の礫が混入する。5区の南西端に確認した。6区斜面によく似た堆積層が見受けられる。また、色調は2層に近い。

9層 (⑱層) : 淡灰褐色砂質土

5区に約25cmの厚さで堆積する。中世前期の遺構を検出した。検出した遺構の埋土は灰褐色砂質土である。

a層 (⑲層) : 灰褐色土

現代の耕作土。

b層 (⑳層) : 橙褐色土

直径約1cm～拳大の礫が多量に混入する。

c層 (㉑層) : 礫層

直径約1cm～人頭大の礫層。湧水あり。

第2節 1区の調査

名和川左岸に位置する。重機によりトレンチを掘削した。c層から現代の瓦片が出土した。c層直下に8層によく似た堆積を確認した。湧水があり検出は困難であったが、遺構の痕跡は見られなかった。遺物の出土もなかったことから、北壁土層断面を記録し、調査を終了した。(森本)

第3節 縄文時代と時期不明の遺構・遺物

1、概要（図9）

2～7区は河岸段丘上の平坦面に位置する。3・4・6・7区から土坑7基を検出した。このうち、土坑1・3・7埋土中から縄文土器が出土している。遺構は1層（にぶい褐色土）または2層（明黄褐色土）上面で検出し、検出面の標高は約32.6m～34.1mである。遺物はV層を中心に出土している。

2・5区では、中世の遺構埋土中または包含層から突帯文土器を中心に出土している。調査地内からは、縄文時代早期末、前期末、中期、後期、晩期の縄文土器が出土している。（森本）

2、検出した遺構・遺物

土坑1（図8、図版13）

7区北東に位置する。平面形は方形状を呈し、検出面での規模は長軸約70cm、短軸約64cmを測る。断面形は長方形で、検出面からの深さは約30cmである。埋土は黒褐色土である。北東側の壁面直下中央から長軸約15cm、短軸約13cm、厚さ約18cmの礫が出土した。北西側と南東側の壁面直下には幅約6cm、最深部約10cmの溝が存在した。埋土①層から深鉢1が出土している。（西川）

土坑2（図10）

7区北東に位置する。南は調査地外、北側は土坑10に切られる。平面形は楕円形を呈すと思われる。検出面での残存規模は長軸約85cm、短軸約58cmを測る。断面形は長方形を呈し、底面は緩く湾曲する。検出面からの深さは約57cmである。埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は出土していない。（西川）

土坑3（図11、図版13）

4区北東際に位置し、東側は調査地外である。平面形は円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸約122cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約80cmである。埋土は黒褐色土を基調とする。底面中央に長軸約44cm、短軸約25cm、深さ約34cmの底面ピットを検出した。埋土中より深鉢2～6が出土した。（西川）

土坑4（図10、図版14）

6区の河岸段丘肩部に位置する。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約80cm、短軸約76cmを測る。断面形は長方形を呈し、検出面からの深さは約101cmを測る。埋土は黒褐色土である。底面中央に径約9cm、深さ約28cmの底面ピットが存在する。遺物は出土していない。（西川）

土坑5（図10、図版14）

6区南端に位置する。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約79cm、短軸約63cmを測る。断面形は長方形を呈し、検出面からの深さは約110cmである。埋土は2層に分層され、①層は締まりの弱い暗褐色土。②層は黒褐色粘質土である。底面中央やや東寄りに径約10cm、深さ約19cmの底面ピットが存

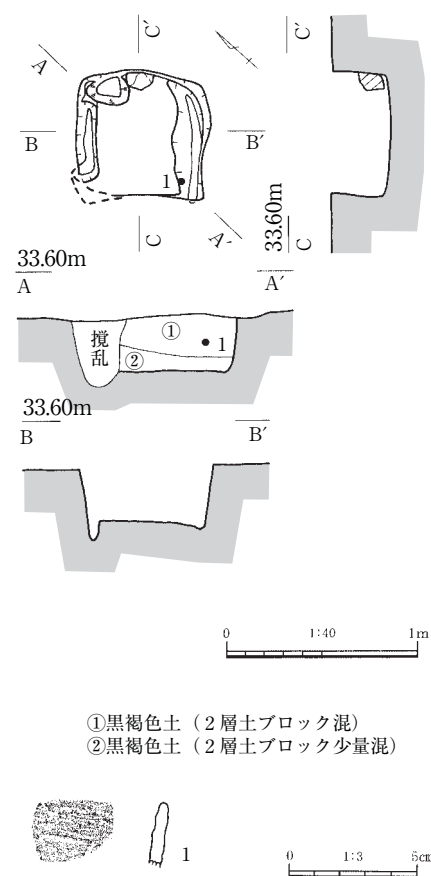


図8 土坑1および出土遺物

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

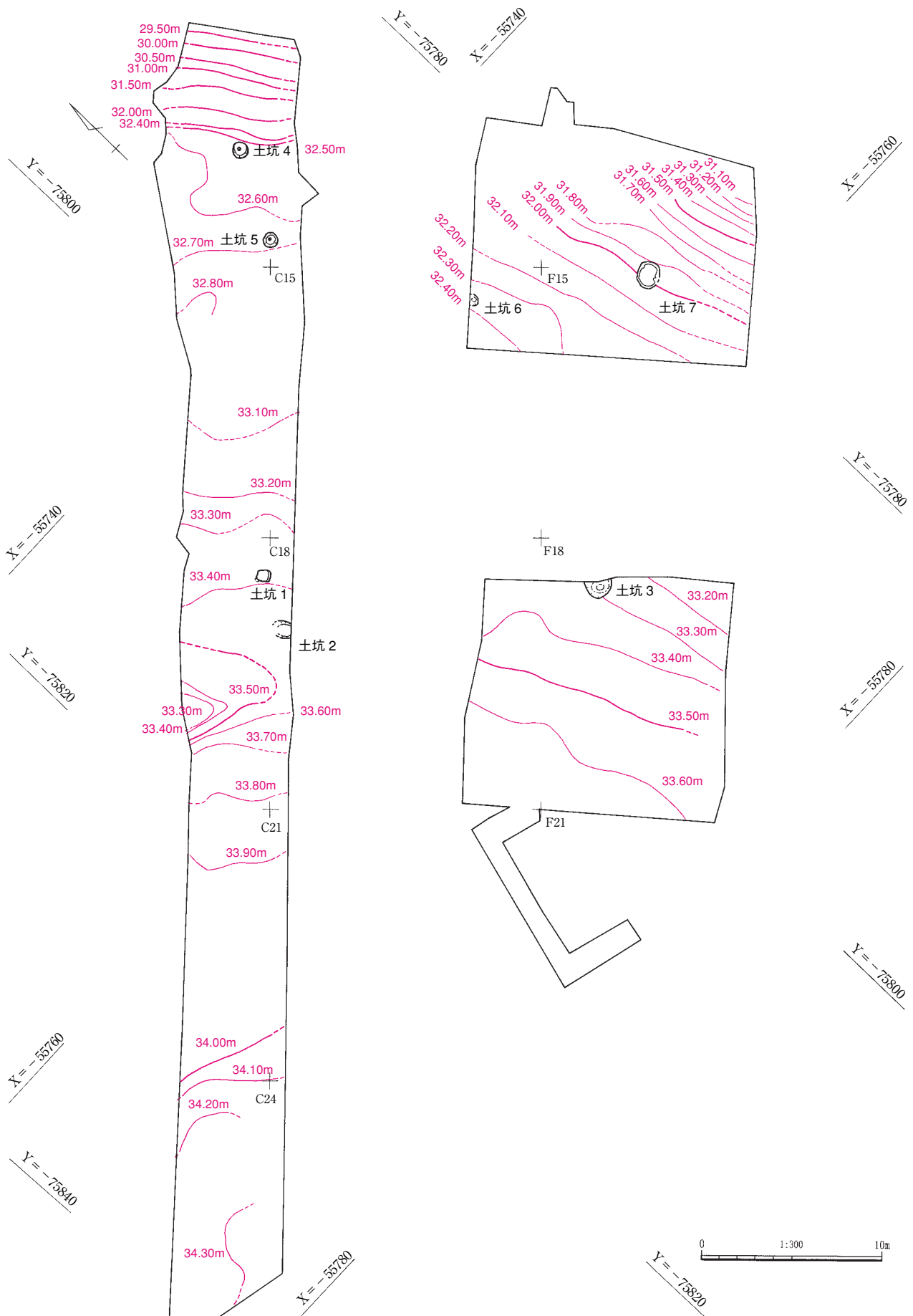


図9 縄文時代遺構全体図

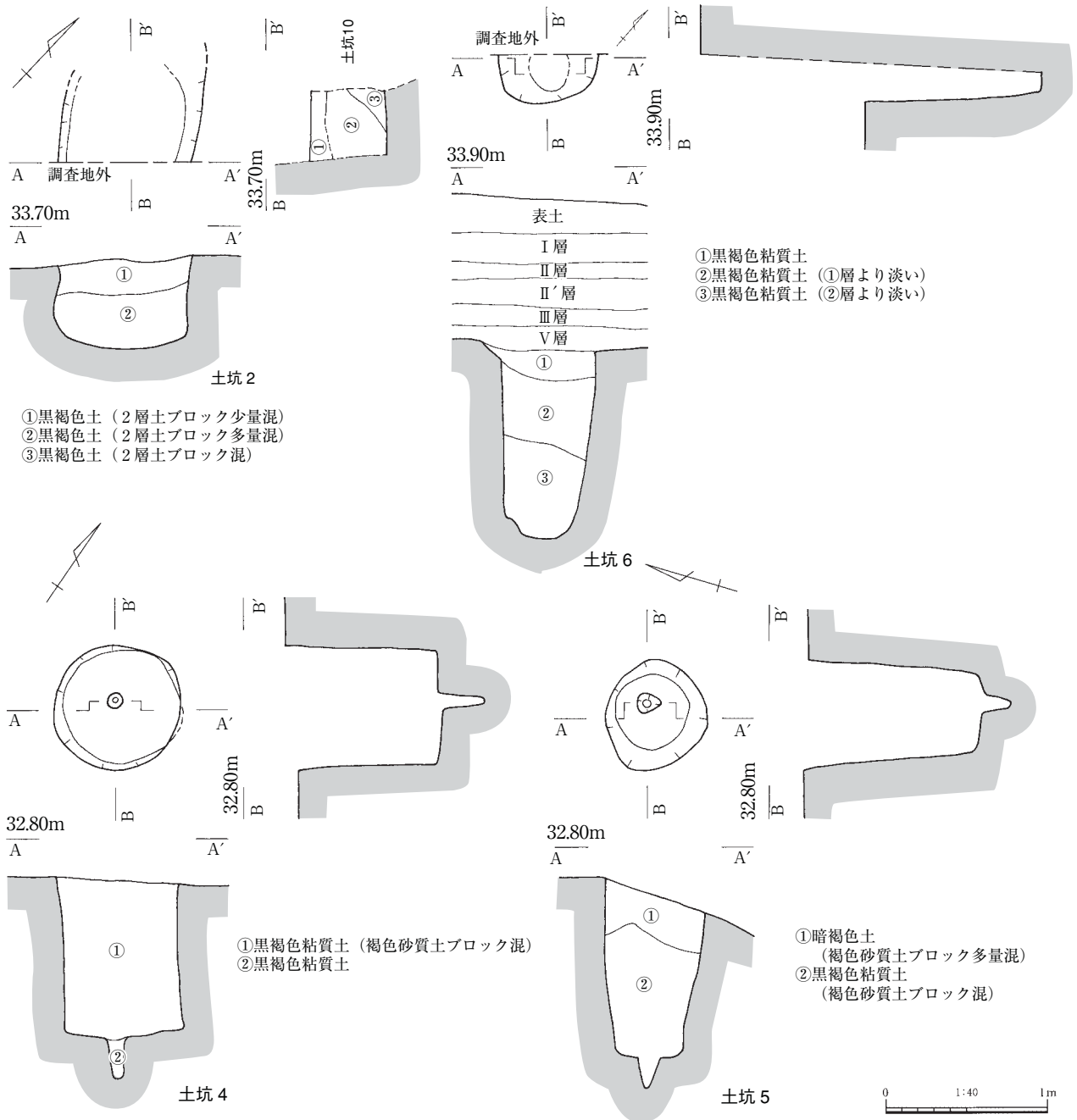


図10 土坑2・4～6

在する。遺物は出土していない。

(西川)

土坑6 (図10、図版14)

3区北西際に位置し、北側は調査地外である。平面形は円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸約62cmを測る。断面形は長方形を呈する。検出面からの深さは約122cmであり、埋土は黒褐色土を基調とする。遺物は出土していない。

(西川)

土坑7 (図12・13、図版14・15)

3区中央やや南寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約137cm、短軸約114cmを測る。断面形は皿状を呈し、中央部に向けて緩やかに湾曲する。検出面からの深さは約24cmである。南側の底面には深さ3～5cmの浅い窪みを3ヶ所検出した。埋土は3層に分層でき、褐色系の土を基調とする。

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

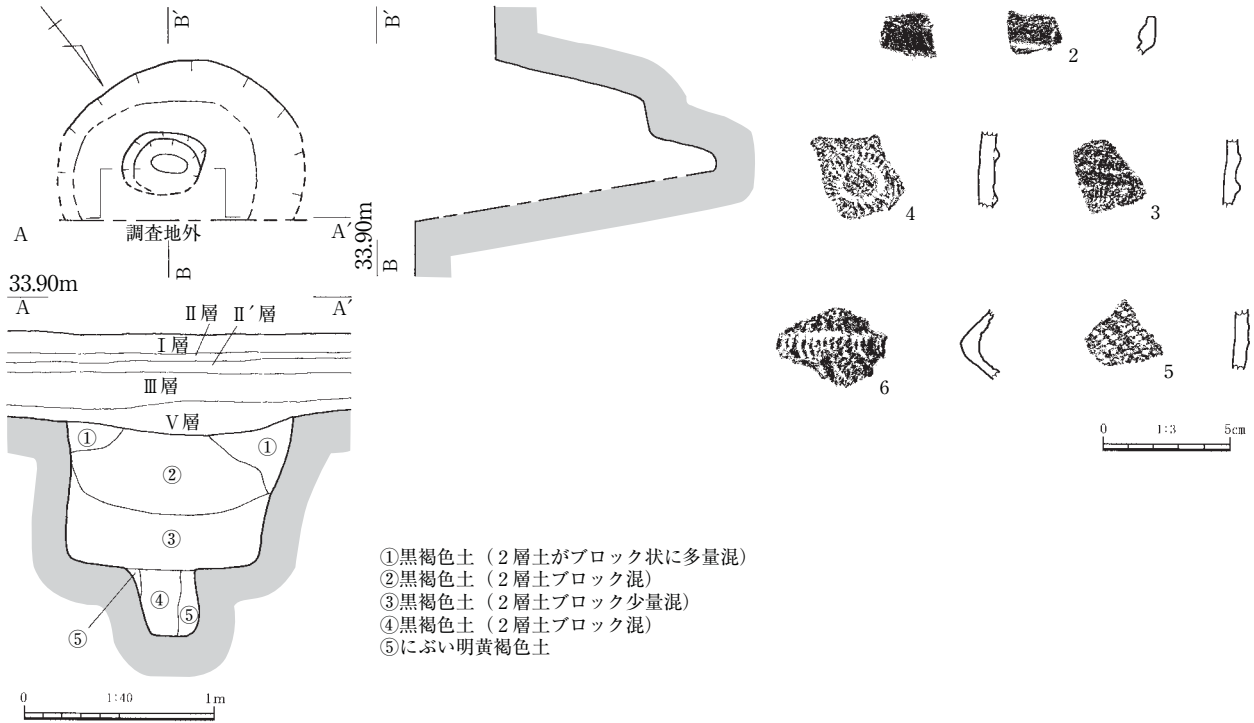


図11 土坑3および出土遺物

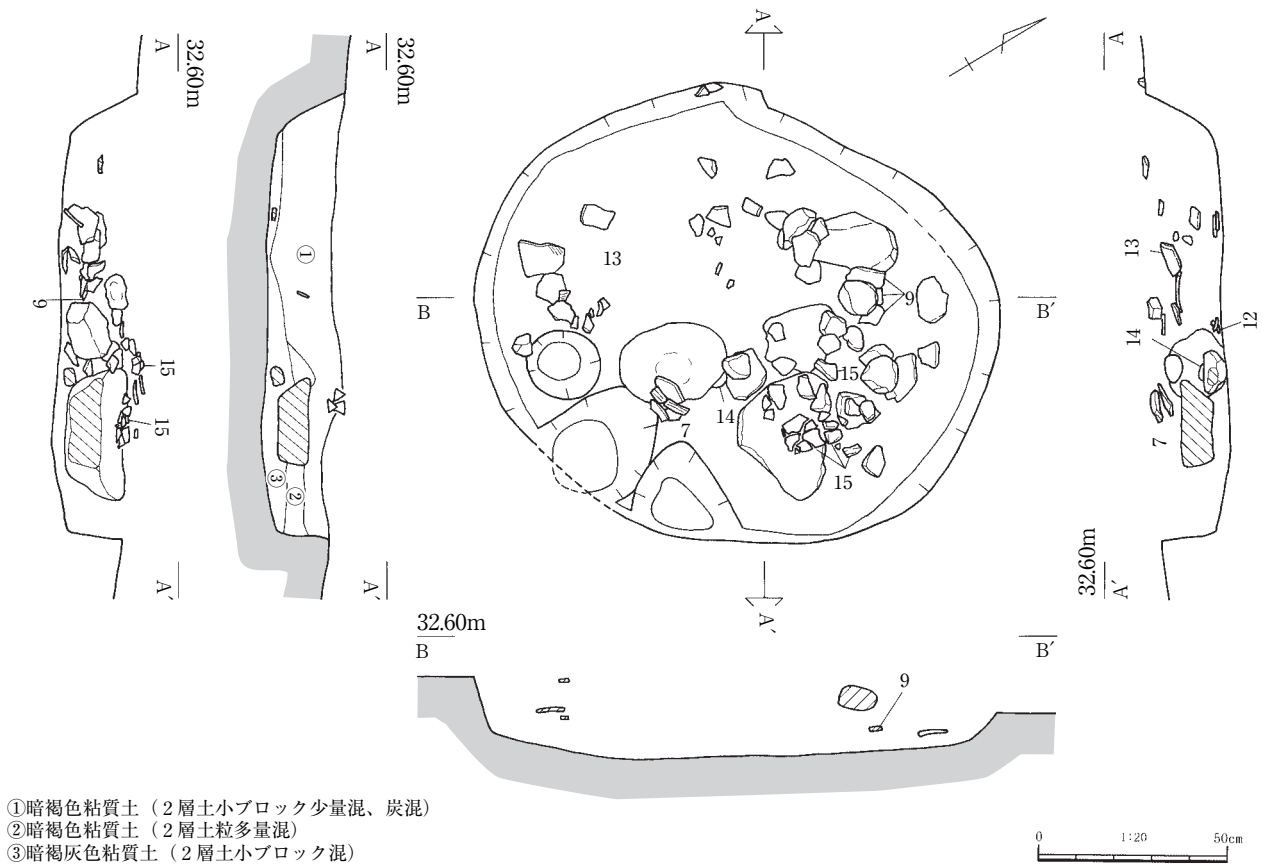


図12 土坑7

本土坑内からは拳大から径30cm程度の大きさの礫と混在して縄文土器が出土した。この内、深鉢口縁部7～9、深鉢胴部10、浅鉢口縁部11～13、底部14・15の9点を図化した。7は縁帯文土器の口縁部である。9は口縁やや下に2孔の穿孔が焼成後に穿たれる。14は底面に穿孔しようとした痕跡が

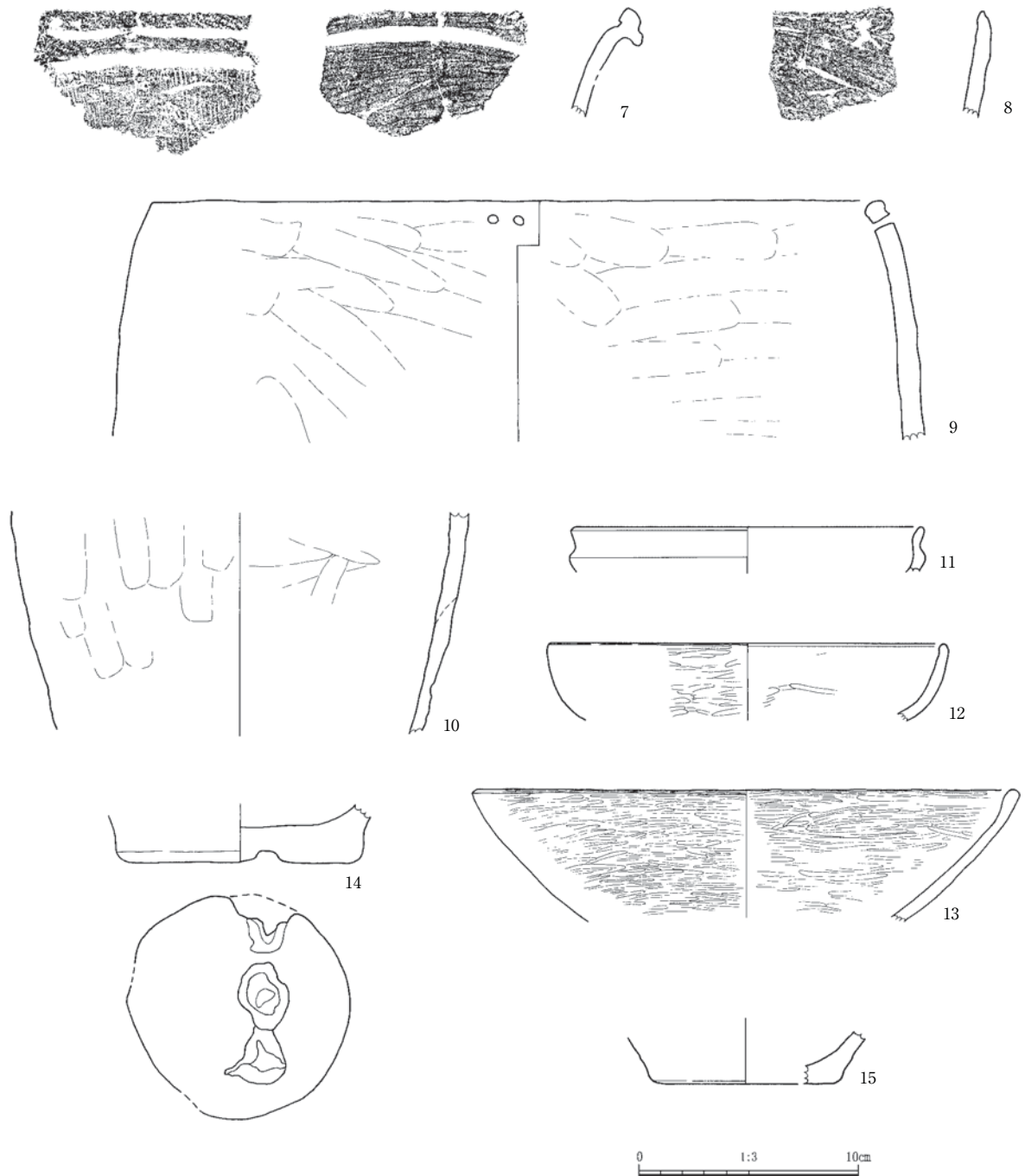


図13 土坑7出土遺物

3ヶ所認められた。

(西川・森本)

3、調査地内出土縄文土器 (図14・72・77、図版16)

3、4、6、7区では主に遺構内とV層から出土している。2、5区は中世の遺構埋土中または包含層からの出土である。

深鉢口縁部16、浅鉢と思われる18は3区から出土した。16は層位不明、18はV層出土である。突帯文土器19・20・196は2区の出土である。19・20は攪乱土中、196は溝18埋土中より出土した。深鉢17・深鉢183は5区の出土である。17は土坑21埋土中、183は溝13の埋土中より出土した。 (森本)

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

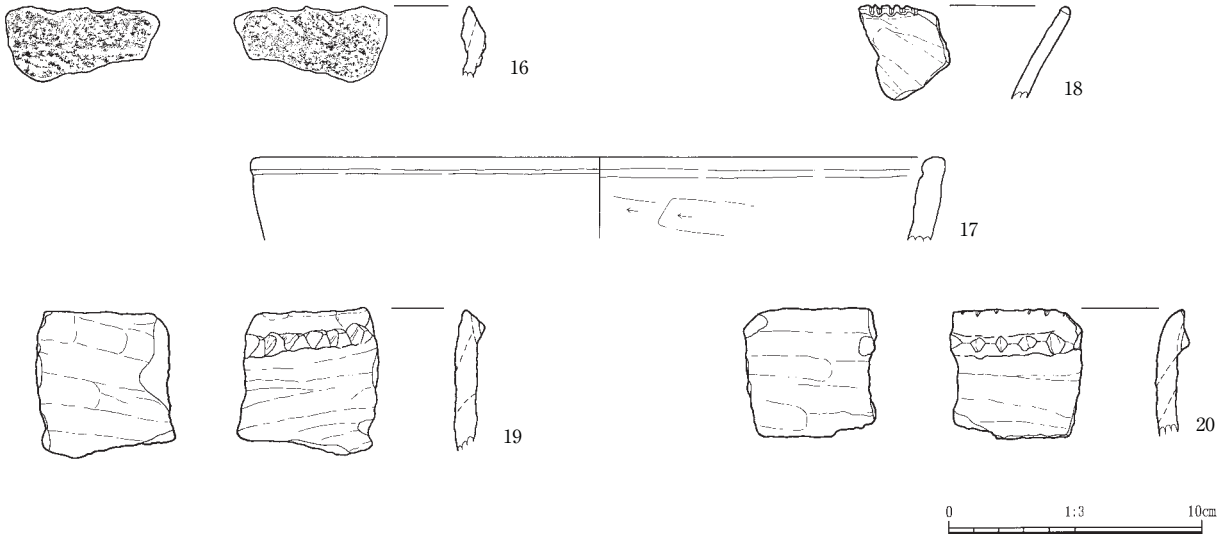


図14 調査地内出土遺物（縄文時代）

遺物観察表（縄文時代）

土器

*：復元値、△：残存値

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
1	8	7区 土坑1埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△2.6	粗製土器の口縁部。外面板状工具によるナデ。内面ナデ。	密良	内) 浅黄橙色 外) 黒褐色	-	
2	11	4区 土坑3埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△1.5	深鉢口縁部。口縁端部を肥厚させている。内外面縄文。3～6と同一個体の可能性あり。	密良	内外とも灰黄褐色～黒褐色	-	大歳山式
3	11	4区 土坑3埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△2.6	深鉢体部片。2条の突帯施文後、刺突文。外面縄文、内面ナデ。2、4～6と同一個体の可能性あり。	密良	内) にぶい黄橙色 外) 灰黄褐色	-	大歳山式
4	11	4区 土坑3埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△3.0	深鉢体部片。円形の突帯施文後刺突。外面縄文、内面ナデ。2、3、5、6と同一個体の可能性あり。	密良	内) 浅黄橙色 外) 黒褐色	-	大歳山式
5	11	4区 土坑3埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△2.4	深鉢体部片。外面刺突文。内面ナデ。2～4、6と同一個体の可能性あり。	密良	内外とも褐色	-	大歳山式
6	11	4区 土坑3埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△2.8	深鉢体部片。屈曲部に1条の突帯施文後、連続する爪形文。爪形文施文後、2条の下垂する突帯。外面縄文、内面ナデ。2～5と同一個体の可能性あり。	密良	内) 浅黄橙色 外) 黒褐色	-	大歳山式
7	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△4.9	深鉢口縁部。縁帯土器。口縁端部を肥厚させている。口縁端部に1条の沈線文。口縁外面縄文。体部外面ハケ。内面ミガキ。	密良	内) にぶい黄橙色 外) 灰黄褐色	-	崎ヶ鼻I式
8	13	3区 土坑7 底面直上	縄文土器 深鉢	-	-	△4.9	深鉢口縁部。口縁外面板状工具によるナデ。内面ナデ。	密良	内) にぶい黄褐色 外) 黒褐色	-	
9	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 深鉢	*33.4	-	△11.0	深鉢口縁部。焼成後穿孔2孔。口縁内外外面板状工具によるナデ。	やや粗 やや軟	内) にぶい黄橙色 外) 黒褐色	1/10	
10	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 深鉢	-	-	△10.2	深鉢体部片。口縁内外外面板状工具によるナデ。内面煤付着。	やや粗 やや軟	内) にぶい黄橙色・黒色 外) 浅黄橙色	1/7	
11	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 浅鉢	*15.8	-	△2.1	浅鉢の口縁部片。内外面ナデ。	密良好	内外ともにぶい橙色	1/10	
12	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 浅鉢	*24.2	-	△4.8	浅鉢の口縁部片。内外面ミガキ。	密良	内外ともにぶい黄橙色	1/19	
13	13	3区 土坑7埋土中	縄文土器 浅鉢	*33.2	-	△8.1	浅鉢の口縁部片。内外面ミガキ。	密良好	内外ともにぶい黄橙色	1/4	
14	13	3区 G15 土坑7埋土中	縄文土器 底部	-	10.2	△2.1	底面に穿孔しようとした痕跡が3ヶ所。内外面ナデ。	やや粗	内) 灰白色・にぶい黄 橙色・褐灰色 外) 浅黄橙色・黄橙 色・褐灰色	ほぼ 完存	
15	13	3区 G15 土坑7埋土中	縄文土器 底部	-	*8.0	△2.4	内外面ナデ。	密良		1/2	
16	14	3区 層位不明	縄文土器 深鉢	-	-	△2.7	口縁部片。やや内湾し、口縁端部は肥厚させている。波状口縁。外面は2条の突帯と2条の押し沈線で施文される。内外面縄文。	密良	内) 灰白色・灰黄褐色 外) 灰白色・明黄褐色	-	里木I式
17	14	7区 土坑21	縄文土器 深鉢	*27.0	-	△3.3	口縁部片。口縁上部内外面に1条ずつ沈線状の窪み。外面ナデ、内面ケズリ。	密良	内外とも灰黄褐色	1/12	
18	14	3区 G15 V層	縄文土器 深鉢	-	-	△3.7	口縁部片。口唇部にキザミが連続する。外面板状工具によるナデ、内面ナデ。	密良	内) 褐色・にぶい橙 色 外) 黒褐色	-	
19	14	2区 F8 攪乱層	縄文土器 突帯文土器	-	-	△5.1	口唇部に連続するキザミ。口縁やや下に断面三角形の突帯が付く。突帯上はD字状キザミが連続。内外面とも板ナデ。	密良	内) 灰白色・明黄褐色 外) 浅黄橙色・橙色	-	
20	14	2区 攪乱	縄文土器 突帯文土器	-	-	△5.7	口縁やや下に断面三角形の突帯が付く。突帯上はD字状キザミが連続。内外面とも板ナデ。	密良	内外とも灰白色・褐色	-	
183	72	5区 溝13④層	縄文土器 深鉢	-	-	△4.6	直立気味な口縁部。口唇部にキザミが連続し、そこから下って断面三角形のやや高い突帯が付く。突帯上はD字気味のキザミ。内外面とも二枚貝条痕。	粗 やや軟	内) 灰黄褐色・黒褐色 外) 黒色・灰黄褐色	-	
196	77	2区 溝18	縄文土器 突帯文土器	*30.4	-	△15.7	胴部中位から直立する口縁部をもつ。口縁にほぼ接して断面三角形の突帯が付く。突帯上は斜方向のV字状キザミが連続。内外面とも板ナデ。	粗 やや軟	内外とも灰白色・褐色 ・黒色	1/8	

第4節 弥生時代中期の遺構・遺物

1、概要（図15）

3・4・6・7区から弥生時代中期後葉の竪穴住居4棟、土坑5基を検出した。B17～F19グリッドに土坑が集中し、土坑群の南側に点在するように竪穴住居1・2・4を検出した。3・4・6・7区は名和川左岸河岸段丘上平坦面である。遺構はV層（黒褐色土）掘削後、1層（にぶい褐色土）または2層（明黄褐色土）上面で検出した。検出面の標高は約32.6m～34.3mである。遺構埋土は、土坑9を除き黒褐色土を呈する。主な遺構埋土はV層に由来するものと思われる。土坑9の埋土は灰褐色土とにぶい褐色土を主体とする。土坑9はV層掘削中に検出した。このことより、本来的にはV層中に遺構面が存在するものと想定している。2・5区には当該期の遺構は検出されていない。

検出した遺構のうち、竪穴住居3P2からは炭化物が出土した。炭化した主柱と思われる。土坑9の底面やや上には焼土層を検出し、炭化物も出土した。土坑9と近接して検出した同規模の土坑10・11からも炭化物が出土している。土坑12は、土層断面の観察により落ち込みを確認できたが、平面形は検出できなかった。底面直上に相当する位置から、複数個体の割れた土器が集中して出土した。

遺物は、3・4・6・7区では主に遺構内から出土し、包含層からの出土は比較的少ない。2・5区からは中世の遺構埋土中または包含層から少量ながら出土している。

なお、名和川対岸に位置する名和飛田遺跡では、弥生時代中期後葉の竪穴住居2棟、竪穴3棟を検出している。（森本）

2、検出した遺構・遺物

竪穴住居1（図16、図版16～19）

7区南西隅に位置し、南東側は調査地外、北東側は土坑33・35に切られる。平面形は円形を呈すと思われる。床面での長軸約5.50m、床面積18.88m²を測る。壁高は最も残存する南側で約6cmを測る。住居の埋土は黒褐色土で、僅かに側壁が残存する南側に厚く堆積し、北側ほど薄くなる。床面には幅約15cm、深さ16cmの周壁溝がほぼ全周する。主柱穴と考えられるのはP1～4である。本住居周辺には多数のピットを検出しているが（図15、表3）、埋土の色調と堆積状況、ピットの配置から主柱を判断した。柱穴間距離は約2.30m（P1-2）、約2.45m（P2-3）、約2.53m（P3-4）、約2.47m（P4-1）である。P2⑦層から炭1が出土した。炭化した主柱と思われる。樹種は広葉樹と同定された（第4章第1節参照）。遺存状態は悪く、比較的形状が残っている部分を図化した。⑦層中には小片または粉状に朽ち果てた炭化材が混入している。P6はP3に切られる。床面中央部に検出したP5は平面円形を呈し、長軸約117cm、短軸約96cm、深さ約16cmを測る。埋土は黒褐色土である。P5の北西側と南側には被熱によって赤化した床面を検出した。南西側周壁溝に並行して検出した溝の存在から、建替えが想定される。建替え前の主柱はP6とP1・2・4と思われる。

遺物は、P1⑤層中から肩部にタタキ痕跡の残る甕口縁部22、P2③層中から高坏部23が出土し、南側の床面直上からは甕口縁部21が出土した。（森本）

竪穴住居2（図17・18、図版16・21・22・54）

4区南隅に位置し、南東側は調査地外である。平面形は隅丸方形を呈すと思われる。床面での長軸約5.75m、残存床面積6.14m²を測る。壁高は約14cm、住居の埋土は黒褐色土である。3条の周壁溝が重複していることから、建替えが想定される。主柱穴と考えられるのはP1である。長軸約89cm、

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

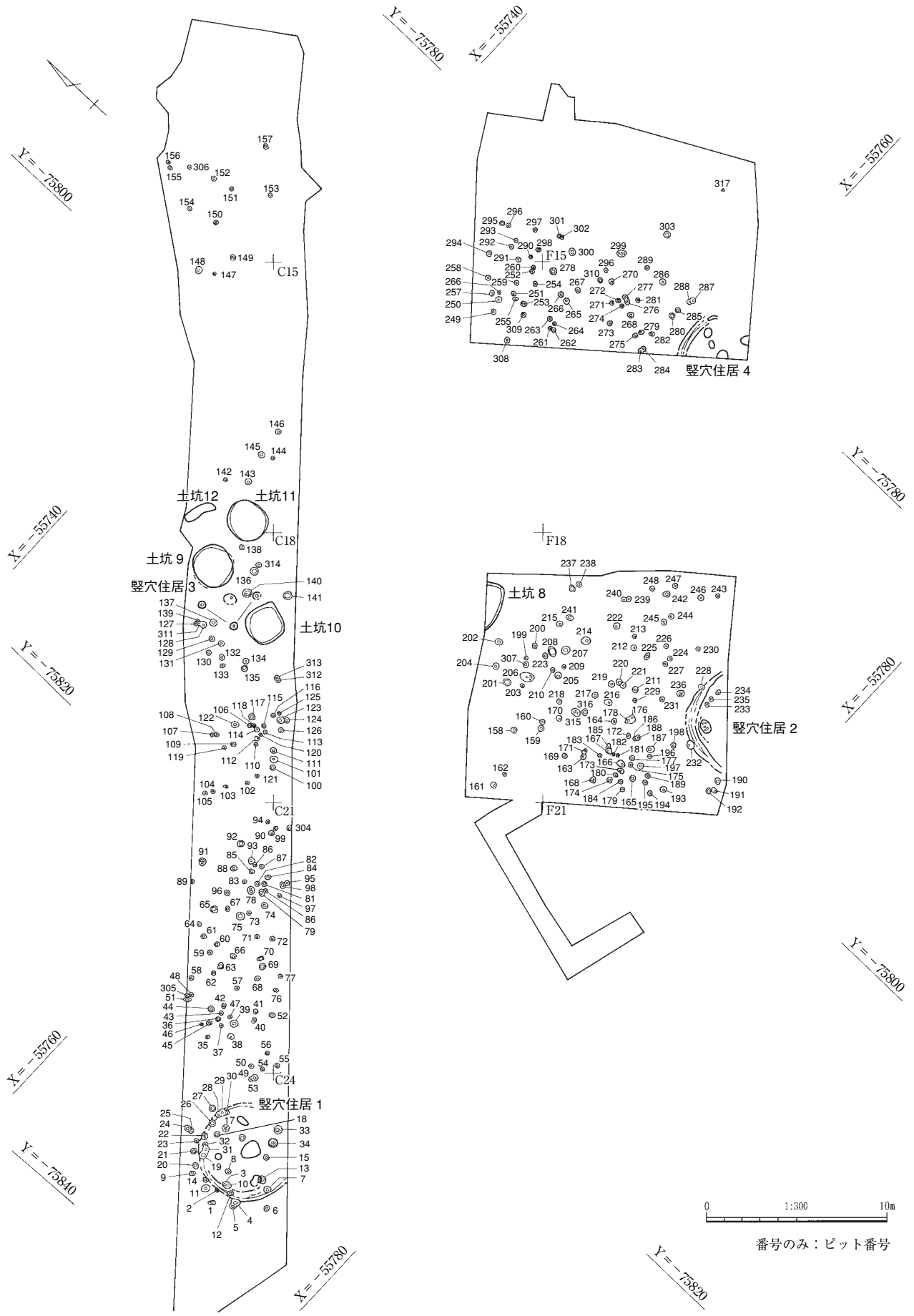
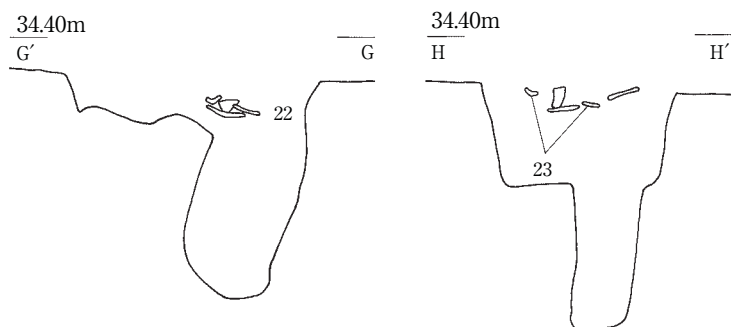
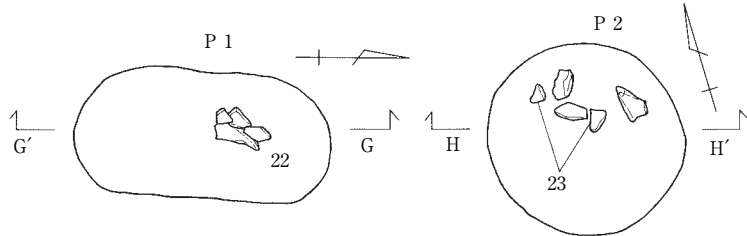
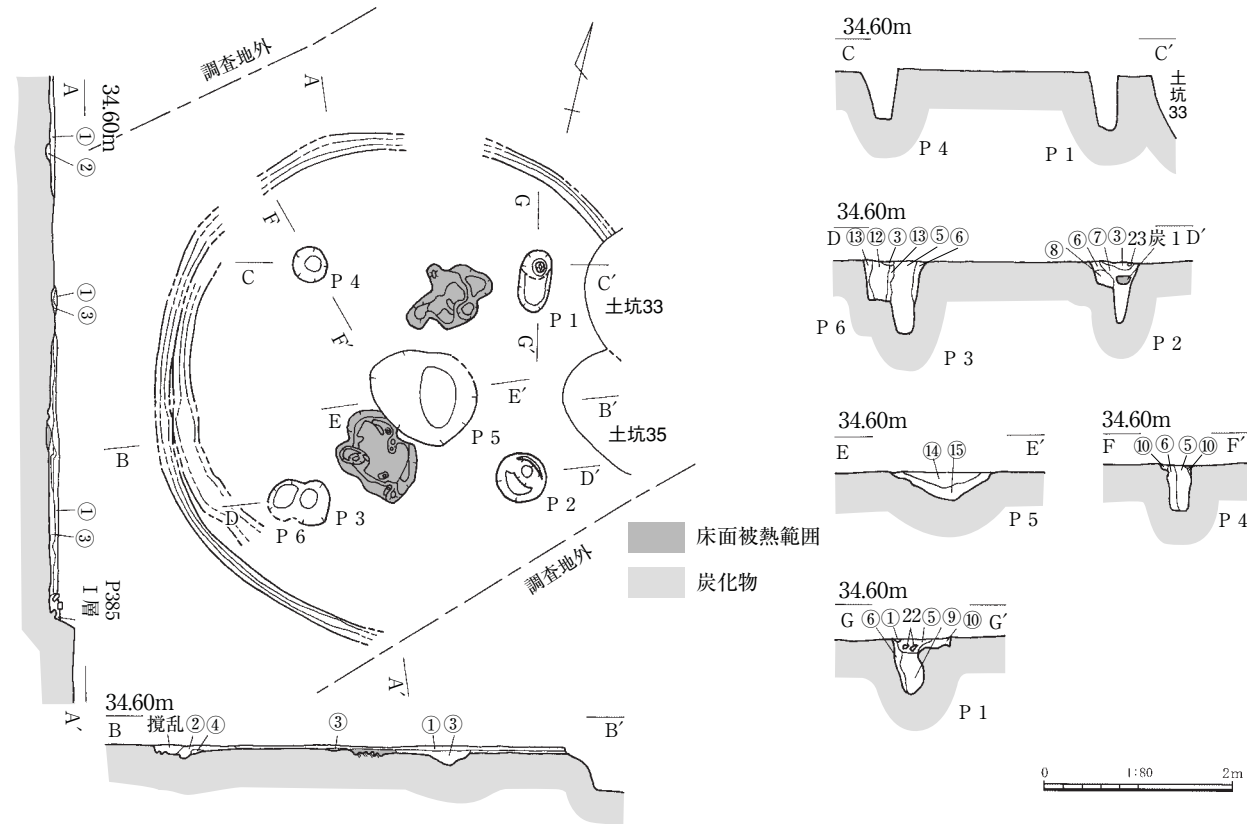


図15 弥生時代中期遺構全体図



P 1 遺物出土状況

P 2 遺物出土状況

P 2 炭化材 (炭 1) 出土状況

0 1:20 50cm

- ① II' 層
- ② にぶい褐色土
- ③ 黒褐色土
- ④ にぶい褐色土 (②層よりやや淡い)
- ⑤ 黒褐色土 (2層土ブロック混)
- ⑥ にぶい褐色土
- ⑦ 黒褐色土 (2層土ブロック混、炭混)
- ⑧ にぶい褐色土 (⑥層よりやや淡い)
- ⑨ 黒褐色土 (2層土ブロック多量混)
- ⑩ 黒褐色土 (2層土ブロック多量混)
- ⑪ にぶい褐色土
- ⑫ 黒褐色土 (2層土ブロック多量混)
- ⑬ にぶい褐色土
- ⑭ 黒褐色土 (2層土ブロック混)
- ⑮ 黒褐色土 (2層土ブロック混、⑬層よりやや淡い)

竪穴住居 1 出土炭化材樹種

(バリノ・サーヴェイ株式会社鑑定、第4章第1節参照)

試料番号	形状・部材	樹種
炭 1	丸太・P2柱	広葉樹 (環孔材)

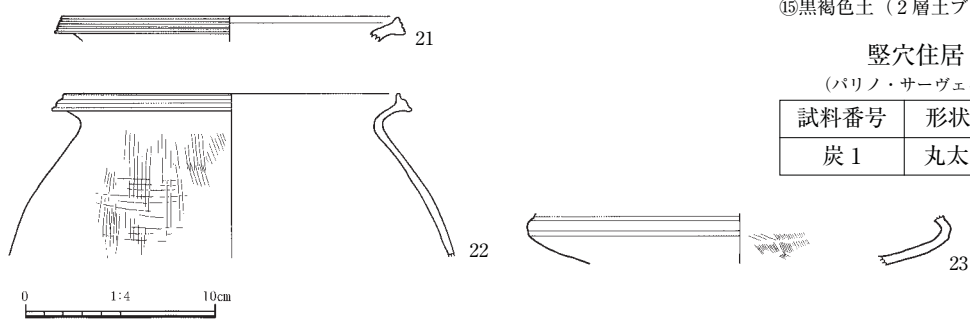
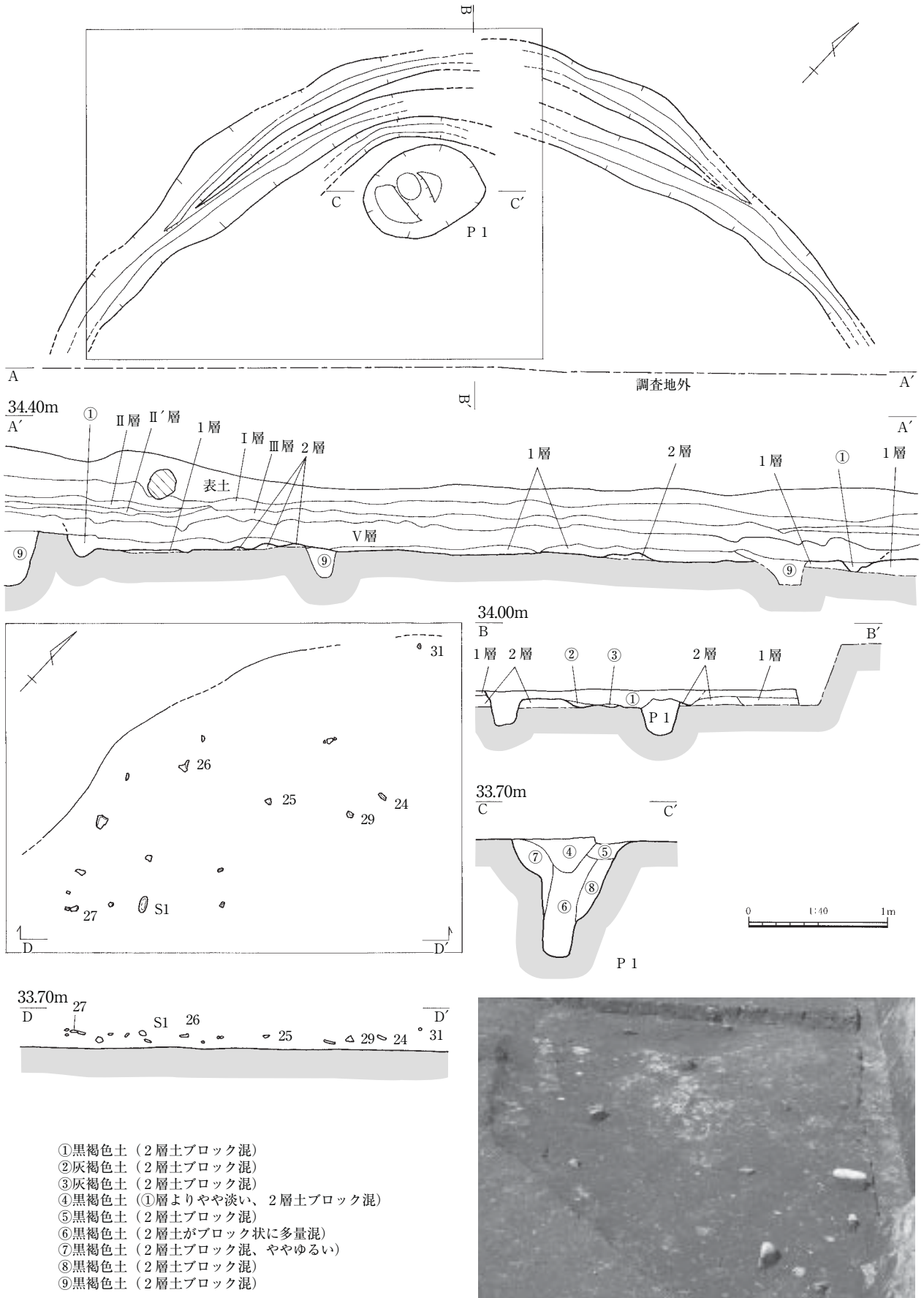


図16 竪穴住居 1 および出土遺物



竪穴住居2 遺物出土状況 (南西から)

図17 竪穴住居2

短軸約65cm、深さ約56cmを測る。

遺物は、床面直上から赤色塗彩の壺口縁部28、土玉30、有溝土錘31などが出土した。 (森本)

竪穴住居 3 (図19、図版22)

7区中央部に位置する。検出したのは床面の一部のみである。P 1～4のピットの配置から竪穴住居と判断した。本住居周辺からは多数のピットを検出しているが(図15、表3)、埋土の色調と堆積状況、ピットの配置からP 1～3を主柱と判断した。柱穴間距離は約2.08m (P 1 - 2)、2.15m (P 2 - 3)である。住居の中央部と想定される位置にP 4を検出し、埋土は黒褐色土を呈す。P 4の北

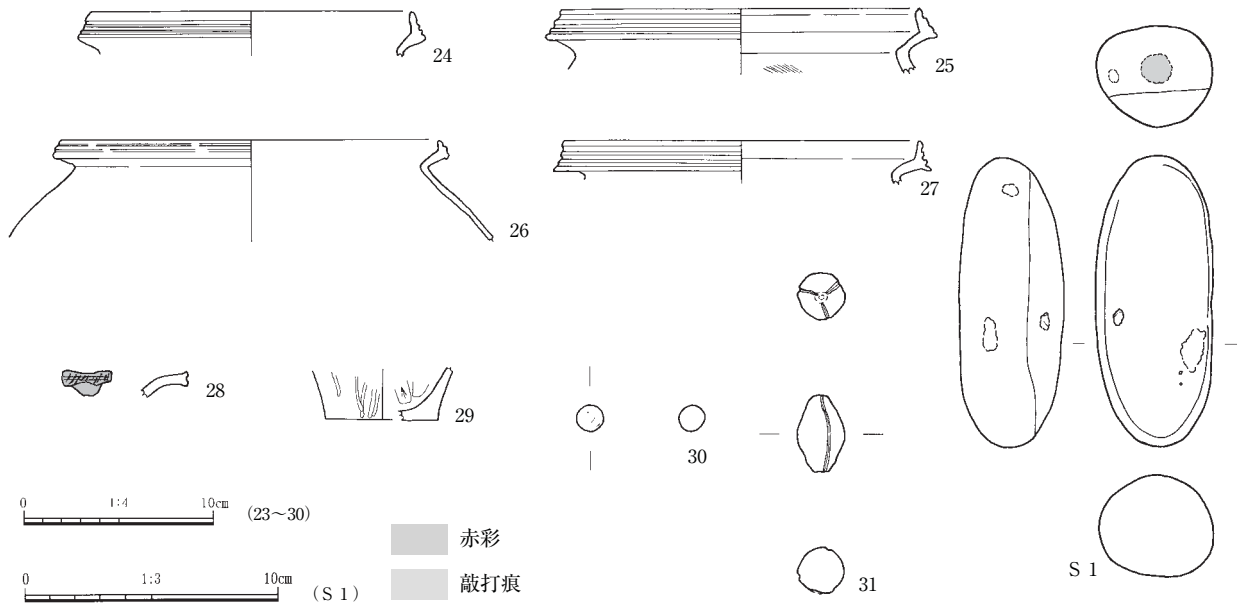


図18 竪穴住居 2 床面直上出土遺物

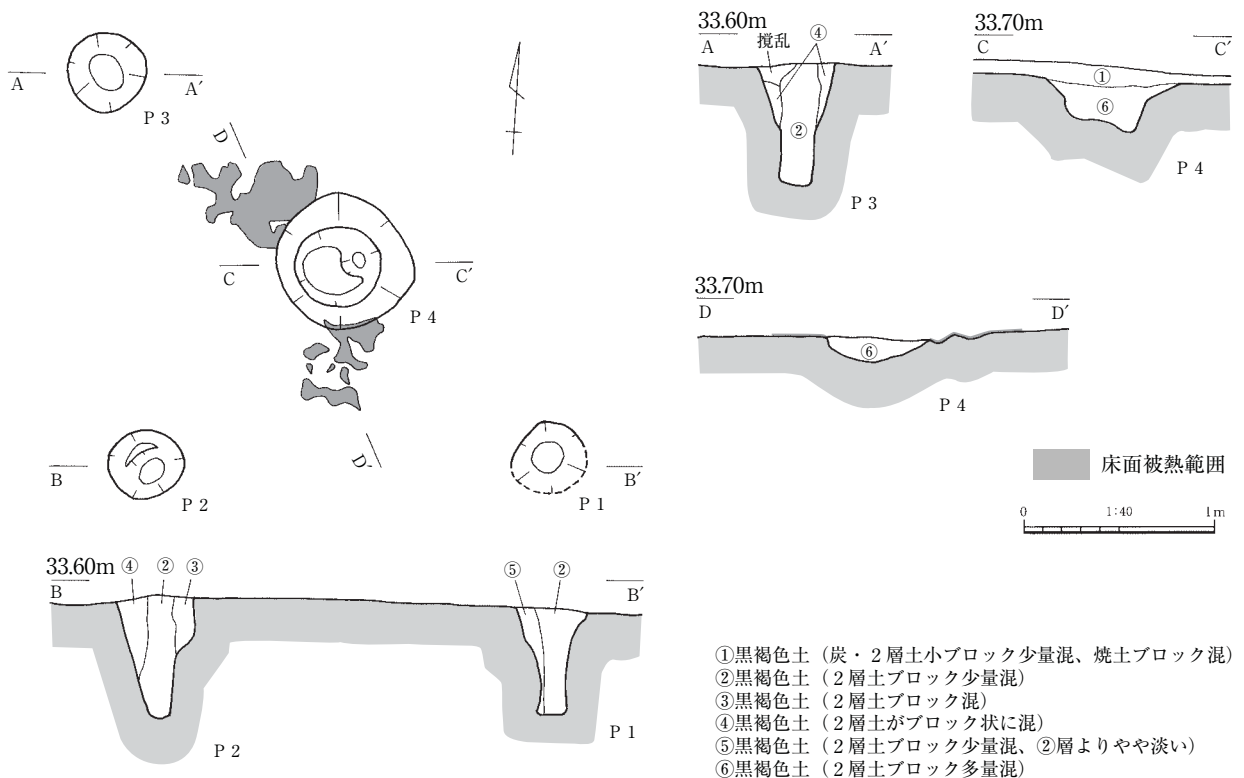
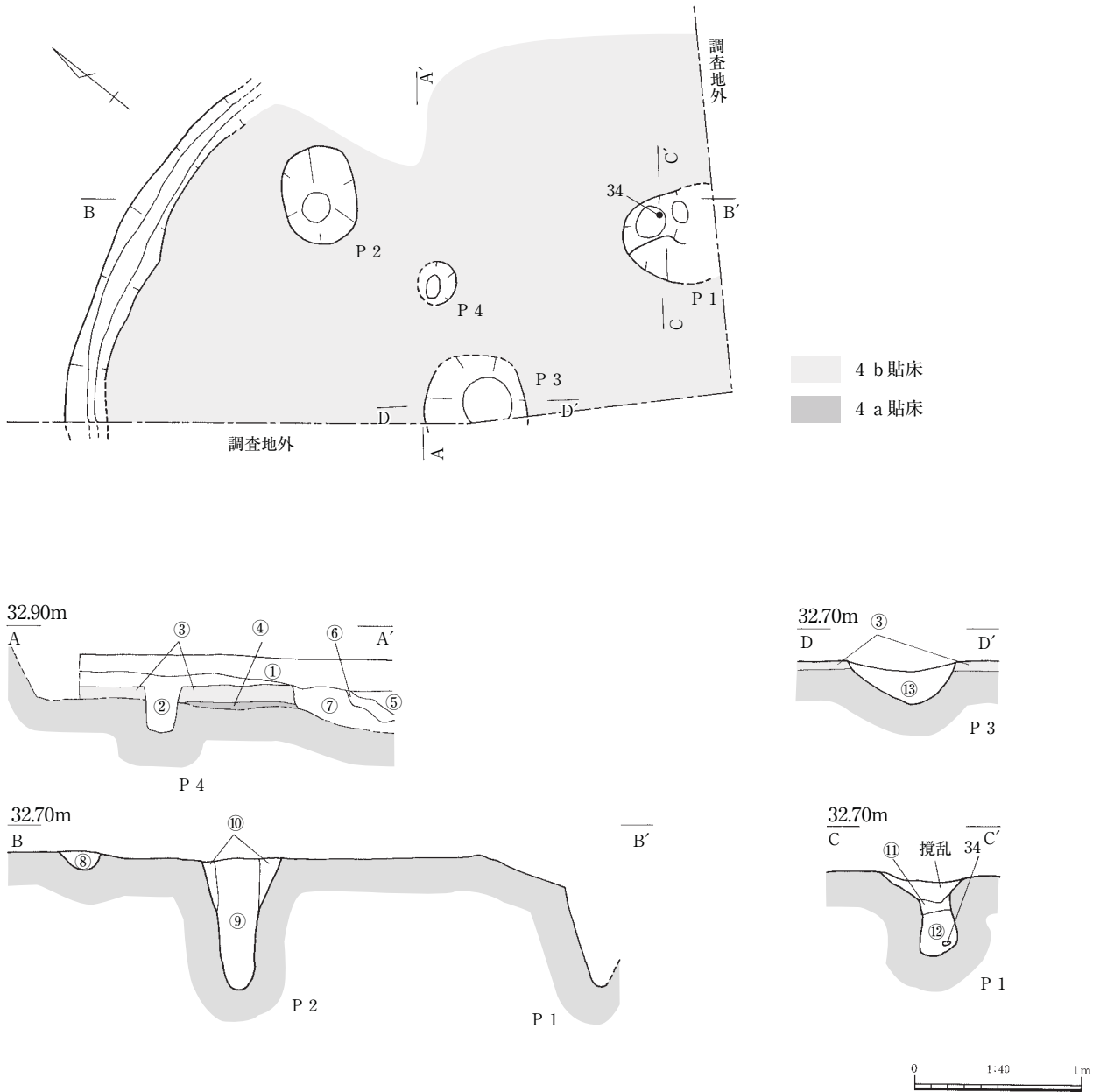
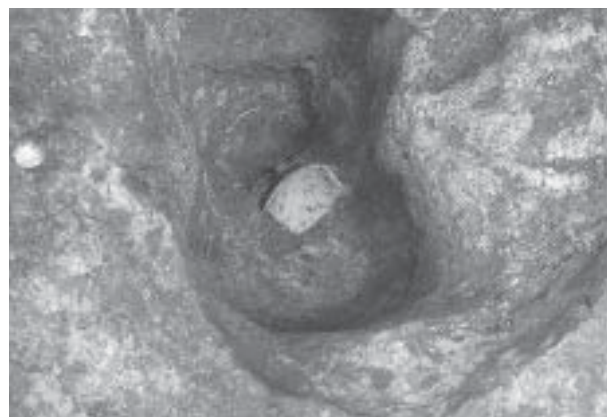


図19 竪穴住居 3

第3章 門前上屋敷遺跡の調査



- ①暗褐色粘質土 (白色砂小粒少量混)
- ②黒褐色粘質土 (2層土小ブロック少量混)
- ③黒褐色粘質土 (2層土小ブロック多量混)
- ④黄褐色粘砂土 (淡褐色土小ブロック多量混)
- ⑤黒褐色粘質土 (淡褐色土小ブロック少量混、攪乱)
- ⑥黒褐色粘質土 (淡褐色土小ブロック多量混、攪乱)
- ⑦黒褐色粘質土 (淡褐色土小ブロック少量混、攪乱)
- ⑧黒褐色粘質土 (2層土小粒混)
- ⑨暗褐色粘質土 (2層土小粒混)
- ⑩暗褐色粘質土 (2層土ブロック多量混)
- ⑪暗褐色粘質土 (2層土小粒混)
- ⑫暗褐色粘質土 (2層土小粒少量混)
- ⑬黒褐色粘質土 (2層土粒混)



P 1 遺物 (34) 出土状況 (北西から)

図20 竪穴住居 4 b

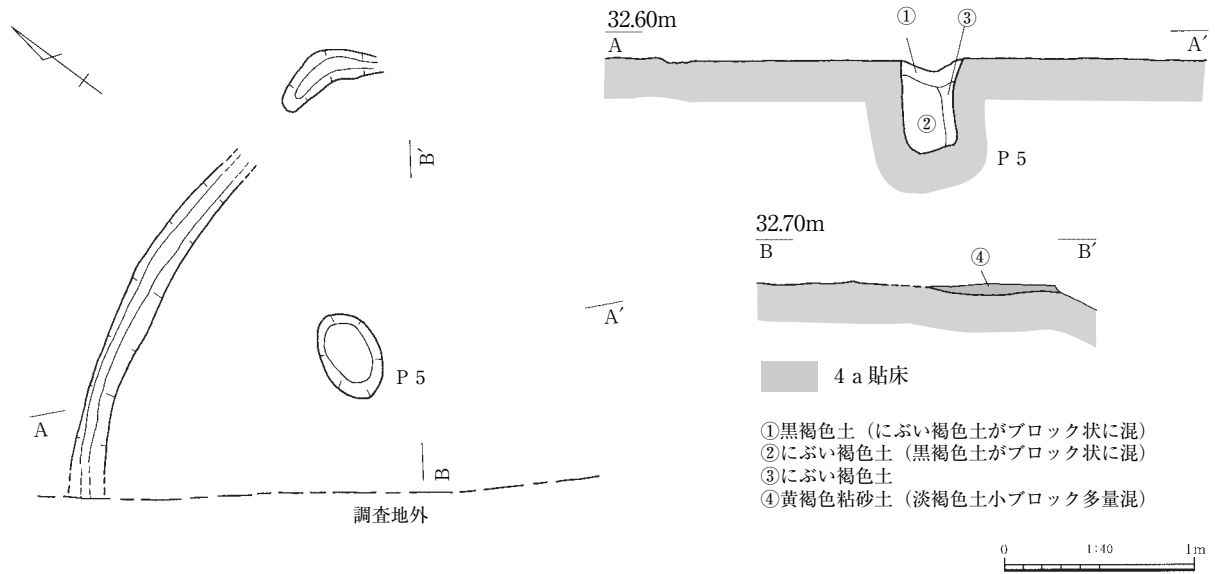


図21 竪穴住居 4 a

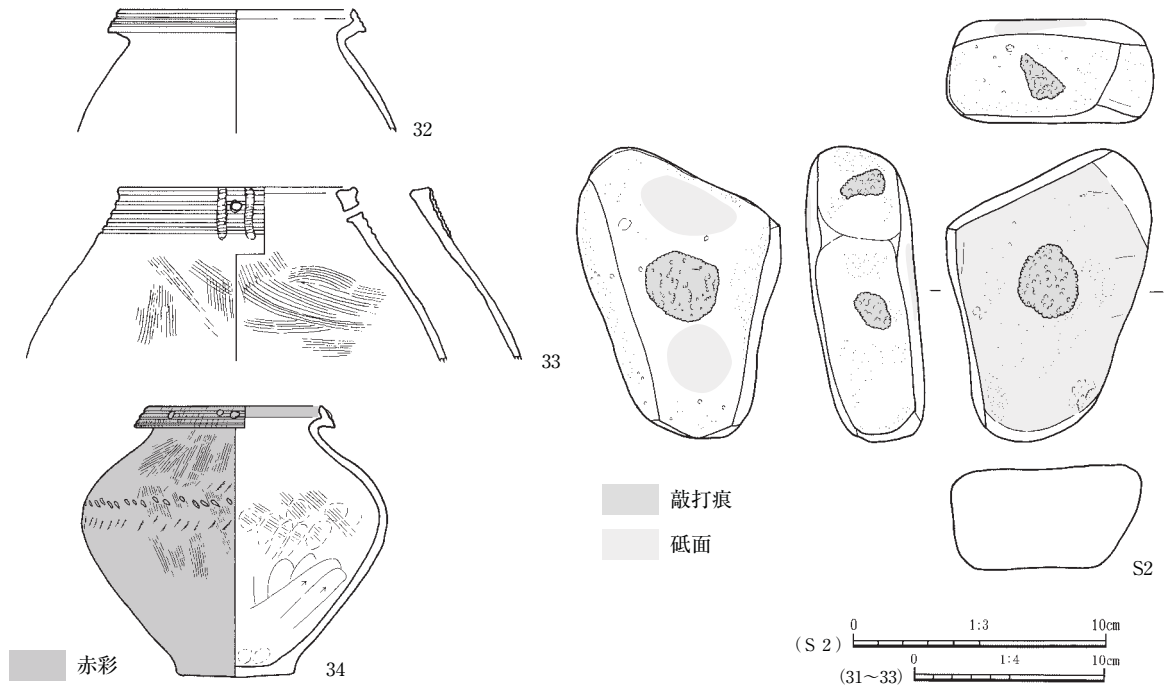


図22 竪穴住居 4 出土遺物

西側と南側には被熱して赤化した床面を検出した。

P 4 埋土中から土器の小片が出土したが、図化できなかった。

(森本)

竪穴住居 4 (図20~22、図版16・20・21・54)

3 区の南隅に位置し、南側は調査地外である。検出した貼床下に周壁溝を検出したことから建替えが想定される。建替え前を竪穴住居 4 a、建替え後を竪穴住居 4 b とする。4 a・4 b とともに検出したのは床面の約1/4程度である。

竪穴住居 4 a は、竪穴住居 4 b の貼床③層除去後に検出した。平面形は円形を呈すると想定される。床面における残存部最大長は約3.4m、残存床面積は約6.1m²を測る。周壁溝は幅14~18cm・深さ3cm程度で、断面はU字状を呈する。支柱穴 P 5 を検出した。床面には部分的に貼床④層 (図20④層

と同一)があり、厚さは約5cmを測る。

竪穴住居4bは、竪穴住居4a廃絶後、貼床③層で被覆し構築される。③層の厚さは6~10cmを測る。平面形は円形を呈すると想定される。床面における残存部最大長は約3.7m、残存床面積は約7.2m²である。残存壁高は約11cmを測る。周壁溝は幅18~25cm、深さ6~8cmで、断面はU字状を呈する。支柱穴はP1・P2の2基だが、P1内に切り合いが存在し、東側が新しい。柱間距離は約2.0m(P1-2)である。南西側の調査地際に検出したP3は長径約62cm、深さ約25cmを測り、円形を呈すると思われる。P1-3間に検出したP4は長径約28cmを測る。支柱と推測する。

出土遺物は、P1新段階埋土中出土の甕34、埋土中出土の無頸壺33などがある。(西川)

表1 弥生時代中期竪穴住居計測表

(): 残存値

遺構名	平面形	床面規模 (m)	床面積 (m ²)	時期	備考
竪穴住居1	円形	5.50×(4.83)	18.88	弥生時代中期後葉	
竪穴住居2	隅丸方形	5.75×(2.04)	(6.14)	弥生時代中期後葉	
竪穴住居3	-	-	-	弥生時代中期	
竪穴住居4a	円形		(6.13)	弥生時代中期後葉	
竪穴住居4b	円形		(7.21)		

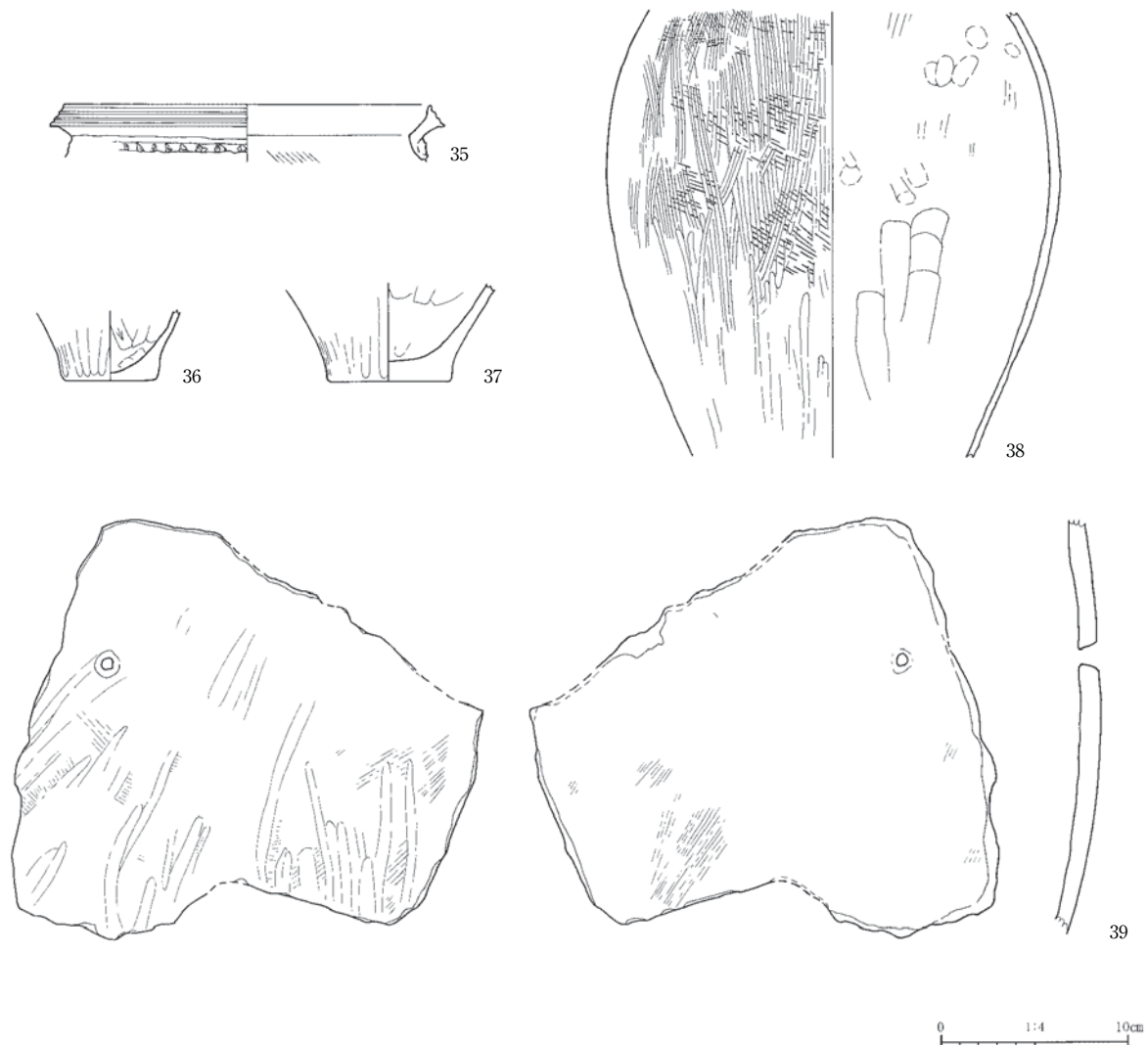


図23 土坑8出土遺物

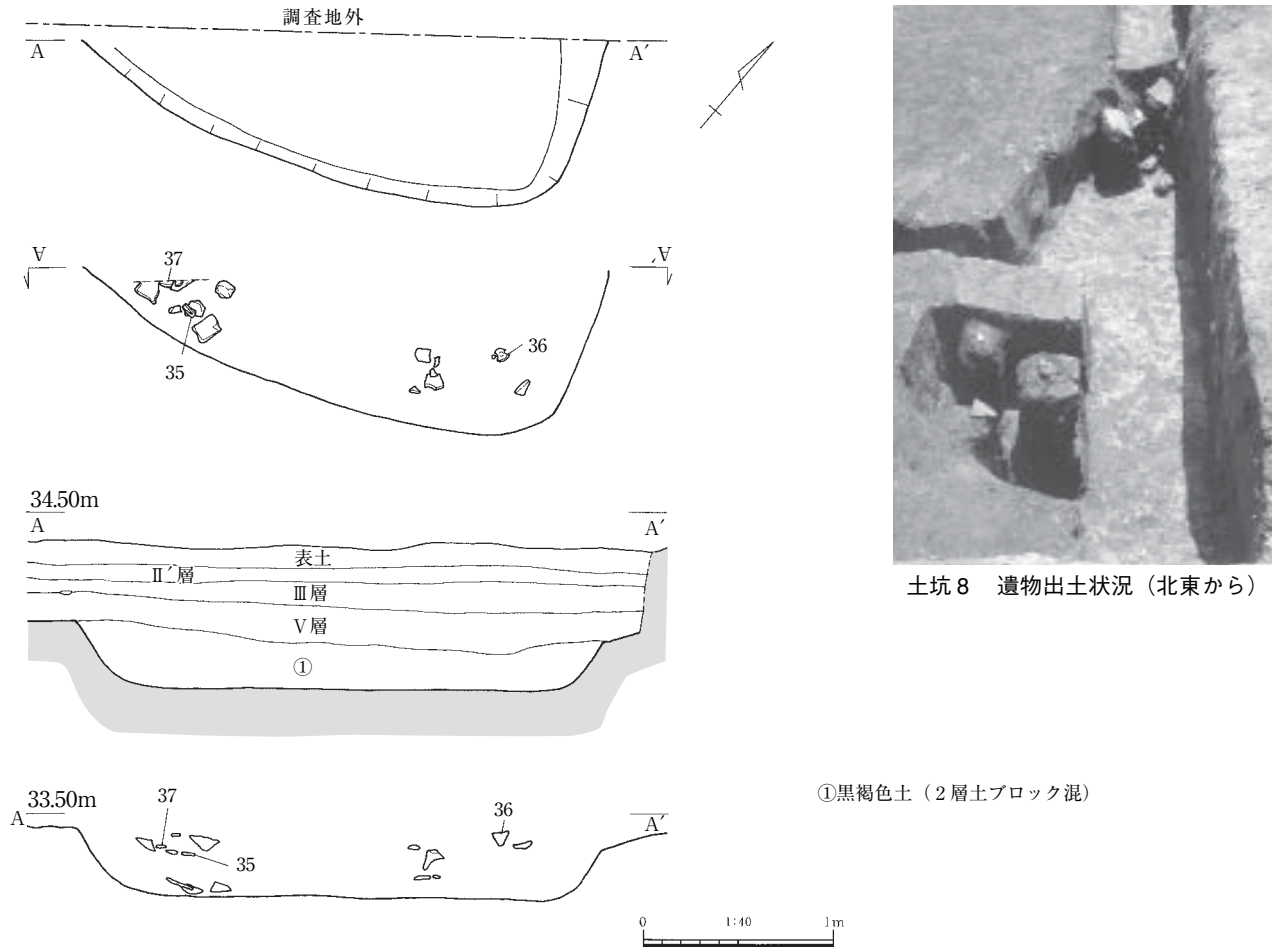


図24 土坑 8

土坑 8 (図23・24、図版23・24)

4区北隅に位置し、北西側は調査地外である。平面形は隅丸方形を呈すと思われる。検出面での規模はA-A'で約2.75m、深さは約33.6cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は①層から35～39が出土した。このうち、38は肩部にタタキの痕跡が残る甕胴部片、39は大型の壺または甕の胴部片で、焼成後に1孔穿孔される。(森本)

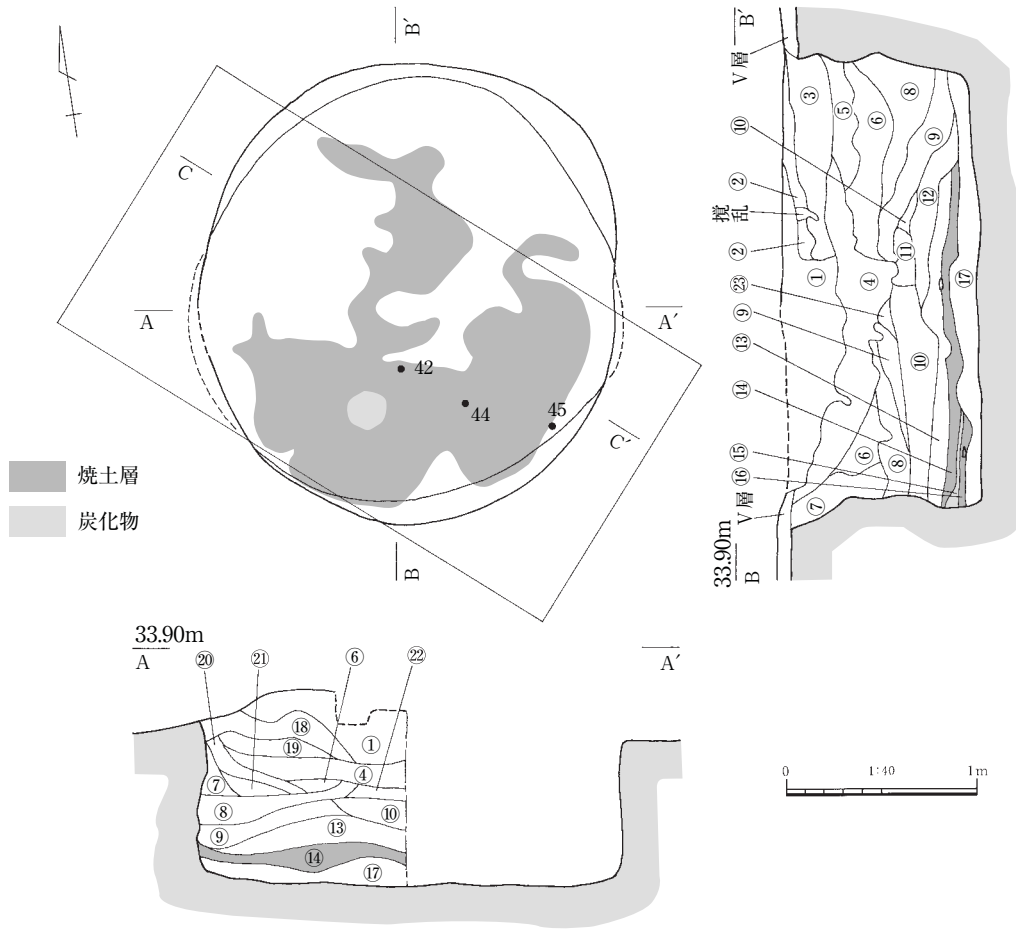
土坑 9 (図25～29、図版17・28～30・54)

7区中央部に位置する。V層掘削中に検出した。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長軸約2.45m、短軸約2.23mを測る。断面形は部分的にややフラスコ状を呈す。深さは約96cm、埋土は灰褐色土とにぶい褐色土を基調とし、2層ブロックが多く混入する。①～⑦層は中央部が窪むように、⑧～⑬層は中央部が高くなるように堆積する。⑭層以下は比較的平らに堆積する。

底面やや上に焼土層(⑭・⑯層)を検出した。壁面・底面ともに被熱した痕跡は認められない。⑭層上面からは炭2・4・6、底面直上からは炭5・7・8が出土した。樹種同定の結果、モミ属、コナラ属アカガシ亜属、スタジイ、マキ属など、多様な樹種で構成されることがわかった(第4章第1節参照)。

本土坑から約1～2mと近接した位置に土坑10・11を検出した。埋土は黒褐色土であり本土坑とは異なるが、ほぼ同規模であり、出土土器から同時期のものと考えられ、炭化物も出土している。

遺物は、底面直上から壺口縁40、底部41、⑭層直上から甕42・43、砥石S 3が出土した。このほか



- ① 灰褐色粘質土 (2層土小ブロック少量混)
- ② 灰褐色粘質土
- ③ にぶい褐色土 (2層土小ブロック少量混)
- ④ 灰褐色粘質土 (2層土ブロック、黄白色土小ブロック多量混)
- ⑤ にぶい褐色土 (2層土小ブロック少量混)
- ⑥ 灰褐色粘質土 (2層土小ブロック多量混)
- ⑦ 黒褐色土 (2層土小ブロック多量混)
- ⑧ 黒褐色土 (2層土小ブロック少量混)
- ⑨ にぶい褐色土
- ⑩ 灰褐色土 (2層土ブロック多量混)
- ⑪ 灰褐色土 (2層土小ブロック混)
- ⑫ 灰褐色土 (2層土小ブロック少量混、焼土ブロック多量混)
- ⑬ 灰褐色土 (2層土小ブロック少量混、焼土ブロック混)
- ⑭ 焼土層 (2層土ブロック少量混、炭混)
- ⑮ 炭化層
- ⑯ 焼土層 (2層土ブロック少量混、炭混)
- ⑰ 黒褐色粘質土 (2層土ブロック少量混、焼土ブロック混)
- ⑱ 灰褐色土 (2層土小ブロック少量混)
- ⑲ にぶい褐色土
- ⑳ にぶい黄褐色土
- ㉑ にぶい褐色土
- ㉒ にぶい褐色土

土坑9 出土炭化材樹種

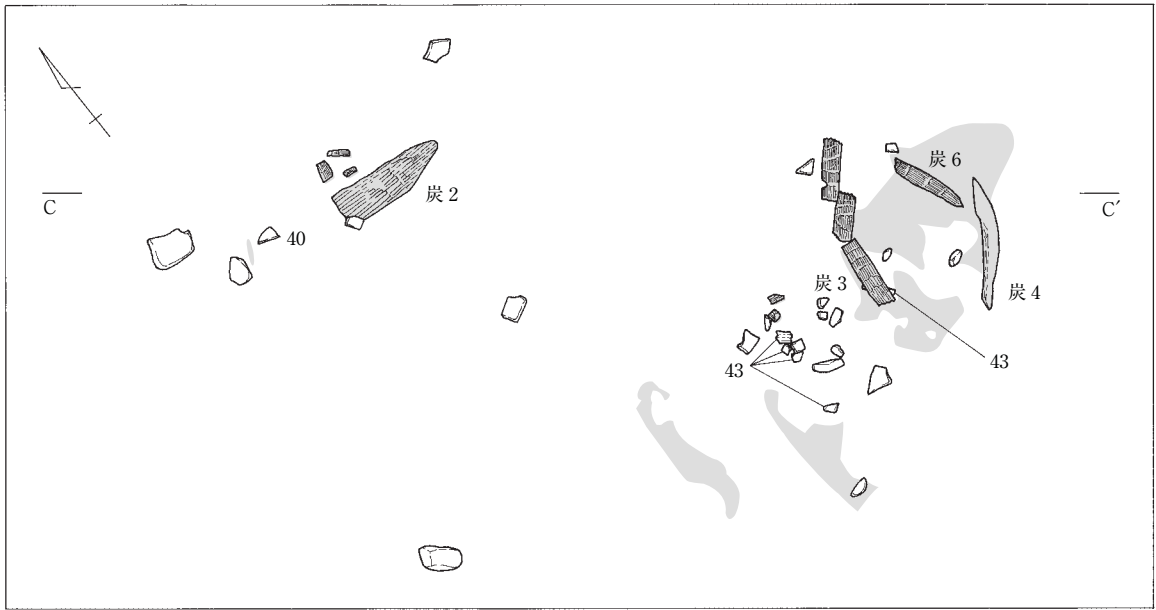
(パリオ・サーヴェイ株式会社鑑定、第4章第1節参照)

試料番号	樹種
炭2	モミ属
炭3	コナラ属アカガシ亜属
炭4	スダジイ
炭5	マキ属
炭6	スダジイ
炭7	スダジイ
炭8	広葉樹 (環孔材)

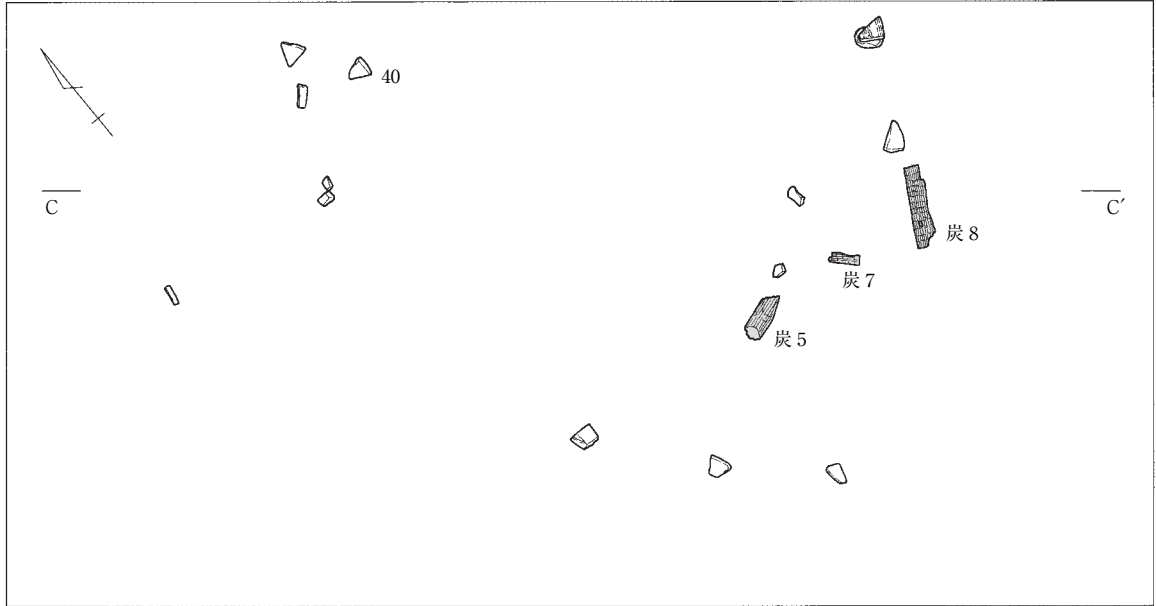


土坑9 炭化物 (炭3・4・6) 出土状況 (北から)

図25 土坑9



⑭層（焼土層）直上遺物出土状況図



底面直上遺物出土状況図

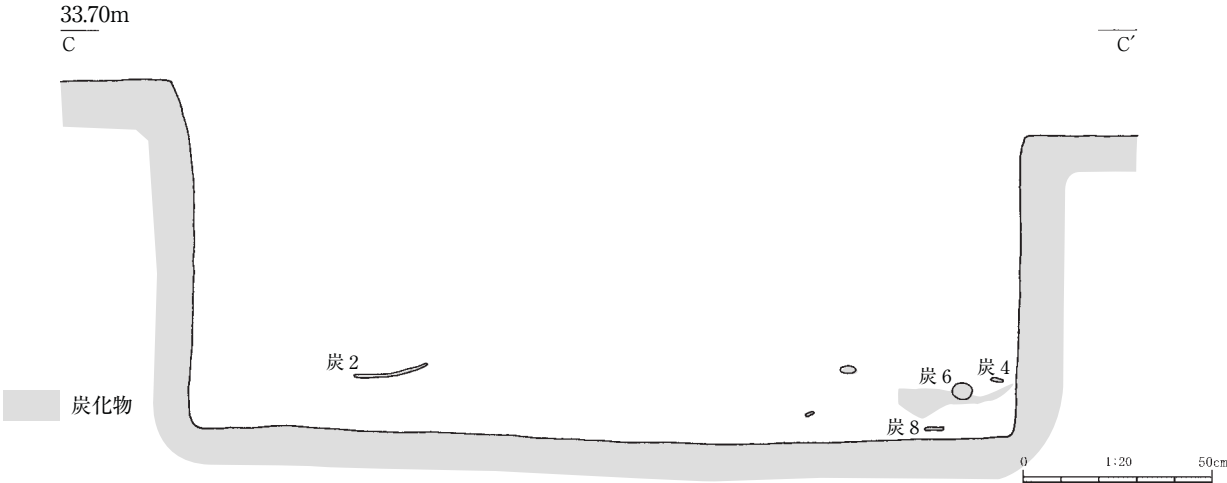


図26 土坑9 遺物出土状況図

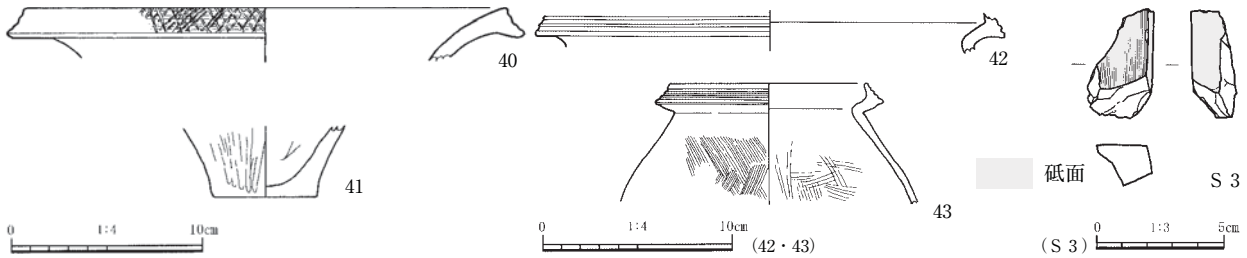


図27 土坑9底面直上出土遺物

図28 土坑9⑭層（焼土層）直上出土遺物

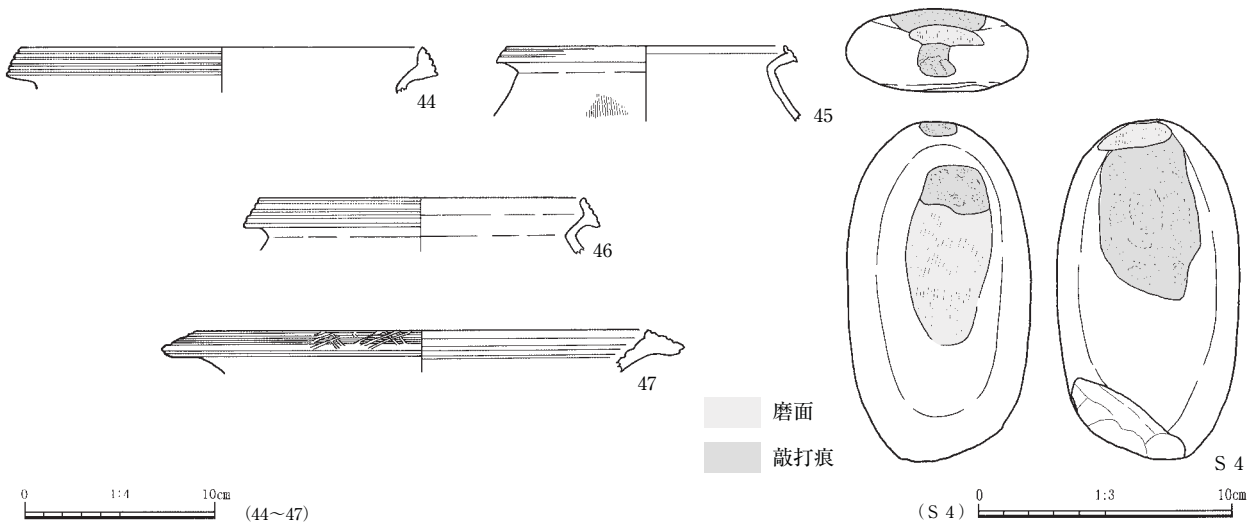


図29 土坑9出土遺物

埋土中からも、甕44～46、壺47、礫石器S4が出土している。（森本）

土坑10（図30～32、図版17・25・26）

7区中央部に位置する。平面形はいびつな隅丸方形を呈す。検出面での規模は長軸約2.05m、短軸約2.04m、深さは約77cmを測る。断面形は部分的にフラスコ状を呈す。埋土は黒褐色土である。

④層上面には焼土ブロック（③層）を検出し、④層からは炭9～13が出土した。樹種同定の結果、クリ近似種、ヤマグワなどで構成されることがわかった（第4章第1節参照）。

遺物は、底面直上から甕48・49、埋土中から、高坏72・73などが出土した。図化できなかったが、約2.5cmの被熱した粘土塊2点が出土した。検出面と埋土中層からの出土である。（森本）

土坑11（図33～35、図版17・27・30・54）

7区中央部に位置する。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長軸約2.35m、短軸約2.24m、深さは約60cmを測る。断面形は部分的にややフラスコ状を呈す。埋土は黒褐色土である。

埋土中から炭14～16が出土した。樹種同定の結果、炭14はクリ近似種、炭16はヤマグワとわかった（第4章第1節参照）。

遺物は、底面直上から甕87～89などが出土した。埋土中からは鉢または高坏坏部と思われる105、剥片S6などが出土している。（森本）

土坑12（図36・37、図版29・31）

7区中央部に位置し、北側は調査地外である。土層断面の観察により落ち込みを確認できたが、平面形は検出できなかった。深さは約14cmを測る。埋土は黒褐色土である。

遺物は、長軸約2.0m、短軸約0.5mの範囲に複数個体の土器が集中して出土した。本来的には、底

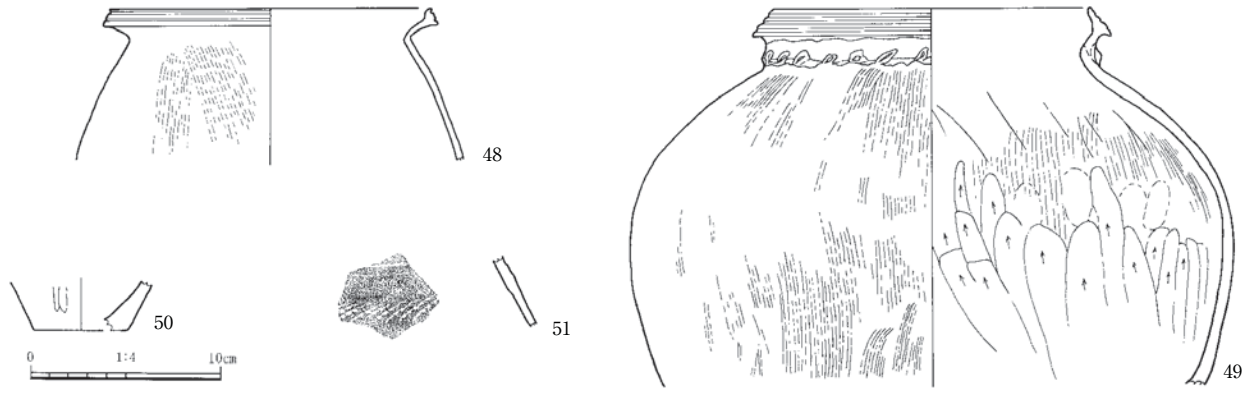


図30 土坑10⑤層出土遺物

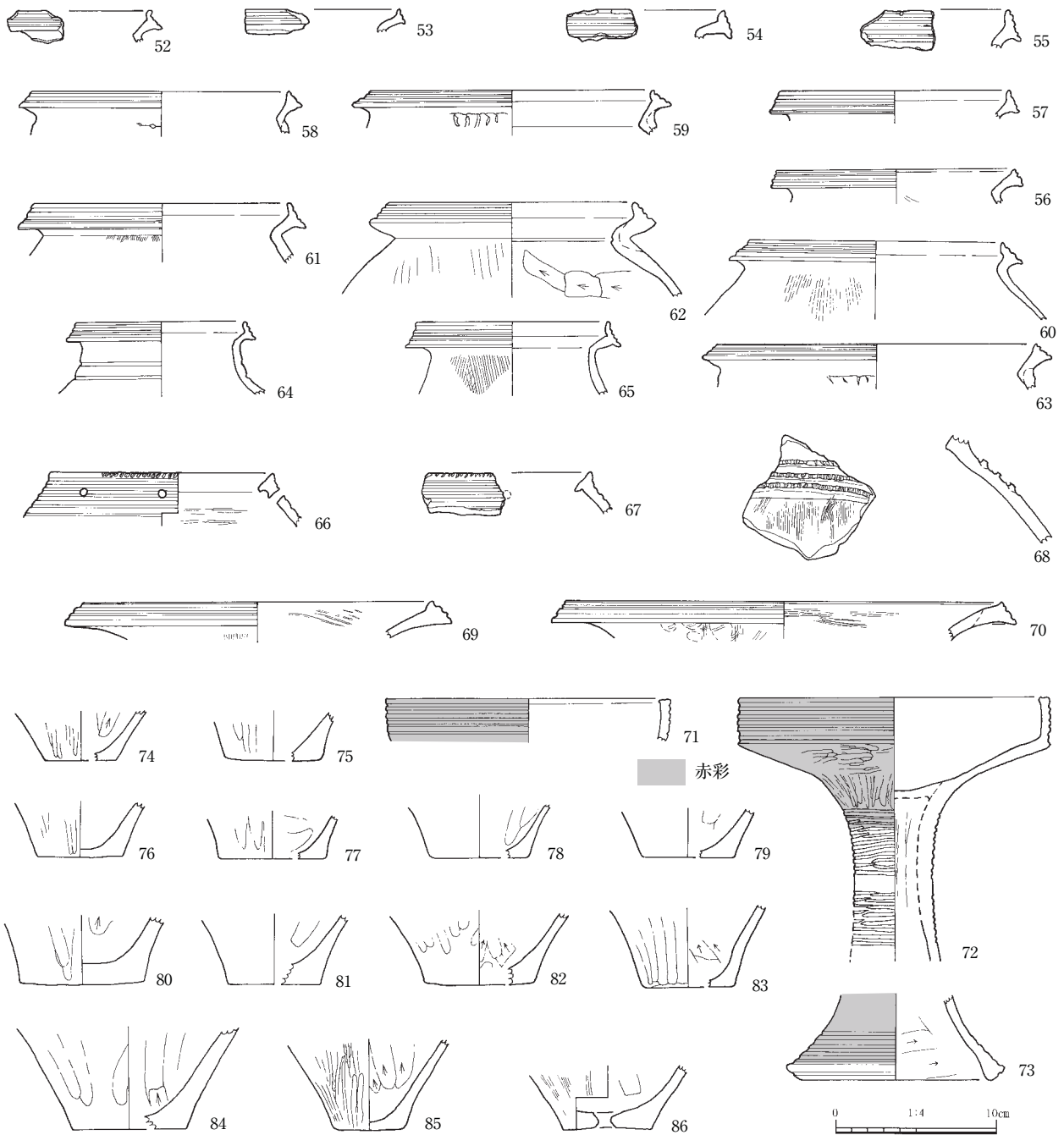
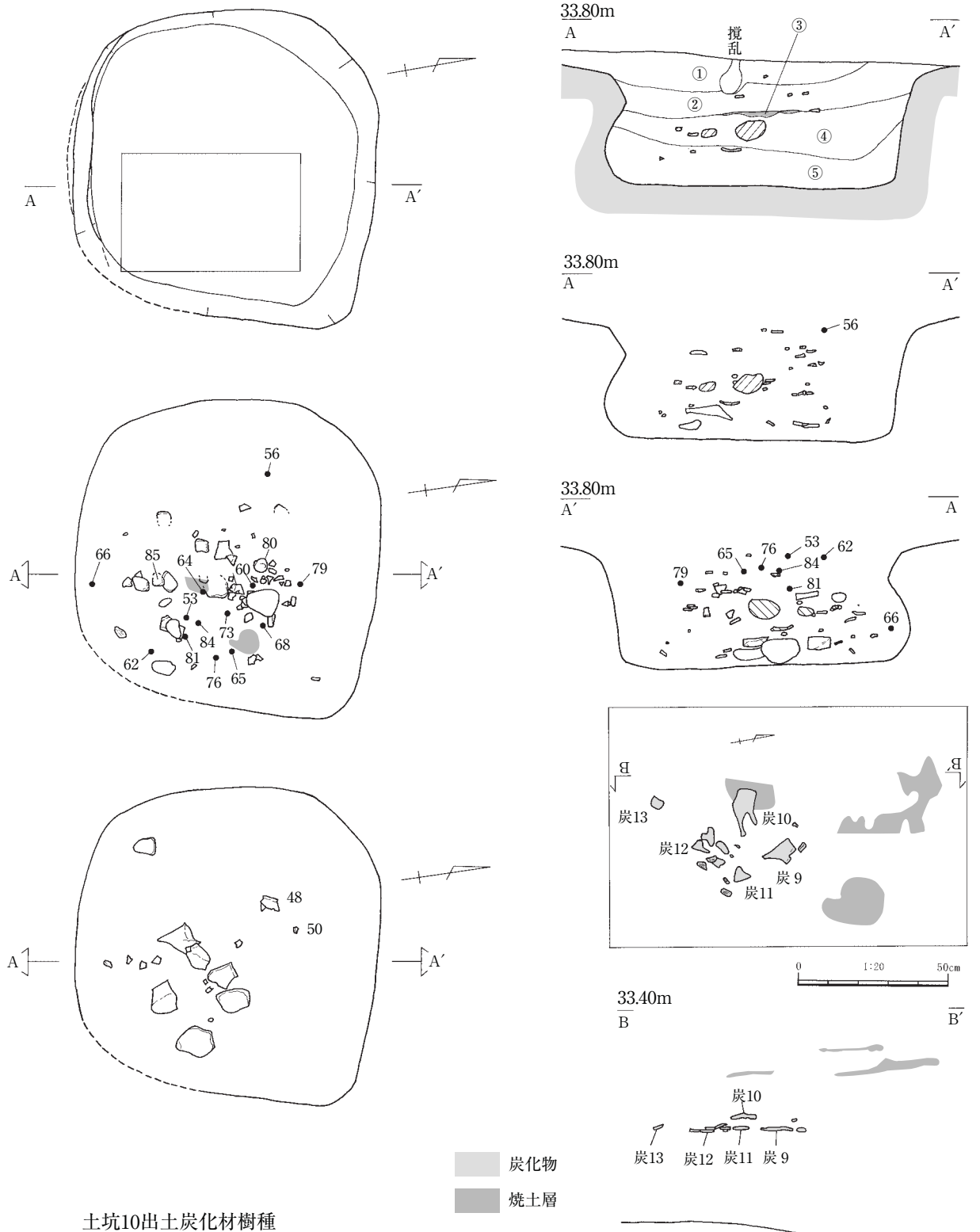


図31 土坑10出土遺物



土坑10出土炭化材樹種

(パリオ・サーヴェイ株式会社鑑定、第4章第1節参照)

試料番号	樹種
炭9	クリ近似種
炭10	広葉樹
炭11	ヤマグワ
炭12	クリ近似種
炭13	不明

焼土・炭化物出土状況図

- ①黒褐色土 (2層土ブロック少量混)
- ②黒褐色土 (2層土ブロック混)
- ③焼土ブロック
- ④黒褐色土 (焼土ブロック少量・2層土ブロック多量混)
- ⑤黒褐色土 (2層土ブロック混)

図32 土坑10

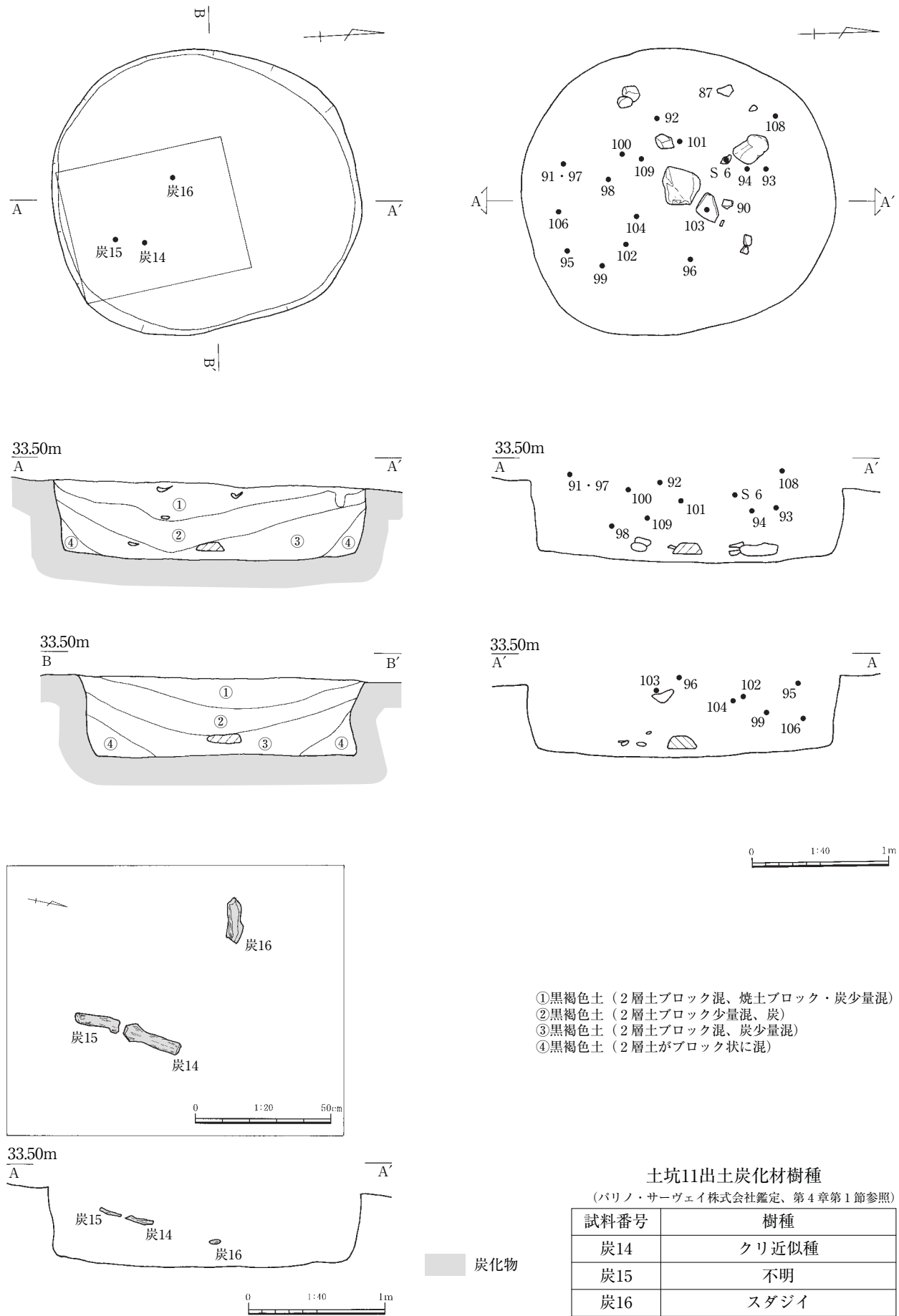


図33 土坑11

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

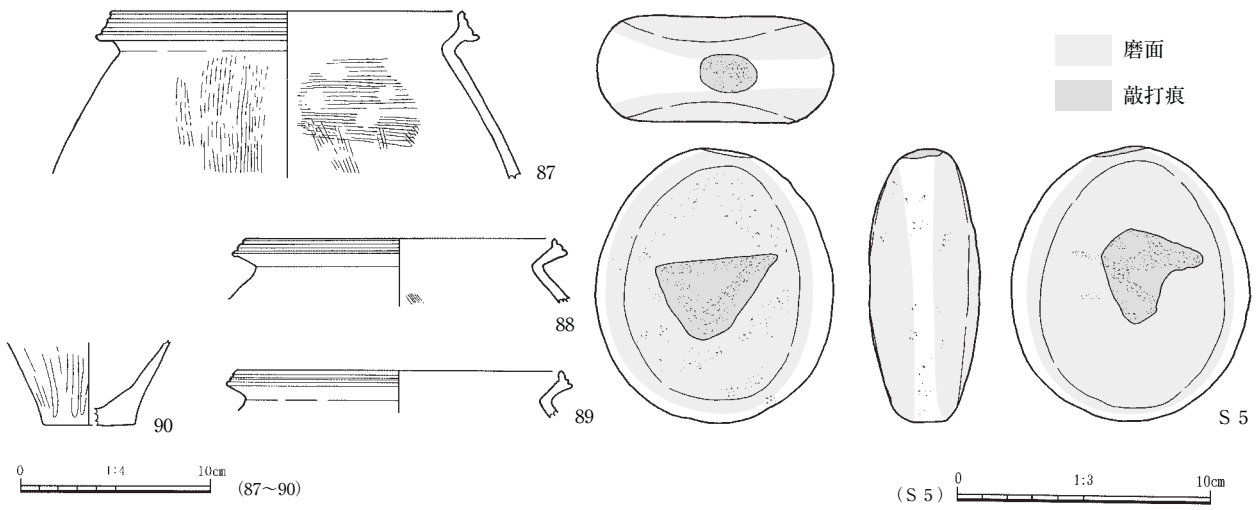


図34 土坑11③層出土遺物

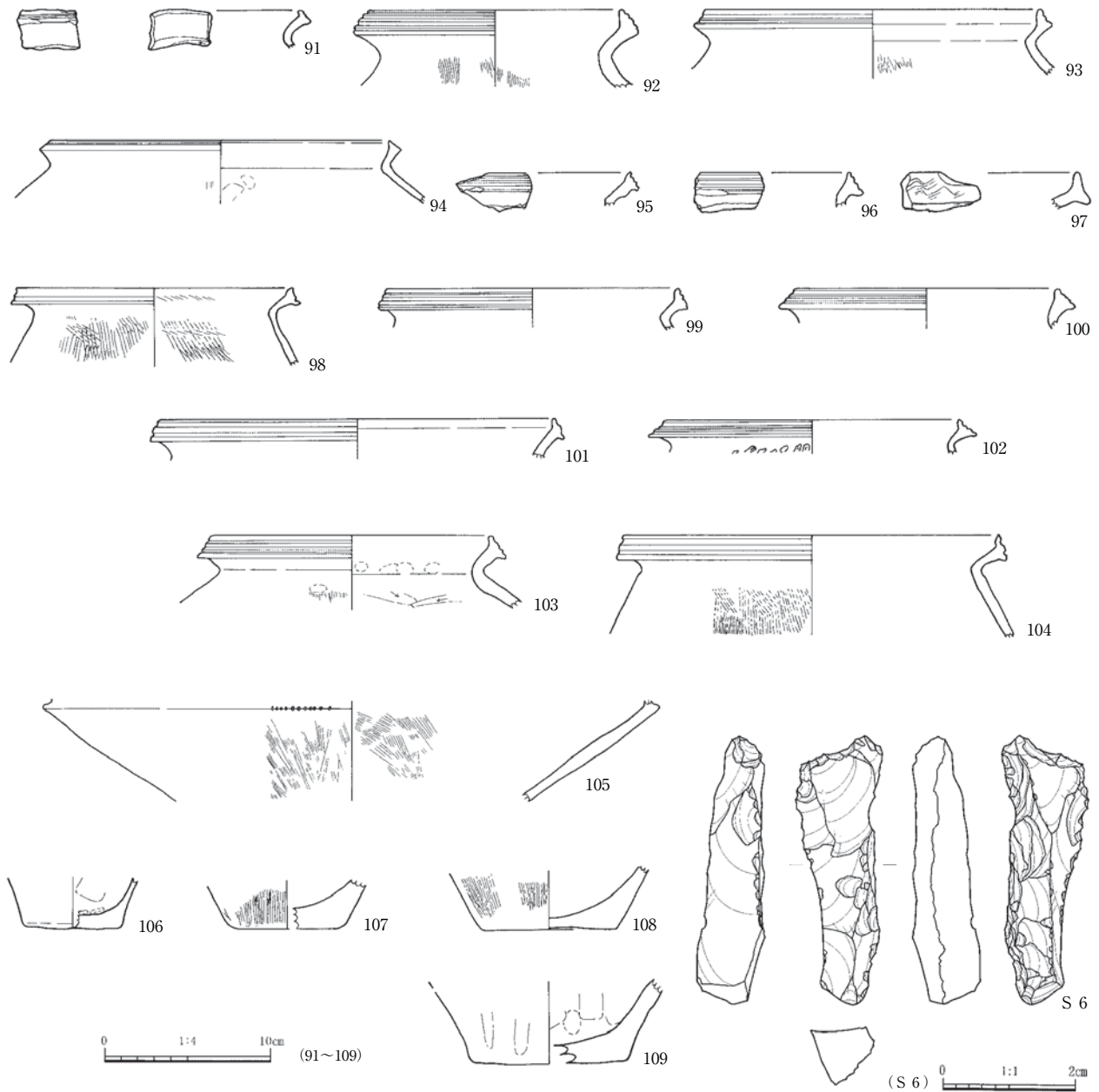


図35 土坑11出土遺物

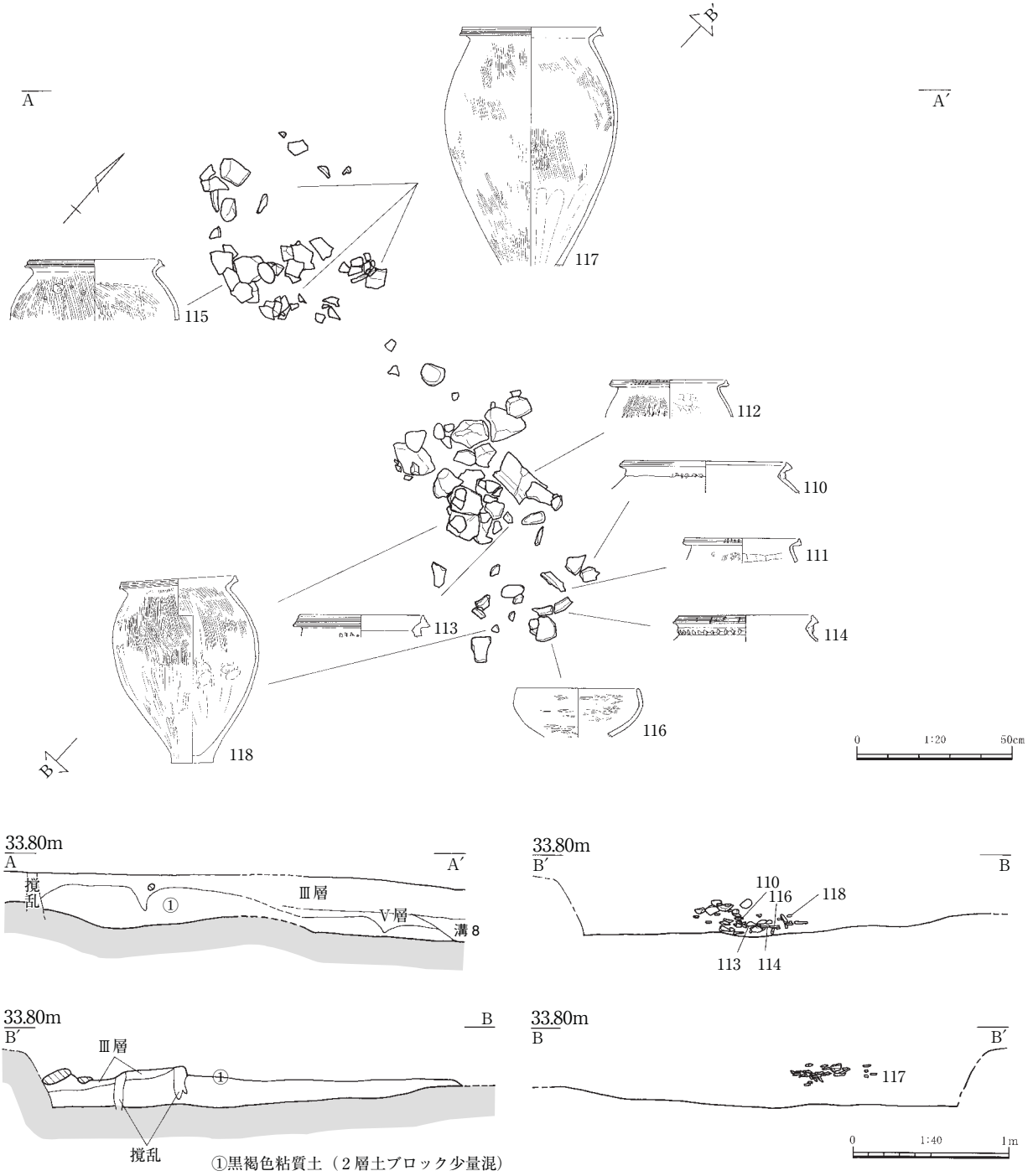


図36 土坑12

表2 弥生時代中期土坑計測表

() : 残存値

遺構名	平面形	床面規模 (m)	検出面からの 深さ (cm)	底面積 (m ²)	時 期	備 考
土坑8	隅丸方形	2.75 〈A-A'ライン〉	33.6	(1.18)	弥生時代中期後葉	
土坑9	円形	2.45×2.23	96.3	3.92	弥生時代中期後葉	
土坑10	隅丸方形	2.05×2.04	77.2	2.79	弥生時代中期後葉	
土坑11	円形	2.35×2.24	59.8	3.53	弥生時代中期後葉	
土坑12	-	-	14.0	-	弥生時代中期後葉	

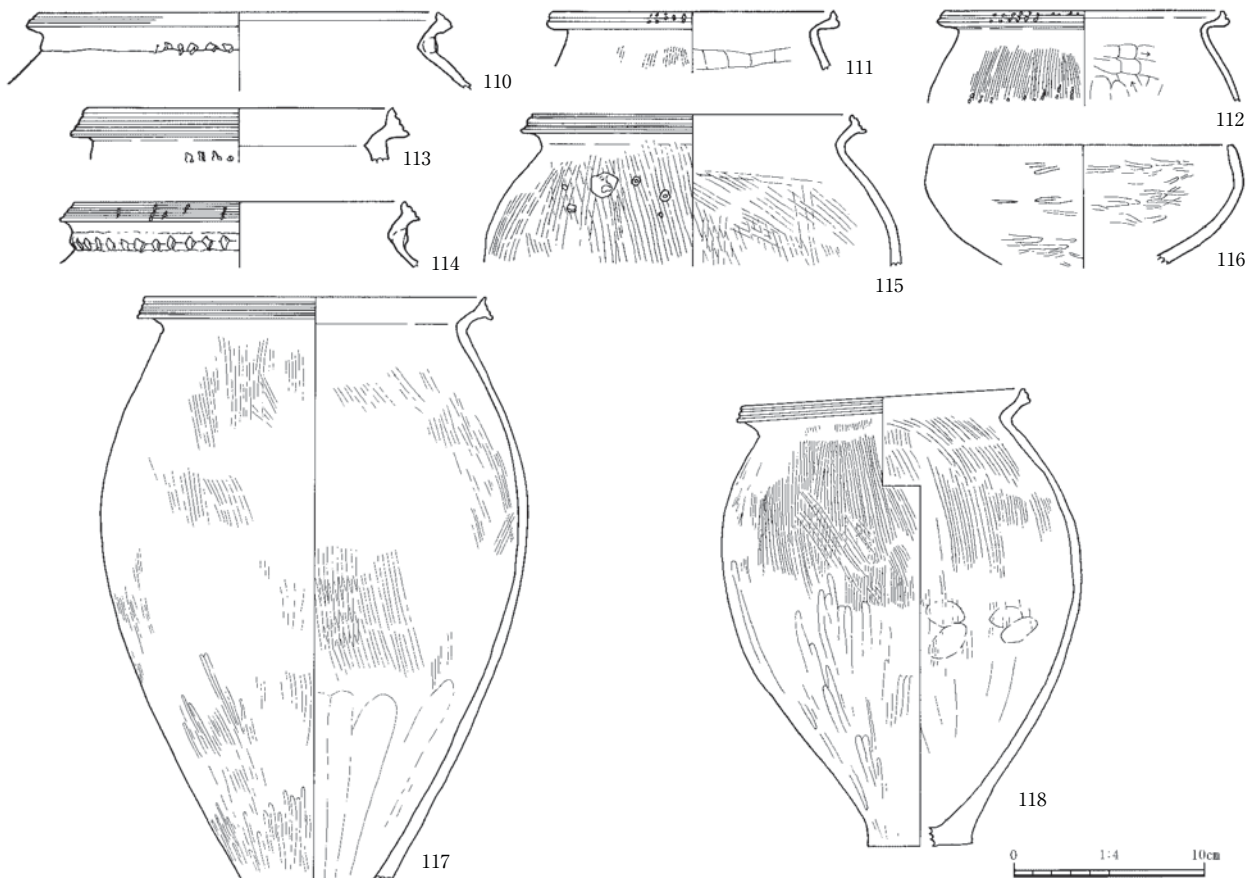


図37 土坑12出土遺物

面直上の一括遺物と思われる。甕115の外面上には穿孔しようとした痕跡が数カ所認められる。(森本)ピット(図38、表3、図版54)

2～7区に掘立柱建物跡として認識できないピットが482個存在した。3・4・6・7区で検出したピットの埋土は主に黒褐色土、灰褐色土、2・5区では灰褐色砂質土と暗褐色砂質土である。このうち、埋土が黒褐色土以外のピットからは中世の遺物が出土している。

黒褐色土はV層(黒褐色土)に由来すると想定される。弥生時代中期、縄文時代の遺構埋土と酷似しているが、中世前期の遺構である溝1・3の埋土の色調も黒褐色を呈すことから時期を確定するに至らなかった。黒褐色土を呈するピットは1層(にぶい褐色土)または2層(明黄褐色土)で検出したことから、本節に掲載した。3・4・6・7区で土色注記漏れのものも、本節に掲載した。(森本)

3、調査地内出土弥生土器(図39・42・77、図版32・33)

調査地内の各包含層または中世の遺構内から、弥生時代中期の土器が出土している。甕口縁部120は7区Ⅲ層出土である。口縁端面に棒状浮文を施す。3区Ⅲ層以下の層位出土の壺口縁部127は、頸部に粉圧痕がある。土坑14出土の底部片137は漆と思われる顔料により内外面黒色塗彩される。(森本)

第5節 古墳時代から古代の遺物(図39、図版32)

調査地内から、古墳時代から古代の遺物が少量ながら出土した。甕186・187、粉圧痕がある高台付きの土師器134、高台付き須恵器135を図化した。186・187は溝13、134は3区Ⅳ層、135は7区Ⅱ'層出土である。(森本)

表3 ピット計測表(1)

PNo.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色・備考	PNo.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色・備考
1	40×20	14	34.14	黒褐色土	80	18×16	14	33.78	黒褐色土
2	25×24	36	33.89	黒褐色土・竪穴住居1を切る	81	32×25	21	33.71	黒褐色土
3	38	26	33.97	黒褐色土・竪穴住居1を切る	82	23×20	18	33.75	黒褐色土
4	33	35	33.90	黒褐色土・竪穴住居1を切る	83	20×19	21	33.72	黒褐色土
5	38	36	33.92	黒褐色土・竪穴住居1を切る	84	31×24	13	33.78	黒褐色土
6	27×24	8	34.22	黒褐色土	85	20×19	10	33.80	黒褐色土
7	39	33	33.89	黒褐色土・竪穴住居1を切る	86	25×21	25	33.61	黒褐色土
8	23×21	19	34.06	黒褐色土	87	28×24	19	33.70	黒褐色土
9	24×21	19	34.06	黒褐色土	88	32×25	31	33.61	黒褐色土
10	40	34	33.90	黒褐色土・竪穴住居1を切る	89	19×18	18	33.75	黒褐色土
11	45×30	38	33.89	黒褐色土	90	32×27	23	33.63	黒褐色土
12	26×25	32	33.93	黒褐色土	91	40×32	29	33.60	黒褐色土
13	40×38	62	33.60	黒褐色土・竪穴住居1を切る	92	36×29	28	33.68	黒褐色土
14	26×24	20	34.02	黒褐色土・竪穴住居1を切る	93	33×30	21	33.64	黒褐色土
15	31×30	23	34.01	黒褐色土	94	-	-	33.35	黒褐色土
16	29×28	24	34.00	黒褐色土	95	30×25	28	33.55	黒褐色土
17	24×23	25	33.97	黒褐色土	96	23	13	33.80	黒褐色土
18	29×25	14	34.09	黒褐色土	97	19×18	11	33.84	黒褐色土
19	58	38	33.87	黒褐色土・竪穴住居1を切る	98	30×27	24	33.70	黒褐色土
20	33×25	20	34.05	黒褐色土	99	24×19	20	33.66	黒褐色土
21	32×30	29	33.96	黒褐色土・竪穴住居1を切る	100	25×23	24	33.49	黒褐色土
22	34×29	47	33.74	黒褐色土・竪穴住居1を切る	101	41×40	45	33.25	黒褐色土
23	22×16	17	34.04	黒褐色土	102	24×21	19	33.58	黒褐色土
24	34×28	19	33.99	黒褐色土	103	19×12	16	33.64	黒褐色土
25	25×24	20	33.99	黒褐色土	104	20×19	26	33.52	黒褐色土
26	35×26	25	33.97	黒褐色土・竪穴住居1を切る	105	25×20	18	33.59	黒褐色土
27	34×32	22	33.92	黒褐色土	106	27×22	13	33.52	黒褐色土
28	36	40	33.79	黒褐色土・竪穴住居1を切る	107	21×20	14	33.51	黒褐色土
29	35	26	33.92	黒褐色土・竪穴住居1を切る	108	24×18	15	33.52	黒褐色土
30	34×24	19	33.99	黒褐色土・竪穴住居1を切る	109	32×24	30	33.41	黒褐色土
31	37	37	33.89	黒褐色土	110	19×16	21	33.50	黒褐色土
32	33×32	36	33.86	黒褐色土	111	28×25	13	33.57	黒褐色土
33	44	62	33.61	黒褐色土	112	25×20	59	33.10	黒褐色土
34	32×29	43	33.78	黒褐色土・竪穴住居1を切る	113	21×19	20	33.47	黒褐色土
35	17×14	12	33.78	黒褐色土	114	26×24	29	33.29	黒褐色土
36	24×23	5	33.87	黒褐色土	115	20×19	17	33.48	黒褐色土
37	17×15	20	33.72	黒褐色土	116	24×23	12	33.49	黒褐色土
38	30×26	17	33.74	黒褐色土	117	30×25	12	33.50	黒褐色土
39	32×31	17	33.75	黒褐色土	118	18×16	9	33.57	黒褐色土
40	26×21	17	33.75	黒褐色土	119	22×19	22	33.50	黒褐色土
41	23×18	18	33.74	黒褐色土	120	24	22	33.46	黒褐色土
42	26×17	11	33.81	黒褐色土	121	21	17	33.57	黒褐色土
43	15×12	10	33.82	黒褐色土	122	29	16	33.45	黒褐色土
44	30×28	12	33.81	黒褐色土	123	35×32	23	33.42	黒褐色土
45	19×14	11	33.82	黒褐色土	124	25×24	17	33.48	淡い灰褐色粘質土
46	16×14	11	33.81	黒褐色土	125	16×14	8	33.53	黒褐色土
47	20×17	9	33.82	黒褐色土	126	25×22	17	33.49	黒褐色土
48	25	57	33.37	黒褐色土	127	24×22	19	33.22	黒褐色土
49	24×22	19	33.90	黒褐色土	128	42	24	33.22	黒褐色土
50	24×18	13	33.93	黒褐色土	129	22×19	35	33.10	黒褐色土
51	34×25	13	33.80	黒褐色土	130	25×22	35	33.08	黒褐色土
52	23×22	24	33.68	黒褐色土	131	30×28	21	33.29	黒褐色土
53	26	16	33.92	黒褐色土	132	25×22	15	33.31	黒褐色土
54	25×24	12	33.98	黒褐色土	133	19×17	14	33.31	黒褐色土
55	22×21	20	33.88	黒褐色土	134	29×24	47	33.05	黒褐色土
56	20×18	9	33.96	黒褐色土	135	35×31	34	33.19	黒褐色土
57	18×13	10	33.82	黒褐色土	136	50	19	33.18	黒褐色土・S7
58	24×20	11	33.83	黒褐色土	137	38×34	19	33.27	黒褐色土
59	25×21	13	33.79	黒褐色土	138	29×24	11	33.23	黒褐色土
60	27×22	14	33.79	黒褐色土	139	22	15	33.27	黒褐色土
61	25×21	15	33.78	黒褐色土	140	48×40	37	33.10	黒褐色土
62	18	15	33.78	黒褐色土	141	42	28	33.38	灰褐色土
63	30×28	20	33.74	黒褐色土	142	18×17	12	33.08	黒褐色土
64	24×19	9	33.87	黒褐色土	143	34×29	13	33.08	黒褐色土
65	32×27	16	33.78	黒褐色土	144	21×20	17	32.99	黒褐色土
66	27×25	33	33.61	黒褐色土	145	33×25	25	32.92	黒褐色土
67	25×21	25	33.69	黒褐色土	146	23×17	45	32.66	黒褐色土
68	27×23	39	33.53	黒褐色土	147	17×16	15	32.63	黒褐色土
69	29×26	17	33.77	黒褐色土	148	38×28	53	32.24	黒褐色土
70	34×22	26	33.69	黒褐色土	149	29×27	19	32.53	黒褐色土
71	25×22	17	33.76	黒褐色土	150	20×18	20	32.50	黒褐色土
72	24×23	21	33.72	黒褐色土	151	21×19	22	32.34	黒褐色土
73	24×20	19	33.76	黒褐色土	152	29×23	22	32.38	黒褐色土
74	30	25	33.68	黒褐色土	153	17×16	27	32.57	黒褐色土
75	44×38	19	33.74	黒褐色土	154	24×20	10	32.56	黒褐色土
76	25×19	37	33.56	黒褐色土	155	25×18	26	32.27	黒褐色土
77	25×24	33	33.60	黒褐色土	156	23×17	22	32.32	黒褐色土
78	36×32	37	33.56	黒褐色土	157	26×23	18	32.60	黒褐色土
79	34×25	21	33.72	黒褐色土	158	33	24	33.39	黒褐色土

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

PNo.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色・備考
159	31×25	30	33.31	黒褐色土
160	35	32	33.29	黒褐色土
161	29×28	41	33.29	黒褐色土
162	22×19	25	33.42	黒褐色土
163	40×27	38	33.23	黒褐色土
164	29×25	44	33.09	黒褐色土
165	34×32	26	33.36	黒褐色土
166	48×36	49	33.12	黒褐色土
167	32×30	23	33.35	黒褐色土
168	31×29	29	33.36	黒褐色土
169	26×19	26	33.36	黒褐色土
170	30×26	35	33.20	黒褐色土
171	27	48	33.10	黒褐色土
172	24×19	26	33.29	黒褐色土
173	34×23	43	33.18	黒褐色土
174	33×32	12	33.52	黒褐色土
175	24×21	16	33.44	黒褐色土
176	38	40	33.12	黒褐色土
177	28×27	22	33.38	黒褐色土
178	44	30	33.23	黒褐色土
179	25×20	18	33.47	黒褐色土
180	22×21	26	33.37	黒褐色土
181	24×19	21	33.38	黒褐色土
182	23×18	24	33.35	黒褐色土
183	22×17	23	33.36	黒褐色土
184	23×22	17	33.47	黒褐色土
185	35	32	33.26	黒褐色土
186	25	20	33.34	黒褐色土
187	39×35	24	33.32	黒褐色土
188	29	20	33.34	黒褐色土
189	26×24	26	33.34	黒褐色土
190	36×28	42	33.16	黒褐色土
191	41×26	32	33.27	黒褐色土
192	30×24	20	33.40	黒褐色土
193	30×29	48	33.15	黒褐色土
194	25×23	21	33.42	黒褐色土
195	28×24	36	33.25	黒褐色土
196	27×25	22	33.36	黒褐色土
197	34×25	32	33.26	黒褐色土
198	24×19	40	33.15	黒褐色土
199	21×18	35	33.15	黒褐色土
200	30×29	48	32.99	黒褐色土
201	42×32	14	33.42	黒褐色土
202	45×34	46	33.03	黒褐色土
203	21×18	13	33.41	黒褐色土
204	36×30	54	32.99	黒褐色土
205	41×35	36	33.11	黒褐色土
206	72×52	49	33.04	黒褐色土
207	49	48	32.96	黒褐色土
208	58×48	10	33.38	黒褐色土
209	21×16	27	33.20	黒褐色土
210	22×20	13	33.34	黒褐色土
211	36×33	41	33.07	黒褐色土
212	31×28	27	33.12	黒褐色土
213	25×21	20	33.18	黒褐色土
214	53×43	44	32.97	黒褐色土
215	42×30	48	32.91	黒褐色土
216	44×32	37	33.15	黒褐色土
217	32×28	30	33.21	黒褐色土
218	26×17	40	33.11	黒褐色土
219	35×28	30	33.19	黒褐色土
220	44	16	33.31	黒褐色土
221	36	30	33.18	黒褐色土
222	34×26	29	33.06	黒褐色土
223	27×25	14	33.34	黒褐色土
224	27×25	27	33.11	黒褐色土
225	34×29	35	33.05	黒褐色土
226	30×26	15	33.21	黒褐色土
227	27×24	25	33.14	黒褐色土
228	27×26	14	33.29	黒褐色土
229	18×17	15	33.34	黒褐色土
230	24×21	20	33.10	黒褐色土
231	28	25	33.23	黒褐色土
232	40×38	34	33.20	黒褐色土
233	29×22	7	33.39	黒褐色土
234	22×21	22	33.22	黒褐色土
235	30×25	19	33.27	黒褐色土
236	39×32	40	33.06	黒褐色土
237	36×25	37	32.93	黒褐色土
238	29×28	30	32.96	黒褐色土

PNo.	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	底面の標高 (m)	土色・備考
239	29×26	32	32.95	黒褐色土
240	30×26	23	33.06	黒褐色土
241	44×29	37	32.99	黒褐色土
242	35×34	28	32.96	黒褐色土
243	21×20	11	33.05	黒褐色土
244	32×27	27	33.00	黒褐色土
245	33×26	23	33.07	黒褐色土
246	32×28	21	33.00	黒褐色土
247	34×30	31	32.89	黒褐色土
248	27×23	19	33.02	黒褐色土
249	29×26	23	32.62	黒褐色土
250	36×29	8	32.75	黒褐色土
251	28×24	19	32.61	黒褐色土
252	27×25	49	32.20	黒褐色土
253	29×28	34	32.49	黒褐色土
254	24×20	18	32.55	黒褐色土
255	33×20	24	32.59	黒褐色土
256	22×19	30	32.51	黒褐色土
257	29×25	19	32.64	黒褐色土
258	30	38	32.40	黒褐色土
259	22×18	30	32.44	黒褐色土
260	28×22	19	32.49	黒褐色土
261	23×21	24	32.59	黒褐色土
262	25×24	25	32.57	黒褐色土
263	27×25	24	32.56	黒褐色土
264	23×22	32	32.49	黒褐色土
265	33×25	26	32.47	黒褐色土
266	29×25	11	32.60	黒褐色土
267	27×25	19	32.48	黒褐色土
268	26×24	28	32.39	黒褐色土
269	21×19	18	33.39	黒褐色土
270	21×20	25	33.34	黒褐色土
271	21×18	18	33.47	黒褐色土
272	30×19	38	32.22	黒褐色土
273	27×18	19	33.51	黒褐色土
274	20×15	17	32.43	黒褐色土
275	25×17	16	32.56	黒褐色土
276	31	29	32.30	黒褐色土
277	34	17	32.39	黒褐色土
278	30×26	22	32.45	黒褐色土
279	33×18	15	32.54	黒褐色土
280	35×29	25	32.34	黒褐色土
281	21×20	14	32.42	黒褐色土
282	29×17	35	32.33	黒褐色土
283	30×26	23	32.54	黒褐色土
284	28	28	32.48	黒褐色土
285	30×23	21	32.34	黒褐色土
286	27	19	32.29	黒褐色土
287	29×23	37	32.16	黒褐色土
288	27	34	32.19	黒褐色土
289	21×19	31	32.11	黒褐色土
290	18×17	15	32.50	黒褐色土
291	23×20	14	32.53	黒褐色土
292	21×18	27	32.36	黒褐色土
293	22×17	28	32.35	黒褐色土
294	30×28	21	32.48	黒褐色土
295	25×22	23	32.29	黒褐色土
296	24×21	16	32.39	黒褐色土
297	18×17	15	32.42	黒褐色土
298	31×22	27	32.34	黒褐色土
299	47×32	34	32.16	黒褐色土
300	35×33	22	32.35	黒褐色土
301	19×15	35	32.20	黒褐色土
302	21×17	13	32.42	黒褐色土
303	34×32	22	32.03	黒褐色土
304	25×24	26	33.51	不明
305	15	17	33.76	不明
306	19×16	34	32.24	不明
307	30×26	43	33.07	不明
308	29×22	25	32.67	不明
309	27×21	25	32.61	不明
310	27×23	32	32.30	不明
311	30	27	33.15	不明
312	23×17	21	33.38	不明
313	25×24	18	33.41	不明
314	30×22	25	32.07	不明
315	41×34	29	33.23	不明
316	29	26	33.26	不明
317	68	21	32.26	不明

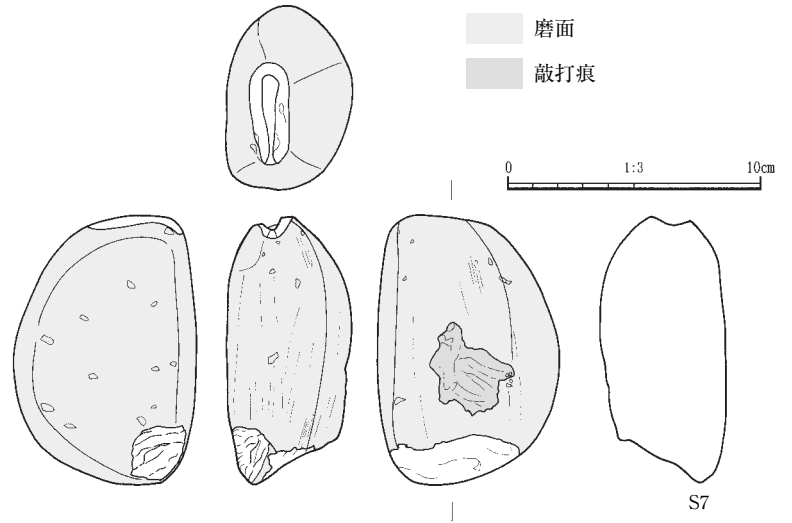


図38 P 136出土遺物



図39 調査地内出土遺物 (弥生時代～古代)

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物観察表（弥生時代中期から古代）

*：復元値、△：残存値

土器

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
21	16	7区 竪穴住居1 床面直上	弥生土器 甕	*18.0	-	△1.3	口縁端部に3条の凹線。内外面ともにナデ。	密良	内外ともにぶい橙色	1/12	胎土分析 試料5
22	16	7区 竪穴住居1 P1埋土③層	弥生土器 甕	*17.8	-	△8.6	口縁端部は上下に拡張され、端面に2条の凹線が巡る。口縁部内面ナデ。外面は口縁から頸部ナデ、肩部タキ後ハケ。	密良	内外ともにぶい黄橙色 ～灰黄褐色	1/4	胎土分析 試料4
23	16	7区 竪穴住居1 P2埋土⑤層	弥生土器 高坏	-	-	△2.7	体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部端部は欠損。内面は口縁部ナデ、体部ハケ。口縁部外面に2条の凹線。体部外面ナデ。	密良	ぶい黄褐色土・黒褐色土	1/10 (最大径部)	
24	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 甕	*17.0	-	△2.3	口縁部は上方に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。内外面ナデ。	密良	内外とも浅黄橙色	1/8	
25	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 甕	*19.0	-	△3.4	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。内面は口縁部から頸部ナデ、頸部以下ハケ。外面ナデ。	密良	内外とも橙色・灰褐色	1/12	胎土分析 試料2
26	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 甕	*20.0	-	△5.3	口縁部は上下に拡張され端面に僅かに2条の凹線の痕跡が残る。内外面調整不明。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄橙色	1/4	
27	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 甕	*19.0	-	△2.2	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。内外面ナデ。	密良	内外とも橙色	1/12	胎土分析 試料3
28	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 壺	-	-	△1.4	口縁部は僅かに上下に拡張され、端面に1条の凹線を施文後貝殻腹縁による刺突。内外面ナデ。外面赤彩。	密良	内外とも浅黄橙色	-	胎土分析 試料1
29	18	4区 竪穴住居2 床面直上	弥生土器 底部	-	*6.0	△2.8	外面ミガキ。内面ケズリ。破片の為断定できないが、底部穿孔土器の可能性もある。	密良	内外とも黄灰色	1/3	
32	22	3区 竪穴住居4 埋土中	弥生土器 甕	*12.4	-	△6.5	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。口縁部から頸部は内外面ともにナデ。頸部以下は調整不明。	密良	内外とも浅黄橙色	1/4	胎土分析 試料7
33	22	3区 竪穴住居4 埋土中	弥生土器 無頸壺	*12.4	-	△9.1	口縁部はやや凹状の面をなし、やや肥厚する。口縁外面は6条の凹線施文後、一孔穿孔。焼成前の穿孔。穿孔を挟み、棒状浮文を施す。棒状浮文には横方向の刺突文。体部内外面ともハケ。	やや粗 やや軟	内外ともにぶい黄褐色	1/8	胎土分析 試料8
34	22	3区 竪穴住居4 P1層	弥生土器 甕	*9.2	6.3	14.3	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線を施文後刺突文。刺突後、2個で一对をなす凹形浮文を施す。体部最大径部に貝殻腹縁による刺突文。外面は口縁から頸部はナデ。体部下半までハケ。体部下半は丁寧なナデ。内面は口縁から体部最大径部までナデ。体部最大径部は指押さえ後ハケ。体部下半ケズリ。体部最大径部の上半と下半で接合か。口縁から底面までの外面、口縁内面端部赤彩。	密良	内外とも浅黄橙色	1/2	胎土分析 試料6
35	23	4区 土坑8 ①層	弥生土器 甕	*20.0	-	△2.9	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貼付突帯後、刺突後ナデ。口縁内外面ナデ。頸部以下内面ハケ。	密良	内外とも浅黄橙色	1/8	胎土分析 試料10
36	23	4区 土坑8①層	弥生土器 底部	-	5.0	△3.7	外面はミガキ。内面はケズリ。	密良	内) ぶい黄橙色 外) ぶい黄褐色・黒色	完存	
37	23	4区 土坑8①層	弥生土器 底部	-	6.5	△5.2	外面はミガキ。内面はケズリ。	密良	内外とも褐灰色・灰褐色	完存	
38	23	4区 土坑8①層	弥生土器 体部	-	-	△24.1	外面は肩部から最大径部やや下までタキ後ハケ。下半はミガキ。内面は肩部から最大径部はハケ。最大径部以下はケズリ。最大径部で上半と下半を接合か。外面に剥離痕? 数個あり。	密良	内) ぶい黄橙色 外) 黒褐色	1/4	
39	23	4区 土坑8①層	弥生土器 体部	-	-	△22.0	大型の壺または甕。最大径部やや上に焼成後の穿孔。外面はハケ後丁寧なナデ。内面ハケ。	密良	内) 浅黄褐色 外) ぶい黄褐色	-	胎土分析 試料9
40	27	7区 土坑9 床面直上	弥生土器 壺	*25.4	-	△2.8	口縁端部に3条の凹線施文後、貝殻腹縁による斜格子文。内外面ナデ。	密良	内外とも明褐色・褐灰色	1/12	胎土分析 試料16
41	27	7区 土坑9 床面直上	弥生土器 底部	-	*5.4	△3.6	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内外ともにぶい黄褐色	1/3	
42	28	7区 土坑9 ④層直上	弥生土器 甕	-	-	△2.1	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁部は欠損。口縁部から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内外とも浅黄褐色	1/16	
43	28	7区 土坑9 ④層直上	弥生土器 甕	*10.4	-	△6.4	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁部から頸部は内外面ナデ。頸部以下内外面ハケ。	密良	内外とも浅黄褐色	1/4	胎土分析 試料17
44	29	7区 土坑9中層	弥生土器 甕	*21.5	-	△2.4	口縁部は上方に拡張され、端面に4条の凹線。口縁部から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内外とも橙色	1/16	

第5節 古墳時代から古代の遺物

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)			特徴	胎土焼成	色調	残存率	備考
				口径	底径	器高					
45	29	7区土坑9上層	弥生土器甕	*14.8	-	△4.0	全体的に風化が激しい。口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線の痕跡が僅かに残る。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面調整不明。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄橙色	1/5	
46	29	7区土坑9	弥生土器甕	*17.4	-	△2.9	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。	密良	内外とも橙色	1/16	
47	29	7区土坑9①層	弥生土器壺	*24.0	-	△2.2	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線施文後、櫛状工具による鋸歯文。口縁内面に3条の凹線。口縁部外面に1条の凹線。口縁外面ナデ。	密良	内外とも灰白色	1/12	
48	30	7区土坑10⑤層	弥生土器甕	*17.2	-	△8.0	全体的に風化が激しい。口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面調整不明。	密良	内外とも浅黄橙色～灰黄褐色	1/4	胎土分析試料11
49	30	7区土坑10⑤層	弥生土器甕	*16.9	-	△19.8	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貼付突帯を施し、刺突後ナデ。外面はハケ。内面は口縁から頸部までナデ。頸部から最大径部やや上までハケ後ナデ。ナデ後等間隔の線状痕。最大径部、ハケ後指押さえ。以下、ケズリ。最大径部で上下を接合か。	密良	内外とも浅黄褐色	1/4	胎土分析試料12
50	30	7区土坑10⑤層	弥生土器底部	-	*3.0	△2.6	外面ミガキ。内面ケズリ。	密不良	内) ぶい黄橙色 外) ぶい橙色	1/3	
51	30	7区土坑10⑤層	弥生土器壺	-	-	△3.7	壺の頸部から肩部の破片か。頸部に2条の凹線。肩部に櫛状工具による波状文と貝殻腹縁による刺突文。内面は2種類の原体によるハケ調整。頸部は粗いハケ、肩部ハケ後ナデ。	密良	内外とも橙色	-	
52	31	7区土坑10中層	弥生土器甕	-	-	△2.0	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内外とも浅黄褐色	-	
53	31	7区土坑10上層	弥生土器甕	-	-	△1.5	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内) 褐灰色 外) ぶい褐色	-	
54	31	7区土坑10中層	弥生土器甕	-	-	△1.8	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内) 灰黄褐色 外) 灰白色	-	
55	31	7区土坑10	弥生土器甕	-	-	△2.4	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内) 灰黄褐色 外) 灰白色	-	
56	31	7区土坑10上層	弥生土器甕	*15.0	-	△2.2	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。頸部以下、内面ハケ。	密良	内外ともぶい橙色・ 褐灰色	1/20	
57	31	7区土坑10④層	弥生土器甕	*14.4	-	△1.9	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ともにナデ。	密良	内外とも浅黄褐色	1/8	
58	31	7区土坑10中層	弥生土器甕	*16.2	-	△2.7	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線の痕跡が僅かに残る。頸部に貼付突帯後、刺突文。口縁内外面ナデ。	密良	内外ともぶい黄褐色	1/16	
59	31	7区土坑10②層	弥生土器甕	*17.8	-	△2.9	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貼付突帯を施し、刺突後ナデ。口縁内外面ナデ。	密良	内外とも灰褐色	1/9	
60	31	7区土坑10②層	弥生土器甕	*16.0	-	△4.8	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。外面は口縁から頸部はハケ後ナデ、以下ハケ。内面ナデ。	密良	内) 浅黄褐色・灰褐色 外) 浅黄褐色	1/6	
61	31	7区土坑10中層	弥生土器甕	*16.0	-	△3.7	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。外面は口縁から頸部はナデ。頸部以下、ハケ後ナデ。内面ナデ。	密良	内外ともぶい黄褐色・ 黒褐色	1/8	
62	31	7区土坑10上層	弥生土器甕	*15.6	-	△5.9	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。内面頸部に凹線状の窪みが1条巡る。内外面口縁から頸部はナデ。頸部以下外面ハケ、内面ケズリ。	密良	内) ぶい黄褐色・灰黄褐色 外) 灰黄褐色	1/4	
63	31	7区土坑10下層	弥生土器甕	*20.2	-	△2.8	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貼付突帯を施し、刺突後強くナデ。口縁内面ナデ。	密 やや 不良	内外とも明褐色	1/14	
64	31	7区土坑10中層	弥生土器壺	*10.8	-	△4.6	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に2条の凹線。外面ナデ。内面は口縁から頸部までナデ、頸部以下ハケ。	密良	内) ぶい黄褐色 外) 黄褐色	1/3	胎土分析試料13
65	31	7区土坑10②層	弥生土器壺	*12.0	-	△4.5	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁内外面ともナデ。頸部以下は外面ハケ、内面ケズリ。	密良	内) 浅黄褐色・橙色 外) 橙色	1/5	
66	31	7区土坑10下層	弥生土器無頸壺	*14.0	-	△3.4	口縁部は上下に拡張され、口唇部に刺突文が施される。口縁下に2孔の焼成前穿孔。口縁部から体部にかけて6条の凹線。口縁端面、内面ナデ。	密良	内外とも明赤褐色	1/8	
67	31	7区土坑10②層	弥生土器無頸壺	-	-	△2.6	口縁部は上下に拡張され、口唇部に刺突文が施される。口縁下に1孔の焼成前穿孔。口縁部から体部にかけて5条の凹線。口縁端面、内面ナデ。	密良	内) 灰褐色 外) ぶい黄褐色	-	
68	31	7区土坑10中層	弥生土器壺	-	-	△6.8	壺の体部片。頸部下、3条の貼付突帯に刺突文。貼付突帯をはさむように、4条の凹線。外面ハケ、内面調整不明。	密良	内) 灰黄色 外) 浅黄色	-	
69	31	7区土坑10下層	弥生土器壺	*22.0	-	△2.3	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁内面に櫛状工具による6条の沈線。口縁外面ナデ、頸部下ハケ。	密良	内) ぶい黄褐色・褐灰色 外) 灰黄褐色	1/10	
70	31	7区土坑10中層	弥生土器壺	*27.4	-	△2.4	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁外面ハケ後ナデ、内面ハケ。	密良	内外ともぶい黄褐色	1/12	

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
71	31	7区 土坑10上層	弥生土器 高環	*18.0	-	△2.7	口縁端面に1条の凹線状の窪み。外面5条凹線。内面ナデ。口縁端面、外面赤彩。	密良	内外とも浅黄橙色	1/12	
72	31	7区 土坑10中層	弥生土器 高環	*19.4	-	△16.5	高環の口縁部から筒部にかけての破片。口縁端面は1条の凹線状の窪み。外面6条の凹線。環部下部外面ミガキ。筒部上部10条、下部8条の凹線。内面ナデ。口縁部から筒部上部まで外面赤彩。73と接合の可能性あり。	密良	内外とも橙色	1/8	胎土分析 試料14・15
73	31	7区 土坑10中層	弥生土器 高環脚部	-	*12.3	△5.3	高環脚部片。脚端部1条の凹線状の窪み。脚部下半、5条の凹線。外面ナデ、内面ケズリ。外面赤彩。72と同一個体の可能性あり。	密良	内外とも橙色	1/4	
74	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*4.4	△3.1	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内) にぶい黄褐色 外) にぶい褐色	1/4	
75	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	*6.0	△3.1	外面ミガキ。内面調整不明。	密良	内外とも明褐灰色・淡 橙色	1/5	
76	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*5.4	△3.5	外面、底面外面ミガキ。内面ナデ。	密良	内) 褐灰色 外) 浅黄橙色	1/3	
77	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*6.8	△2.8	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内) にぶい橙色 外) にぶい黄褐色	1/5	
78	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	*6.4	△3.3	外面調整不明。内面ケズリ。	密良	内) 浅黄褐色 外) にぶい褐色・黒褐 色	1/4	
79	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*5.8	△3.1	外面ナデ。内面ケズリ。	密良	内外とも橙色～明黄褐 色	1/3	
80	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	7.9	△4.2	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内) 黒褐色 外) 浅黄褐色・黒褐色	完存	
81	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*5.8	△4.4	外面調整不明。内面ケズリ。	密良	内) 浅黄褐色 外) 浅黄褐色・褐灰白 色	1/3	
82	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	*7.0	△4.4	外面は底面から約2cmはナデ、上部はミガキ。内面ケズリ。	密良	内) 褐灰色～灰黄褐色 外) 褐灰色	1/5	
83	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	*5.6	△5.0	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内外ともぶい橙色～ 褐灰色	1/8	
84	31	7区 土坑10②層	弥生土器 底部	-	*7.2	△6.4	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内) 明褐灰色 外) にぶい橙色	1/4	
85	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*4.6	△5.6	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内) にぶい黄褐色・灰 黄褐色 外) 褐灰色	1/2	
86	31	7区 土坑10中層	弥生土器 底部	-	*5.5	△4.0	外面ハケ、底面ややナデ。内面ケズリ。底部焼成後穿孔。	密良	内外とも褐色～黒褐色	1/2	
87	34	7区 土坑11③層	弥生土器 甕	*18.8	-	△8.8	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下内外面ハケ。	密良	内) 浅黄褐色 外) 浅黄褐色・灰黄褐 色	1/12	胎土分析 試料20
88	34	7区 土坑11③層	弥生土器 甕	*16.6	-	△3.3	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面は調整不明、内面ハケ。	密良	内外ともぶい橙色・ 黒褐色	1/8	胎土分析 試料19
89	34	7区 土坑11③層	弥生土器 甕	*17.4	-	△2.5	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。内外面ナデ。	密良	内) 橙色・褐灰色 外) 橙色	1/12	胎土分析 試料18
90	34	7区 土坑11③層	弥生土器 底部	-	*4.9	△4.4	外面ミガキ。内面ケズリ。	密良	内外ともぶい黄橙 色・褐灰色	1/3	
91	35	7区 土坑11①層	弥生土器 甕	-	-	△2.3	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線の痕跡が僅かに残る。口縁内外面ナデ。頸部以下内面ケズリ。	密良	内) 灰白色 外) 灰白色・黒褐色	-	
92	35	7区 土坑11 埋土中	弥生土器 甕	*15.6	-	△4.7	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下、内外面ハケ。	密良	内外とも黒褐色	1/5	
93	35	7区 土坑11①層	弥生土器 甕	*20.6	-	△4.1	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面ナデ、内面ハケ。	密良	内外とも橙色	1/14	
94	35	7区 土坑11①層	弥生土器 甕	*20.8	-	△3.8	風化が著しい。口縁部は上下に拡張され、端面に2条?の凹線の痕跡が僅かに残る。口縁内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面ケズリ。	密良	内外とも灰黄褐色・褐 灰色	1/11	
95	35	7区 土坑11上層	弥生土器 甕	-	-	△2.1	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁内外面ナデ。	密良	内) 浅黄褐色 外) にぶい褐色	1/12	
96	35	7区 土坑11上層	弥生土器 甕	-	-	△2.2	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁内外面ナデ。	密良	内外とも浅黄褐色	1/16	
97	35	7区 土坑11①層	弥生土器 甕	-	-	△2.2	口縁部は上下に拡張され、端面に櫛状工具による波状文。口縁内外面ナデ。	密良	内外とも浅黄褐色	-	
98	35	7区 土坑11②層	弥生土器 甕	*16.8	-	△4.7	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は外面ナデ、内面ハケ後ナデ。頸部以下内外面ハケ。	密良	内外ともぶい橙色	1/8	

第5節 古墳時代から古代の遺物

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
99	35	7区土坑11中層	弥生土器甕	*17.8	-	△2.5	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。内外面ナデ。	密良	内) 浅黄橙色 外) 橙色	1/14	
100	35	7区土坑11②層	弥生土器甕	*16.0	-	△2.5	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。	密良	内) 浅黄橙色・褐灰色 外) ぶい黄橙色・褐灰色	1/10	
101	35	7区土坑11②層	弥生土器甕	*24.2	-	△2.4	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。内外面ナデ。	密良	内) 橙色 外) 浅黄橙色	1/13	
102	35	7区土坑11上層	弥生土器甕	*18.0	-	△2.0	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貝殻腹縁による刺突。内外面ナデ。	密良	内外ともにぶい黄橙色・灰黄褐色	1/12	
103	35	7区土坑11①層	弥生土器甕	*17.0	-	△4.5	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下、外面ハケ、内面ケズリ。	密良	内外とも橙色・ぶい黄橙色・褐灰色	1/7	
104	35	7区土坑11上層	弥生土器甕	*23.0	-	△6.2	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下、外面ハケ、内面ケズリ後ナデ。	密良	内外とも橙色	1/12	
105	35	7区B17土坑11埋土下層	弥生土器鉢	*38.0	-	△6.1	鉢の体部片か。口縁部は欠損している。口縁部と坏部の屈曲部外面に1条の凹線状の窪みと刺突文。坏部内外面ハケ。	密良	内) ぶい橙色・褐灰色 外) ぶい黄橙色・灰黄色	1/24	胎土分析試料21
106	35	7区土坑11下層	弥生土器底部	-	*5.8	△3.1	外面ナデ。内面ケズリ。	密良	内) 灰白色・褐灰色 外) 褐灰色・ぶい橙色	1/2	
107	35	7区土坑11埋土中	弥生土器底部	-	*6.0	△2.9	外面ハケ。内面ナデ。	密良	内) ぶい黄橙色 外) ぶい黄褐色・褐灰色	1/4	
108	35	7区土坑11上層	弥生土器底部	-	*8.2	△3.7	外面ハケ。内面ナデ。	密良	内) 浅黄橙色 外) 灰黄褐色・黒褐色	1/2	
109	35	7区土坑11下層	弥生土器底部	-	*9.4	△5.0	外面ミガキ。内面ナデ。	密良	内) 灰白色・明褐灰色・褐灰色 外) 明赤灰色	3/5	
110	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*21.2	-	△4.1	全体的に風化が激しい。口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線の痕跡が僅かに残る。頸部に貼付突帯後、刺突文。内外面調整不明。	密良	内) 橙色 外) 褐灰色	1/16	
111	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*15.0	-	△3.2	口縁部はやや上方に拡張され、端面に1条の凹線施文後、貝殻腹縁による刺突文。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面ケズリ。112と同一個体か。	密良	内外とも灰褐色	1/8	
112	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*14.8	-	△4.8	口縁部はやや上方に拡張され、端面に1条の凹線施文後、貝殻腹縁による刺突文。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面ケズリ。111と同一個体か。	密良	内) 灰褐色 外) 灰黄褐色	1/8	
113	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*16.4	-	△2.8	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。頸部に貼付突帯後、刺突後ナデ。内外面ナデ。	密良	内外ともにぶい黄橙色	1/16	
114	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*17.6	-	△3.4	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線施文後、貝殻腹縁による刺突文。頸部に貼付突帯後、刺突後ナデ。内外面ナデ。	密良	内外ともにぶい橙色	2/5	
115	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*17.0	-	△8.0	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。体部に穿孔1孔。他に体部外面に穿孔しようとした痕跡2カ所あり。口縁から頸部は内外面ナデ。頸部以下内外面ハケ。	密良	内外とも浅黄橙色・褐灰色	1/4	
116	37	7区土坑12①層	弥生土器鉢または高坏	*15.8	-	△6.3	鉢または高坏と思われる口縁部。口唇部はやや面をなす。口縁は内湾し、内外面ミガキ。	密良	内) ぶい黄褐色 外) 黒褐色	1/8	胎土分析試料23
117	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*18.0	-	△31.2	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁から頸部までは内外面ナデ。頸部以下、最大径部やや下まで内外面ハケ。以下、外面ミガキ、内面ケズリ。最大径部やや下、内面指押さえ。最大径部やや下で上下を接合か。	密良	内) 橙色 外) 橙色～灰褐色	1/8	胎土分析試料22
118	37	7区土坑12①層	弥生土器甕	*15.0	5.5	24.1	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線。口縁から頸部までは内外面ナデ。頸部以下、最大径部やや下まで内外面ハケ。以下、外面ミガキ、内面ケズリ。最大径部やや下、内面指押さえ。最大径部やや下で上下を接合か。	密良	内外とも橙色	1/3	胎土分析試料24
119	39	4区F19V層	弥生土器甕	-	-	2.8	口縁部は上方にやや拡張され、端面に2条の凹線。口縁内外面ナデ。	密良	内外とも褐灰色・明黄褐色	-	
120	39	7区B16Ⅲ層	弥生土器甕	-	-	2.9	口縁部は上方に拡張され、口唇部は欠損。口縁端面に4条の凹線施文後、3条の棒状浮文。口縁内外面ナデ。	密良	内外とも灰白色	-	
121	39	7区B18V層	弥生土器甕	*12.9	-	△4.0	口縁部は上下に拡張され、端面に2条の凹線施文後、櫛状工具による波状文。肩部、櫛状工具による波状文。口縁から頸部にかけて内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面ケズリ。	密良	内) ぶい黄褐色・黒色 外) ぶい黄橙色・褐灰色	1/7	
122	39	2区砂礫層	弥生土器甕	*10.8	-	△11.9	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線施文後、刺突文。口縁から頸部にかけて内外面ナデ。頸部以下外面ハケ。内面は体部下半までハケ、以下ケズリ。	密良	内) 橙色 外) 淡黄橙色～黒褐色	1/4	

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
123	39	7区B17 V層	弥生土器 底部	-	*4.9	△4.5	外面ミガキ。内面ケズリ。底部焼成後穿孔。	密良	内) ぶい黄橙色 外) ぶい黄褐色～黒褐色	1/2	
124	39	4区F19 II層	弥生土器 壺	-	-	△2.8	口縁部はやや上方に拡張され、口唇部に刺突文が施される。口縁外面に貼付突帯施文後、刺突文。口縁端面、内外面ナデ。	密良	内外とも灰褐色	-	
125	39	4区G19	弥生土器 壺	-	-	△4.3	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線。口縁から頸部にかけて内外面ナデ。頸部以下内外面ハケ。	密良	内) ぶい橙色 外) ぶい橙色・褐色	-	
126	39	4区G20 IV層	弥生土器 壺	11.0	4.3	-	口縁部は上下に拡張され、端面に4条の凹線施文後、貝殻腹縁による刺突文。口縁から頸部にかけて内外面ナデ。頸部以下外面ハケ、内面ナデ。外面、口縁内面赤彩。	密良	内) 灰白色・ぶい橙色 外) 橙色	1/5	胎土分析 試料25
127	39	3区 III～V層	弥生土器 壺	-	-	3.0	口縁部は上下に拡張される。下垂部分は欠損。口縁端面に3条の凹線。頸部外面に糊圧痕。口縁内外面ナデ。	密良	内) ぶい橙色 外) 橙色	-	
128	39	3区 攪乱土	弥生土器 直口壺	8.4	-	9.1	口縁部片。頸部上部に凹線状の極浅い窪みが1条。口唇部から窪みまでは内外面ナデ。窪み以下外面ハケ、内面ナデ。	密 やや 不良	内外とも橙色	1/3	
129	39	7区B18 V層	弥生土器 壺	-	-	1.7	口縁部は上下に拡張され、端面に3条の凹線。口縁内外面ナデ。	密良	内外ともにぶい黄褐色	-	
130	39	調査地内 層位不明	弥生土器 壺	*22.2	-	△1.6	口縁部部に3条の凹線施文後刺突文。口唇部外面に1条の凹線状の窪み。内面に3条の凹線。外面ナデ。	密良	内外ともにぶい黄褐色	1/6	
131	39	5区 V層	弥生土器 壺	*23.8	-	△2.5	口縁部部に3条の凹線。内外面ナデ。	密 やや 不良	内外とも浅黄褐色	1/10	
132	39	7区B18 V層	弥生土器 壺	*25.8	-	△5.2	口縁部部に5条の凹線。口縁部内外面ナデ、以下内外面ハケ。	密良	内) ぶい黄褐色・明黄褐色・褐灰色 外) 黄褐色・明黄褐色・褐灰色	1/6	
133	39	7区B19 層位不明	弥生土器 壺	-	-	△4.2	体部片。突帯が1条。突帯下、沈線文。内面ケズリ。	密良	内外ともにぶい褐色	-	
134	39	3区F14 IV層	土師器 高台付坏	-	-	△3.7	内面糊圧痕。内外面ナデ。	密 やや 不良	内外とも浅黄褐色	1/7	
135	39	7区B17 II層	須恵器 高台付坏	-	*8.0	△2.7	全体的に風化が激しい。内外面ナデ。	密 不良	内外とも灰白色	1/16	
137	42	7区 土坑14	弥生土器 底部	-	*5.6	△2.7	外面ヘラミガキ。内面はナデ。内外面とも黒漆塗布。	やや粗 良好	内外とも褐色・黒色・ 褐灰色	5/8	
184	72	5区 溝13埋土中	弥生土器 壺	*12.6	-	△6.2	口縁部が上下に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。口縁部ナデ、内面頸部には指頭圧痕、外面はハケ。	やや粗 やや軟	内) 灰白色・灰褐色 外) 灰白色・浅黄褐色	1/5	
185	72	5区 溝13埋土中	弥生土器 甕	-	*12.0	△5.9	底部から外傾するもの。外面はヘラミガキ、内面はケズリ。	やや粗 やや軟	内) 灰白色 外) 灰白色・ぶい橙色	1/8	
186	72	5区 溝13埋土中	土師器 甕	*18.6	-	△5.8	頸部から口縁へかけ二段に外反する。口縁部はやや面取り状になる。口縁部ナデ、頸部以下内面はケズリ、外面は雑なナデ。	粗 やや軟	内) 褐色・褐灰色 外) 暗赤褐色・褐灰色	1/8	
187	72	5区 溝13埋土中	土師器 甕	*11.4	-	△5.5	頸部から緩やかに外反するもの。口縁部ナデ、頸部以下内面はケズリ、外面はハケか。外面に煤付着。胎土に多量の金雲母含む。	やや粗 やや軟	内) 灰黄褐色 外) 灰黄褐色・黒色	1/6	
188	72	5区 溝13埋土中	須恵器 高坏	-	-	△9.1	高坏の脚部。内外面回転ナデ。わずかに坏部底面が残存。	密 良好	内) 灰白色・ぶい黄褐色 外) 灰白色		筒部完 存、脚 部 1/6
197	77	2区 溝18埋土中	弥生土器 甕	*12.6	-	△1.7	口縁部が上下に拡張され、端面に3条の凹線が巡る。口縁部ナデ。	やや粗 やや軟	内外とも褐色・灰黄色	1/9	
198	77	2区 溝18埋土中	弥生土器 甕	-	-	△4.6	頸部がく字状に屈曲する。端部はやや面取り気味。口縁ナデ、体部はハケ。全体に器壁厚い。	やや粗 やや軟	内) 明褐色・褐灰色・ 灰白色 外) 褐色・灰白色	-	

土製品

遺物番号	挿図番号	地区・遺構層位	器種	法量 (cm)				特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				最大径	最大幅	最大厚	重さ (g)					
30	18	4区 竪穴住居2 床面直上	土玉	1.4	1.4	1.3	3.1	全面ナデ。穿孔無し。	密良	ぶい黄褐色	完存	
31	18	4区 竪穴住居2 床面直上	有溝土錘	4.1	2.5	2.5	17.6	3方向に溝を線刻。溝はそれぞれ独立しており、接点はない。上端下端ともに、やや摩滅している。	密良	褐灰色	完存	

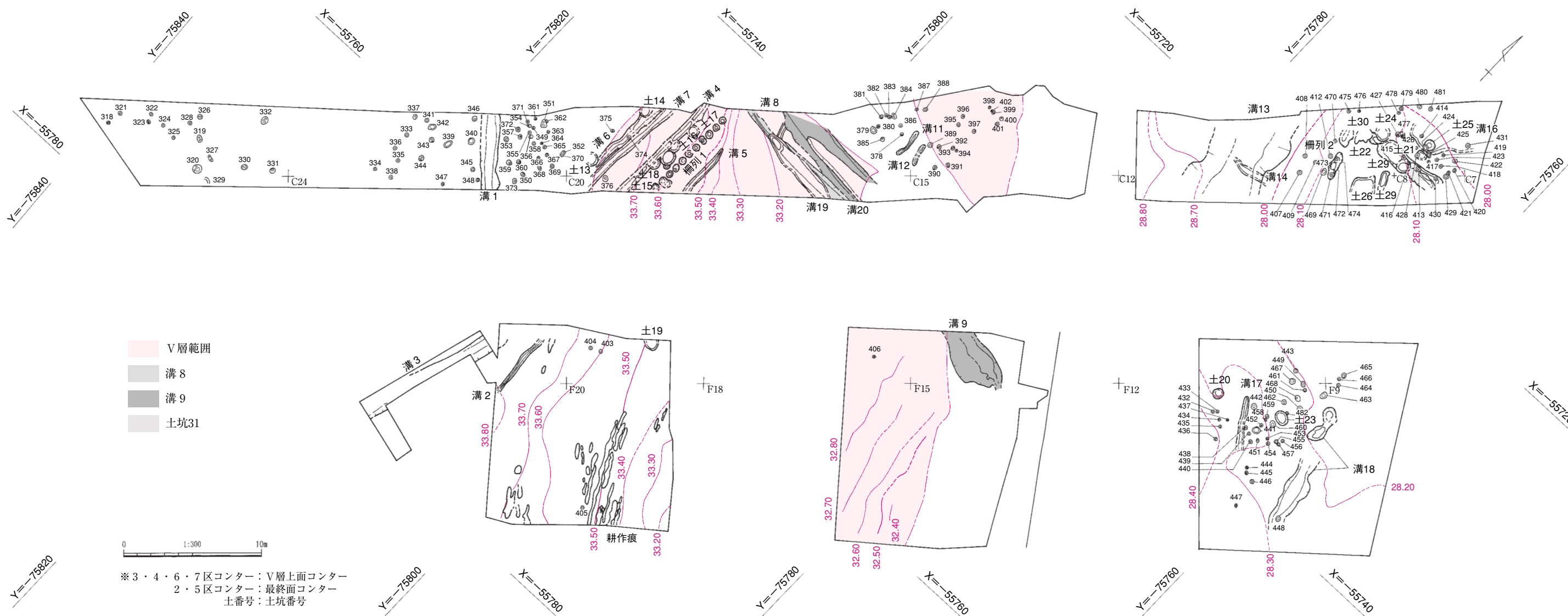


図40 中世遺構全体図

第6節 中世の遺構・遺物

1、概要（図40）

2～7区に中世前期の土坑20基、溝18基、柵列2基、耕作痕を検出した。2～7区は名和川左岸河岸段丘上平坦面に位置する。上段の3・4・6・7区ではV層（黒褐色土）上面で、下段の2区では5～7層（砂礫層）、5区では8層（明黄褐色土）または9層（淡灰褐色砂質土）上面で遺構を検出した。5区には8・9層上面とⅨ層上面に遺構面が存在するが、検出が困難であった為、8・9層上面で遺構を検出した。Ⅸ層検出の遺構埋土は暗褐色系の色調を呈す。検出面の標高は上段で約32.7m～34.1m、下段で約28.2mである。調査地は大小の溝または柵列により、東西南北に整然と区画される。そのうち溝9は東西を主軸とし、最大幅2.7m、最深部192cmを測る大溝である。

調査地内では、中世前期から後期にかけての貿易陶磁器、国産陶器、土師器、須恵器、瓦質土器などが出土している。（森本）

2、検出した遺構・遺物

土坑13（図41・43、図版3・33）

7区北東寄りに位置し、西側は削平される。溝6との切り合い関係は不明である。平面形は円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸約100cmを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約37cmである。埋土は灰褐色粘質土を基調とする。遺物は出土していない。（西川）

土坑14（図42・43、図版3・33）

7区北東寄りに位置し、北側は調査地外である。溝6との切り合いは確認できなかった。平面形は楕円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸残存約100cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約42cmである。埋土は2層に分かれ、灰褐色系の土を基調とする。遺物は、埋土①層から瓦質の片口鉢136が出土した。（西川）

土坑15（図43・44、図版3・33）

7区北東寄りに位置し、溝4を切る。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約98cm、短軸約80cmを測る。底面は緩く湾曲する。検出面からの深さは約14cmを測る。埋土は灰褐色砂質土単層である。遺物は出土していない。なお、本土坑の南に土坑16・17を検出した。土坑15～17はほぼ同

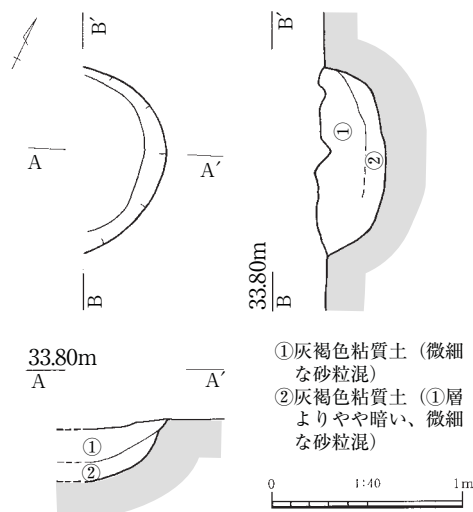


図41 土坑13

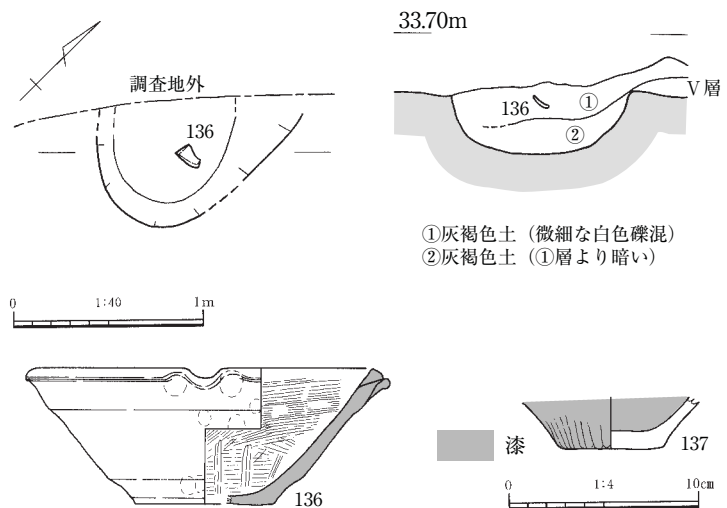


図42 土坑14および出土遺物

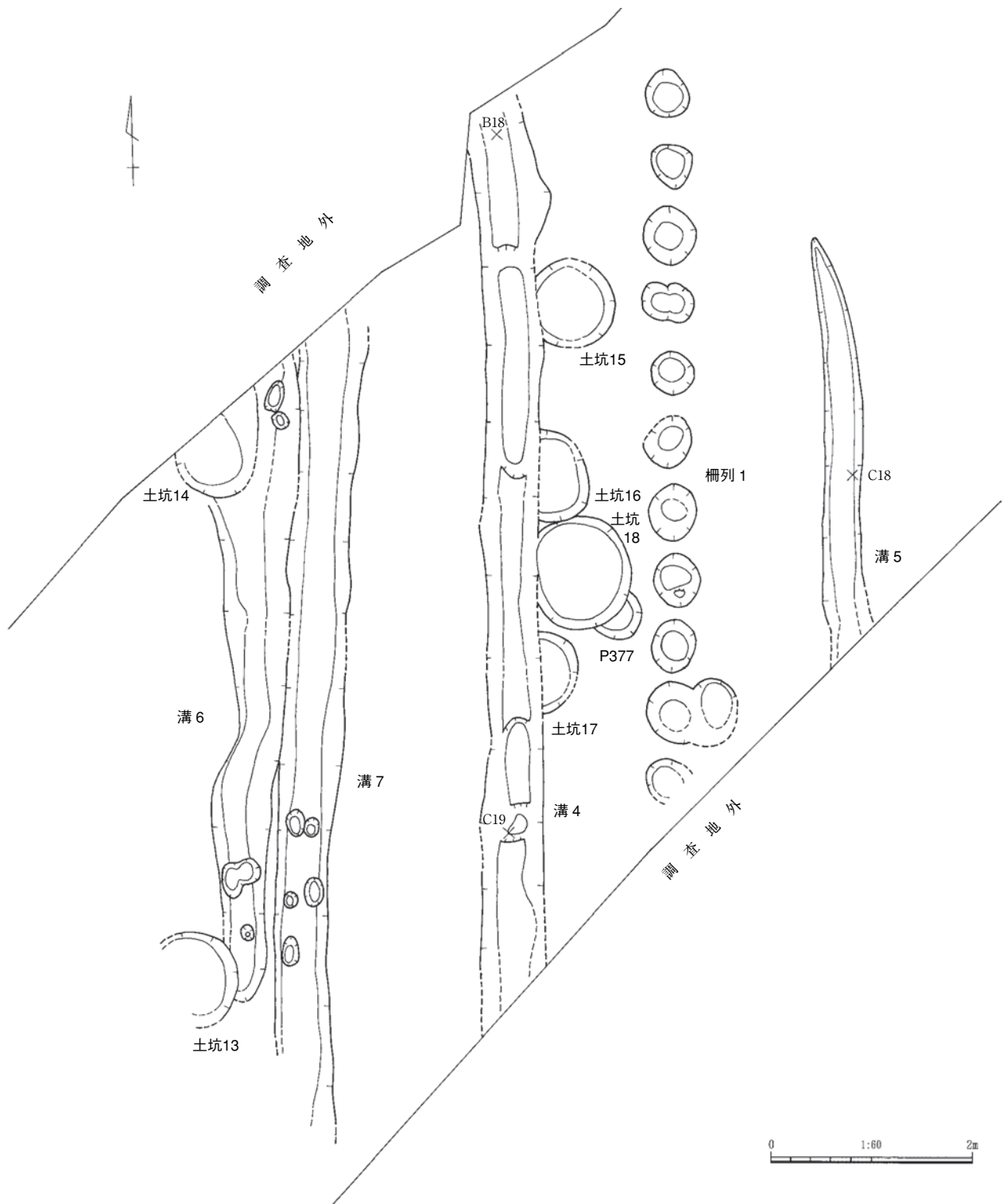


図43 B17～19グリッド周辺V層検出遺構平面図

規模であり、等間隔に位置することから、一連のものと考えられる。

(西川)

土坑16 (図43～45、図版3・33・38)

7区北東寄りに位置し、溝4を切る。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約87cm、短軸約77cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。検出面からの深さは約8cmを測る。埋土は灰褐色粘砂土である。埋土中から土師器皿139が出土した。

(西川)

土坑17 (図43・44、図版3・34)

7区北東寄りに位置し、溝4を切る。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約90cm、短軸

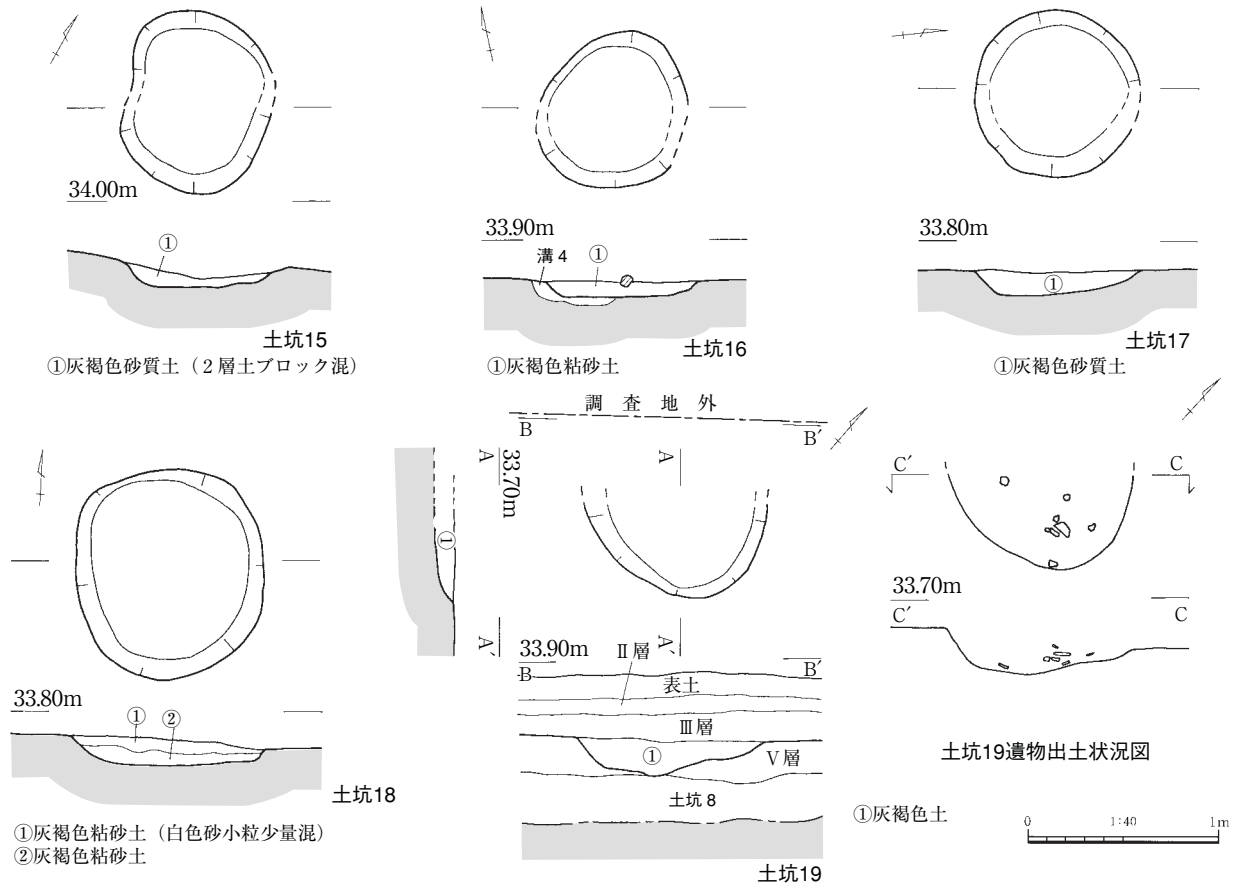


図44 土坑15～19

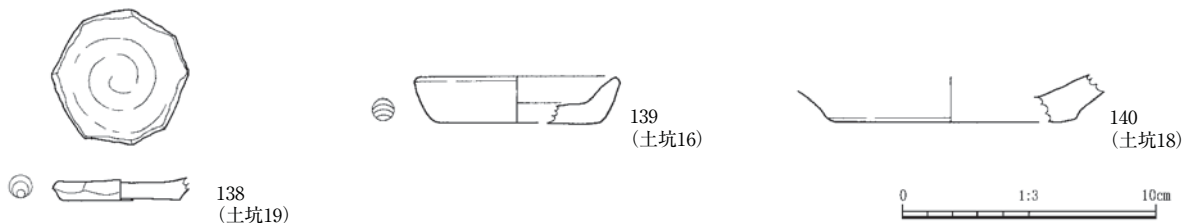


図45 土坑16・18・19出土遺物

約87cmを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約14cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。(西川)

土坑18 (図43～45、図版3・34・38)

7区北東寄りに位置し、溝4を切り、土坑16に切られる。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約111cm、短軸約99cmを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約15cmを測る。埋土は2層に分れるが、共に灰褐色粘砂土である。埋土中から土師器杯140が出土した。(西川)

土坑19 (図44・45、図版34・38)

4区北隅に位置し、北西側は調査地外である。平面形は円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸残存約97cm、短軸約48cmを測る。底面は緩く湾曲する。検出面からの深さは約20cmを測り、埋土は灰褐色土である。埋土中から、口縁部を打ち欠いた土師器皿138が出土した。(西川)

土坑20 (図46、図版35)

2区西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約76cm、短軸約62cmを測る。検出面からの深さは11cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。(西川)

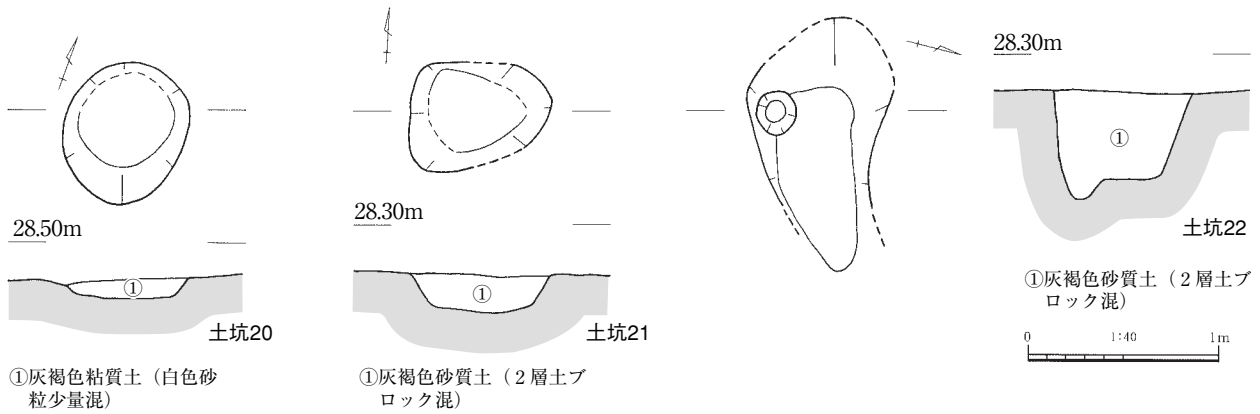


図46 土坑20～22

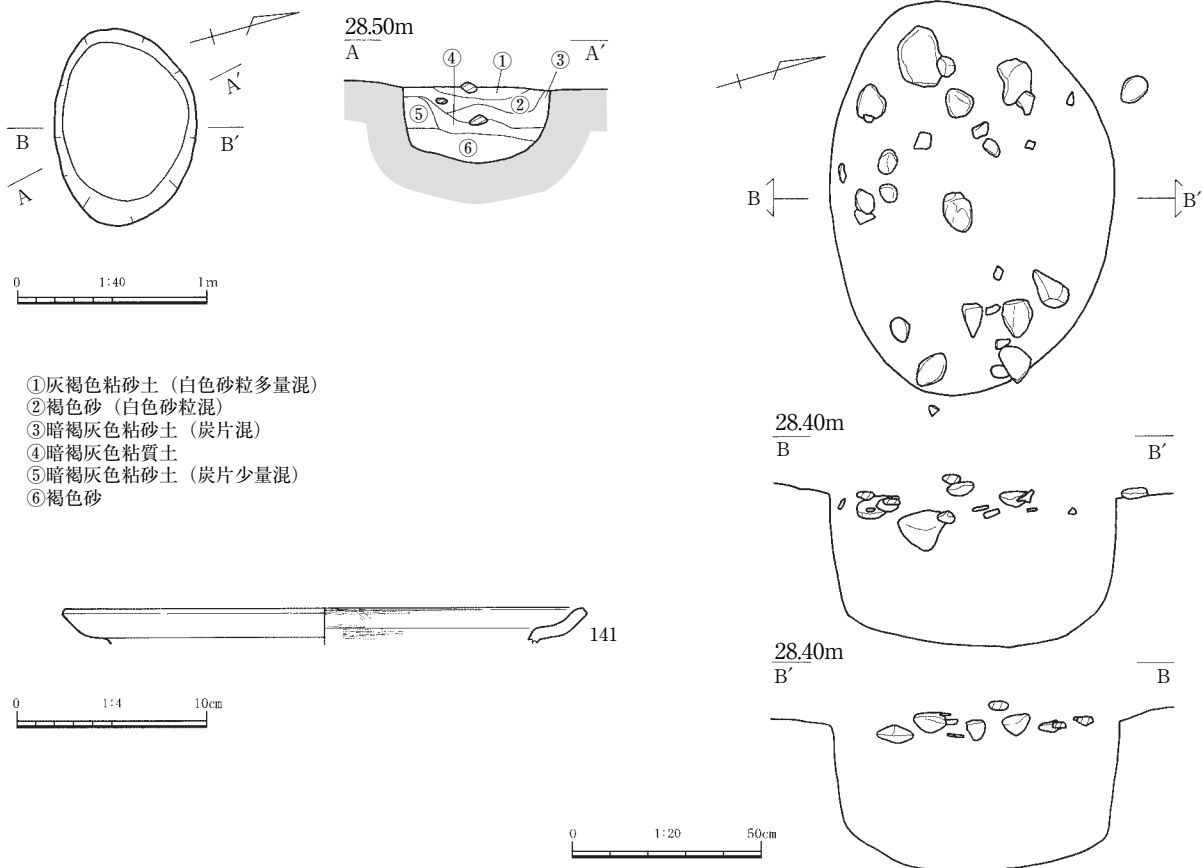


図47 土坑23および出土遺物

土坑21 (図46、図版35)

5区北隅寄りに位置する。平面形はいびつな円形を呈し、検出面での規模は長軸約74cm、短軸約59cmを測る。断面形はほぼ逆台形状を呈し、検出面からの深さは約21cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。(西川)

土坑22 (図46)

5区北隅寄りに位置する。北側を土坑24に、東側を溝15に切られる。平面形は不整な長楕円形を呈する。検出面での規模は長軸残存約136cm、短軸約72cmを測る。断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは約48cmを測る。南側壁下から径約20cm、深さ11cmのピット状の窪みを検出した。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。(西川)

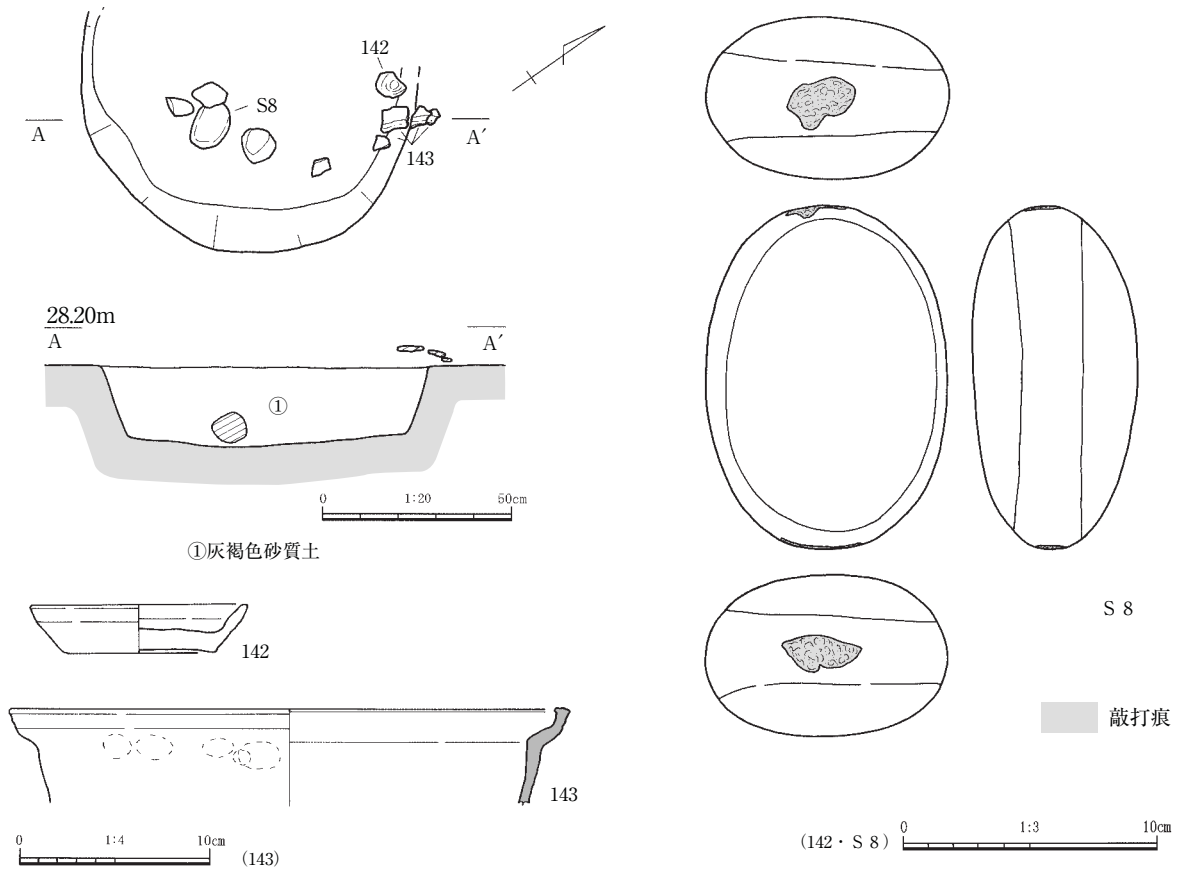


図48 土坑24および出土遺物

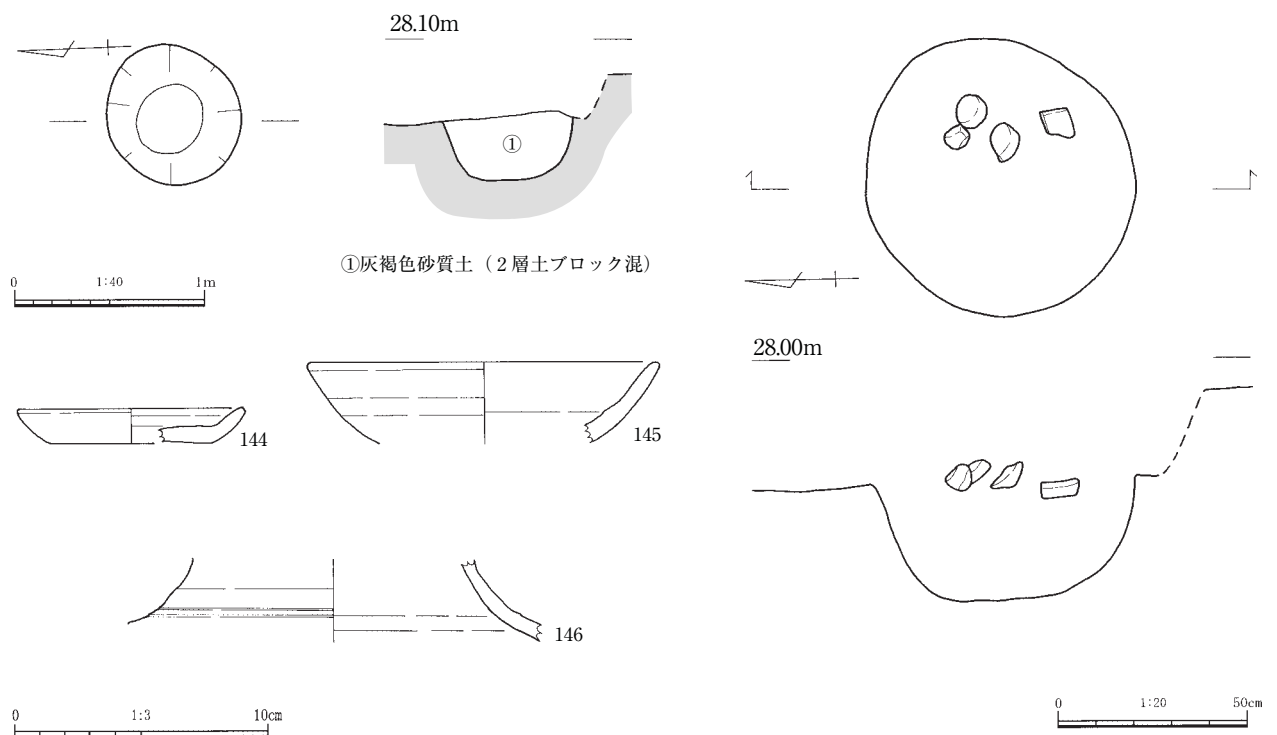
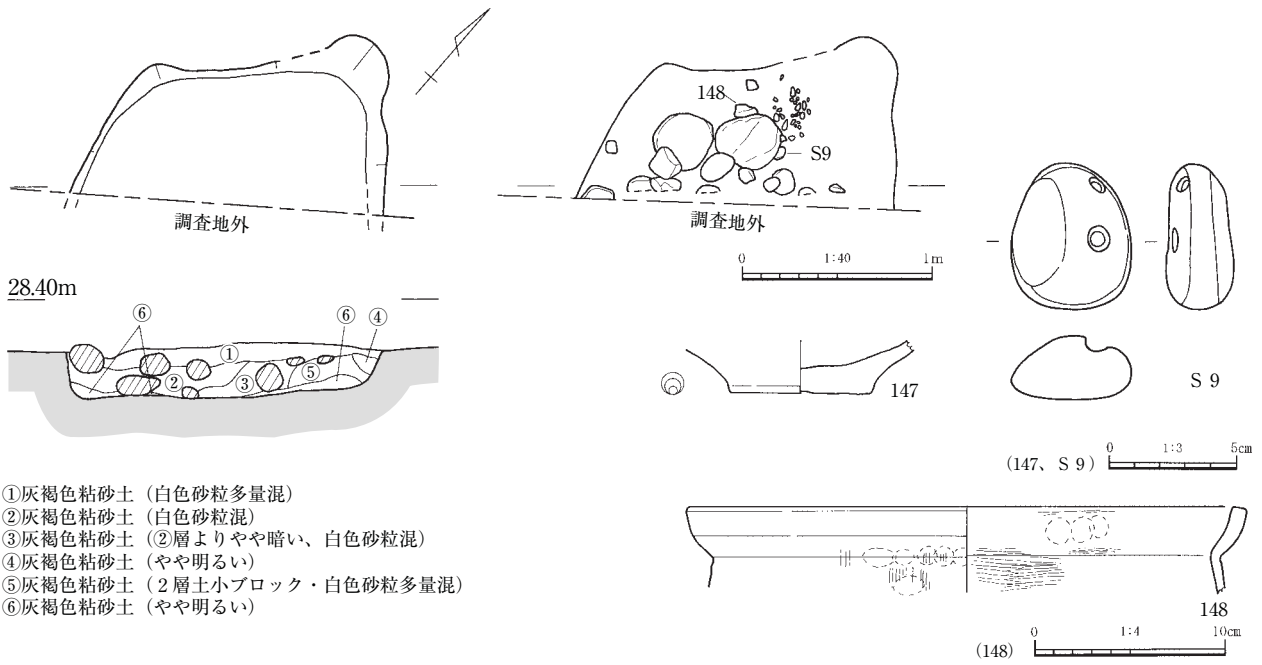
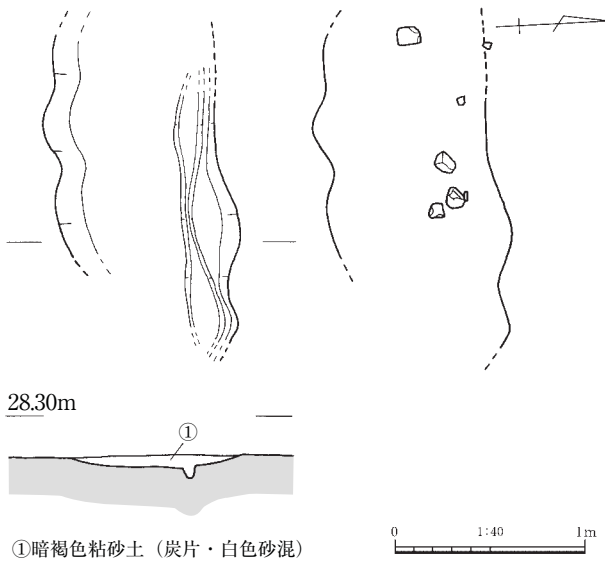


図49 土坑25および出土遺物



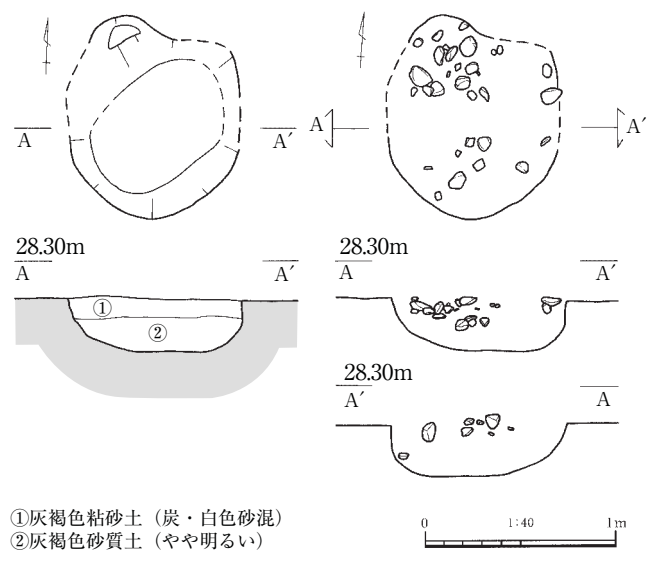
- ① 灰褐色粘砂土 (白色砂粒多量混)
- ② 灰褐色粘砂土 (白色砂粒混)
- ③ 灰褐色粘砂土 (②層よりやや暗い、白色砂粒混)
- ④ 灰褐色粘砂土 (やや明るい)
- ⑤ 灰褐色粘砂土 (2層土小ブロック・白色砂粒多量混)
- ⑥ 灰褐色粘砂土 (やや明るい)

図50 土坑26および出土遺物



- ① 暗褐色粘砂土 (炭片・白色砂混)

図51 土坑27



- ① 灰褐色粘砂土 (炭・白色砂混)
- ② 灰褐色砂質土 (やや明るい)

図52 土坑28

土坑23 (図47、図版35・38)

2区やや北寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約104cm、短軸約75cmを測る。底面は緩やかに湾曲する。検出面からの深さは約40cmを測る。埋土は灰褐色系の土と褐色砂である。埋土上層から径約5～10cmの礫が出土した。遺物は土師器鍋141が出土した。(西川)

土坑24 (図48、図版36～38・54)

5区北寄りに位置し、土坑22を切る。北側はトレンチで切られる。平面形は隅丸方形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸約90cmを測る。検出面からの深さは22cmを測り、埋土は灰褐色砂質土である。検出面から、土師器の灯明皿142、瓦質の鍋143が出土した。(西川)

土坑25 (図49、図版4・36・38)

5区北寄りに位置する。溝16底面で検出した。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸約

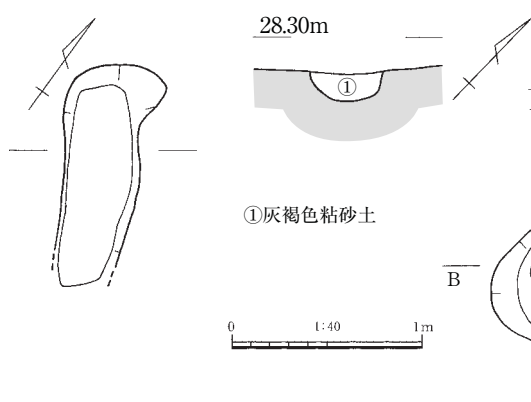


図53 土坑29

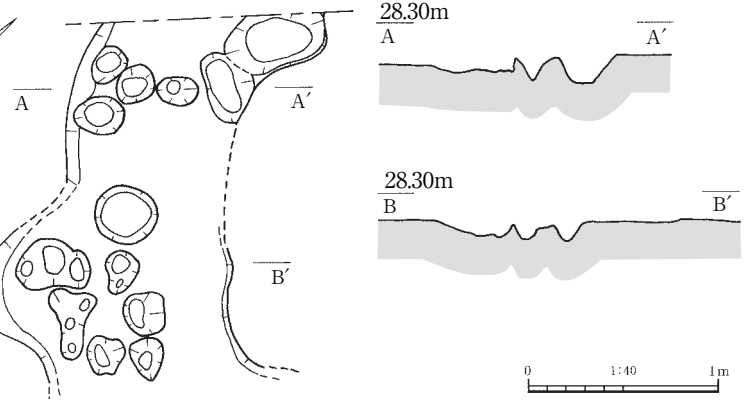


図54 土坑30

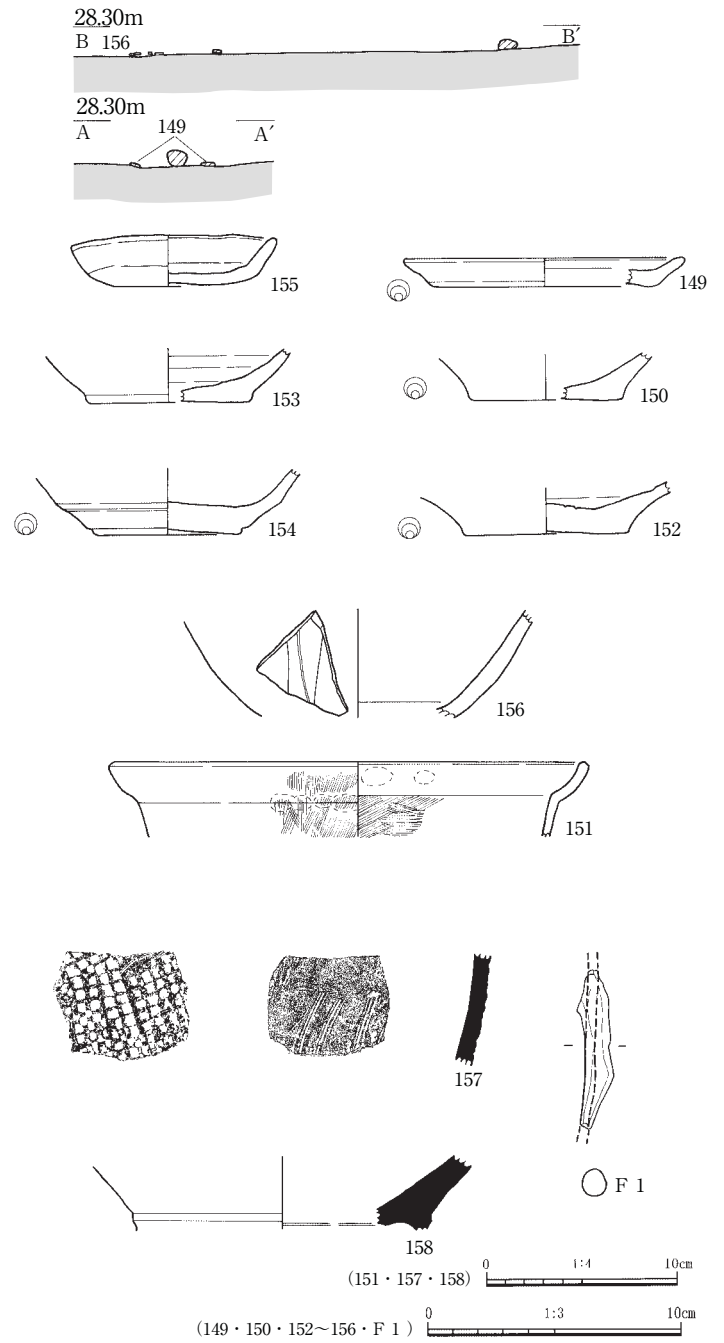


図55 土坑31および出土遺物

76cm、短軸約70cmを測る。底面は中央部に向けて緩やかに湾曲する。検出面からの深さは36cmを測る。埋土は灰褐色砂質土に8層ブロックが混入する。

遺物は、埋土中から土師器皿144、土師器杯145、褐釉陶器壺の頸部146が出土した。検出面からは約10cmの礫が4つ出土した。(森本)

土坑26 (図50、図版37・38)

5区東側に位置する。南東側は調査地外に続く。残存部平面形は不整な隅丸方形を呈し、検出面での規模は長軸約168cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは28cmである。埋土は主に灰褐色粘砂土を基調とする。このうち、⑤層については8層土ブロックが多く含まれ、人為的に埋められた層と推測される。②・③層を中心に径30cmを越えるものを含む多くの礫が出土した。

遺物には土師質土器147・148、石器S 9が存在する。(西川)

遺物には土師質土器147・148、石器S 9が存在する。(西川)

土坑27 (図51、図版36・55)

5区北東隅寄りに位置する。東側は調査地外である。西側は土坑28に切られる。残存部平面形は長方形を呈し、検出面での規模は短軸約90cmを測る。検出面からの深さは約6cmである。底部中央部分には深さ約6cmの筋状の溝が存在する。埋土は砂質の強い単層であり、炭片を含む。若干の土器が出土したが、小片のため図化できなかつた。(西川)

土坑28 (図52、図版37)

5区北東寄りに位置し、東側は土坑27を切る。平面形はいびつな円形を呈し、検出面での規模は長軸約108cm、短軸約94cmを測る。検出面からの深さは30cm、埋土は灰褐色系の砂質土を基調とする。①層中から径10cm程度の礫と共に土器が出土したが、小片のため図化できなかつた。(西川)

土坑29 (図53、図版36)

5区東寄りに位置し、南東側は調査地外である。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長軸残存約123cm、短軸40cmを測る。検出面からの深さは16cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。(西川)

土坑30 (図54)

5区中央部に位置し、北西側は調査地外である。検出面での規模は短軸約0.9mを測る。検出面からの深さは約4cmで、底面には深さ2～3cmの窪みがある。埋土は灰褐色砂質土である。本遺構は土坑として扱ったが、本来的には流路の一部と思われる。遺物は出土していない。(森本)

土坑31 (図55、図版4・36～38)

5区東側に位置する。平面形は検出できなかつた。長軸約5.2m、短軸約1.7mの範囲に遺物が点在して出土した。遺物が出土した周辺には、径約1～2cm、深さ約1～2cmの僅かな窪みが数カ所あり、灰褐色砂質土が堆積していた。本土坑は、本来的には削平された流路の底面部分と思われる。

遺物は、土師器皿149・155、土師器杯150・152～154、土師器鍋151、須恵器甕157、須恵器捏鉢158、青磁碗156、鍛造の棒状不明品F 1と多種出土している。

なお、位置関係、形態、埋土土色から土坑30との関連が窺われる。(森本)

土坑32 (図56、図版38)

5区北東寄りに位置する。遺構の平面形は確認できなかつた。口縁部を打ち欠いた土師器皿159が

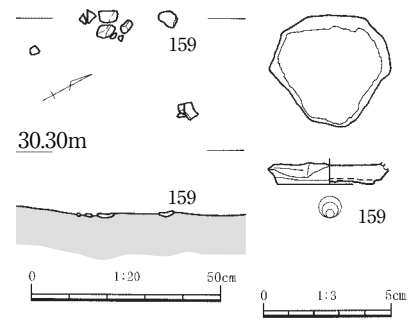


図56 土坑32および出土遺物

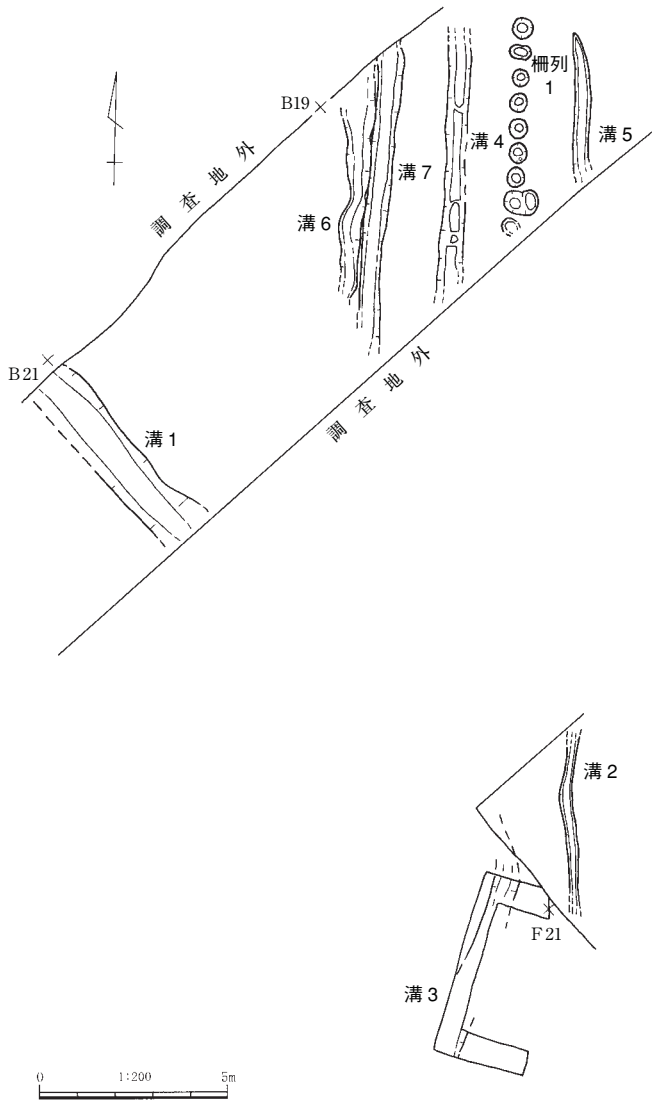


図57 B17～F22グリッド周辺V層検出遺構概念図

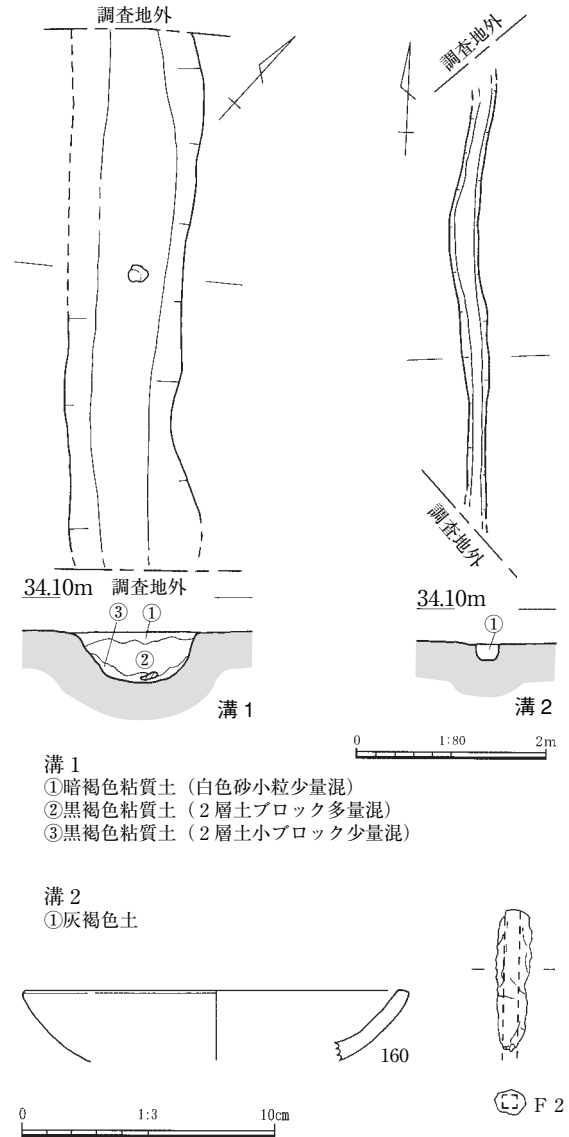


図58 溝1・2および溝1出土遺物

出土した。159出土部分は僅かに窪み、径約10cmの範囲に灰褐色砂質土が薄く堆積していた。(森本)
溝1 (図57・58、図版39・48・55)

7区中央に位置し、北西-南東方向を主軸にとる。遺構両端は調査地外である。検出面では長さ約5.7m、幅約1.0~1.4m、検出面からの深さは約54cmを測る。底面は緩く湾曲する。埋土は主に黒褐色土である。②層には2層ブロックが多量に混入する。

遺物は埋土中から土師器杯160、埋土②層から鍛造の棒状不明鉄製品F2が出土した。(西川)

溝2 (図57・58、図版39)

4区西端に位置する。南北方向に主軸をとり、直線的に延びる。遺構両端が調査地外である。北側延長上には溝5が位置しており、同一遺構となる可能性がある。検出面では長さ4.6m、幅0.18~0.30mを測る。検出面からの深さは17cm程度である。埋土は灰褐色土の単層である。

遺物は出土していない。(西川)

溝3 (図57・59、図版39・48)

4区西脇の名和町試掘トレンチ内に存在する。試掘トレンチ内では南北方向(N-18°-E)に主

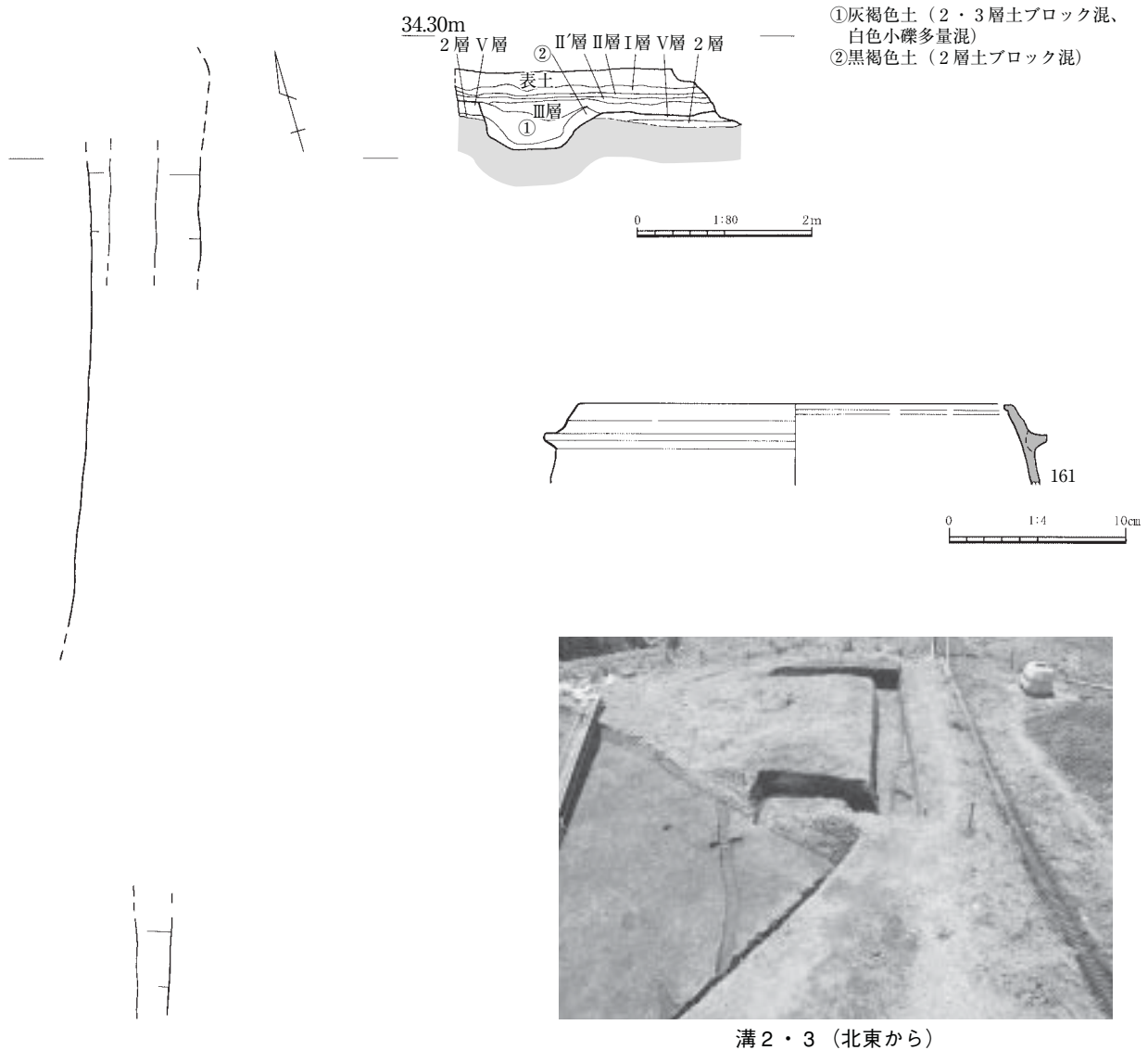


図59 溝3および出土遺物

軸をとるが、4区西隅で北西方向（N-24°-W）にやや曲がる。検出面での幅約1.3m、検出面からの深さは約50cmである。埋土②層は黒褐色土を呈し、2層ブロックが混入する。溝3の北西側延長上には溝1が位置する。埋土の色調が似ていることから、同一遺構となる可能性もある。

遺物は、埋土中から瓦質土器の羽釜161が出土した。（森本）

溝4（図60・61、図版3・4・41・48・54）

7区北東寄りに位置する。南北方向に主軸をとり、直線的に延びる。土坑15～18に切られ、南北両端は調査地外である。検出面では長さ9.1m、幅0.51～0.63mを測る。検出面からの深さは15～18cm程度である。主な埋土は灰褐色砂質土であり、小礫等を含むことから流水状況下で堆積が進んだことが推察される。

遺物は、埋土中から土師器皿162・163、白磁碗164、土師器鍋165、石鏃S10が出土した。（西川）

溝5（図57・62、図版3・42）

7区北東寄りに位置する。南北方向に主軸をとるが、北端がやや西に振れる。南側は調査地外である。南側延長上には溝2が位置しており、同一遺構となる可能性がある。検出面では長さ約4.2m、

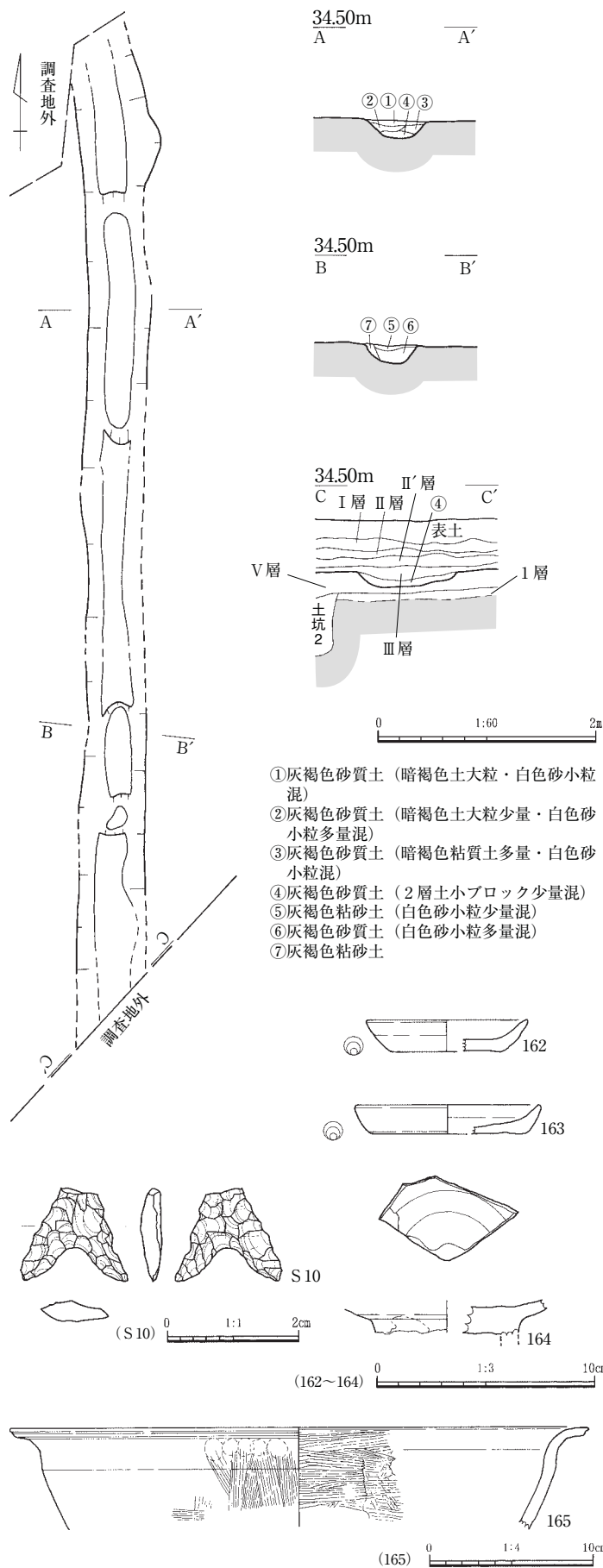


図60 溝4および出土遺物

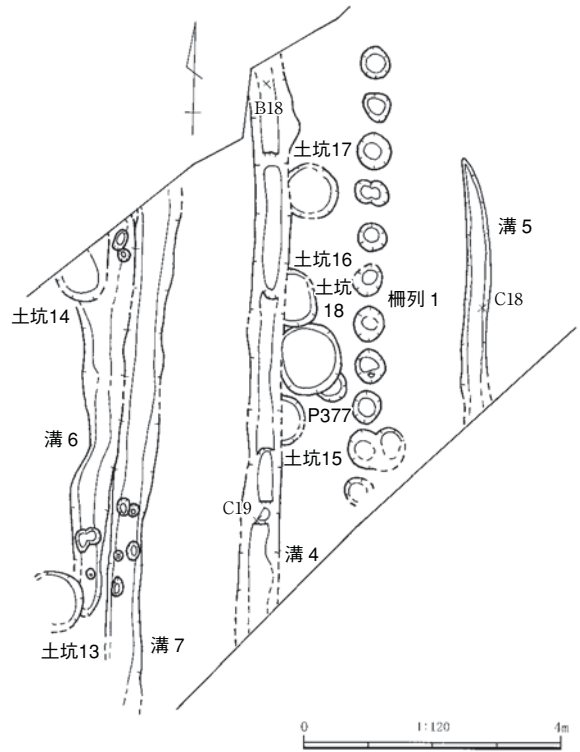


図61 B17~19グリッド周辺
V層検出遺構概念図

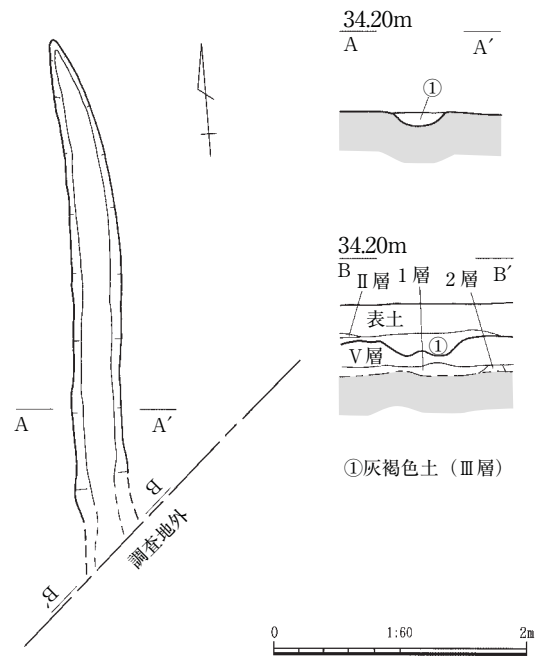


図62 溝5

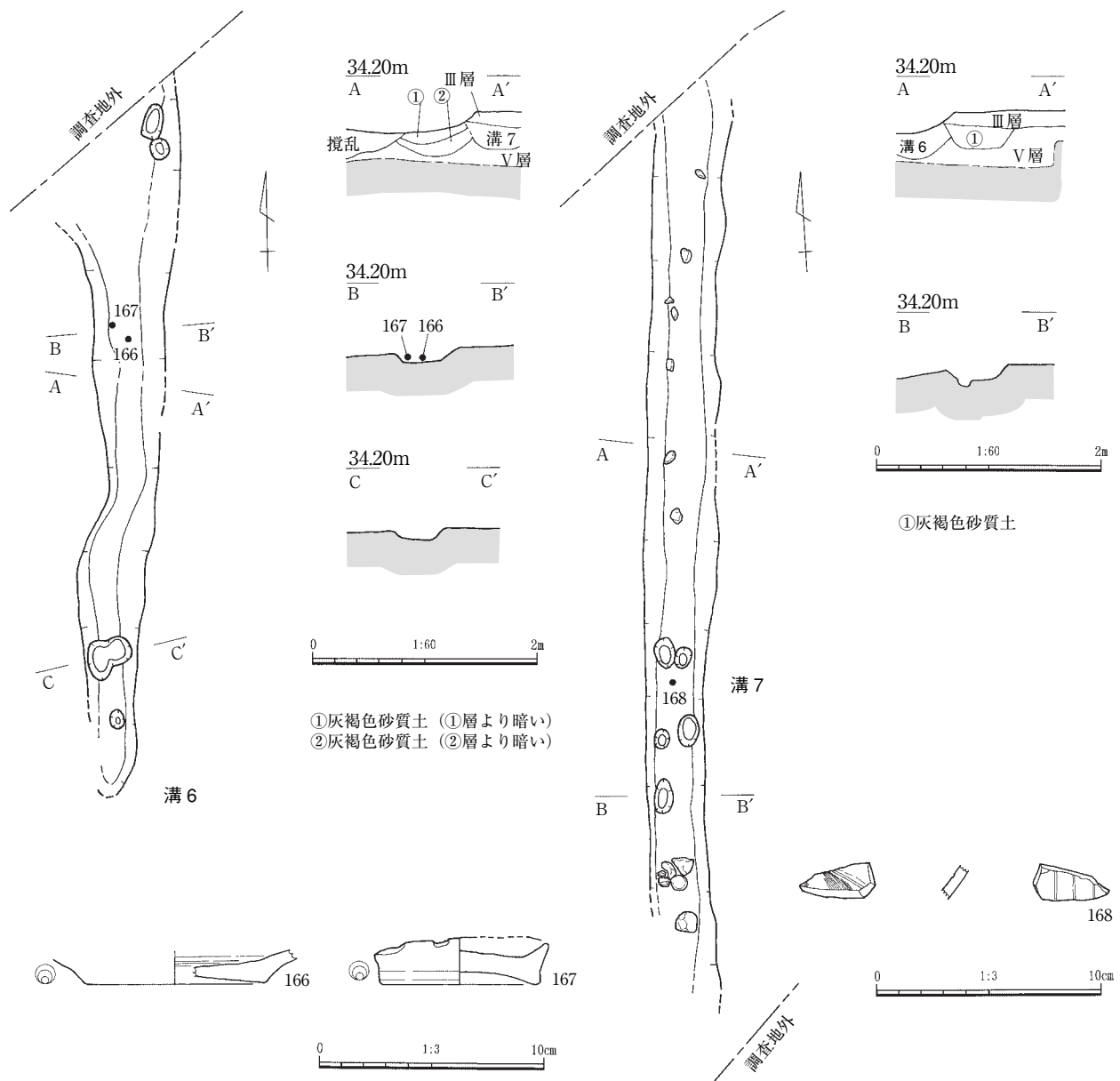


図63 溝6・7および出土遺物

幅約0.4mを測る。検出面からの深さは約9cm、埋土は灰褐色土（Ⅲ層）である。遺物は出土していない。（西川）

溝6（図57・63、図版3・41・48）

7区北東寄りに位置し、溝7に切られる。南北方向に主軸をとり、直線的に延びる。南端・西側は削平を受ける。北側は調査地外へ続く。検出面では幅約0.4~0.9mを測る。底面は凹凸のある歪な形状を呈する。検出面からの深さは最大で約30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物は埋土中からの出土であり、土師器杯166・皿167を図化した。（西川）

溝7（図57・63、図版3・4・41）

7区北東寄りに位置し、溝6を切る。南北方向に主軸をとり、直線的に延びる。北端は調査地外へ続き、南端は削平される。検出面では幅約0.5~0.7mを測る。底面は凹凸のある歪な形状を呈する。検出面からの深さは20cm程度を測る。埋土は灰褐色砂質土であり、多くはないが小礫が存在する。

遺物は埋土中からの出土であり、青磁碗168を図化した。（西川）

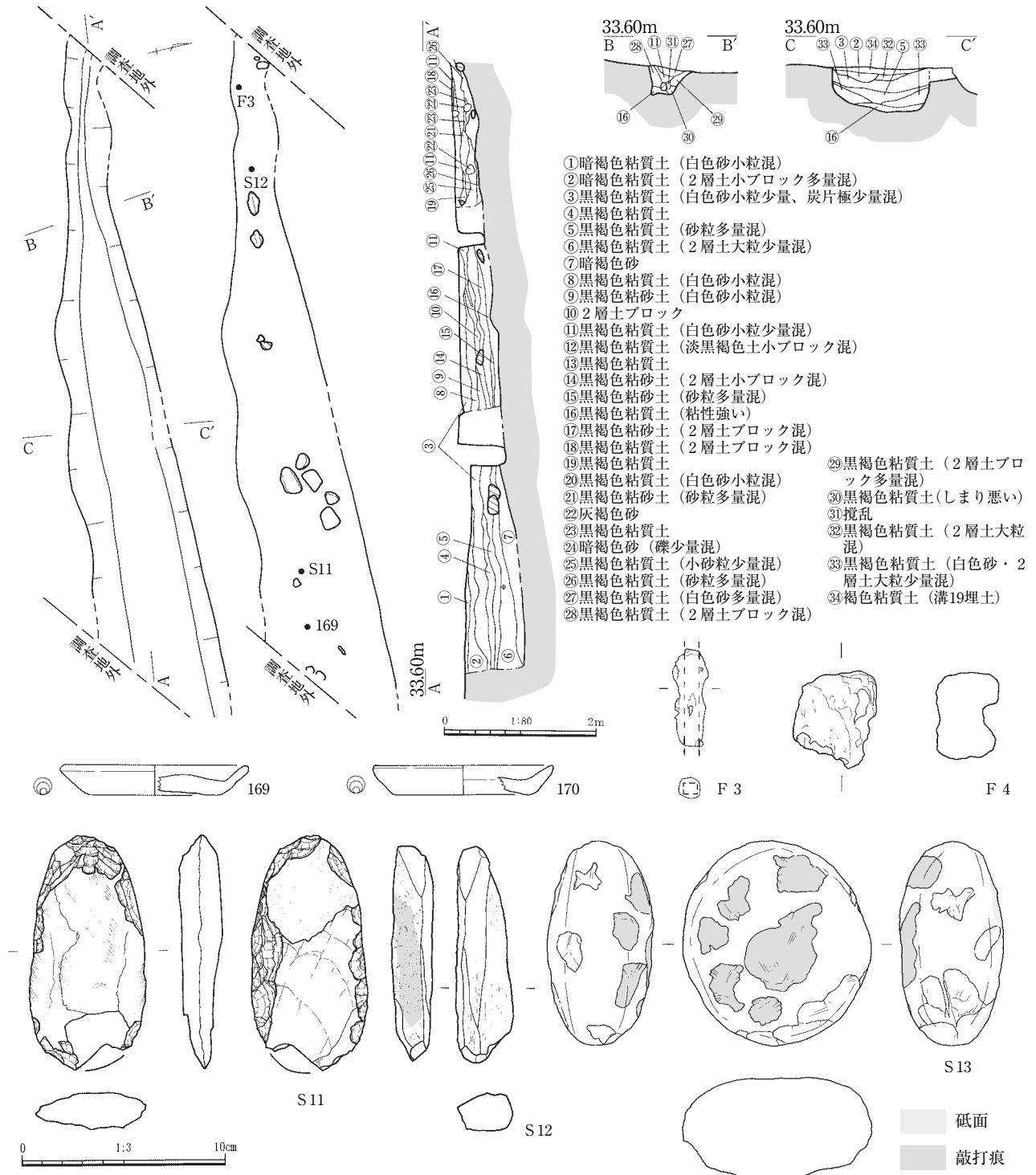


図64 溝8および出土遺物

溝8 (図64、図版3・42・43・48・54・55)

7区北端に位置し、上部を溝19に切られる。東西方向を主軸とし、直線的に延びる。東西両端とも調査地外に続く。検出面では長さ約9.5m、幅は西側約0.4m、東側約1.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、東側では底部が緩く湾曲する。検出面からの深さは西端部で約10cm、東端部で約80cmである。主な埋土は黒褐色粘質土で、底面直上の一部に砂(⑦層)が堆積するため、流水状況下で堆積が進んだと推察される。②・③層には2層ブロックが多量に混入し、人為的に整地された層と思われる。

遺物は、埋土中から土師器皿169・170、鉄器では棒状不明品F3と椀形鍛冶滓F4、打製石斧S11などが出土した。(西川)

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

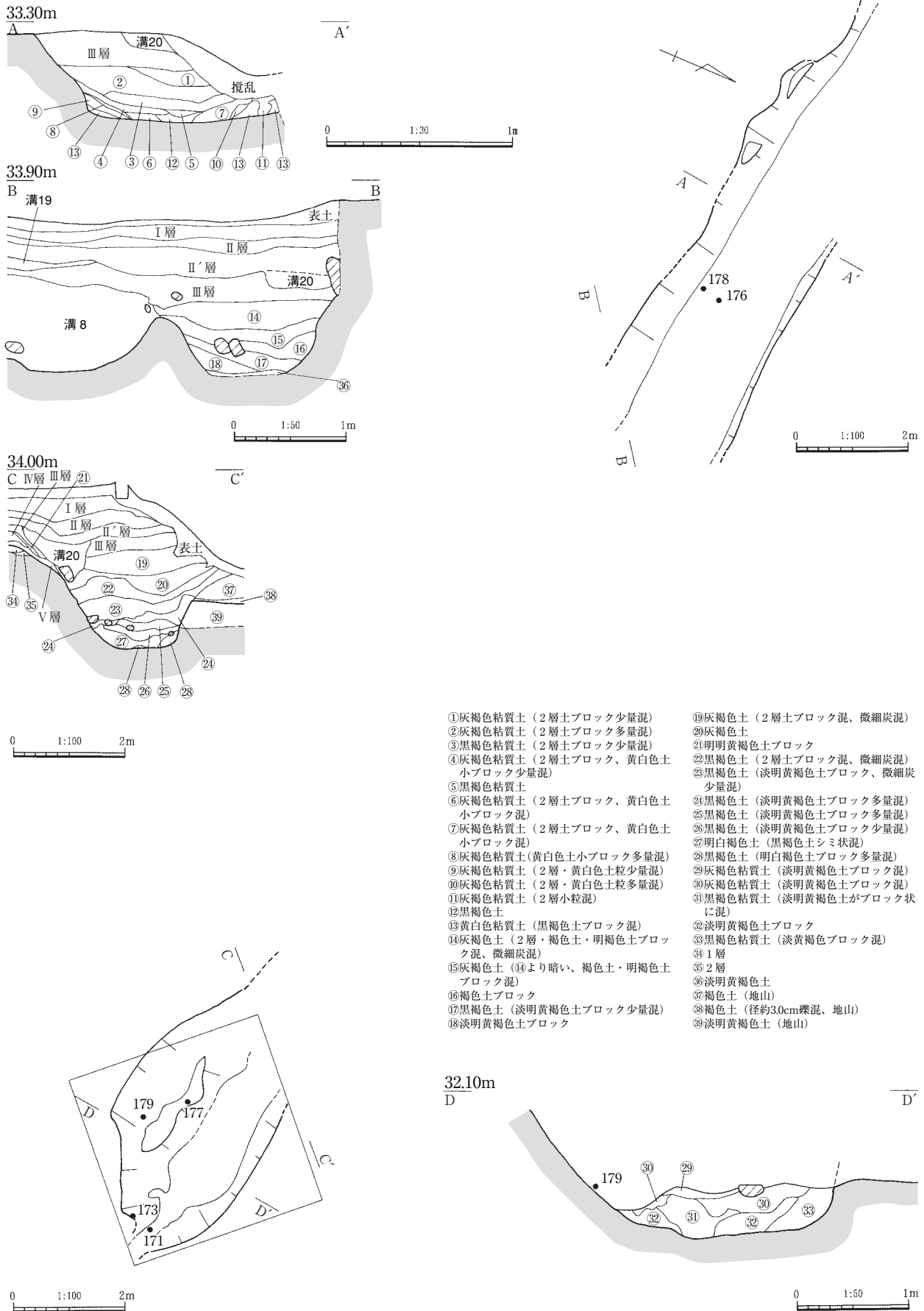


図65 溝9

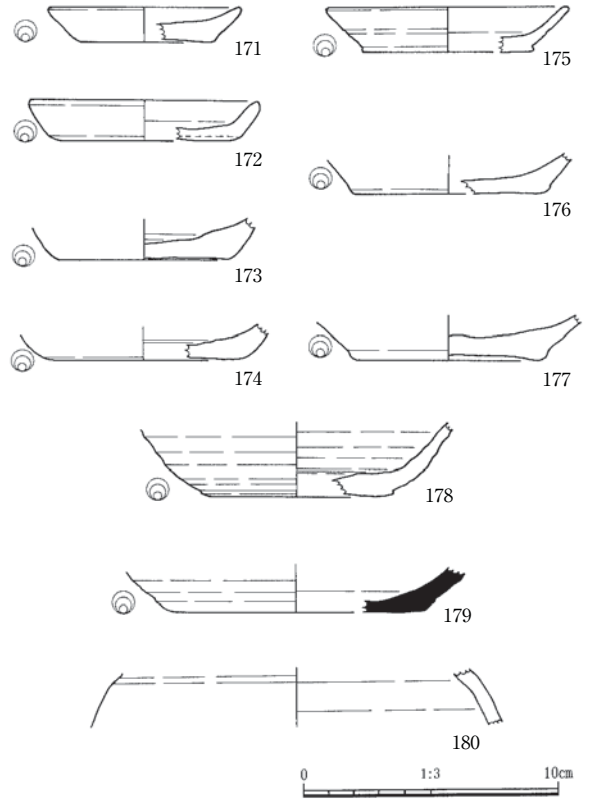
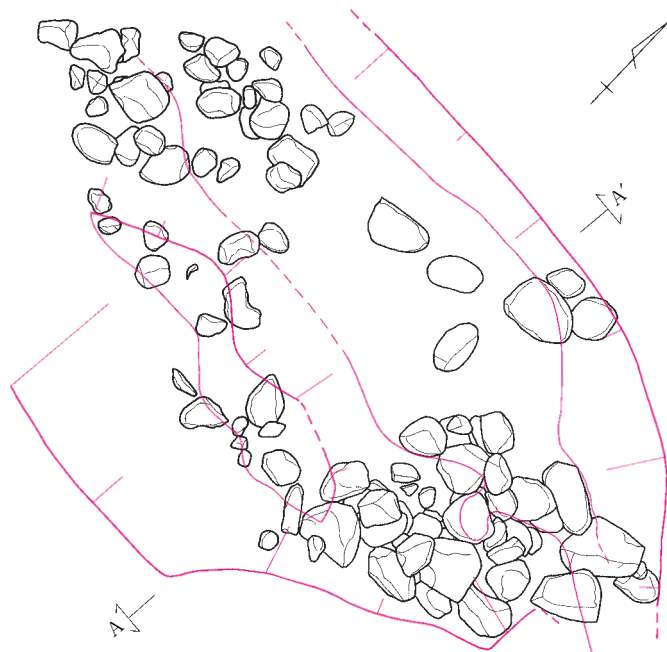


図67 溝9出土遺物

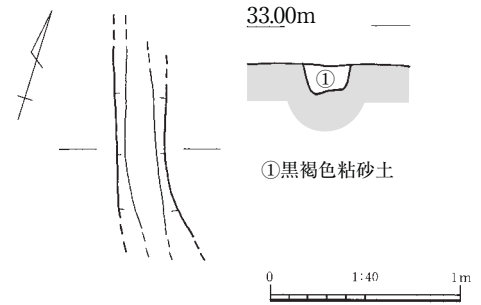
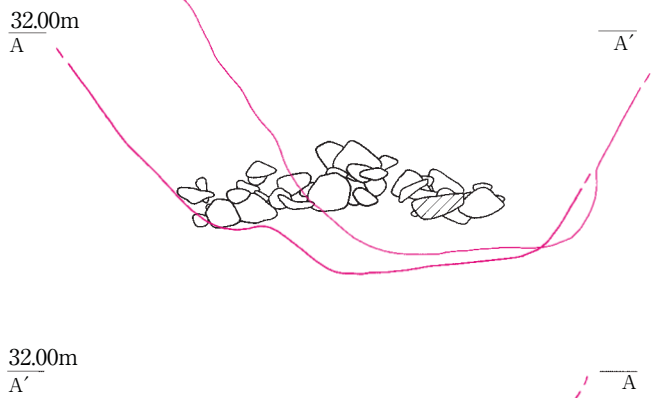


図68 溝10

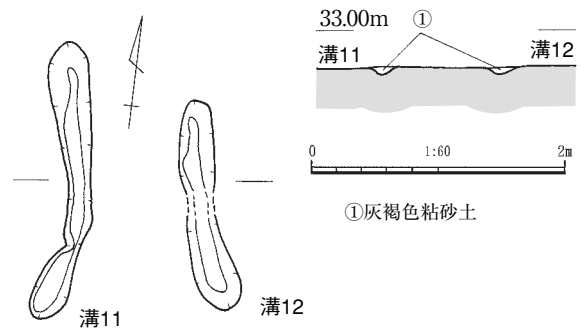


図69 溝11・12

図66 溝9遺物出土状況

溝9 (図65~67・70、図版2・3・5・43~45・48・55)

河岸段丘上平坦面の北東側縁辺部にあたる3区北隅と7区北東端で検出した。両区で検出した溝は、主軸・埋土の色調から同一遺構と判断した。遺構上部は溝20に切られ、南側は溝8を切る。東端は削平され、西端は調査地外である。東西方向(N-10°-E)を主軸とする。検出面での幅は東端で約2.7m、西端で約2.3m、底面までの深さは東端で約192cm、西端で約27cmである。底面の標高は東端で約30.55m、西端で約32.51mであり、比高差が約2mある。IV層(暗褐色土)から掘削され、断面形は逆台形を呈す。埋土は主に黒褐色土または灰褐色土であり、底面直上には締まった粘土(⑬・⑳層)が堆積する。

3区検出部分では南側肩部に2層ブロック(㉑層)が約2~3cmの厚さで堆積する。溝肩部の補強をしている可能性がある。C-C'ラインの土層断面から埋土をサンプリングし、花粉分析と珪藻分析を行った。分析の結果、㉒~㉔層は生活排水が流れ込み、水流のある中で堆積したものであり、㉒・㉓層は水流が停滞し澱んだ状況での堆積とわかった。埋土㉕層中から鞭虫卵も検出されている(第4章第3節参照)。また、底面やや上に、人頭大の大礫が集中して出土し、南壁側から落ち込むような出土状況を示す。大礫と混在して、自然木、種子などの自然遺物も出土している。

溝9は、ほぼ同時期の溝4~7、柵列1と直交する位置関係にある。遺跡内は、大小の溝または柵列により方形に区画されていたと想定される。調査地内では当該期の建物跡は検出されていないが、調査地周辺には東西南北に整然と区画された集落跡が存在するものと思われる。

遺物は埋土中から、土師器皿、馬銚F5、椀形鍛冶滓F7~9などが出土した。(森本)

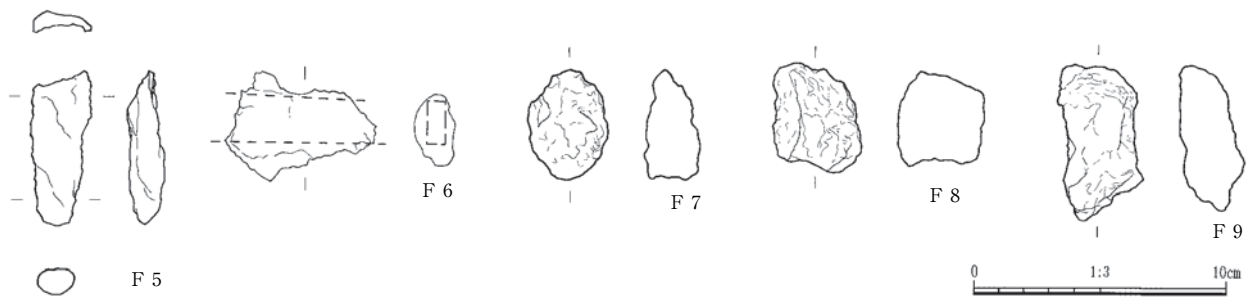


図70 溝9出土鉄関連遺物

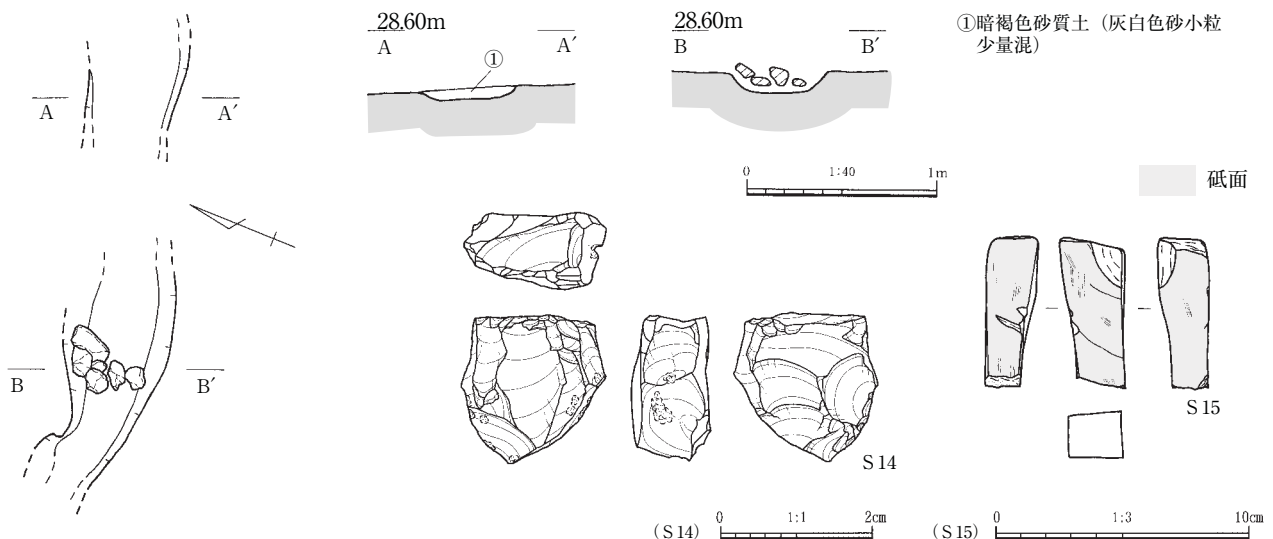


図71 溝14および出土遺物

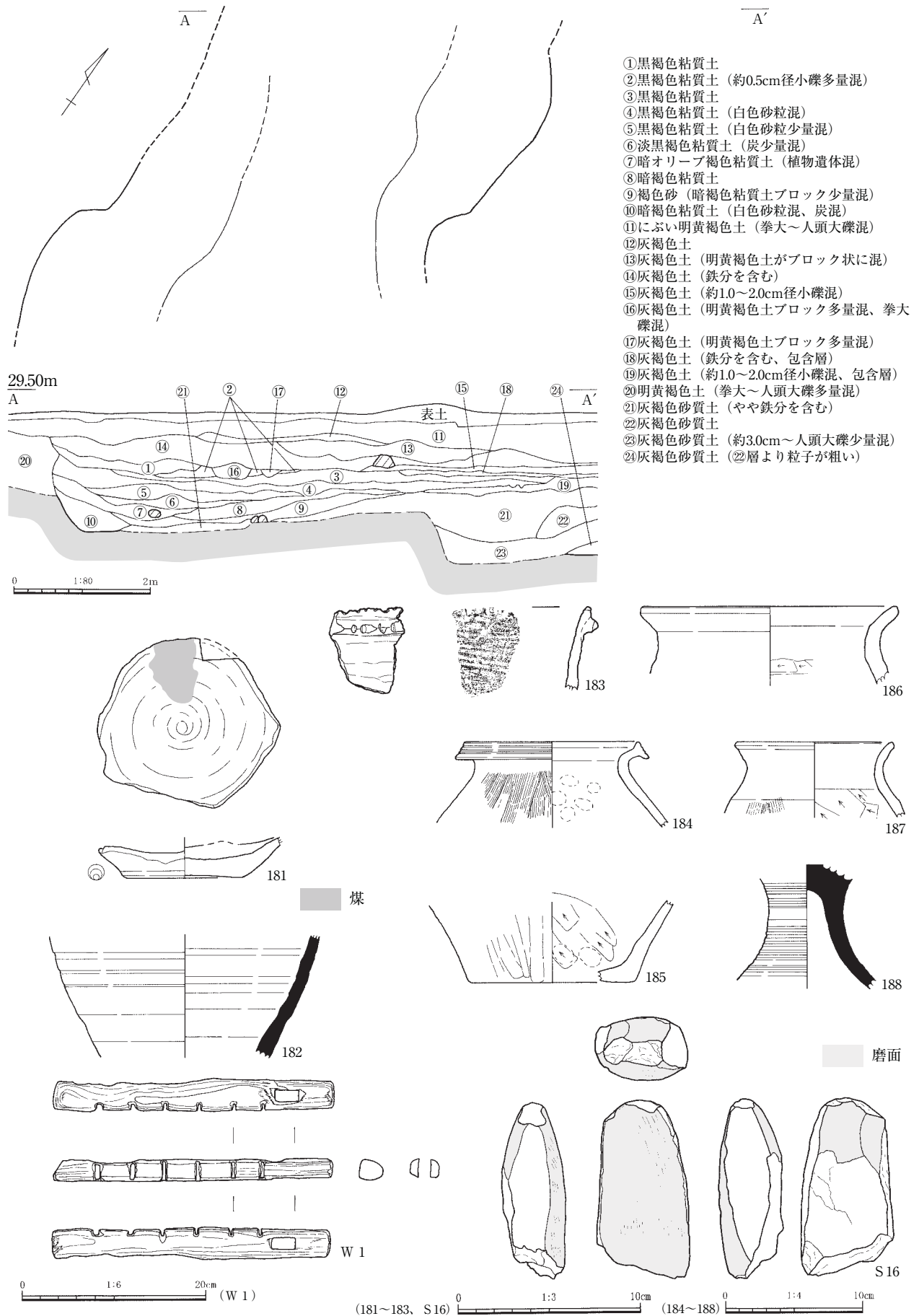


図72 溝13および出土遺物



図73 溝13遺物出土状況図

溝10 (図68)

7区北端に位置し、溝8と溝9に挟まれた部分に存在する。埋土の観察から溝10が溝8より古い遺構と判断する。南北方向を主軸とする。検出面での幅は約25cm、深さは約16cmを測る。埋土は黒褐色系の砂質土単層である。遺物は出土していない。(西川)

溝11・12 (図69)

6区の中央付近に位置し、溝11・12はほぼ並行する。南北方向に主軸をとる。検出面での幅は、溝11は約16～33cm、溝12は約21～33cmを測る。検出面からの深さは、どちらも6cm程度である。埋土はともに灰褐色系の砂質土単層である。遺物は出土していない。(西川)

溝13 (図72・73、図版16・32・47・48・54)

5区南寄りに位置し、南北方向に主軸をとる。上部は溝14に切られ、南北両端は調査地外に延びる。検出面での幅は約4.4m、深さは最深部で約1.2mを測る。西岸は急傾斜、東岸は緩慢な立ち上がりであり、西岸からは径10cm程度を中心に40cmを越えるものも含む礫が多数出土したが、それらの多くは名和川堆積土を基盤とする5区の地山層(8層)中に含まれる礫に由来すると考えられる。埋土は

黒褐色粘質土を基本とするが、底面近くは砂質が強まり、⑦層のように植物遺体を多く含む層も存在する。最下層の砂層（⑨層）上面からは、若干の土器片に混じり、加工痕の認められない流木が多数出土した。溝13は、埋土の上層は安定した堆積をしているものの、下層では堆積層が小刻みに変化して連続性に乏しい。

遺物は埋土中出土で、181～188の土器8点、石斧S16、編み台と想定するW1を図化した。（西川）

溝14（図71、図版54）

5区南寄りに位置し、溝13を切る。東西方向に主軸をとる。遺存状態が悪いが検出面での幅は約28～56cm、深さは約10cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。西側の底面直上から、径約10cmの自然礫が集中して出土した。

遺物は、石核S14、砥石S15が埋土中から出土した。（西川）

溝15（図74、図版46・48）

5区北東寄りに位置し、東側は調査地外である。上部は土坑27・28に切られ、西端で土坑22を切る。東西方向を主軸にとる。検出面での幅は約76～130cm、深さは東側で約48cm、西側で約40cmを測る。底面の標高は、東側で約27.6m、西側で約27.7mである。西側底面に径・深さとも約30cmのピットを2基検出した。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物は、埋土中から土師器皿189・190、杯191が出土した。（森本）

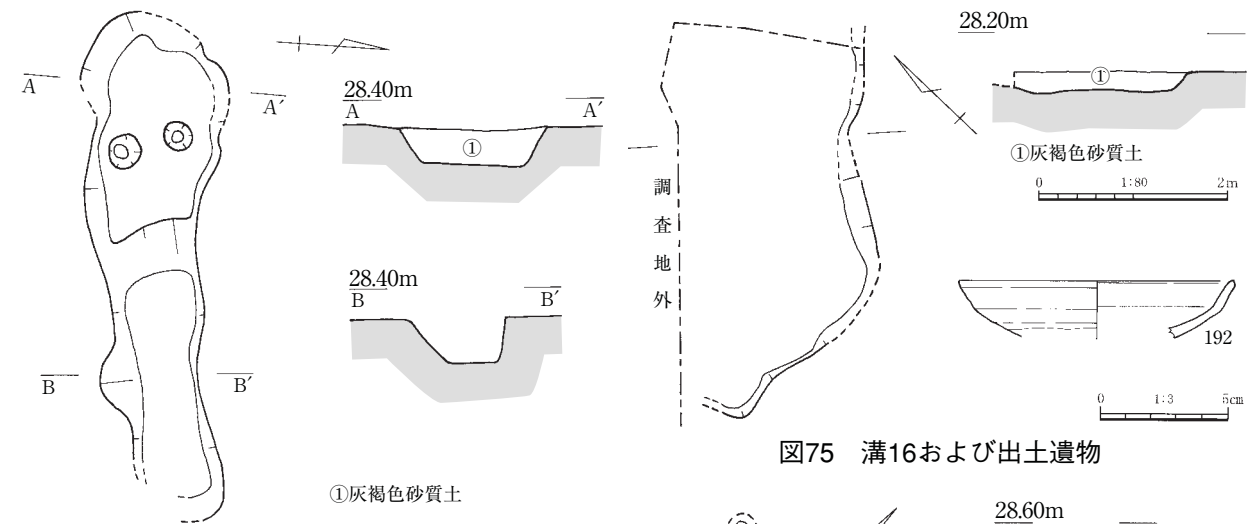


図75 溝16および出土遺物

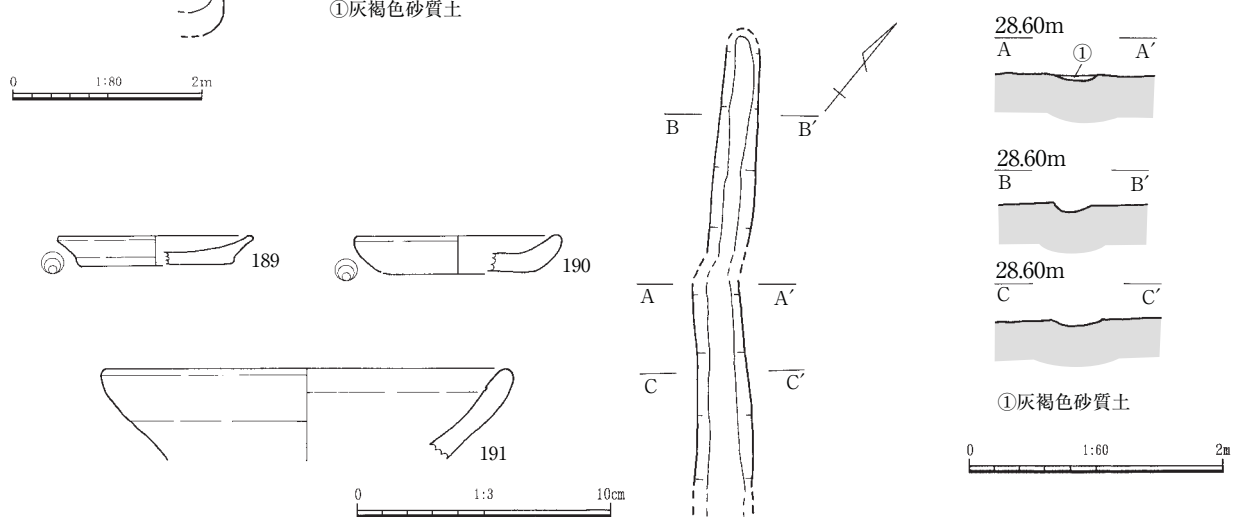
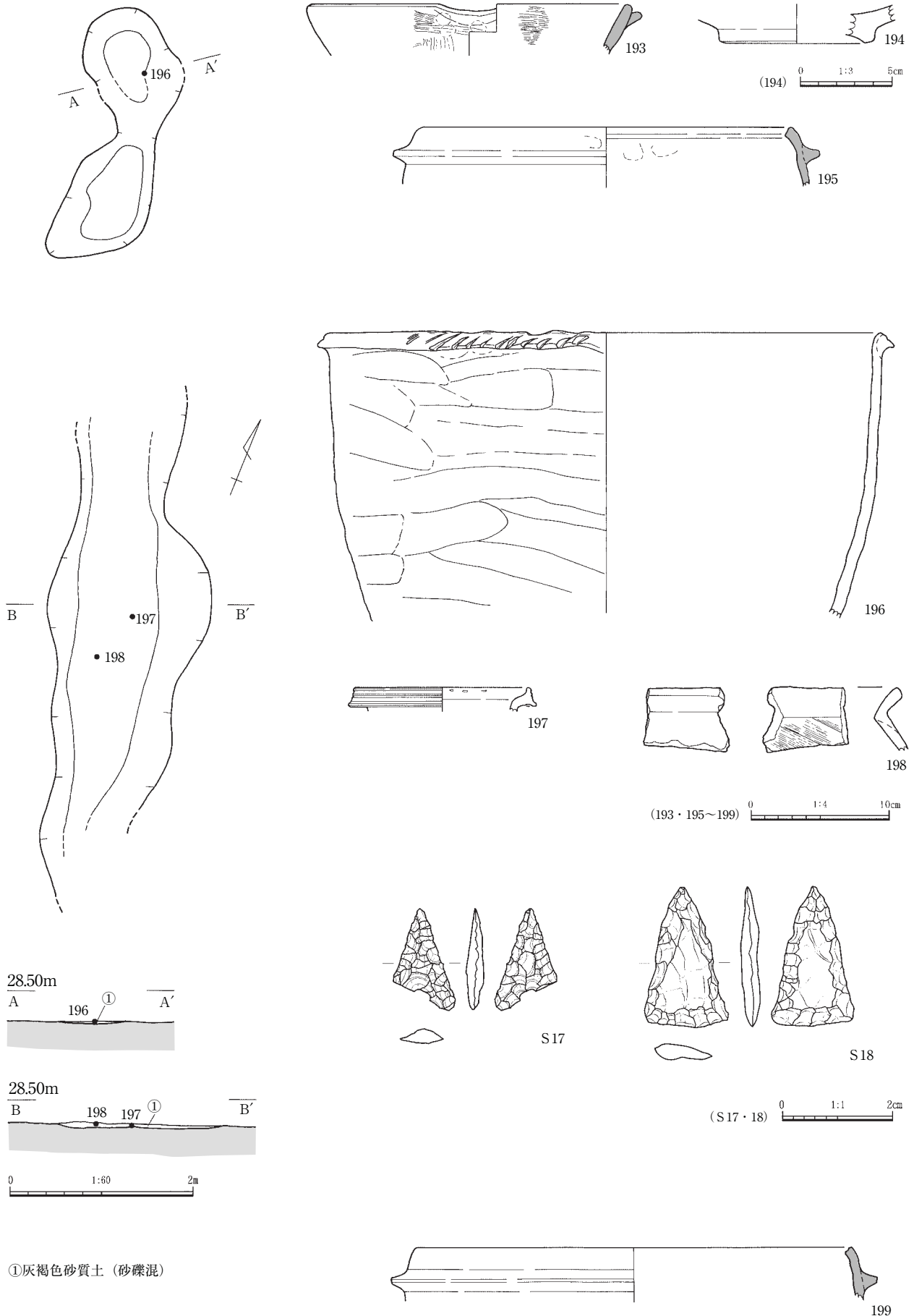


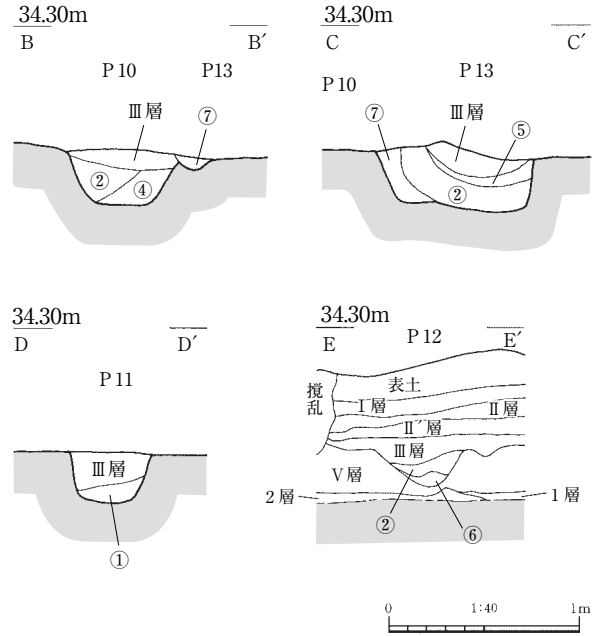
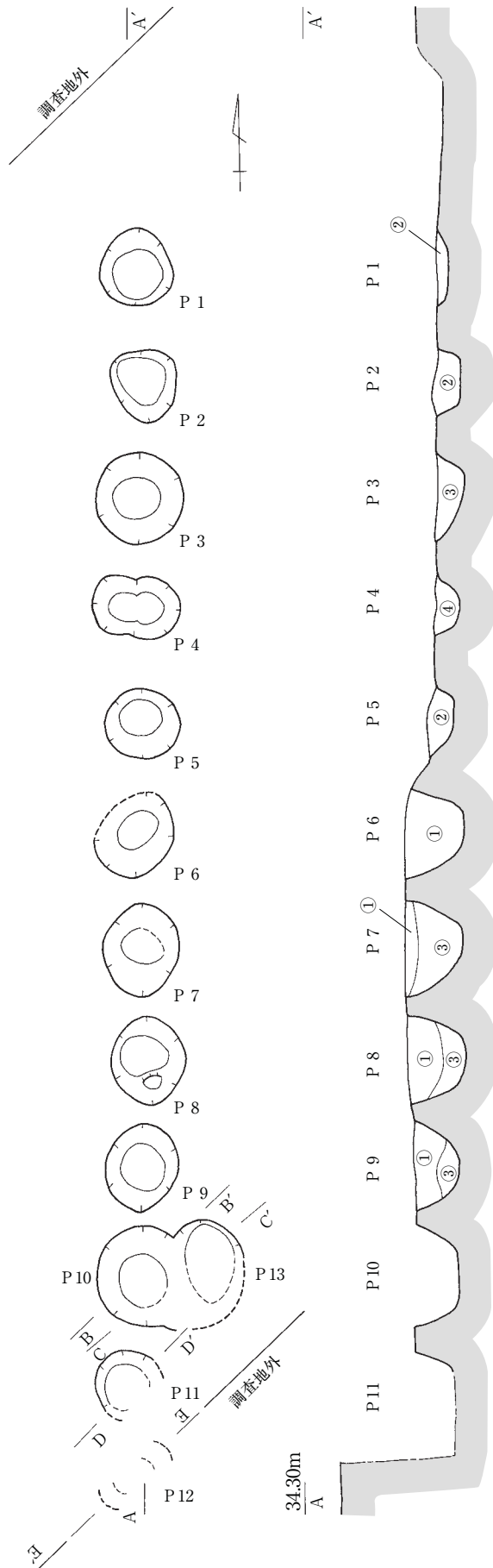
図74 溝15および出土遺物

図76 溝17



① 灰褐色砂質土 (砂礫混)

図77 溝18および出土遺物



- ① 灰褐色土 (Ⅲ層よりやや暗い、暗褐色土粒・白色砂粒混)
- ② 灰褐色土 (Ⅲ層よりやや暗い、白色砂粒混)
- ③ 灰褐色土 (Ⅲ層よりやや暗い、暗褐色土粒混)
- ④ 灰褐色土 (Ⅲ層よりやや暗い、白色砂粒混、鉄分混)
- ⑤ 灰褐色土 (Ⅲ層よりやや暗い、微細炭化物混)
- ⑥ 灰褐色土 (やや暗い)
- ⑦ 灰褐色土

柵列1ピット観察表

P No.	長径×短径	深さ (cm)	底面の標高	土色・備考
1	48×43	12	33.40	灰褐色土
2	45×38	26	33.31	灰褐色土
3	56×53	27	33.32	灰褐色土
4	55×37	26	33.35	灰褐色土
5	45×43	24	33.37	灰褐色土
6	55	28	33.32	灰褐色土
7	56×47	27	33.30	灰褐色土
8	55×45	30	33.30	灰褐色土
9	55×44	26	33.35	灰褐色土
10	61	30	33.35	灰褐色土
11	42	28	33.38	灰褐色土
12	48	20	33.46	灰褐色土
13	62	27	33.32	灰褐色土



柵列1 (南から)

図78 柵列1

溝16 (図75、図版4・46)

5区北隅に位置し、土坑25を切る。北側のほとんどは調査地外である。検出面での幅は残存約210cmを測る。検出面からの深さは約22cmである。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物は、埋土中から白磁皿192が出土した。(森本)

溝17 (図76)

2区西側に位置する。南東-北西方向に直線状に延び、河岸段丘の肩部とほぼ並行する。検出面では幅約24~46cm、深さは約4cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。遺物は出土していない。(西川)

溝18 (図77、図版4・16・32・52)

2区中央付近に位置する。埋土及びその位置関係から同一遺構と判断した。南北方向を主軸にとる。検出面での最大幅約1.8m、深さは約6cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で、径5cm以下の砂礫を含む。

遺物は、埋土中から瓦質の片口鉢193・羽釜195、白磁碗194が出土した。瓦質の羽釜199は、本遺構周辺での出土である。(西川)

柵列1 (図78、図版3・42)

7区北東寄りに位置し、南側は調査地外である。南北を主軸にして、直線的に連続するピット群を検出した。ピットの検出面での規模は長軸約43~68cm、短軸約40~53cm、深さ約10~29cmを測る。ピット間距離は約70cmである。7区南壁土層断面にP12を検出したことから、柵列1は南側に続くことが分かったが、P1の北側には検出していない。埋土は主に灰褐色土である。

ピット内から僅かに土器が出土したが、小片の為図化できない。(森本)

柵列2 (図79・80、図版3・50・51)

5区中央部にピット2基を検出した。規模、埋土の色調・堆積、礎盤石を伴うことなどから、同一遺構と判断した。周辺に同じ特徴をもつピットが検出されなかったことから、柵列と想定した。P1(58×57-75cm)とP2(62×51-75cm)の柱穴間距離は約2.2mである。柱痕部分である②層は灰褐色土で、③・④・⑨層には8層ブロックが多量に混入する。P1・2の底面から検出した礎盤石は2段に生まれ、2、3個の礫の上に柱を支える上段の礫が1個重ねられる。P2の上段の礫は、柱当たりを工具によって調整した痕跡がある。検出面から小礫が密に出土した。

遺物は、P1②層から土師器杯201、P2上層の砂礫層から土師器皿200が出土している。(森本)

耕作痕 (図81、図版49)

4区東側に検出した。南北方向に主軸をとる。埋土はⅢ層(灰褐色土)が落ち込む。耕作痕周辺から、株痕跡と思われる小ピットを検出した。土壌を分析した結果、中世前期以降、調査地では稲作が行われていた可能性が指摘された(第4章第4節、門前第2遺跡菖蒲田地区第10章第9節)。(森本)

ピット (図40・82、表4)

中世の遺物が出土したピットの埋土土色は灰褐色、灰褐色砂質、暗褐色砂質である。他の中世の遺構埋土とも色調が似ており、中世のピットと判断した。なお、2・5区で検出した土色の注記漏れのものについては、灰褐色砂質土または暗褐色砂質土のどちらかであることは間違いなことから本節に記載した。(森本)

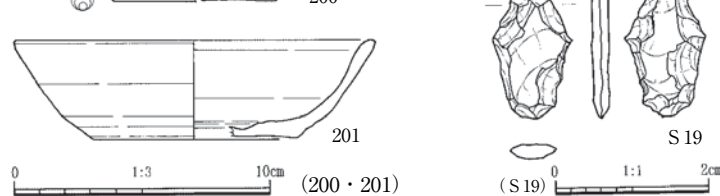
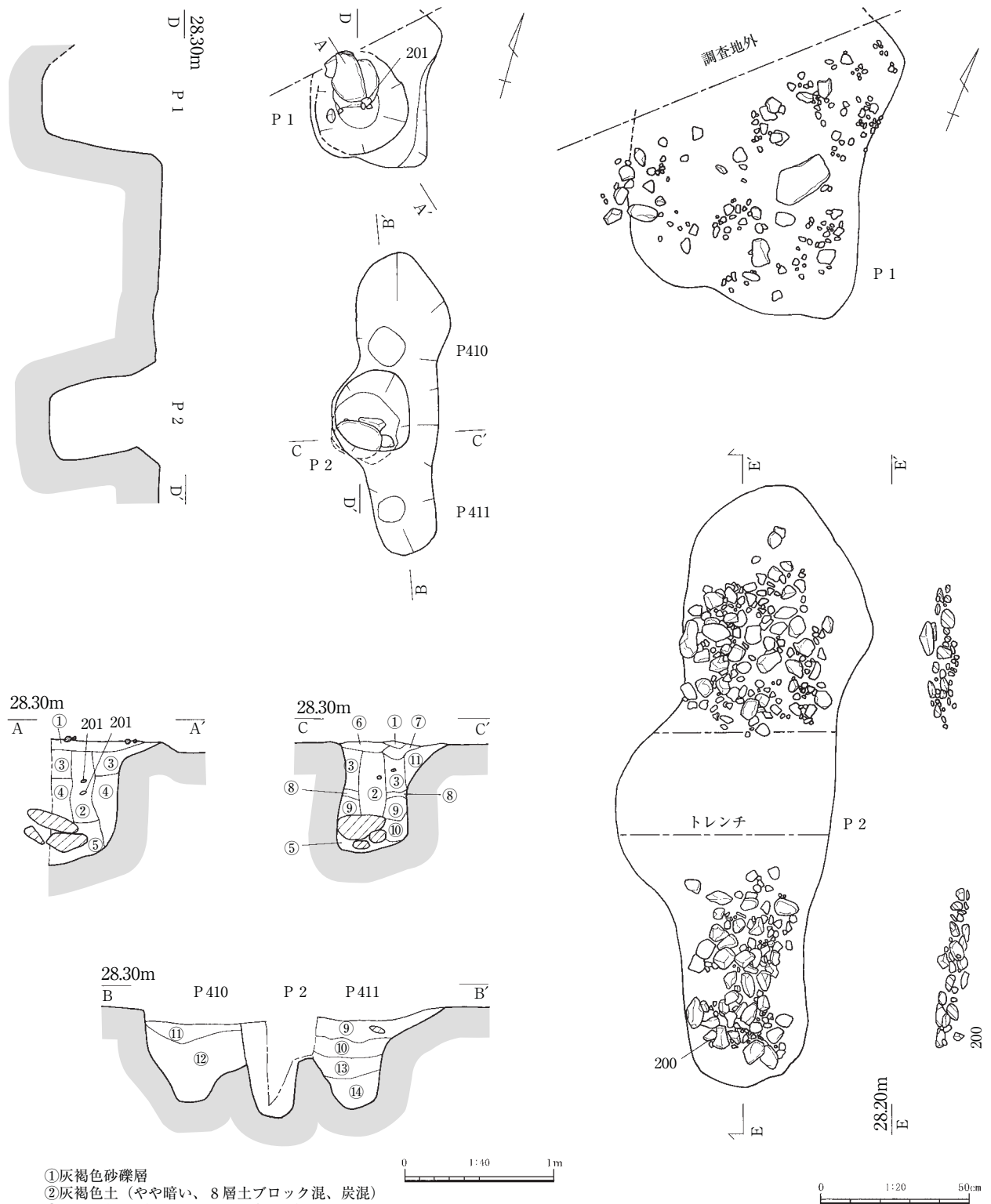


図79 柵列2出土遺物



- ① 灰褐色砂礫層
- ② 灰褐色土 (やや暗い、8層土ブロック混、炭混)
- ③ 黄灰褐色土 (8層土ブロック多量混)
- ④ 黄灰褐色土 (8層土ブロック多量混)
- ⑤ 灰褐色砂質土 (小礫混)
- ⑥ 灰褐色砂質土 (8層土ブロック混)
- ⑦ 灰褐色土 (8層土ブロック多量混・拳大の礫混)
- ⑧ 灰褐色砂質土
- ⑨ 黄灰褐色土 (8層土ブロック多量混)
- ⑩ 灰褐色砂質土
- ⑪ 灰褐色砂質土
- ⑫ 灰褐色砂質土 (やや淡い)
- ⑬ 灰褐色砂質土
- ⑭ 灰褐色砂質土 (⑪層とほぼ同じ)

柵列2ピット観察表

P No.	長径×短径	深さ (cm)	底面の標高	備考
1	36×31	82	27.32	礎盤石・201
2	28×25	74	27.34	礎盤石・200

図80 柵列2

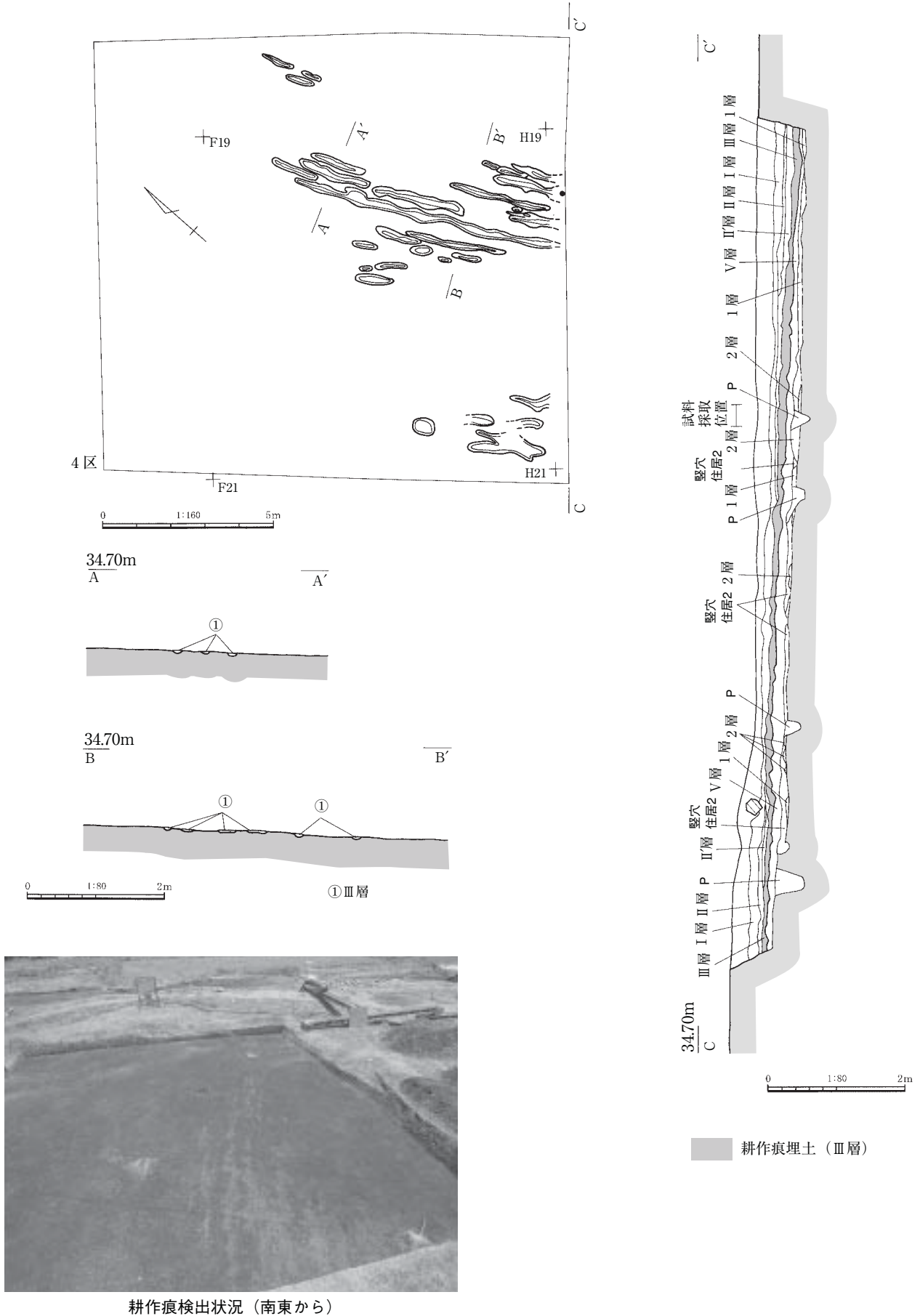


図81 耕作痕

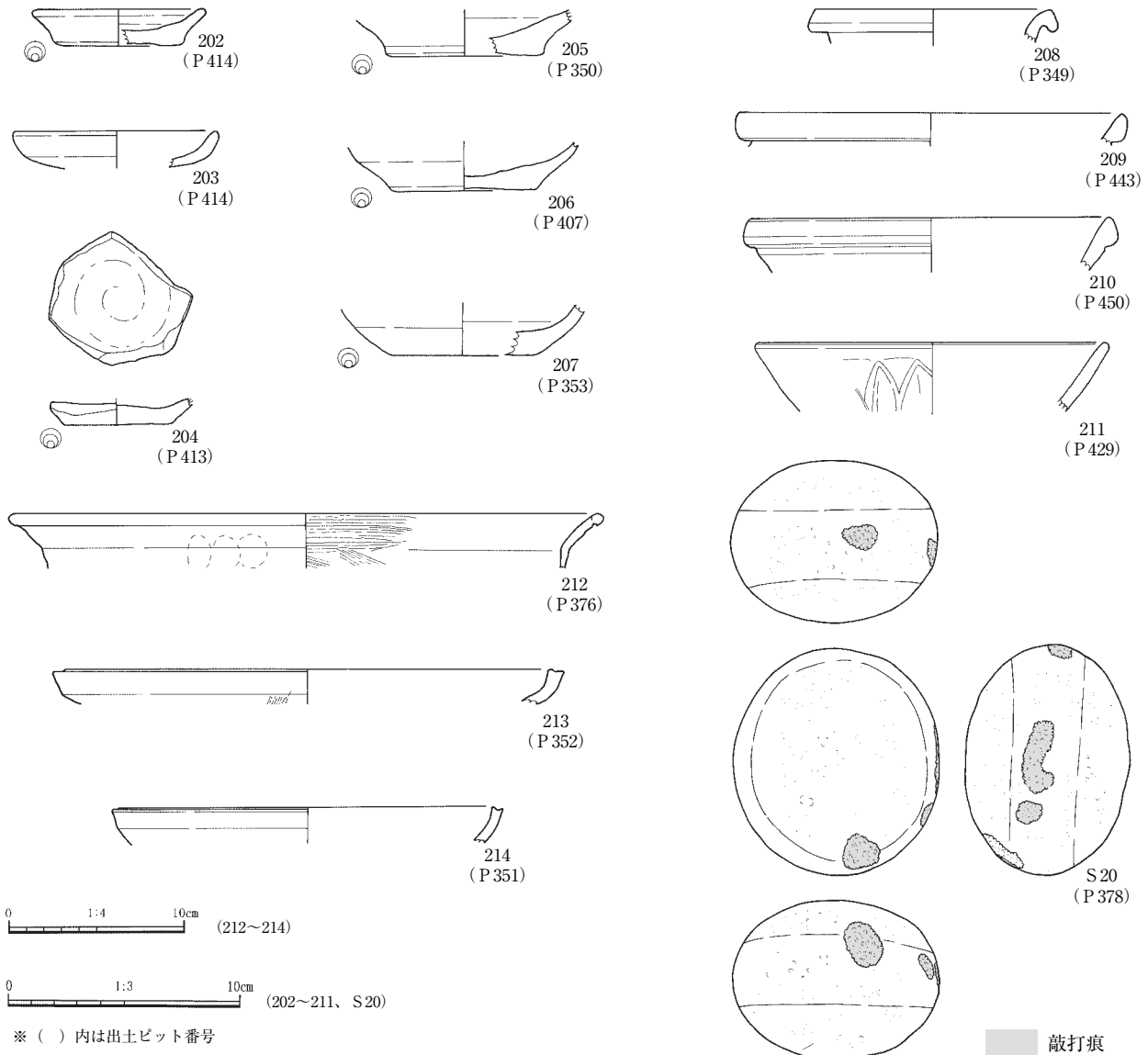


図82 ピット出土遺物

3、調査地内出土中世土器 (図83~85、表5、図版4・5・52)

図83は中世前期の遺物である。貿易陶磁器のうち白磁は山本分類のⅣ・Ⅴ類が占める。また一定量同安窯系青磁もみられる。本調査地では煮炊具が多く、土師質・瓦質の鍋はいずれも受け口状の口縁部をもつ。また貯蔵具では勝間田焼系の須恵器甕が多い。

図84・85は中世後期に属する遺物である。貿易陶磁器では白磁、青磁が主体を占め、土師器皿は手づくねのいわゆる京都系土師器皿が多い。備前産陶器などからみて本調査地の資料は15世紀代(後半)を主体とし、若干16世紀代の青花、朝鮮産陶器などがみられる。

中世の遺物は遺構が密に検出されているわりには少ない。土師器が大半を占め、陶磁器の出土傾向(表5)を見ると中世前期では白磁は各地区からみられ、遺構がほとんどない3・4区においても同様に出土する。一方青磁では遺構が密な5・7区においてやや多い傾向が窺えよう。また須恵器系甕類は7区がもっとも多く4区が次ぐ。さらに常滑産と考えられるもの(表では瓷器系とした)も、4・7区においてまとまるなど、貯蔵具は調査地上段にあたる地区において多く、下段では少ない。

遺構のない中世後期の遺物も一定量みられ、3・7区において青磁・白磁、備前産陶器が多く出土している。とくに7区において比較的多く出土する傾向が認められる。(中森)

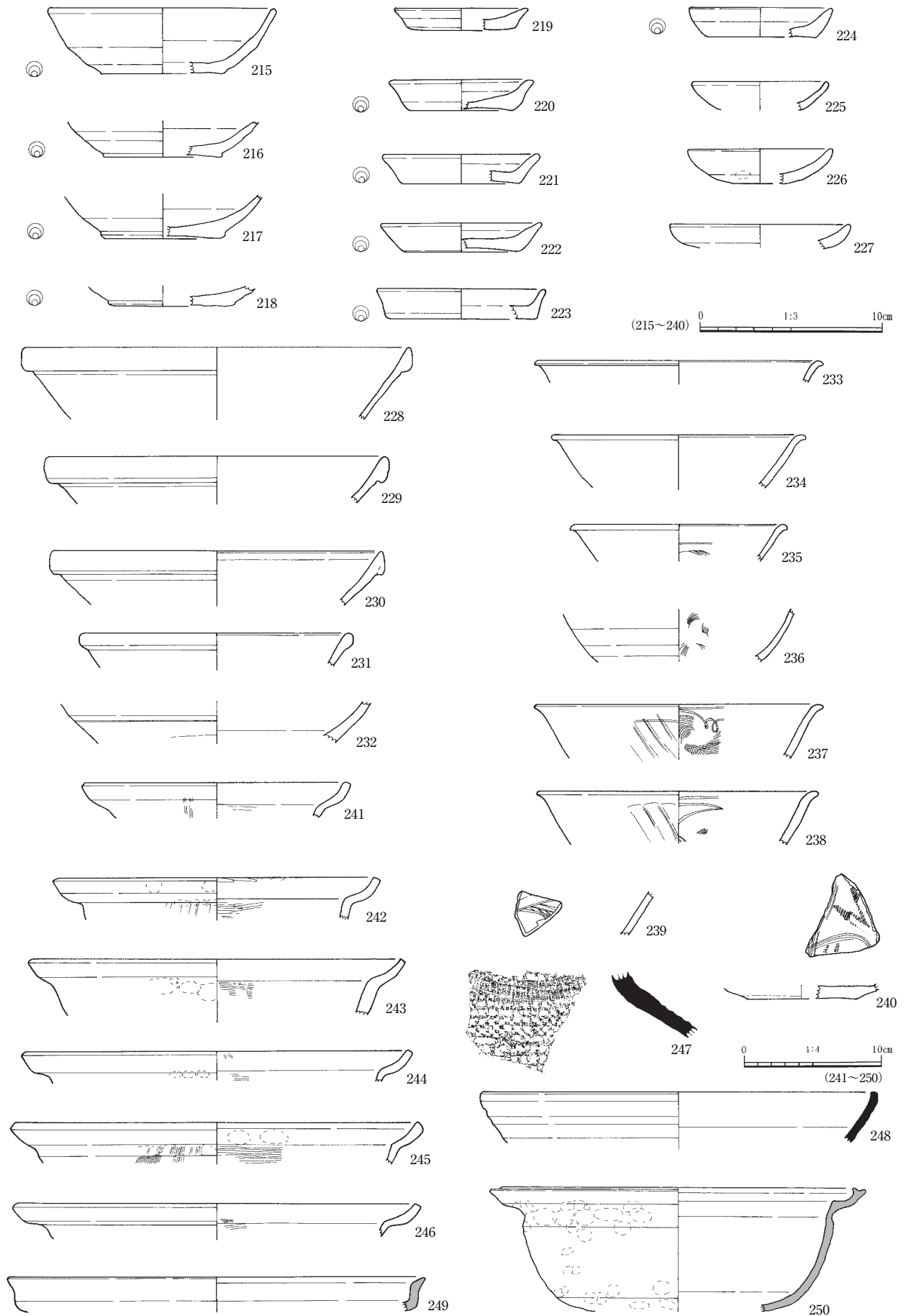


図83 調査地内出土遺物（中世前期）

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

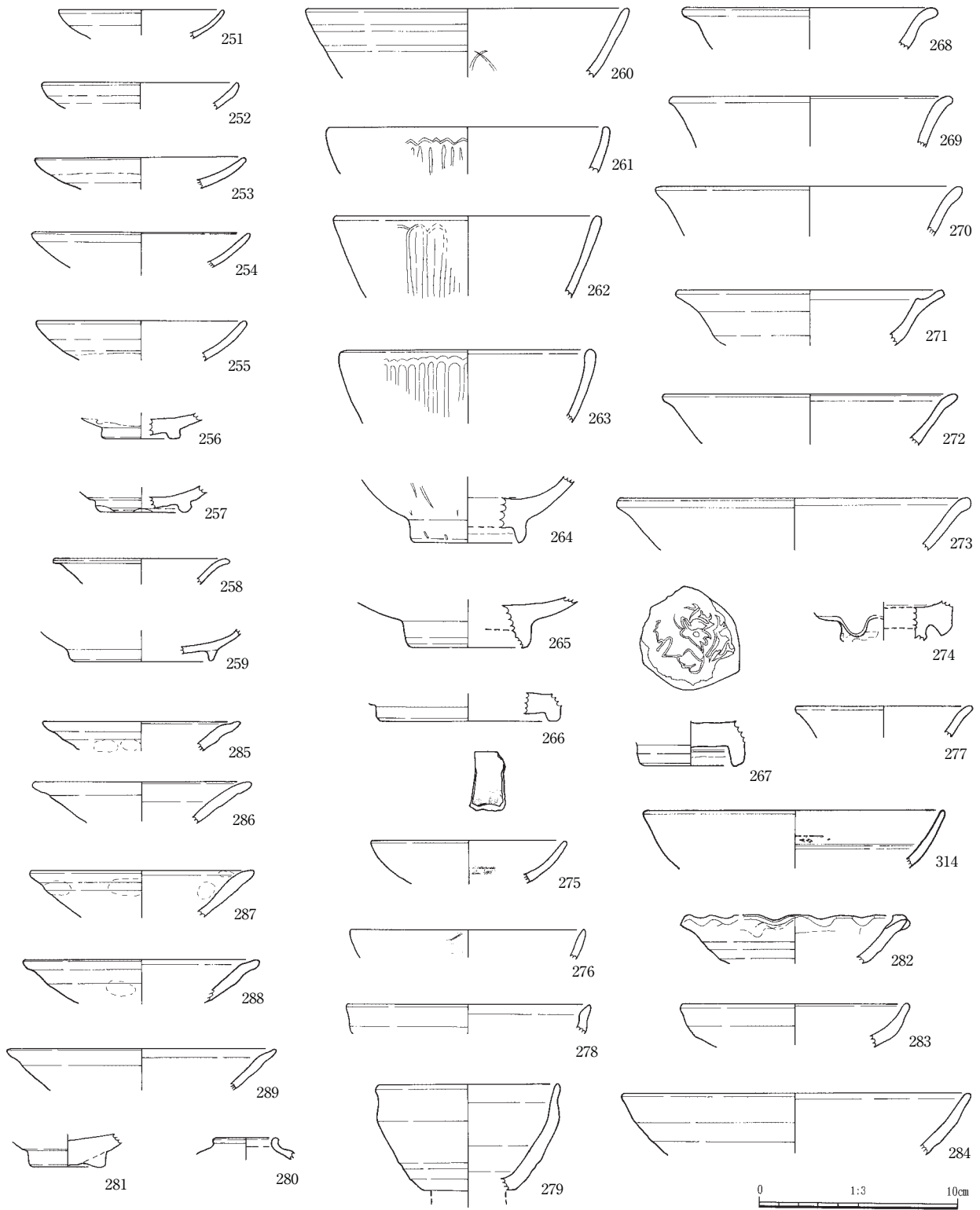


図84 調査地内出土遺物（中世後期1）

表5 調査地内出土中世陶磁器集計表

	青磁						白磁						青花		褐釉陶器		朝鮮		須恵器		瀬戸		備前					
	龍泉	同安	B類	D類	皿	不明	香炉	碗Ⅳ	碗Ⅴ	碗Ⅵ	皿Ⅳ	壺	D群	E群	B群	C群	漳州	天目	壺	青磁	陶器	鉢	壺	壺	皿	他	搦鉢	壺
2区		1	3			1		5				1					1		1?		2	10	1	1	1			1
3区		2	2	2		2		1	3			3	1	1						2	1	8	1			2	4	
4区		1	2				1	1	3							2		1			1	14	3	2		2	4	
5区	3	1		1				1	1		1					1		2			2	7					2	
6区						1							2					1									1	
7区		5	2	3	2	5		2	2	1		1	5	1	1					2		22	3	2	2	7	12	

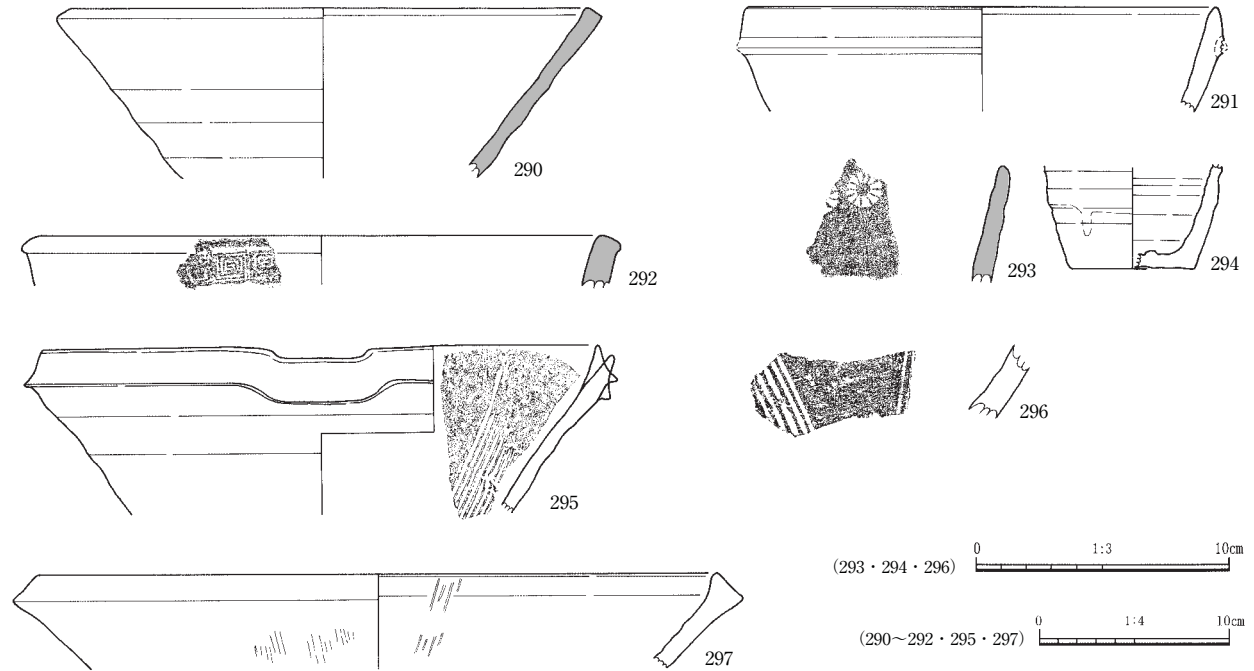


図85 調査地内出土遺物（中世後期2）

遺物観察表（中世）

土器

*：復元値、△：残存値

遺物番号	挿図番号	地区遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
136	42	7区 B18 土坑14埋土①層	瓦質土器 片口鉢	*18.0	7.4	7.2	ほぼ直線的に外傾するもの。口縁下端部は外側に肥厚。外面全体ナデ、部分的に指頭圧痕。内面ハケメ。	やや粗良好	内外とも灰色	1/3	胎土分析試料26
138	45	4区 E18 土坑19埋土中	土師器 皿	5.1	4.8	0.8	皿の体部を波状に打ち欠いたもの。内外面ナデ。底部回転糸切り。	やや粗良好	内) 浅黄橙色・褐灰色 外) 浅黄橙色・橙色	完存	
139	45	7区 B18 土坑16埋土中	土師器 皿	7.8	6.8	1.8	底部から短く逆ハ字状に立ち上がる。体部はやや丸みがあり、口縁部も丸みをもつ。全体に器壁が厚い。内外面ナデ、底部静止糸切り。	やや粗やや軟	内外とも橙色	1/3	
140	45	7区 B18 土坑18埋土中	土師器 杯	-	*9.6	△1.8	底部からやや屈曲気味に体部へ立ち上がる。内外面ナデ。	やや粗良好	内外とも明褐色	1/6	
141	47	2区 土坑23埋土中	土師器 鍋	27.4	-	1.9	口縁部は受け口状を呈す。口縁の屈曲は緩やかで、端部は丸く収める。外面ナデ、内面は横ハケ。外面に煤付着。	やや粗良好	内) 明褐色・明褐色 外) 黒色	1/12	
142	48	5区 土坑24埋土①層	土師器 灯明皿	8.4	6.0	1.9	底部から直線的に短く外傾する。内面の底部から体部の屈曲部は強いナデにより段状になる。底部回転糸切り後ナデ。底部器壁は厚く、やや窪み底状。内面には全体的に煤付着。	やや粗良好	内) 灰白色・黒色 外) 灰白色・黄灰色	2/3	胎土分析試料33
143	48	5区 土坑24埋土①層	瓦質土器 鉢	*29.2	-	△5.1	口縁部は受け口状を呈し、端部は両端が丁字状に広がる。内面および口縁外面ナデ。口縁外面のナデはやや強い。頸部に指頭圧痕が連続する。口縁外面の一部に黒斑。	やや粗やや軟	内) 灰色 外) 灰黄色・にぶい黄褐色	1/8	胎土分析試料32
144	49	5区 土坑25埋土①層	土師器 皿	*8.9	*6.4	1.4	底部から開き気味に外傾する。体部はやや丸みをもつ。口縁部ナデ、底部外面は磨滅により不明瞭。糸切り後ナデか。	やや粗やや軟	内外とも浅黄褐色	1/8	
145	49	5区 土坑25埋土①層	土師器 碗	*13.6	-	△3.2	若干湾曲する体部をもつ。口縁部は外傾し、端部はやや丸みを帯びる。内外面ナデ。内面に煤付着し、口縁部外面まで黒斑が若干まわる。	やや粗やや軟	内外とも灰白色・にぶい黄褐色	1/10	
146	49	5区 土坑25埋土①層	陶器 壺	-	-	△3.2	褐釉陶器壺の頸部。外面には沈線が2条巡る。外面にはやや厚く釉がかかり、内面はハケ状のもので薄く塗布される。	密良好	釉：緑褐色 胎土：灰白色	-	
147	50	5区 土坑26埋土中	土師器 杯	-	5.6	△2.1	底部から弧状に大きく開くような体部。底部器壁は厚い。回転糸切り。体部はナデ。外面はほぼ全体に黒斑。	やや粗良好	内) にぶい橙色 外) にぶい橙色・黒褐色	3/4	胎土分析試料30
148	50	5区 土坑26埋土中	土師器 鍋	*28.4	-	4.6	口縁部は緩く受け口状を呈し、端部は面取り気味になる。口縁部ナデ、体部は内面が横、外面は縦ハケ。体部は器壁薄く、口縁部はほぼその倍の厚さになる。外面のほぼ全体に煤付着。	やや粗やや軟	内) 浅黄褐色 外) 灰白色・黒色	1/9	胎土分析試料31
149	55	5区 C7 土坑31	土師器 皿	*11.1	*8.2	1.2	底部から短く外反する。口縁部はやや尖り気味。底部は回転糸切りで、窪み底となる。器高低い。	やや粗良好	内) 灰白色 外) 灰白色・褐色	1/4	
150	55	5区 C7 土坑31	土師器 杯	-	*6.0	△1.8	底部から弧状に大きく開くような体部。回転糸切り。体部はナデ。	やや粗良好	内外とも浅黄褐色	1/4	
151	55	5区 C7 土坑31	土師器 鍋	*24.0	-	△3.9	口縁部は受け口状を呈し、端部は面取り。口縁内外ナデ。外面は体部からの縦ハケが残る。内面体部横ハケ。ハケメは細かい。胎土に金雲母多く含む。	やや粗良好	内外ともにぶい橙色	1/18	
152	55	5区 C7 土坑31	土師器 杯	-	*6.6	△2.0	底部から弧状に大きく開くような体部。底部器壁厚く、回転糸切り。体部はナデ。外面黒斑。	やや粗良好	内) 浅黄褐色 外) 明褐色	1/4	
153	55	5区 C7 土坑31	土師器 鉢	-	*6.4	△2.2	底部から段状になり、そこから体部は丸みをもって立ち上がる。体部ナデ、底部回転糸切り後ナデか。全体に磨滅し、調整不明瞭。	やや粗やや軟	内外とも浅黄褐色	1/4	
154	55	5区 C7 土坑31	土師器 杯	-	*5.7	△2.5	底部から体部へ逆「く」字状に屈曲する。底面は回転糸切りで、わずかに台状になり、器壁は厚い。	やや粗良好	内外とも橙色	1/2	胎土分析試料28

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
155	55	5区 C 7 土坑31	土師器 皿	8.0	4.4	2.0	手づくねの皿。底部は丸みをもち、底部から体部は屈曲する。口縁部はやや外反。全体にややいびつ。	やや粗 良好	内外とも浅黄橙色	完存	胎土分析 試料27
156	55	5区 C 7 土坑31	青磁 碗	-	-	△4.2	龍泉窯系統Ⅱ-b類。釉は濃いめのオリブ灰色で、やや厚めにかかる。内面体部下に1条の沈線。	密 良好	釉：オリブ灰色 胎土：灰白色	-	
157	55	5区 C 7 土坑31	須恵器 甕	-	-	△5.9	外面格子目タタキ、内面はナデ後ハケメが一部にみられる。勝間田焼系。	密 良好	内外とも灰白色	-	
158	55	5区 C 7 土坑31	須恵器 捏鉢	-	-	△3.9	端部外面が屈曲し、やや先端が細くなる高台をもつ鉢。内面は使用により器表面が滑らか。また、内面に接合痕みられる。底部外面は高台付け根との境が段状になる。産地不明。在地か。	やや粗 良好	内外とも灰白色	1/6	胎土分析 試料29
159	56	5区 土坑32	土師器 皿	4.2	3.9	0.8	体部から上を波状に打ち欠いたもの。底部回転系切りで、低く柱状になる。	やや粗 良好	内外とも浅黄橙色	完存	
160	58	7区 B21 溝1 埋土中	土師器 杯	*14.8	-	△2.8	緩やかに湾曲し立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内外面粗いナデ。内面には多量に煤が付き、破面から外面までまわる。煤の付着量が多いことと合わせ、破損後に再利用されたものである可能性が考えられる。	やや粗 良好	内) 黒色 外) 黄灰色	1/8	
161	59	4区 溝3 埋土中	瓦質土器 羽釜	*24.0	-	△4.5	内湾する口縁部をもつ。口縁端部は面取りし、内面端部下には1条の凹線状のものが巡る。突帯は台形を呈し、端部は面取り。内面から突帯下まで横ナデ、以下雑なナデがみられる。	やや粗 良好	内) 灰白色 外) オリブ黒色	1/6	胎土分析 試料34
162	60	7区 溝4埋土中	土師器 皿	*7.4	*5.0	1.5	底部からやや丸みをもって立ち上がる体部で、口縁部は1段の横ナデにより、細身になる。底部回転系切り。	やや粗 やや軟	内外とも橙色	1/8	
163	60	7区 溝4埋土中	土師器 皿	*8.6	*7.0	1.3	底部からやや丸みをもって立ち上がる体部で、口縁部は細身になる。内外ナデ。底部回転系切り。	やや粗 やや軟	内外とも橙色	1/4	
164	60	7区 溝4埋土中	白磁 碗	-	-	△1.6	見込みは環状に軸剥ぎされる。高台部も欠損する。高台内無釉。白磁碗Ⅱ類。	密 良好	釉：灰白色 胎土：淡灰色	1/3	
165	60	7区 溝4埋土中	土師器 鍋	*35.6	-	△6.2	頸部でやや屈曲した後、大きく開く口縁部となる。端部外面は面取り的で、凹線状に1条窪む。先端部は尖り気味。内面は全体に横ハケ、外面は縦ハケ後、口縁部は横ナデ、頸部指オサエ。外面は全体的に黒斑で、一部に煤が付く。	やや粗 良好	内) 明褐色 外) 褐灰色	1/16	胎土分析 試料36
166	63	7区 B19 溝6埋土中	土師器 杯	-	8.0	1.5	底部から開き気味に外傾する。内外ナデ、底部回転系切り。底部の1/4ほどの破片だが、体部を波状に打ち欠いたものの可能性有り。	やや粗 良好	内) 浅黄橙色 外) 橙色	1/4	
167	63	7区 B19 溝6埋土中	土師器 皿	*7.8	7.0	2.1	短く外反して立ち上がる。底部器壁は非常に厚く、底部回転系切りで、大きく窪む。底部外面は切り後板目圧痕あり。全体にいびつ。	やや粗 良好	内) にぶい橙色 外) 褐色・橙色	1/2	胎土分析 試料35
168	63	7区 B18 溝7埋土中	青磁 碗	-	-	△1.5	外面は縦方向に幅広の櫛目文、内面に櫛状の花文。同安窯系統Ⅲ-1b類。	密 良好	釉：オリブ灰色 胎土：灰色	-	
169	64	7区 C16 溝8埋土中	土師器 皿	*8.8	*6.6	1.5	底部から短く外傾し、口縁端部は丸く収める。底部は器壁が厚く、体部へかけて底部内面外周が窪む。底部回転系切り。	やや粗 良好	内外とも浅黄橙色	1/2	胎土分析 試料40
170	64	7区 C16 溝8埋土中	土師器 皿	*8.6	*7.0	1.5	底部から短く外傾し、口縁端部は細くなる。底部回転系切り。内外面赤色塗彩か。	やや粗 やや軟	内外とも灰白色	1/3	胎土分析 試料41
171	67	3区 E13 溝9埋土中	土師器 皿	*7.6	*5.4	1.4	底部から短く外傾し、体部は若干丸みをもつ。口縁端部は細くなる。底部回転系切り。	やや粗 やや軟	内外とも橙色	1/2	胎土分析 試料38
172	67	3区 溝9埋土中・下層	土師器 皿	*9.0	*7.4	1.6	底部から短く外傾し、口縁端部は細くなる。底部回転系切り。内外面赤色塗彩か。	やや粗 やや軟	内外とも灰白色・橙色	1/4	No.170と 同一個体 か。
173	67	3区 E13 溝9埋土中	土師器 杯	-	*6.8	△1.7	体部はやや丸みをもつ。内外面ナデ。底部回転系切り。	やや粗 やや軟	内) にぶい黄橙色 外) 浅黄橙色	1/3	胎土分析 試料37
174	67	3区 E13~14 溝9埋土中	土師器 杯	-	*8.0	1.4	体部はやや丸みをもつ。内外面ナデ。底部回転系切り。内面に黒斑。	やや粗 やや軟	内) にぶい黄橙色 外) 浅黄橙色	1/8	
175	67	7区 溝9埋土上層	土師器 皿	*9.3	*6.6	1.8	底部から体部への立ち上がり部分が突出し、そこから直線的に外傾するもの。口縁端部は丸く収める。外面体部中位から上、一段のやや強いナデ。底部回転系切り。	やや粗 良好	内外とも浅黄橙色	1/6	
176	67	7区 B15 溝9埋土中	土師器 杯	-	*7.4	△1.6	底部からやや屈曲気味に立ち上がる。内外面ナデ。底部回転系切り。	やや粗 良好	内外ともにぶい橙色	1/4	
177	67	3区 E13~14 溝9埋土中	土師器 杯	-	7.2	△1.8	底部から体部への立ち上がり部分が突出し、そこから外反する。底部回転系切り。外面は3ヶ所に黒斑あり。2次的に被熱している。破面がかなり磨滅しており不明瞭ながら、波状に打ち欠いたものの可能性がある。	やや粗 良好	内) 灰白色・褐灰色 外) 淡赤褐色・暗赤灰色	ほぼ 完存	胎土分析 試料39
178	67	7区 B15 溝9埋土中	土師器 杯	-	*7.6	△2.9	体部は丸みをもち、段状に回転ナデの痕跡が残る。底部はわずかに柱状に段をもつ。底部回転系切り。外面底部から体部下半にかけて黒斑。	やや粗 良好	内) にぶい黄橙色 外) にぶい黄橙色・褐灰色	1/6	
179	67	3区 E13~14 溝9埋土中	須恵器 皿	-	*9.8	△1.8	底部から外傾する体部をもつ。内外回転ナデ、底部回転系切り。8世紀代。	密 良好	内外とも灰色	1/10	
180	67	3区 E14 溝9埋土最下層	陶器 壺	-	-	△2.2	外面に薄く淡灰褐色釉を施す。内面頸部下は雑なナデ。産地不明。時期の下ものである可能性あり。溝最下層ながら、2・3区境界付近からの出土のため、混入したということもあり得る。	密 良好	釉：淡灰褐色 胎土：灰色	-	
181	72	5区 B18 溝13埋土上層	土師器 皿	9.7	6.4	2.2	底部から外傾する体部。体部上半を波状に打ち欠き、灯明皿として転用する。見込みに油溜りの痕跡あり。底部回転系切り。	やや粗 良好	内) 褐灰色 外) 浅黄橙色	完存	
182	72	5区 溝13埋土中	須恵器 甕	-	-	△9.0	内外ナデ。外面下方に粉痕あり。胎土に角閃石を含む。在地産か。	密 良好	内) 黄灰色 外) 灰色	-	胎土分析 試料42
189	74	5区 溝15埋土中	土師器 皿	*7.6	*6.0	1.2	底部から体部への立ち上がり部分が突出し、そこから外反するもの。突出部に接合痕。口縁端部は丸く収める。内外面ナデ。底部回転系切り。内面黒斑。	密 良好	内外ともにぶい橙色・ 褐灰色	1/2	
190	74	5区 溝15埋土中	土師器 皿	*8.0	*6.1	1.5	底部から丸みをもって立ち上がる。全体に器壁厚い。内外面ナデ、底部は回転系切り。外面に赤色塗彩。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄橙色・橙 色	1/6	
191	74	5区 溝15埋土中	土師器 杯	*15.6	-	△3.6	やや丸みをもった体部をもつ。内面から口縁外面は横ナデされ、器壁が厚い。外面中位以下未調整で、段状になる。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄橙色	1/16	
192	75	5区 溝16埋土中	白磁 皿	*10.6	-	△2.2	体部で屈曲し、やや外反気味の口縁をもつ。内面屈曲部に1条の沈線。釉は薄く、黄色みを帯びる。体部下半は露胎。露胎部に煤付着。白磁皿VI-1a類。	密 良好	釉：淡灰色 胎土：灰白色	1/6	
193	77	2区 溝18埋土中	瓦質土器 片口鉢	*23.2	-	△3.7	緩やかに外傾する口縁部で、内外面横ハケ。体部外面は縦方向のハケ。全体的に磨滅。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄橙色・明 褐色	1/11	
194	77	2区 溝18埋土中	白磁 碗	-	*7.6	△2.1	低い逆台形状の高台をもつ。内面のみ施釉。胎土粗い。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰色 胎土：灰白色	1/10	

第6節 中世の遺構・遺物

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
195	77	2区 溝18埋土中	瓦質土器 羽釜	*32.4	-	△3.9	内湾する口縁部をもつ。端部は面取りし、凹線状に中央が窪む。鈷は断面台形を呈す。内外面ともナデ。	密 良好	内) 灰色 外) 灰白色	1/24	
199	77	2区 F 9	瓦質土器 羽釜	*27.2	-	△4.4	内湾する口縁部をもつ。端部は面取りし、下方にやや拡張。端部は凹線状に中央が窪む。鈷は断面台形を呈す。内外面ともナデ。口縁内面に指頭圧痕。	密 良好	内外とも黄褐色・黄灰色	1/12	
200	79	5区 欄列 2P 2 上層	土師器 皿	*7.7	*6.4	1.2	底部から直線的に短く外傾する。口縁端部は丸く収める。底部回転糸切りが重なる。2度にわたって切り離しが行なわれたものか。	やや粗 良好	内外ともにぶい黄 橙色・ぶい赤褐色	1/4	胎土分析 試料43
201	79	5区 欄列 2P 1 ②層	土師器 杯	*14.0	*8.0	3.8	体部下位で屈曲して外傾。口縁部は内面がやや肥厚し、端部は尖り気味になる。全体に器壁薄めで、つくりはよい。内外面ナデ。内面および口縁外面まで煤、見込みに油溜り痕。灯明皿として利用されたものである。	やや粗 良好	内) 褐灰色 外) 灰黄褐色・褐灰色	1/2	胎土分析 試料44
202	82	5区 P414埋土中	土師器 皿	*7.4	*5.6	1.6	底部器壁厚く、直線的に短く外反する。内外面ナデ。底部回転糸切り。全体に被熱し、口縁部内外面に煤が付着する。	やや粗 良好	内) 橙色・灰黄褐色 外) ぶい黄褐色・橙 色・灰黄褐色	1/22	
203	82	5区 P414埋土中	土師器 皿	*8.8	-	1.6	手づくねの皿。内面から体部中位までナデ、底部はやや雑な調整。器壁は底部が薄く、口縁部は厚い。胎土は橙褐色を呈し、底部糸切りの皿類などと異なる。	やや粗 良好	内外とも橙褐色	1/7	
204	82	5区 P413埋土中	土師器 皿	6.1	4.6	1.1	体部から上を波状に打ち欠く。底部回転糸切り。煤などの痕跡はない。	やや粗 良好	内外とも浅黄褐色	ほぼ 完存	
205	82	7区 B20 P350埋土中	土師器 杯	-	*6.8	△1.9	平高台状の底部で、そこから大きく体部は外反する。内外面ナデ。底部回転糸切り。	やや粗 良好	内外とも浅黄褐色	1/5	
206	82	5区 P407①層	土師器 杯	-	6.4	△2.1	底部から直線的に外傾し、体部下位で屈曲し内傾する。底部回転糸切り。全体的に磨減しているため不明瞭だが、体部を波状に打ち欠いた可能性あり。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄褐色	ほぼ 完存	胎土分析 試料46
207	82	7区 B20 P353埋土中	土師器 杯	-	6.4	△2.2	底部から直線的に外傾し、体部下位で屈曲し内傾する。内外面ナデ。底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内外とも灰黄褐色	1/6	
208	82	7区 B20 P349埋土中	白磁 四耳壺	*10.2	-	△1.4	口縁部が玉縁状で、垂下するもの。口縁上端は尖り、明瞭な後縁が巡る。白磁壺Ⅲ類。	密 良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/13	
209	82	2区 P443埋土中	白磁 碗	*16.6	-	△1.3	口縁部は縦長な玉縁で、下端は沈線状になる。釉はやや緑がかつた灰色。胎土は黒色粒多く、軟質。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰色	1/18	
210	82	2区 P450埋土中	白磁 碗	*15.4	-	△2.3	口縁部は縦長な玉縁で、下端は沈線状になる。外面に回転ナデ痕。釉はやや緑がかつた灰色。胎土は黒色粒含み、やや軟質。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰色	1/15	
211	82	5区 P429埋土中	青磁 碗	*15.0	-	△2.9	口縁は外傾するもの。外面に鎬蓮弁文が連続する。釉は黄緑色を呈す。青磁碗Ⅱ-b類。	密 良好	釉：黄緑色 胎土：淡灰色	1/11	
212	82	7区 C19 P376	土師器 鍋	*34.0	-	△3.2	頸部でく字状に屈曲するもの。口縁部は長く、端部は肥厚し丸をもつ。内面横ハケ後ナデ。口縁外面はナデ、指頭圧痕。外面に煤付着。	やや粗 良好	内) 橙色 外) ぶい橙色・黒褐 色	1/6	
213	82	7区 P352	土師器 鍋	*28.0	-	△2.0	受け口状を呈するもの。口縁端部は左右に若干広がり、一条の凹線状に窪む。口縁部はナデ、外面下ハケメ。	やや粗 良好	内) 浅黄褐色 外) 淡黄褐色・橙色	1/16	
214	82	7区 P351埋土中	土師器 鍋	*21.6	-	△2.1	受け口状を呈するもの。口縁端部は一条の凹線状に窪む。口縁部はナデ。	やや粗 良好	内外とも灰白色	1/14	
215	83	7区 B21 Ⅱ層	土師器 杯	*12.4	*6.8	3.6	体部やや屈曲するもので、口縁端部は丸く収める。体部回転ナデ、底部回転糸切り。胎土に金雲母多く含む。	やや粗 良好	内) ぶい橙色 外) ぶい橙色・褐灰 色	1/4	
216	83	4区 G18 Ⅱ層	土師器 杯	-	*6.2	△2.0	体部やや丸みをもつもの。体部回転ナデ、底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内) ぶい黄褐色 外) 浅黄褐色	1/4	
217	83	5区 B 8 12層	土師器 杯	-	*6.4	△2.4	底部胎が突出するもの。体部は丸みをもって立ち上がる。底部の器壁厚め。全体に磨減。内外ナデ。底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内外とも浅黄褐色	1/4	
218	83	5区 B 9 Ⅳ層	土師器 杯	-	*7.4	△1.1	底部胎がわずかに突出するもの。体部は外傾する。内外ナデ。底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内) 暗灰黄色・浅黄色 外) 淡黄褐色	1/6	
219	83	4区 G18 Ⅱ層	土師器 皿	*7.2	*6.0	1.2	短く外反して立ち上がる。底面はヘラ切り後ナデ。	やや粗 良好	内外ともにぶい橙色	1/5	
220	83	5区 B9	土師器 皿	*7.6	*5.6	1.7	口縁が外反するもの。端部はやや尖り気味になる。口縁内外の広い範囲に煤が付着。ただし、ほぼ1/2の破片であるが、見込みにはみられない。内外面ナデ。底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内外とも灰白色・黒褐 色	1/6	胎土分析 試料45
221	83	3区 G15 Ⅲ層	土師器 皿	*8.4	*6.4	1.6	口縁が外反するもの。端部は丸みをもつ。内外面ナデ。底部回転糸切りで、窪み底となる。	やや粗 やや軟	内外ともにぶい黄褐色	1/3	
222	83	3区 F15 Ⅱ層	土師器 皿	*8.8	*6.2	1.6	口縁が外反し、端部は細くなっていくもの。内外面ナデ。底部は器壁厚めで、回転糸切り。やや窪み底を呈す。	やや粗 やや軟	内) 浅黄褐色 外) 浅黄褐色・橙色	1/4	
223	83	3区 G15 Ⅲ層	土師器 皿	*9.0	*8.4	1.6	底部から比較的直立気味に立ち上がり、口径と底径にあまり差がないもの。口縁は外反する。口縁部ややいびつ。内外面ナデ、底部回転糸切り。	やや粗 やや軟	内外とも灰白色・褐白 色	1/8	
224	83	5区 B 9	土師器 皿	*7.8	*6.2	1.6	底部から丸みをもって立ち上がる。外反するものに比べ器壁やや厚い。内外面ナデ、底部は回転糸切り。内面に黒斑。	やや粗 やや軟	内) 橙色・赤灰色 外) 淡赤褐色・浅黄橙 色	1/4	
225	83	2区 F 8	土師器 皿	*7.4	-	1.5	底部から丸みをもって立ち上がる。器壁薄い。内外面ナデ。内面は薄く赤彩か。胎土もやや緻密。	密 やや軟	内) 橙色 外) 灰白色	1/10	
226	83	5区 B 7 X層	土師器 皿	*7.8	-	1.9	手づくねの皿。丸底状で、体部も丸みをもつ。内面から口縁外面にかけてナデ、底部は指頭圧痕が目立つ。	やや粗 やや軟	内外ともにぶい黄橙 色・橙色	1/4	
227	83	4区 G19 Ⅱ層	土師器 皿	*10.0	-	1.3	手づくねの皿。底部からの立ち上がりは低い。内面から口縁外面にかけてナデ、底部は未調整気味。	やや粗 やや軟	内外とも灰黄褐色	1/15	
228	83	2区 F 9	白磁 碗	*21.2	-	△4.0	口縁部に縦長な玉縁が付く。下端が肥厚し、口縁端部は細くなる。玉縁下部に1条の凹線が巡る。口縁は比較的直線状に外傾。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/24	
229	83	3区 E15 Ⅲ層	白磁 碗	*18.6	-	△2.6	口縁端部に縦長な玉縁が付く。下端部は垂下し、口縁下は段状になる。口縁端部は丸く収める。口縁上半には釉がやや厚かかる。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/24	
230	83	7区 B18 Ⅳ～Ⅴ層	白磁 碗	*18.2	-	△3.0	口縁端部に付く玉縁は上半側から折り曲げられ、空洞ができる。口縁端部は尖り気味。体部から口縁にかけてやや内湾する。釉は灰色を呈し、貫入多い。外面口縁部までは釉厚くかかり、口縁下には釉が垂れる。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：灰色 胎土：淡灰色	1/12	
231	83	7区 I層	白磁 碗	*14.6	-	△1.8	口縁部に小さな玉縁が付く。全体に丸みを帯びたもの。釉調は乳白色に近い。白磁碗Ⅳ類。	やや粗 良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/15	

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物番号	挿図番号	地区遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
232	83	5区 B9	白磁碗	-	-	△2.3	体部中位で若干屈曲。その下位に細い沈線が巡る。体部下位以下露胎。白磁碗Ⅳ類。	やや粗良好	釉：淡灰色 胎土：淡灰色	-	
233	83	5区 B8	白磁碗	*15.4	-	△1.2	口縁部が短く逆L字に外反する。口縁部には釉が厚くかかり丸みを帯びる。白磁碗Ⅴ類。	密良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/36	
234	83	4区	白磁碗	*13.6	-	△2.9	口縁部が短く逆L字に外反する。口縁部内面はやや段状に屈曲。白磁碗Ⅴ類。	密良好	釉：淡灰色 胎土：淡灰色	1/52	
235	83	3区Ⅲ層 F15	白磁碗	*11.4	-	△2.0	口縁部が短く逆L字に外反する。口縁部には釉が厚くかかり丸みを帯びる。内面の口縁から下がったところに細い1条の沈線が巡り、以下飾描文。白磁碗Ⅴ-4b類。	密良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/22	
236	83	3区Ⅰ層 F15	白磁碗	-	-	△2.8	緩やかに湾曲する体部。外面には横ナデの痕跡明瞭。内面には短い飾描文。白磁碗Ⅴ類。	密良好	釉：淡灰白色 胎土：淡灰白色	1/16	
237	83	7区Ⅰ層 B24	青磁碗	*15.4	-	△3.0	直線的に外傾する体部をもち、口縁部はさらに短く外反する。外面に斜方向の幅広な飾目文。内面には飾・甕状工具により施文。同安窯系統Ⅲ-1c類。	密良好	釉：オリーブ灰色 胎土：灰色	1/17	238と同一個体か
238	83	7区Ⅲ層 B21	青磁碗	*15.4	-	△3.0	直線的に外傾する体部をもち、口縁部はさらに短く外反する。外面に斜方向の幅広な飾目文。内面には飾・甕状工具により施文。同安窯系統Ⅲ-1c類。	密良好	釉：オリーブ灰 胎土：灰色	1/16	237と同一個体か
239	83	5区4層 B9	青磁碗	-	-	△2.4	体部内面に飾描文。同安窯系統。	密良好	釉：オリーブ灰色 胎土：灰白色	-	
240	83	7区 B19	青磁皿	-	*6.0	△0.9	体部下半まで施釉。底部は露胎となる。見込みにジグザグの端点描文。同安窯系Ⅲ-1b類。	密良好	釉：オリーブ灰色 胎土：灰白色	1/5	
241	83	5区 B7	土師器鍋	*19.4	-	△2.6	径が20cm弱の小型のもの。口縁は受け口状を呈すが、屈曲は緩やか。全体に磨減し調整は不明瞭だが、口縁部はナデ、体部はハケメ。	やや粗やや軟	内外とも浅黄褐色	1/16	
242	83	5区 B7	土師器鍋	*23.2	-	△3.1	頸部の屈曲はしっかりし、受け口状を呈す。口縁部は面取り。口縁内面はハケメ後ナデ、外面はナデで下半部に指頭圧痕目立つ。体部はハケメ。	やや粗やや軟	内外ともにぶい黄褐色	1/11	
243	83	7区Ⅱ層 B21	土師器鍋	*27.4	-	△4.2	全体に外傾気味で、体部器壁厚い。受け口状の口縁の屈曲は緩やか。口縁部面取り。口縁ナデ、体部はハケメ。外面体部上半に指頭圧痕。	やや粗やや軟	内) 浅黄褐色 外) ぶい黄褐色・黒褐色	1/28	
244	83	5区 B8	土師器鍋	*28.4	-	△2.3	受け口状の口縁で、端部は丸く収める。全体的に磨減し調整不明瞭ながら、体部内面はハケメ。胎土に砂粒を多く含む。	粗やや軟	内外ともにぶい黄褐色	1/18	
245	83	7区Ⅰ層 B22	土師器鍋	*30.0	-	△3.1	受け口状の口縁部の屈曲が非常に緩やかなもの。頸部屈曲は明瞭。口縁部は器壁厚くなり面取り気味。口縁内外面ナデ、体部はハケメ。外面に煤付着。	やや粗やや軟	内外ともにぶい赤褐色・褐灰色	1/16	
246	83	5区 B7	土師器鍋	*29.6	-	△2.6	受け口状の口縁で、端部は面取り。口縁部は内外面ナデ。体部はハケメ。	やや粗やや軟	内外ともにぶい橙色	1/18	
247	83	2区 F8	須恵器甕	-	-	△4.8	体部外面に格子目叩きがあり、頸部には縦方向のハケメもみられる。内面はナデ。勝岡田焼系。	密良好	内外とも灰色	-	
248	83	5区 B9	須恵器鉢	*29.0	-	△3.7	口縁が緩やかに湾曲し、端部が短く直立するもの。外面に回転ナデ痕跡著。器壁薄く、焼成も良好。産地不明。	密良好	内外とも灰色	1/16	胎土分析試料49
249	83	7区C16~18	瓦質土器鍋	*30.8	-	△2.5	受け口状に屈曲する口縁部で、端部はさらに外反し先端は尖る。内外面ナデ、体部外面は調整雑。外面に煤付着。	やや粗やや軟	内) ぶい黄褐色・褐灰色 外) 黒色	1/18	
250	83	7区B19・20Ⅱ'・Ⅲ層	瓦質土器鍋	*26.2	-	△9.1	受け口状の口縁部で、端部は左右に広がりそこに凹線が巡るため断面Y字状になる。頸部の屈曲は明瞭。内面は全体に丁寧なナデ、外面は口縁ナデ、頸部以下は指頭圧痕により器表面に凹凸が目立つ。外面煤付着。	やや粗良好	内) 灰色 外) 黒色	1/5	胎土分析試料47
251	84	7区Ⅰ層 C20	土師器皿	*8.2	-	△1.5	体部が丸みをもつ薄手の皿。口縁部を中心に煤が付着する。形態的、出土層位から時期の下がるものの可能性あり。	やや粗良好	内外ともにぶい橙色・黒褐色	1/6	
252	84	3区Ⅱ層 G14	白磁皿	*9.7	-	△1.3	体部が湾曲し、口縁部内側が尖り気味のもの。釉は貫入多い。森田D群。	やや粗良好	釉：淡白色 胎土：白色	1/8	
253	84	7区Ⅰ層 B21	白磁皿	*10.4	-	△1.6	やや外へ開くような器形。口縁部は細くなる。外面は口縁下まで施釉。釉調はやや灰色みを帯び、貫入多い。森田D群。	やや粗良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/12	
254	84	7区Ⅲ層 B16	白磁皿	*10.8	-	△1.8	体部が湾曲し、口縁部は丸く収める。釉は貫入多い。森田D群。	やや粗良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/13	
255	84	3区Ⅱ層 H15	白磁皿	*10.4	-	△2.0	体部が湾曲し、口縁部は丸く収める。釉は体部下半まで施釉、貫入多い。被熱し全体的にバサバサした感じ。森田D群。	やや粗良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/9	
256	84	3区Ⅲ層H15Ⅲ~Ⅴ層	白磁皿	-	*3.4	△1.2	体部下位まで施釉し、以下露胎。底部には輪高台を付す。釉は光沢があるもの。貫入多い。森田D群。	やや粗良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/2	
257	84	7区Ⅰ層 B22	白磁皿	-	*4.2	△1.3	挟り高台をもつもの。高台からその内側まで全面に施釉する。釉は細かい貫入がみられる。見込みに高台痕跡。森田D群。	やや粗良好	釉：淡灰白色 胎土：白色	1/6	
258	84	7区 B16	白磁皿	*8.4	-	△1.3	口縁が外反するもの。釉は光沢をもち、外面に細かい気泡がみられる。森田E群。	密良好	釉：白色 胎土：白色	1/4	
259	84	3区 F13	白磁皿	-	*7.0	△1.6	丸みをもつ底部で、先端が尖り気味の高台が付く。端部は無釉で砂付着。森田E群。	密良好	釉：白色 胎土：白色	1/4	
260	84	3区Ⅰ層 E14	青磁碗	*16.0	-	△3.4	直線的に外傾するもの。内面にヘラ描きの連弁文がある。外面には回転ナデの痕跡が見える。胎土灰色でやや軟質。上田B類碗。	やや粗良好	釉：淡オリーブ色 胎土：淡灰色	1/22	
261	84	7区Ⅰ層 B24	青磁碗	*14.0	-	△2.3	緩やかに湾曲する体部から口縁が直立気味になるもの。外面に線描き連弁文がある。釉の緑色が濃い。上田B-Ⅳ類。	密良好	釉：濃オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/13	
262	84	4区Ⅱ層 G19	青磁碗	*13.2	-	△4.1	直線的に外傾するもの。釉に貫入みられる。外面にヘラ描きの連弁文。上田B-Ⅲ類。	密良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/16	
263	84	4区Ⅲ層 G18	青磁碗	*12.4	-	△3.7	口縁部が直立気味で、端部は肥厚する。外面に線描き連弁文。胎土は灰白色で、やや軟質。上田B-Ⅲ類。	やや粗良好	釉：淡オリーブ色 胎土：淡灰色	1/7	
264	84	3区表土 G15	青磁碗	-	*5.3	△3.3	釉は高台内面中位までかかる。高台裏無釉。外面にはヘラ描き連弁文があり、高台外面にまでみられる。上田B-Ⅱ類。	密良好	釉：青緑色 胎土：淡灰色	1/5	
265	84	3区Ⅲ層 G14	青磁碗	-	*5.4	△2.5	釉は高台置付けまで施釉される。外面無文か。	密良好	釉：淡オリーブ色 胎土：淡灰色	1/12	
266	84	7区Ⅰ層 C25	青磁皿	-	*8.6	△1.4	釉は高台裏までまわるもの。高台は低く、径が大きいことから稜花皿のものと考えられる。	密良好	釉：青緑色 胎土：淡灰色	1/8	
267	84	7区 B16	青磁碗	-	*4.6	△2.3	体部から上を打ち欠いたもの。釉は高台内面中位までかかり、底面裏の一部に飛び散った釉がみられるが露胎。見込みに草花文。	密良好	釉：青緑色 胎土：淡灰色	1/3	
268	84	7区Ⅰ層 C24	青磁皿	*12.4	-	△2.1	外反する口縁部をもつ皿。釉は厚く濃緑色。	密良好	釉：濃緑色 胎土：淡灰色	1/9	

第6節 中世の遺構・遺物

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
269	84	5区 B9	青磁碗	*14.0	-	△2.6	外反する口縁部をもつ。釉は全体に貫入多い。上田D類。	密良好	釉：青緑色 胎土：淡灰色	1/10	
270	84	7区 B・C24 II層	青磁碗	*15.2	-	△2.5	外反する口縁部をもつ。釉は全体に細かい貫入がはいる。上田D類。	密良好	釉：青緑色 胎土：淡灰色	1/5	
271	84	3区 F13	青磁皿？	*13.2	-	△2.7	口縁部が「へ」字状に折れる口折皿か。無文のものであり、壺の蓋である可能性も考えられよう。	密良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/10	
272	84	3区 I層 F15	青磁碗	*14.6	-	△2.5	口縁端部が屈曲するもの。釉は薄く、胎土は灰色。上田D類か。	やや粗良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/22	
273	84	3区 II層 F15	青磁碗	*17.6	-	△2.6	外反する口縁部をもつ。釉は厚めにかかり、全体に細かい貫入がはいる。胎土は赤褐色を呈す。上田D類。	やや粗良好	内外ともオリーブ灰色 胎土：赤褐色	1/5	
274	84	4区 II層 G18	青磁香炉	-	-	△2.0	三脚の付く香炉。釉は厚く、見込みは露胎。脚部先端、および高台外面の露体部との境は赤褐色となる。	密良好	釉：濃青緑色 胎土：白色	-	
275	84	4区	青花皿	*9.6	-	△2.2	体部が湾曲する皿。見込みには波濤文。小野皿C群。	密良好	釉：白色 胎土：白色	1/24	
276	84	5区 12層 B8	青花碗	*11.8	-	△1.5	釉は全体にくすむ。外面に文様が展開。漳州窯系。	やや粗良好	釉：淡黄白色 胎土：白色	1/24	
277	84	3区 G15	白磁？ 皿	*8.6	-	△1.6	被熱しているため詳細不明。口縁には鉄分による赤褐色を呈す。産地など不明。	やや粗良好	釉：淡灰色 胎土：灰白色	1/13	
278	84	6区 IV層	陶器 大目茶碗	*12.2	-	△1.5	短く屈曲する口縁部をもつ。胎土は硬質。釉は2度かけられ、口縁部は暗赤褐色、その下から黒褐色。中国産か。	密良好	釉：黒褐色 胎土：灰白色	1/18	
279	84	7区 B19	陶器 大目茶碗	*9.2	-	△5.3	く字状の口縁をもつ。口縁部は暗褐色、以下黒褐色で、体部下位まで施釉。露体部境界には釉が溜まる。全体的に被熱。瀬戸美濃産か。	密良好	釉：黒褐色 胎土：灰白色	1/9	
280	84	7区 II層 B17	陶器 壺	*3.0	-	△1.1	口縁が短く立ち上がるもの。釉は口縁端部が褐色、以下黒褐色。茶入れてであろう。	密良好	釉：黒褐色 胎土：灰白色	1/12	
281	84	3区 F15	雑陶器 碗	-	*3.2	△1.6	断面三角形の高台が付く。置付けを除き、表面に光沢のある釉がかかる。朝鮮半島産。	密良好	釉：灰色 胎土：灰白色	1/8	
282	84	4区 II層 G20	陶器 輪花皿	*10.6	-	△2.5	口縁部は段状になり、端部は平坦。口縁部にのみ釉がかかる。瀬戸美濃産。	密良好	釉：淡黄灰色 胎土：灰白色	1/14	
283	84	4区 II層 G18	陶器 皿	*11.4	-	△2.1	口縁部は短く外反する。瀬戸美濃産。	やや粗良好	釉：淡黄灰色 胎土：灰白色	1/18	
284	84	2区 F8	陶器 皿	*17.6	-	△3.1	口縁部は短く外反する。外面に回転ナデの痕跡明瞭。口縁の釉は剥離する。瀬戸美濃産。	やや粗良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/14	
285	84	7区 III層 B17	土師器 皿	*9.8	-	△1.5	口縁部は外反し、内面の端部から下がったところは凹線状にやや窪む。体部中位は強いナデによって段状に窪み、以下指頭圧痕。いわゆる京都系土師器皿。	密良好	内外とも浅黄褐色	1/11	
286	84	4区 II層 G18	土師器 皿	*10.8	-	△2.1	強いナデにより口縁部は外反し、内面の端部から下がったところはわずかに窪む。体部中位以下指頭圧痕。京都系土師器皿。	密良好	内外とも浅黄褐色	1/8	
287	84	7区 II層 C17	土師器 皿	*11.2	-	△2.4	強いナデにより口縁部は外反する。口縁は肥厚し、端部は尖り気味。体部中位以下指頭圧痕。京都系土師器皿。	密良好	内外とも浅黄褐色	1/5	
288	84	7区 II層 C21	土師器 皿	*11.6	-	△2.2	口縁部は外反。外面の体部中位は強いナデによって段状に窪み、以下指頭圧痕。京都系土師器皿。	密良好	内外とも浅黄褐色	1/16	
289	84	7区 III層 B17	土師器 皿	*13.6	-	△2.1	口縁部は外反し、端部は尖り気味。外面の体部中位は強いナデによって段状に窪む。体部中位以下指頭圧痕。京都系土師器皿。	密良好	内外とも浅黄褐色	1/19	
290	85	2区	瓦質土器 鉢	*21.0	-	△6.7	体部は外傾し、口縁端部は面取りする。内外面回転ナデ。外面は凹凸が明瞭。	やや粗良好	内) 灰色 外) 灰色	1/4	胎土分析 試料50
291	85	4区 II層 E20	土師器 羽釜	*25.0	-	△5.5	直線的に外傾する口縁部。端部は尖る。端部より下がったところに鈎が付くがかなり摩耗し欠損。外面から口縁内側にかけ黒斑および煤。	やや粗やや軟	内) 黒色・灰黄褐色 外) 暗灰色	1/11	胎土分析 試料48
292	85	2区 F9	瓦質土器 火鉢	*30.0	-	△3.1	口縁端部は外方に突出し、その下面に方形渦巻き文が連続する。器壁は厚い。	やや粗やや軟	内外とも灰白色	1/20	
293	85	2区	瓦質土器 火鉢	-	-	△4.6	口縁は直線的に外傾。花形スタンプ文が外面に連続する。	やや粗やや軟	内外とも灰白色・橙色	-	
294	85	7区 B21・22 表土	陶器 壺	-	*5.0	△4.2	小型壺の体部以下の破片。体部下半まで暗緑褐色釉がかかる。底面はへら切りか？胎土は暗褐色。備前産。	密良好	内) 暗緑褐色 胎土暗褐色	1/2	
295	85	7区 II層 B20	陶器 挿鉢	*29.6	-	△8.8	挿鉢の片口部。口縁下端部が垂下し、上端部は上方へ伸び尖る。乗岡中世4b期に相当。	密良好	内外とも灰褐色・黒褐色 胎土灰色・灰赤色	1/10	
296	85	2区 F9	陶器 挿鉢	-	-	△2.9	外傾する体部片。スリメ単位の間隔は広い。	密良好	内外とも灰褐色・黒褐色 胎土灰色・灰赤色	-	
297	85	4区 II層 F19	土師器？ 挿鉢	*36.4	-	△5.0	口縁部が上方にやや拡張され、端部は若干窪む。内面は磨減し不明瞭だが、スリメがわずかにみられる。外面体部には縦方向のハケメ。	やや粗やや軟	内) 浅黄色 外) 灰黄色	1/16	

木製品

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	法量 (cm)			特 徴	種別	樹種	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				
W1	72	5区 B10 溝13 黒褐色土	*31.2	3.5	2.4	方形(約2.7cm×1.4cm)の穿孔あり。3.4cm～3.9cmの間隔で、0.5cm～0.8cmのキザミ。	編み台	杉	

第7節 近世の遺構・遺物

1、概要

近世の遺構は溝19・20、土坑33・34・35を検出した。溝19・20は7区北東端で検出し、東西に主軸をとる。埋土はⅡ'層が落ち込む。土坑3基は7区西隅で検出し、規模・埋土の色調・堆積状況が類似し、切り合っている。土坑33にはⅠ層が落ち込み、裏込土と思われる堆積（⑤層）もみられる。埋土中から陶器を中心に多種の遺物が出土し、底面直上からは板状の木製品が出土している。

近世の遺構外出土遺物は、Ⅰ層、表土、攪乱土中の出土である。 (森本)

2、検出した遺構・遺物

溝19 (図86、図版4)

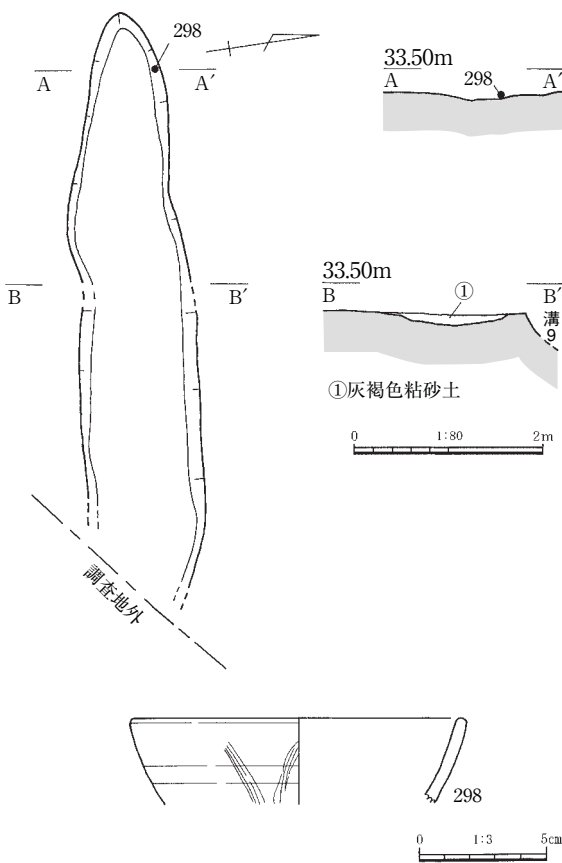


図86 溝19および出土遺物

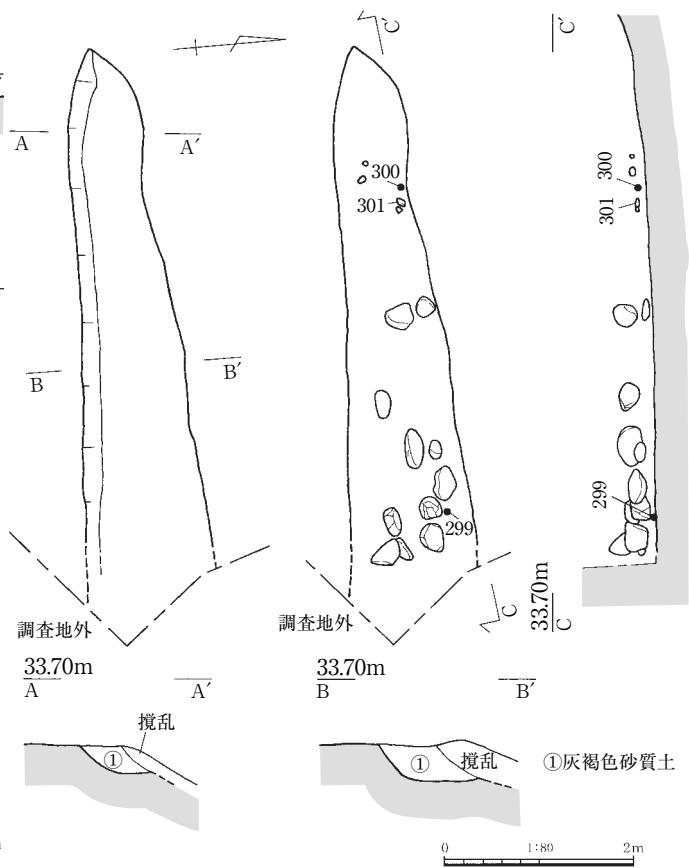


図87 溝20

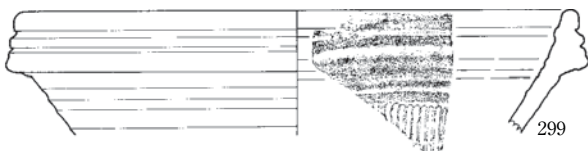


図88 溝20出土遺物

7区北端に位置し、溝8の上部に存在する。東側は調査地外である。東西方向に主軸をとり、直線的に延び、現代の用水路とほぼ並行する。検出面での最大幅1.26m、深さは約12cmを測る。埋土は灰褐色粘砂土の単層である。

遺物は底部直上から出土した青磁碗298を図化した。(西川)

溝20 (図65・87・88、図版38・39)

7区北端に位置し、溝9の上部に存在する。東側は調査地外である。溝は東西方向を主軸にとる。現代の用水路とほぼ並行し、北側が用水路に破壊される。検出面での最大幅約1.32m、深さは約36cmを測る。埋土は灰褐色砂質土であり、径約30cmの大礫がやや浮いた位置から10数個出土した。溝9の3区検出部分のC-C'土層断面に、溝20とよく似た堆積を確認した。平面形は検出できなかったが、溝20の東側延長上にあたることから、同一遺構と考える。

遺物は埋土中から出土したもので、陶器播鉢299・300、土師器鍋301を図化した。(西川)

土坑33 (図90、図版53・55)

7区南西端に位置する。東側は土坑34を切り、南側は土坑35を切る。平面形は円形を呈す。検出面での規模は長軸約172cm、短軸約160cm、深さは約70cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面直下は溝状にやや窪む。主な埋土は灰褐色土であり、①層はI層が落ち込んだものである。⑤層中には2層土がブロック状に混入する。⑤層上面には薄い炭化層が存在し、底面直上からは板状木製品の小片(長軸7.1cm、短軸5.5cm)が出土した。

遺物は①～④層中の出土である。①～④層の中でも比較的⑤層に近い部分で出土した。そのうち、陶器皿305、土鈴304、碁石S21、釘F10・11、鍛造環状不明品F12を図化した。306は土坑35の埋土

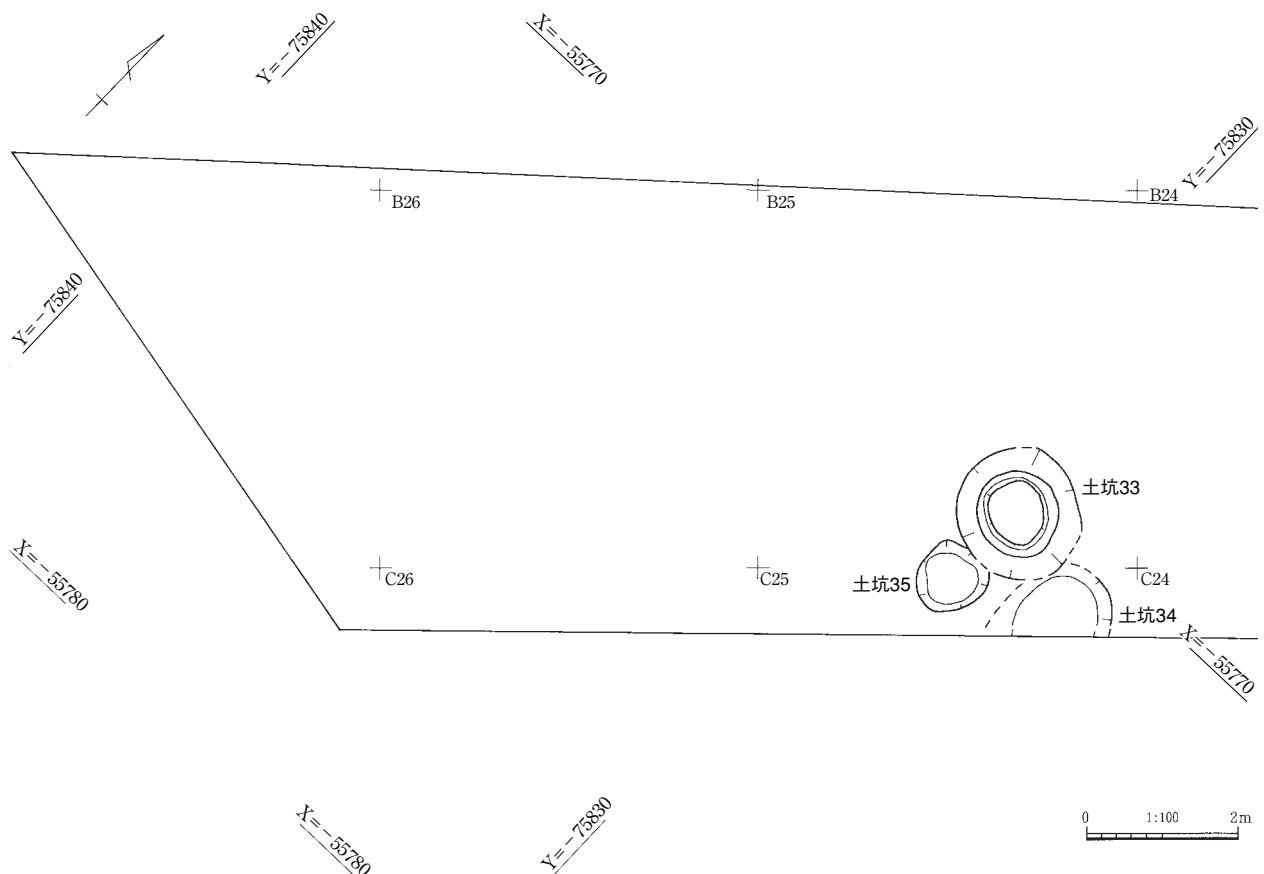


図89 B24・C24グリッド近世遺構全体図

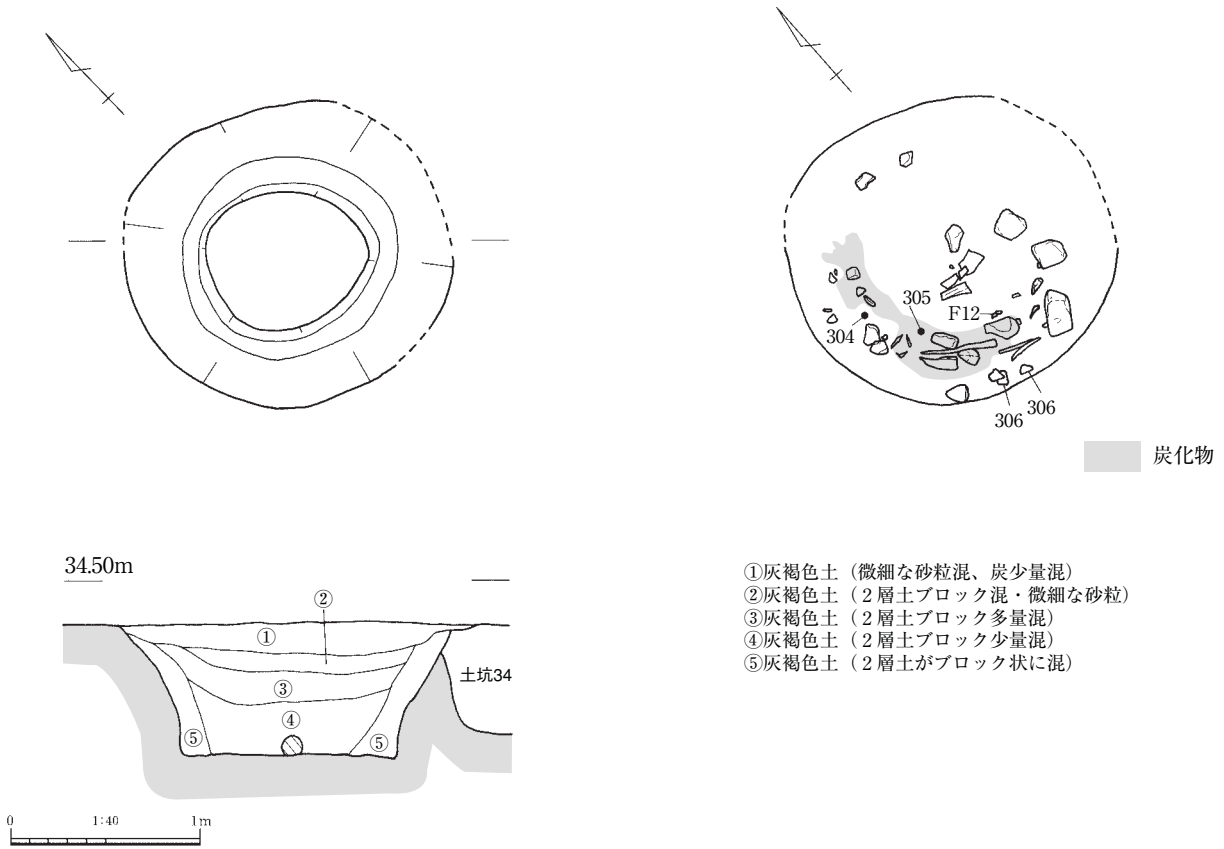


図90 土坑33

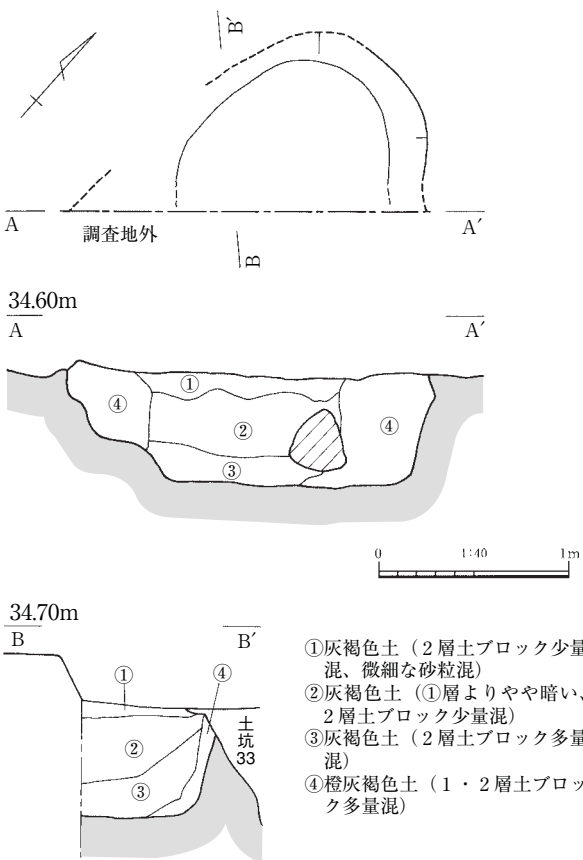


図91 土坑34

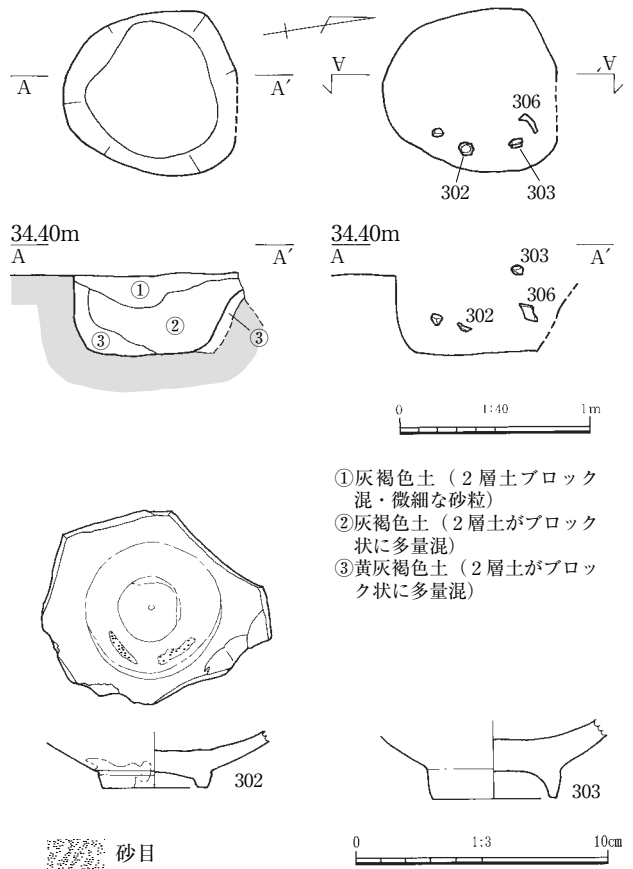


図92 土坑35および出土遺物

中遺物が本土坑掘削時に混入したものと思われる。

出土した板状木製品、⑤層上面の炭化物、釘の存在、埋土の堆積状況から、土坑中央部に木製構造物が存在し、⑤層はその裏込土であった可能性がある。墓壙または井戸であろうか。本土坑と切り合って検出した土坑34・35は、規模、埋土の色調・堆積状況がよく似ていることから、同じような構造の遺構と思われる。(森本)

土坑34 (図91、図版53)

7区南西端に位置する。南東側が調査地外に掛かり、西側は土坑33に切られる。平面形は楕円形を呈すと思われる。検出面での規模は長軸約186cm、深さは約60cmを測る。断面形は逆台形を呈し、南側は階段状に段をなす。埋土は、①～③層は灰褐色土、④層には2層ブロックが多く混入する。土坑33と似た堆積状況を呈す。③層上面には径約30cmの自然礫が存在する。遺物は出土していない。

(西川)

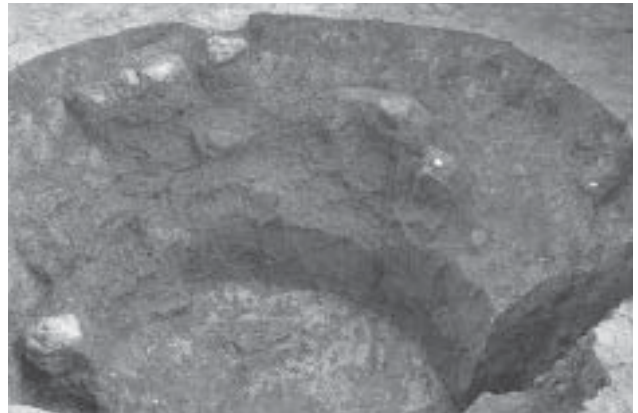
土坑35 (図92、図版6・53)

7区南西端に位置し、北側を土坑33に切られる。平面形は円形を呈し、検出面での規模は長軸残存約96cm、短軸約90cm、深さは43cmを測る。主な埋土は灰褐色土であり、③層には2層ブロックが多く混入する。土坑33の堆積状況と類似する。

遺物は埋土中からの出土であり、陶器皿302・高台付碗303、播鉢306を図化した。播鉢306は土坑33からも出土しているが、本土坑の埋土中遺物が混入したものと思われる。(西川)



土坑33 F12出土状況 (東から)



土坑33 遺物出土状況 (東から)

第8節 調査地内出土石製品・鉄関連遺物 (図94～100、図版53～55)

調査地内から出土した石製品・鉄関連遺物を掲載した。

石製品はS 1～S 66を図化した。黒曜石の剥片を中心に掲載できなかったものも多数ある。黒曜石の剥片は、主に包含層からの出土である。図化した遺物には、玉髓製石錐S 35、線刻礫S 51、不明石製品S 53などがある。

遺構外出土の鉄関連遺物は主にⅡ層以下の中世から近世前半に相当する遺物を図化した。Ⅰ層中からも釘など棒状の鉄製品が多数出土している。遺物の分類については、穴澤義功氏にお願いした。中世前期の溝9出土の馬鋤F 5は、4区に同時期の耕作痕を検出していることから、興味深い遺物である。なお、同じく中世の耕作痕が検出された門前第2遺跡菖蒲田地区でも馬鋤が出土している。

(森本)

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

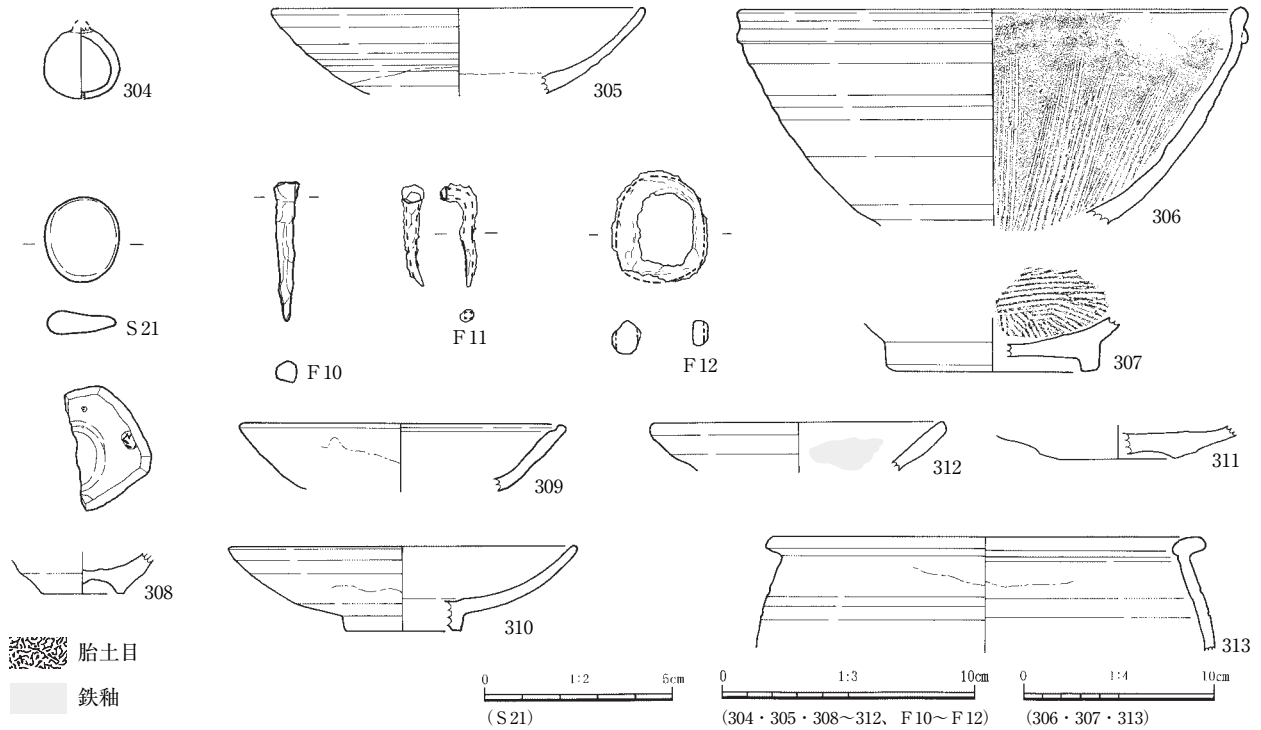


図93 調査地内出土遺物（近世）

遺物観察表（近世）

土器

*：復元値、△：残存値

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)			特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高					
298	86	7区 B17 溝19埋土中	青磁碗	*13.0	-	△3.4	内湾気味の口縁部をもつもの。外面には蓮弁文が連続する。片切り彫りによるものだが、線が二重になる。上田B類。断面に漆継ぎ痕。	密良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/7	
299	88	7区 B15 溝20埋土中	陶器 播鉢	*29.2	-	△6.3	口縁下部が張り出し、外面に二条の凹線が巡る。口縁端部は丸みを持ち、端部から下がった内面には1条の低い突帯がある。スリメは密。	密良好	内外とも灰色 胎土：褐色	1/12	
300	88	7区 B16 溝20埋土中	陶器 播鉢	-	-	△5.9	土師質なもの。スリメは間隔をもつ。内外面ナデ。在地産か。	やや粗良好	内外ともにぶい橙色	-	
301	88	7区 B16 溝20埋土中	土師器 鍋	*26.8	-	△3.4	緩く屈曲し受け口状を呈す。器壁厚い。全体に被熱しており、内表面は剥離、外面は亦変する。	やや粗良好	内) 浅黄橙色・黒褐色 外) 橙色	1/14	
302	92	7区 C24 土坑35埋土中	陶器 皿	-	*3.4	△2.2	見込み蛇の目釉剥ぎし、一部砂目が残る。釉は淡灰色系で、外面は一部高台までかかる。体部は波状に打ち欠きか。肥前系。Ⅲ期。	密良好	釉：灰白色 胎土：淡赤褐色	1/1	
303	92	7区 C24 土坑35埋土中	陶器 碗	-	*4.6	△3.1	外面から内面の一部まで被熱し釉がとぶ。丸みをもったやや高い高台をもつ。畳付けのみ露胎。見込みに輪状の畳付け痕。肥前系。Ⅲ期。	密良好	釉：淡黄灰色 胎土：淡灰白色	1/2	
305	93	7区 B24 土坑33埋土中	陶器 皿	*14.6	-	△3.4	別個体であるが底部は302と同様のものが付くと思われる。体部外面下位まで施釉。見込みは蛇の目釉剥ぎ。肥前系。Ⅱ期。	密良好	釉：灰白色 胎土：淡赤褐色	1/8	
306	93	7区 C24 土坑35	陶器 播鉢	*26.8	-	△11.4	やや丸みをもった体部から直立気味に口縁は立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚。外面には突帯が貼付けられる。スリメは密に底部から引き上げられる。全面に暗褐色の釉がかかる。防長産か？	やや粗良好	内外とも暗赤褐色	1/5	
307	93	7区	陶器 播鉢	-	*9.8	△2.9	306と同一個体の可能性のあるもの。低いがしっかりした高台が付き、釉は全体にかかる。	やや粗良好	内外とも褐色	1/4	
308	93	7区 B19	陶器 碗	-	*3.2	△1.6	高台はケズリ出し、径は小さい。外面および見込みに釉の剥離痕があり、胎土目痕と考えられる。釉は体部外面の下半近くまで施釉。肥前系。Ⅰ期。	密良好	釉：淡灰色 胎土：灰色	1/2	
309	93	2区 F 9	陶器 皿	*12.6	-	△2.6	口縁端部に溝が巡らせる「溝緑皿」である。釉は体部外面中位までかかる。肥前系。Ⅱ期。	密良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/10	
310	93	4区 I層	陶器 皿	*13.6	*4.0	3.4	内面は緑釉がかり、外面は体部中位まで薄くかけられる。見込み砂目で、その内側は段状に窪む。肥前系。Ⅱ期。	密良好	釉：緑・緑褐色 胎土：淡灰色	1/8	
311	93	3区 E14 I層	陶器 皿	-	*4.6	△1.3	ケズリ出し高台で、畳付け周辺に多量に砂が付着する。内面および外面高台際まで施釉。肥前系。Ⅱ期。	密良好	釉：淡オリーブ灰色 胎土：淡灰色	1/3	
312	93	3区 G15 I層	陶器 皿	*11.4	-	△1.9	体部内面に鉄釉による文様をもつ。全体に被熱し、釉調の詳細不明。肥前系。Ⅱ期。	密良好	釉：淡灰色 胎土：灰色	1/5	
313	93	5区 B 8	陶器 甕	22.0	-	6.0	体部中位から内傾し、口縁端部が逆し字状になるもの。若干内側へも拡張され、端部上面は丸みもち磨滅（使用）によるものかツルツルする。口縁部は施釉。在地産か。	密良好	内) ぶい褐色・灰赤色 外) 暗灰色	1/11	

土製品

遺物番号	挿図番号	地区 遺構層位	器種	法量 (cm)				特 徴	胎土 焼成	色 調	残存率	備 考
				口径	底径	器高	重さ (g)					
304	93	7区 B24 土坑33埋土中	土鈴	-	-	△2.8	4.0	上部に把手が付き、穿孔される。外面はナデ。	密良好	内外とも淡褐色	1/2	

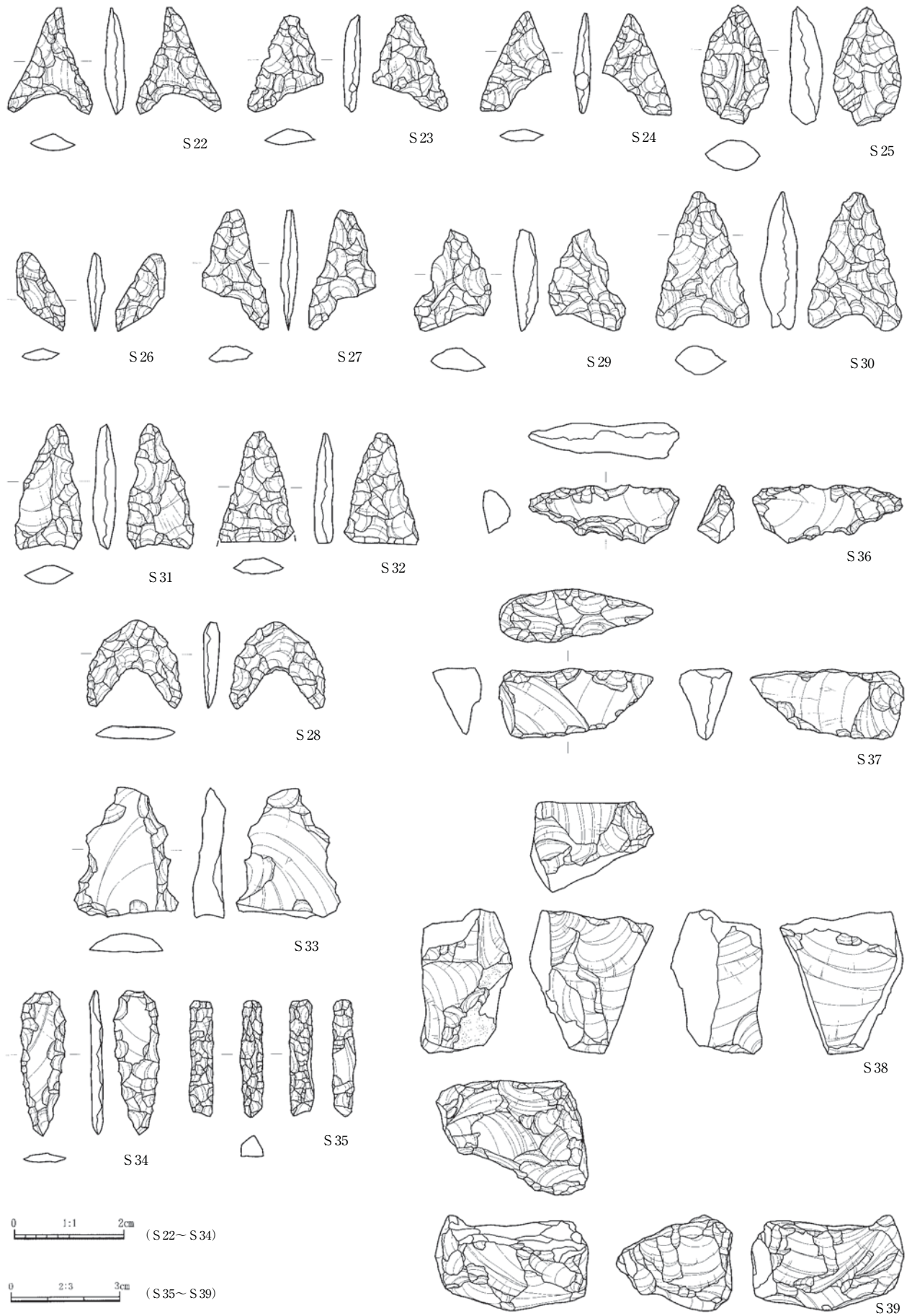


図94 調査地内出土石器（1）

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

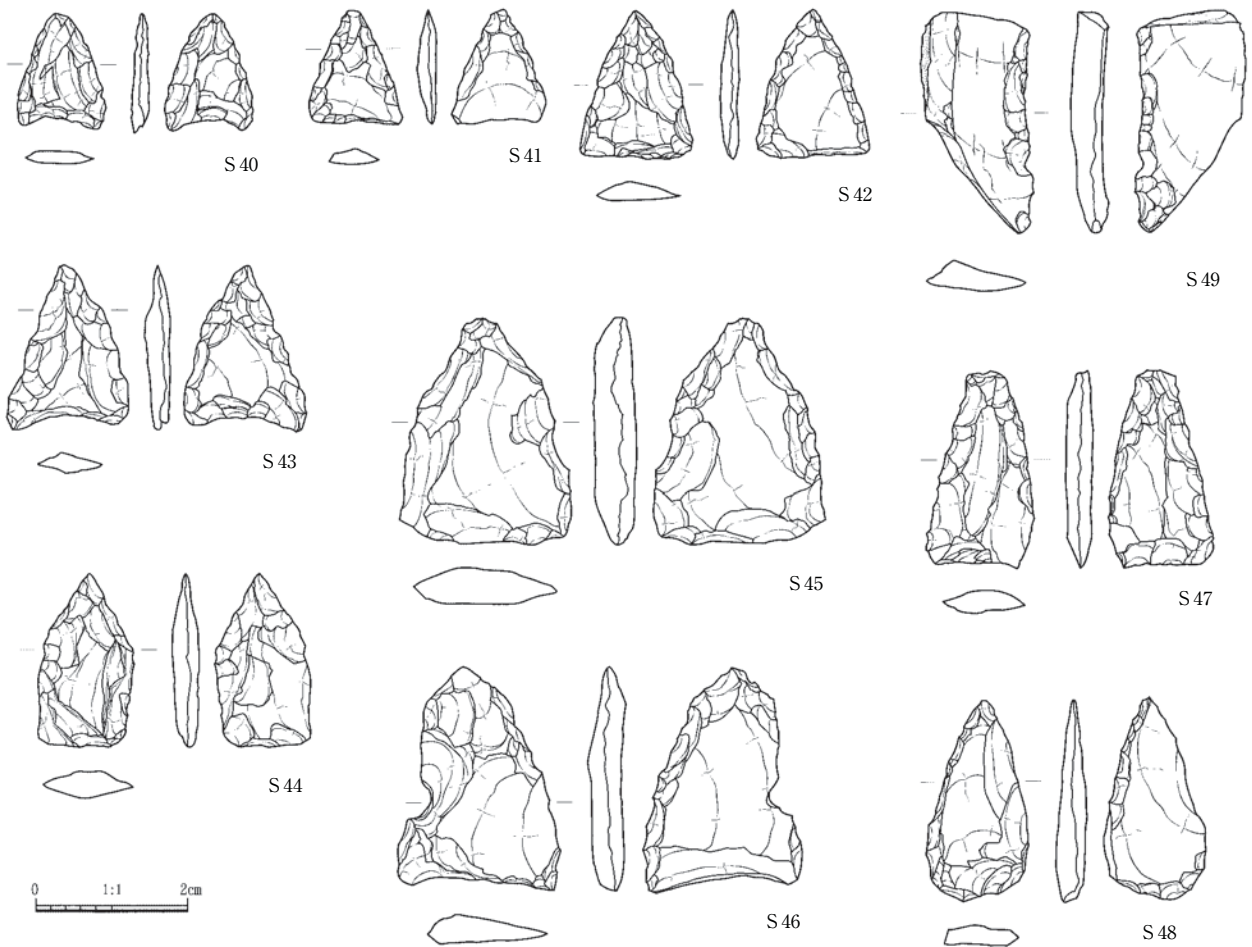


図95 調査地内出土石器（2）

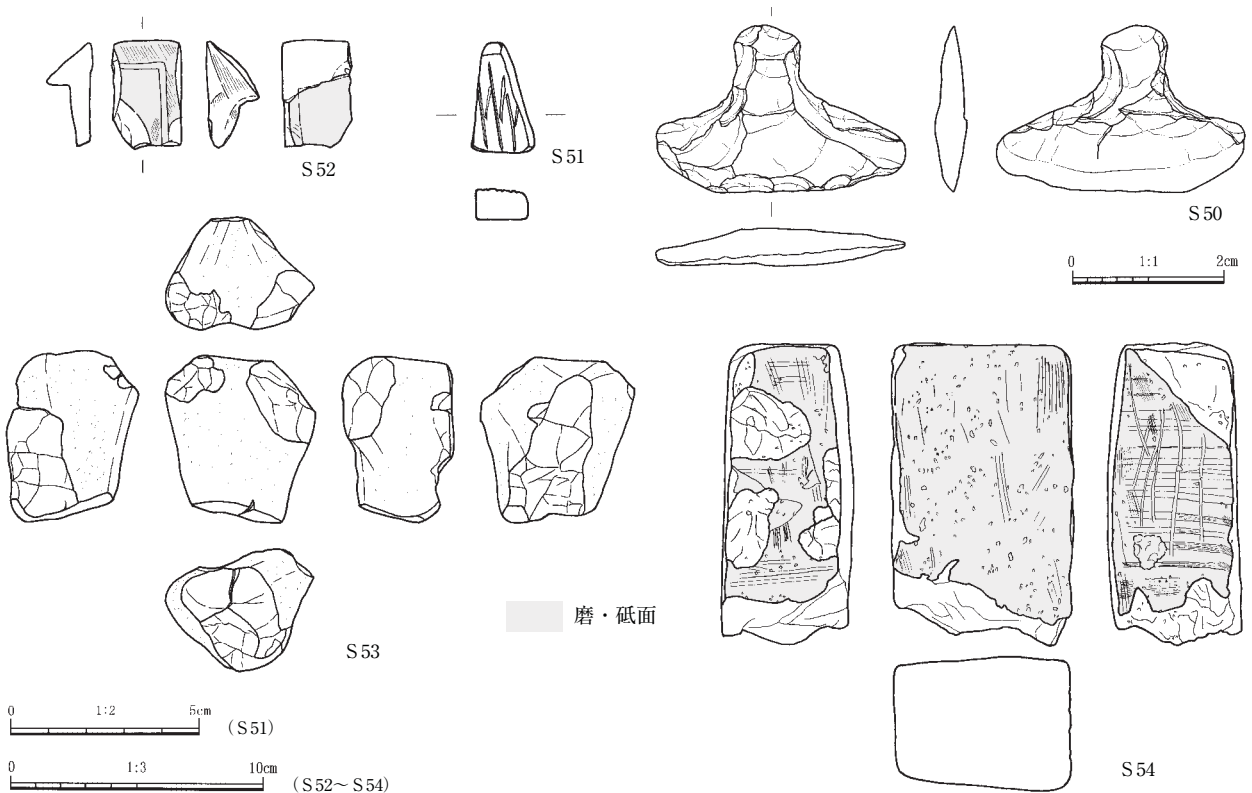


図96 調査地内出土石器（3）

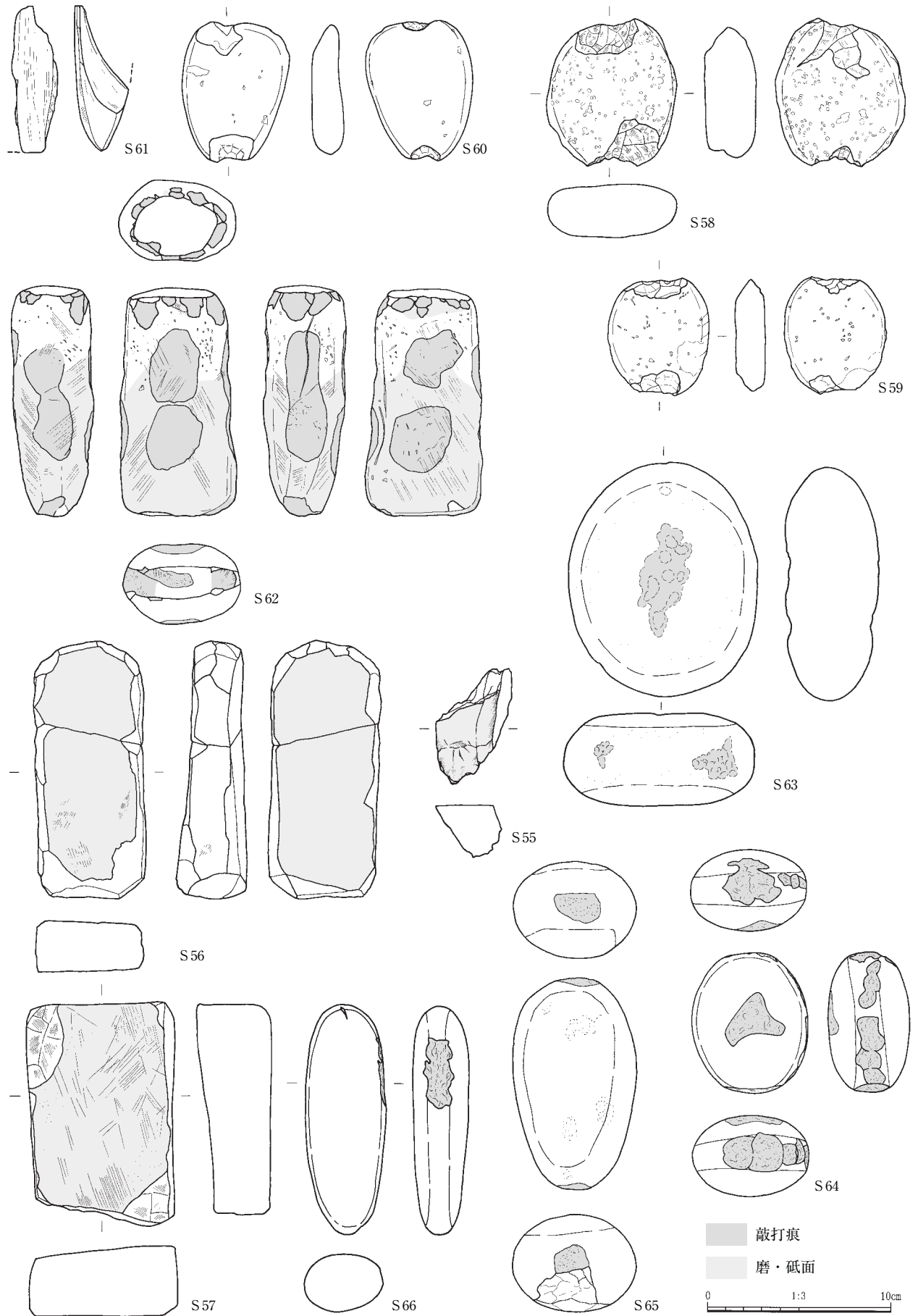


図97 調査地内出土石器（4）

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

石製品観察表

遺物番号	挿図番号	層位・地区	層位・地区	法量 (cm)				石 材	備 考
				最大長	最大幅	最大厚	重さ (g)		
S1	18	4区 竪穴住居2床面直上	礫石器 (敲石)	11.6	4.7	4.0	326	両輝石安山岩	
S2	22	3区 竪穴住居4	礫石器 (敲石・磨石)	11.6	8.0	4.1	530	両輝石安山岩	
S3	28	7区 土坑9⑩層直上	砥石	4.25	2.55	1.65	18	粘板岩	
S4	29	7区 土坑9北西区 ①層	礫石器 (敲石)	13.5	7.3	3.3	480	両輝石安山岩	
S5	34	7区 土坑11 ③層	礫石器 (敲石)	10.9	9.5	4.4	664	安山岩	
S6	35	7区 土坑11 ①層	剥片	6.15	1.95	1.6	130	黒曜石	
S7	38	7区 P136	砥石	10.6	7.1	4.9	449	黒雲母角閃石安山岩	
S8	48	5区 土坑24	礫石器 (敲石)	13.7	9.6	6.5	1215	両輝石安山岩	
S9	50	5区 土坑26	不明石製品	5.8	4.8	2.55	87	安山岩	自然遺物の可能性有り
S10	60	7区 溝4	石鏃	1.4	1.6	0.3	0.4	黒曜石	
S11	64	7区 溝8	打製石斧	11.5	5.7	2.0	157	粘板岩	
S12	64	7区 溝8	石斧	10.7	2.8	1.9	88	緑色片岩	破損
S13	64	7区 溝8	礫石器 (敲石・磨石)	10.5	9.3	4.9	591	黒雲母角閃石安山岩	
S14	71	5区 溝14	石核	2.95	2.9	1.55	12.6	黒曜石	
S15	71	5区 溝14	砥石	5.95	2.6	1.9	43	砂岩	
S16	72	5区 溝13	石斧	9.9	5.2	3.5	283	緑色片岩	破損
S17	77	4区 溝18	石鏃	1.9	1.1	0.3	0.3	黒曜石	
S18	77	4区 溝18	石鏃	2.6	1.55	0.35	1.2	安山岩	
S19	79	5区 欄列2	石鏃	1.9	1.05	0.23	0.5	安山岩	
S20	82	7区 P378	礫石器 (敲石)	9.9	9.0	6.9	856	両輝石安山岩	
S21	93	7区 土坑33	基石	2.2	2.0	0.6	4.1	無斑晶安山岩	
S22	94	3区 G15 II層	石鏃	1.9	1.6	0.4	0.5	黒曜石	
S23	94	3区 G14 IV層	石鏃	1.8	1.4	0.3	0.5	黒曜石	
S24	94	4区 F18	石鏃	1.85	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
S25	94	7区 C16 II層	石鏃	2.2	1.2	0.6	1.4	黒曜石	
S26	94	4区 E19 II'層	石鏃	1.4	0.9	0.3	0.2	黒曜石	
S27	94	3区 E15 IV層	石鏃	2.2	1.2	0.3	0.4	黒曜石	
S28	94	4区	石鏃	1.6	1.8	0.3	0.5	黒曜石	
S29	94	7区 B20	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.7	黒曜石	
S30	94	7区 B24 II層	石鏃	2.55	1.7	0.75	2.0	黒曜石	
S31	94	7区 C17 II'層	石鏃	2.3	1.2	0.4	0.8	黒曜石	
S32	94	7区 B17	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.8	黒曜石	
S33	94	7区 B19	石鏃	2.4	1.9	0.5	2.1	黒曜石	
S34	94	4区 G19 II'層	石鏃	2.7	0.8	0.3	0.6	黒曜石	
S35	94	3区 G14 IV層	石鏃	3.3	0.7	0.6	1.4	玉髓	
S36	94	2区 G9	楔形石器	1.6	4.1	1.0	4.8	黒曜石	
S37	94	4区 F20 II'層	楔形石器	2.1	4.3	1.4	33.4	黒曜石	
S38	94	2区 F9	石核	4.0	3.4	2.5	30.2	黒曜石	
S39	94	出土地不明	石核	2.7	4.2	3.2	33.4	黒曜石	
S40	95	4区 E18 II'層	石鏃	1.55	1.15	0.25	0.4	安山岩	
S41	95	6区	石鏃	1.5	1.25	0.25	0.4	安山岩	
S42	95	2区 G9	石鏃	2.0	1.5	0.25	0.7	安山岩	
S43	95	7区 B24 I層	石鏃	2.2	1.6	0.35	0.8	安山岩	
S44	95	7区 G21	石鏃	2.3	1.35	0.4	0.9	安山岩	
S45	95	7区 B19 II層	石鏃	3.05	2.3	0.55	4.5	安山岩	
S46	95	4区 E20 II'層	石鏃	3.0	2.15	0.6	2.6	安山岩	
S47	95	4区 G20 II'層	石鏃	2.65	1.4	0.35	1.3	安山岩	
S48	95	5区	石鏃	2.7	1.35	0.4	1.5	安山岩	
S49	95	7区 B19	スクレイパー	4.4	2.25	0.75	5.9	安山岩	
S50	96	3区	石匙	3.35	4.95	0.75	9.2	安山岩	
S51	96	7区 B・C20 V層	線刻礫	3.0	1.7	0.8	6	安山岩	
S52	96	6区 L8	硯	4.3	2.7	1.7	11	流紋岩	
S53	96	4区 II'層	不明石製品	6.4	5.8	4.0	183	玄武岩	
S54	96	7区 B16	砥石	12.0	7.3	5.1	824	長石斑岩	破損
S55	97	7区 C24 I層	砥石	4.7	3.75	2.9	60	長石斑岩	
S56	97	7区 B・C19・20	砥石	14.1	6.1	2.8	484	長石斑岩	
S57	97	7区 B16	砥石	12.2	8.1	4.0	712	長石斑岩	
S58	97	7区 B18 V層	石錘	8.1	7.1	2.9	224	角閃石黒雲母安山岩	
S59	97	7区 B19 V層	石錘	6.3	5.6	1.6	80	角閃石安山岩	
S60	97	4区 F20 II'層	石錘	7.7	5.7	1.7	88	黒雲母角閃石安山岩	
S61	97	4区 F19 II'層	石斧	8.0	2.8	2.0	57.5	緑色片岩	破損
S62	97	2区 G9	礫石器 (敲石・磨石)	12.5	6.4	3.55	582	玄武岩	石斧転用
S63	97	7区 C16~18	礫石器 (敲石)	12.9	10.4	5.2	989	両輝石安山岩	
S64	97	7区 B18 II'層	礫石器 (敲石)	7.75	6.35	4.5	323	安山岩	
S65	97	7区 B18 II層	礫石器 (敲石)	11.7	6.8	5.4	568	両輝石安山岩	
S66	97	7区 B18 V層	礫石器 (敲石)	12.7	4.5	3.1	258	安山岩	

表6 石製品構成表

石 鏃	スクレイパー	石 錘	石 匙	楔形石器	石 核	剥 片	石 錘	
25	1	2	1	2	3	1	3	
石 斧	打製石斧	礫 石 器		砥 石	基 石	硯	線 刻 礫	不明石製品
		敲 石	敲石・磨石					
3	1	9	3	7	1	1	1	2

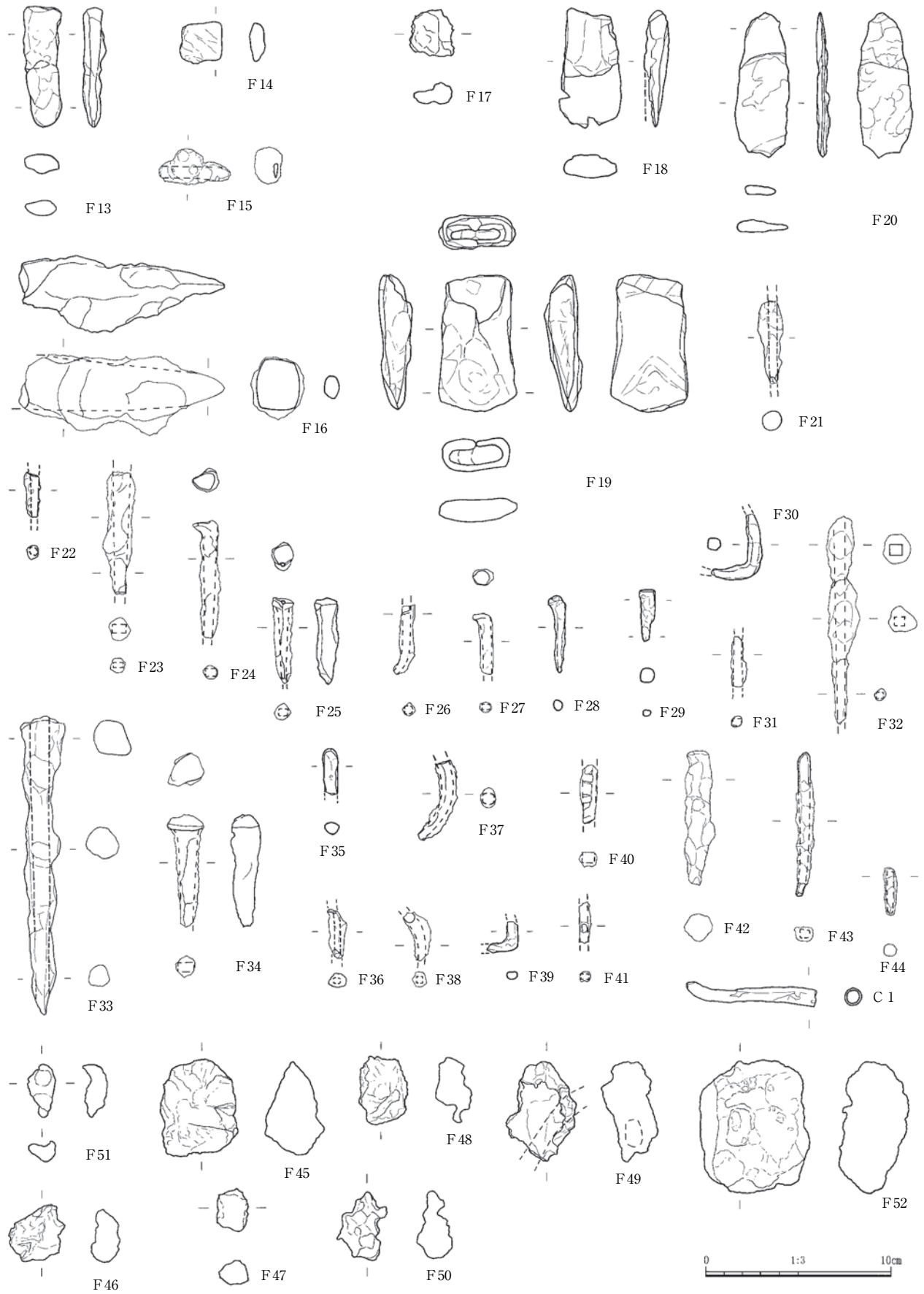
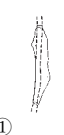



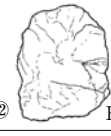






















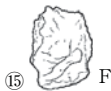


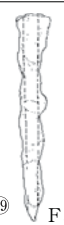

























図98 調査地内出土鉄関連遺物

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

中世前期				近世前期				
土坑31	溝9	溝1	Ⅲ層	Ⅱ'層				
鉄製品(鍛造品)	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)	鉄製品(鍛造品)	鉄製品(鍛造品)	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	鉄製品(鍛造品)			
棒状不明品	L(・)	銹化(△)	釘(小型)	銹化(△)	楔	釘(小型)	棒状不明品	鍛冶滓
銹化(△)					L(・)			
 ① F1	 ④ F7	 ⑦ F2	 ⑩ F22	 ⑫ F45 椀形鍛冶滓(極小)	 ⑯ F13	 ⑳ F26	 ㉔ F32	
溝9	鉄製品(鍛造品)	溝8						
椀形鍛冶滓(中)	馬銹	椀形鍛冶滓(小)		 ⑬ F46		 ㉑ F27	 ㉕ F30	
 ② F8	 ⑤ F5	 ⑧ F4		鍛冶滓	 ⑰ F23			 ㉘ F50
			銹	 ⑭ F47		 ㉒ F28	 ㉖ F31	
椀形鍛冶滓(小)	鉄製品(鑄造品)	鉄製品		Ⅶ層		 ⑱ F24	鑄造鉄斧?	
	板状不明	銹化(△)	 ⑪ F21	椀形鍛冶滓(極小・含鉄)		 ⑲ F25	鉄製品(鑄造品)	
 ③ F9	 ⑥ F6	 ⑨ F3		銹化(△)		 ㉓ F29	 ㉗ F17	
				 ⑮ F48				

0 1:6 20cm

図99 鉄関連遺物構成図(1)

近世前期			近世後期				
Ⅱ層			土坑33	Ⅰ層			攪乱
鉄製品(鍛造品)			袋状鉄斧	鉄製品(鍛造品)			
釘(大型)	釘?	棒状不明品	特L(★)	釘(小型)	棒状未製品	釘(中型)	粘土質溶解物
 ㉙ F33	 ㉓ F37	 ㉖ F40	 ㉘ F19	銹化(△)	 ④⑤ F43	H(○)	椀形鍛冶滓(極小・工具痕付き)
釘(中型)			銹化(△)	 ⑫ F10	攪乱・不明	 ④⑧ F42	 ⑤② F49
 ⑩⑩ F34	 ⑩④ F38		Ⅱ'層		不明鉄製品	釘(小型)	不明
 ⑩⑩ F35			銹?	 ④③ F11	 ④⑥ F16	 ④⑨ F44	 ⑤① F51
釘(小型)			銹化(△)	環状鉄製品	刀子	銅製品	椀形鍛冶滓(中)
 ⑩⑩ F36	 ⑩⑤ F39	 ⑩⑦ F41	刀子状不明品	銹化(△)	刀子	煙管	 ⑤③ F52
 ⑩⑩ F37	 ⑩⑤ F39	 ⑩⑦ F41	 ④① F14	 ④④ F12	 ④⑦ F15	 ⑤① C1	

0 1:6 20cm

図100 鉄関連遺物構成図(2)

鉄関連遺物観察表

鉄関連遺物

遺物番号	構成番号	図	遺物名	地区層位	特 徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
F 1	1	55	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	B 8 土坑31	足部が左側に折れ曲がった棒状の鉄製品。横断面形は方形で、釘の可能性もっている。外周部は酸化土砂が厚い。頭部は遺存せず。足部は急激に細くなる。	6.3	1.3	1.1	9.7	3	錆化 (△)
F 2	7	58	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	7 区 溝 1	わずかに長方形気味の横断面形をもつ棒状の鉄製品破片。下手側には小破面がのぞく。上手側はやや太くなって取束しており、釘類とは考えにくい。工具あるいは鏝等の莖部であろうか。	5.6	1.3	1.0	10.2	2	錆化 (△)
F 3	9	64	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	B17 溝 8	軽石を含む酸化土砂に覆われた棒状の鉄製品。外観的にも透過X線像からみても種別不明。	4.7	1.7	1.1	14.2	2	錆化 (△)
F 4	8	64	腕形鍛冶滓 (小)	7 区 溝 8 中～下層	小型の腕形鍛冶滓の側部破片。左側側部と上手側が破面となる。上面は皿状で、下面は緩やかに突出する。右側部に幅1.2cmほどの楕円の窪みを残す。工具痕の可能性大。滓は気孔が分散し風化が進んでいる。	4.8	4.1	3.1	52.0	6	無し
F 5	5	70	鉄製品 (鍛造品) 馬鍬	7 区 溝 9 上層	扁平な刃先をもつ馬鍬の先端部破片。体部側が大きく欠落しており、下面上手は錆化により中空となる。完全に錆びきっているため磁着度が1と非常に低い。本遺跡では1例のみとなるが、門前第2遺跡では構成品中に完形品が3点確認される。両遺跡とも調査された遺構として筋状の耕作痕が確認され、遺物との関係で注目される。本例は溝9出土品で、中世の時期が推定できる点がポイントであろう。	5.7	1.4	1.0	13.6	1	錆化 (△)
F 6	6	70	鋳造品・板状不明	7 区 E13～14 溝 9	厚い酸化土砂に覆われた鋳造品破片。左側の側部には破面がのぞく。5mmほどの厚みを持ち、短軸方向にわずかに反り返り気味。ただし、酸化土砂のため鍋状かどうかは不明。	5.9	4.1	1.7	37.2	3	錆化 (△)
F 7	4	70	腕形鍛冶滓 (極小・含鉄)	3 区 E14 溝 9 中～下層	平面、不整形円形をした完形に近い極小の腕形鍛冶滓。小さな錆跡や放射割れが認められる。上面は平坦気味で下面は下手側が厚い腕形となる。含鉄部は中核部に広い。	4.3	3.2	2.2	42.2	7	L (・)
F 8	2	70	腕形鍛冶滓 (中)	3 区 E14 溝 9 中～下層	中型の腕形鍛冶滓の肩部寄りの破片。上下面は生きており、左側部と下手側が破面となる。全体に厚板状で、上下面の突出は少ない。滓はやや緻密。右側の肩部はなだらか。	4.3	3.5	3.4	70.5	5	無し
F 9	3	70	腕形鍛冶滓 (小)	3 区 E14 溝 9 中～下層	小型の腕形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面は生き、左右の側部と下手側は破面。上面はわずかに窪み、下面は皿状に突出する。下面2ヶ所に粘土質溶解物が小さくこびり付く。	6.1	3.4	2.6	60.5	4	無し
F10	42	93	鉄製品 (鍛造品) 釘	7 区 B24 土坑33 埋土中	小型の釘の体部から足部片。頭部と足部先端が欠落する。横断面形は全体に台形できりは粗い。一見、頭部状に膨らんでいるのは酸化土砂。	5.4	0.9	0.8	4.8	2	錆化 (△)
F 11	43	93	鉄製品 (鍛造品) 釘	7 区 B24 土坑33 ①層	頭部が左側に折れ曲がり、体部から足部にかけてがS字状にうねった小釘。頭部は長方形気味で広がり左右方向のみとなる。足部にかけては急速に細くなり取束する。S字状にうねるのは材から引き抜かれたためか。	3.8	0.9	0.55	2.7	2	錆化 (△)
F 12	44	93	鉄製品 (鍛造品) 環状不明品	7 区 B24 土坑33 埋土中	幅1cm前後の帯状の薄板を環状に巻きあげた鉄製品。内側は上下方向にわずかに広がる方形で下手側の隅は直角方向に曲げられている。また、天井部には直交する木部の痕跡を残す。つくり自体は粗く、農具の紋具または門等の金具か。	4.3	3.8	1.1	12.0	1	錆化 (△)
F 13	16	98	鉄製品 (鍛造品) 楔	4 区 F20 II層	長さ6.5cmを測る楔。頭部がわずかに広がっており、右側に傾いているのは打撃によるものか。足部はへら状で両肩部が丸みをもつ。表面には酸化土砂が厚く、中央部で割れたものを接合している。大きさや形状からみて、農具に用いられた楔か。	6.5	2.0	1.0	26.2	4	L (・)
F 14	41	98	鉄製品 (鍛造品) 刀子状不明	7 区 B17 II'層	幅2.1cmほどの薄板状の鉄製品。上手側と右側部が生きており、残る二面が破面となる。刀子様ではあるが、背側が平坦とならないという点など別な要素もある。そのため刀子状不明品とした。	2.2	2.3	0.7	4.3	2	錆化 (△)
F 15	47	98	鉄製品 (鍛造品) 刀子	7 区 B16 攪乱土	厚い酸化土砂に覆われた刀子の刃部片。身幅は8mmほどで背側の厚みは約2mm。錆化が進み、酸化土砂をはずすと崩壊する可能性大。	3.9	1.9	1.5	11.2	1	錆化 (△)
F 16	46	98	鉄製品 (鍛造品) 不明鉄製品	F 14 攪乱土	厚い酸化土砂に囲まれた太い棒状の鉄製品。左右の側部で形態が全く異なっている。左側の側部は隅丸方形の断面形をもつ破面が露出し、外周部沿いに2mmほどの厚さをもつ鉄部が確認される。一方、右側部は尖り気味に突出する扁平な鉄部で、上手側側部からみると右方向に楔状に薄くなっている。また、面の一部が平坦化されている。短い鍵先状ともいえる。左側側部は中空の鉄製品を窺わせ、ほぞとなる可能性が大。先端方向が逆で鍵の可能性も残されている。	10.9	4.2	2.95	143.0	4	錆化 (△)
F 17	27	98	鉄製品 (鍛造品) 鉄斧	7 区 B17 II'層	鍛造鉄斧の体部片、または鍛造の袋状鉄斧の体部片。上下面の一部と右側部が生きており、短軸側の両端部と左側部が破面。右側部沿い上面は幅6mmほどが帯状に盛り上がる。表裏面に酸化土砂が目立つ。上面左側に放射割れが目立ち、鍛造鉄斧特有の層状の割れがみられないことから、鍛造鉄斧の可能性もあるものとみとておく。ただし、層位や出土状態からは錆化の進んだ袋状鉄斧の破片であってもよい。鍛造鉄斧とすれば重要品。	2.45	2.4	1.05	7.8	4	錆化 (△)
F 18	39	98	鉄製品 (鍛造品) 小型袋状鉄斧	B 8	錆化の進んだ小型の袋状鉄斧。袋部の折り返しが小さく、ほぞ部分の狭い形態をもつ。上手側の端部は破面となる。鉄斧全体に表面の風化や錆化が進み、表皮が剥落している。そのため刃部の状態がはっきりしない。上手側半分は袋部の合わせ目が1cm前後開いており、その部分に酸化土砂が目立って詰まっている。	6.3	3.2	1.3	27.4	4	錆化 (△)

第3章 門前上屋敷遺跡の調査

遺物番号	構成番号	図	遺物名	地区層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
F19	38	98	鉄製品 (鍛造品) 袋状鉄斧	E14 II層	袋部の上手側端部が小破面となった袋状鉄斧。側部は直角に立ち上がり、袋部を左右から合わせている。刃部は平面形がへの字状で、中央部がもつとも突出する。縦断面形は刃部外面が強く使用減りしている。鉄部の残りはよく、メタル度は特Lとなる。	7.4	4.1	1.2	94.5	7	特L (★)
F20	40	98	鉄製品 (鍛造品) 鎌?	4区 E20 II'層	7.8cmほどの長さをもつ柳葉形の鉄製品。左右の側部はほぼ生きているが、短軸側の端部は破面となっている。とくに下手側は二面の破面をもち、茎部につながるかどうかははっきりしない。短軸方向にわずかに反りあがるのは接合時のずれか。柳葉形の鎌または、鎌の先端部寄りの破片か。表面の酸化土砂を除くと厚みは1.5mm前後ときわめて薄い。	7.9	2.7	0.6	18.4	2	錆化 (△)
F21	11	98	鉄製品 (鍛造品) 鎌	3区 F15 III層	側面4面にマナをもつ鉄鎌破片。茎部側は生きており、刃部が途中で折れている。やや平作りの鎌で茎側、刃部側とも横断面形は長方形気味。マナから刃部にかけては緩やかな弧状に反る形態で、中世特有の鎌である。表面には酸化土砂が厚い。	4.4	1.3	1.0	7.4	2	錆化 (△)
F22	10	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	7区 B18 III層	小型の釘の体部破片。頭部側と足部側を欠いている。上手側の破面は錆化が激しく、一見、円形の断面形に見える。	2.4	1.3	0.8	1.9	1	錆化 (△)
F23	17	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	4区 E20 II'層	一見鎌のような外形をもつ棒状の鉄製品。下手側には方形断面をもつ部分が露出している。端部は破面。全体の七割方が厚い酸化土砂に覆われており、身部は下手側と同様方柱状か。釘と推定される。	6.6	1.6	1.3	17.8	3	錆化 (△)
F24	18	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 F14 II'層	頭部が左側に伸びた釘。足部側の端部は小さく欠落する。横断面形は方形気味。頭部の平面形は不整形三角形。左側に打ち伸ばしたためか。	6.4	1.2	0.85	9.2	2	錆化 (△)
F25	19	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	7区 B17 II'層	小さな頭部をもつ釘。足部先端は欠落する。頭部の平面形は見かけ上不整形五角形。片側に打ち抜いている可能性大。体部の横断面形は方形。	4.6	1.2	0.9	6.9	2	錆化 (△)
F26	20	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 E14 II'層	足部先端が小さく逆L字状に曲がった釘。体部上半から頭部が欠落する。上手側には幅4.5cm前後の方形の断面が露出する。	3.6	0.8	0.75	2.9	1	錆化 (△)
F27	21	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 F14 II'層	頭部が左側に広げられた小振りの釘破片。足部側が欠落し破面となる。横断面形は方形。	3.3	0.9	0.6	2.7	1	錆化 (△)
F28	22	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 F15 II'層	頭部を左側に折り広げた痕跡をもつ釘。足部先端まで生きており、全長4.2cmと短い。頭部は肩部がかなり潰れており、肩部が丸みをもつ。体部の横断面形は長方形。	4.2	1.0	0.6	2.4	1	錆化 (△)
F29	23	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	4区 G19 II'層	釘の体部から足部破片。表面の酸化土砂が厚くやや不明瞭。上手側破面の可能性大。体部から頭部が欠落か。	2.8	0.9	0.8	1.9	1	錆化 (△)
F30	25	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4区 F20 II'層	逆L字状に曲がった棒状不明品。両端部が小さく欠落する。上手側の端部は徐々に細くなり、横断面形は長方形。左側の端部も徐々に細くなり、断面形は方形ないしは丸。	4.2	3.0	0.7	4.2	2	錆化 (△)
F31	26	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4区 G20 II'層	方形断面をもつ棒状不明品。短軸側の両端部が破面となる。釘との手かかりに欠ける。	2.8	0.85	0.6	2.1	2	錆化 (△)
F32	24	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	4区 F20 II'層	三片に割れた棒状不明品。はっきりした頭部をもたず、足部側に向かい徐々に細くなる。破面の横断面形は5mmほどの方形。釘とは考えにくい。外周部の酸化土砂が厚く、ふくらみが激しい。	11.2	1.6	1.55	20.4	1	錆化 (△)
F33	29	98	鉄製品 (鍛造品) 大型釘	3区 E15 II層	頭部をもつ完形的大型釘。表面には酸化土砂が厚く見かけ上太くなってしまっている。頭部は2.3cm、厚さ1.6cmほどの隅丸方形気味で笠形に広がっている。体部は徐々に足部に向かい細くなり、細く尖った足部で収束する。	16.1	2.1	1.9	72.0	4	錆化 (△)
F34	30	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 E15 II層	しっかりした頭部をもつ中型の釘。足部先端は欠落している可能性あり。横断面形は方形。頭部は平面形が長手の三角形で、左側端部は酸化土砂に影響されている。本来は1.1cm前後の方形でであろう。つくりとしては構成No.27と同様笠形の頭である。	6.1	2.0	1.2	16.2	3	錆化 (△)
F35	31	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 E15 II層	頭部と体部半ばから足部を欠く釘。頭部が左側にわずかに傾斜している。錆化が激しく進んでいる。	2.4	0.8	0.7	3.1	2	錆化 (△)
F36	32	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	3区 F15 II層	頭部が左側にわずかに突出する小型の釘破片。足部先端は欠落する。頭部沿いの先端に浅い窪みをもち、頭折れ釘であったことがわかる。頭は平坦でなくやや傾斜する。	2.6	0.9	0.7	1.9	1	錆化 (△)
F37	33	98	鉄製品 (鍛造品) 釘?	4区 E19 II層	弧状に曲がった棒状の鉄製品。錆化が進み、外周部の酸化土砂も厚くはつきりしない面も多い。釘の体部から足部の破片と推定しておく。	4.6	1.0	1.05	6.8	2	錆化 (△)

第8節 調査地内出土石製品・鉄関連遺物

遺物番号	構成番号	図	遺物名	地区層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
F38	34	98	鉄製品 (鍛造品) 釘?	3区 G15 II層	短軸の両側部に破面をもつ逆L字状に曲がった鉄製品。破面からみて下手側が細くなる形態で、長方形断面を示す。	2.6	1.0	0.75	3.3	1	錆化 (△)
F39	35	98	鉄製品 (鍛造品) 釘?	3区 E15 II層	逆L字状に曲がった釘状の鉄製品の足部破片。錆化と酸化土砂により横断面形がはっきりしない。	1.7	0.6	0.5	1.1	1	錆化 (△)
F40	36	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	7区 B17 II層	やや長方形断面をもつ棒状不明品。短軸の両側部が破面となる。側面は完全な平坦ではなくわずかにふくらみをもつ。釘ではなさそうである。	3.1	1.0	0.8	5.3	3	錆化 (△)
F41	37	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明品	3区 F15 II層	短軸の両側部が破面となった棒状不明品。横断面形は方形気味。小片で遺物名を確定しにくい。	2.2	0.7	0.58	1.7	2	錆化 (△)
F42	48	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	7区 南側壁面	わずかに左側に突出する頭部をもつ中型の釘。足部側の端部は破面となり、頭部は隅丸方形気味。外周部の酸化土砂が厚く、外見上は釘とはみにくい。含鉄部がわずかに残る。	7.2	1.6	1.4	23.8	4	H (○)
F43	45	98	鉄製品 (鍛造品) 棒状未製品	7区 B25 I層上面	緩やかな弧状に反った棒状の鉄製品。横断面形は方形から長方形で、上手側の端部は斜めに成形されている。下手側の端部は破面。釘または棒状の鉄製品をつくりかけている未製品。側面の平坦面は上手側がやや歪んでいる。	7.8	1.1	0.8	8.3	2	錆化 (△)
F44	49	98	鉄製品 (鍛造品) 釘	8区 C16・17・18 南壁トレンチ	小型の釘の体部破片。頭部は欠損し、足部側も破面となる。横断面形は方形。	2.6	0.8	0.6	1.9	2	錆化 (△)
F45	12	98	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	7区 B16 III層	中型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面は生きており、上下面ともに工具痕様のへこみを残す。左側部と下手側が破面。含鉄部が分散しているためか、滓表面の黒みが強い。本来の滓の4分の1ほどの破片。	5.3	4.2	3.4	100.5	6	錆化 (△)
F46	13	98	椀形鍛冶滓 (極小)	3区 F14 III層	極小の椀形鍛冶滓の半欠品。上手側側部が主破面となる。左側部にも小破面あり。上面は平坦で、下面は短軸方向に突出する。鍛錬鍛冶滓か。	3.1	3.0	1.5	16.0	5	無し
F47	14	98	鍛冶滓	3区 F15 III層	小塊状の鍛冶滓。表面は酸化土砂に覆われており、下面の中央部のみに滓がのぞく。鍛冶滓の遊離片か。	2.3	1.7	1.4	6.4	2	無し
F48	15	98	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	2区 G7 包含層	極小の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。左側の側部のみが破面となる。上面はわずかに窪み、右側の肩部はなだらかに下る。下面は凹凸がやや激しい。滓量の少ない段階の椀形鍛冶滓か。下面下手には薄皮状の工具付着滓が巻き込まれている。滓表面は2次的な酸化色となり、明るい紫紅色。	3.7	2.7	2.0	21.0	7	錆化 (△)
F49	52	98	椀形鍛冶滓 (極小・工具痕付)	7区 B16 攪乱	下面に工具痕を残す極小の椀形鍛冶滓の肩部寄りの破片。上下面と右上手側の側部が生きている。上面は広い楕状に平坦化しており、工具痕の可能性をもつ。滓は密度が低く、下手側側部から上手側に向かい中空となっている。中空部の横断面形は幅1cm、厚さ5mmほどの長方形で、工具痕の可能性が大。また、右側面と下面に3単位以上の平坦な工具のあたり痕を残す。すべて下手側からの差し込みである。本来は小型の椀形鍛冶滓の右上手寄りの破片か。	5.4	3.8	2.7	40.8	5	無し
F50	28	98	鍛冶滓	7区 B24 II'層	表面に木炭痕の凹凸の激しい鍛冶滓片。左側部のみが破面となる。滓質は緻密。上下遊の可能性もやや残る。	3.8	2.7	1.9	19.4	3	無し
F51	51	98	粘土質溶解物	7区 B25 I層	粘土質溶解物の小片。上面は黒色ガラス質で流動気味。左側部の窪みは木炭痕。右側部から下面は鍛冶炉の炉壁に接している可能性大。羽口先の溶解物か。	2.75	1.4	1.1	3.9	1	無し
F52	53	98	椀形鍛冶滓 (中)	7区 B17 土坑11 下層	本遺跡では最大重量をもつ中型の椀形鍛冶滓。上下面と右側から下手側の側部が生きており、主破面は左側部と上手側肩部となる。上面は緩やかに窪み、波状の窪みが残される。短軸方向に向かう幅1cmほどの浅い窪みは、工具痕の可能性を残す。下面は左よりの中央部が最大肥厚部となる。やや立ち上がりが急な断面形となる。滓は内部に中小の気孔を乱雑に残す。表面の風化が進む。	7.1	6.0	3.6	180.0	6	無し

銅製品

遺物番号	構成番号	図	遺物名	地区層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度
C1	50	98	銅製品 (煙管)	7区 B22 I層	雁首を欠く煙管破片。基部側の端部は辛うじて生きている。破面右寄りに窪みもち、上下方向に潰れている。雁首の弧状は緩やかで古手の煙管とは考えにくい。	7.1	0.9	0.9	5.6	1	特L (★)

第4章 特論

第1節 門前上屋敷遺跡から出土した木製品・炭化物の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1、はじめに

門前上屋敷遺跡では、弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑、中世の溝状遺構等が検出されている。弥生時代中期の竪穴住居跡のうち、竪穴住居1では柱穴内に柱根と考えられる炭化物が残存していた。また、弥生時代中期の土坑内からも炭化物が出土している。一方、中世の溝状遺構からは木製品が出土している。

本報告では、木材利用に関する資料を得るために、出土した木製品および炭化物の樹種同定を実施する。

2、試料

試料は、弥生時代中期の竪穴住居跡や土坑から出土した炭化物16点（試料1-16）と中世前期の溝13から出土した木製品1点（試料17）の合計17点である。

3、分析方法

表7 樹種同定結果

試料17の木製品は、破損した箇所がある面から、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉

試料番号	遺構	時期	用途など	樹種
1	竪穴住居1 P2	弥生時代中期	柱根	広葉樹（環孔材）
2	土坑9	弥生時代中期	炭化物	モミ属
3	土坑9	弥生時代中期	炭化物	コナラ属アカガシ亜属
4	土坑9	弥生時代中期	炭化物	スダジイ
5	土坑9	弥生時代中期	炭化物	マキ属
6	土坑9	弥生時代中期	炭化物	スダジイ
7	土坑9	弥生時代中期	炭化物	スダジイ
8	土坑9	弥生時代中期	炭化物	広葉樹（環孔材）
9	土坑10	弥生時代中期	炭化物	クリ近似種
10	土坑10	弥生時代中期	炭化物	広葉樹
11	土坑10	弥生時代中期	炭化物	ヤマグワ
12	土坑10	弥生時代中期	炭化物	クリ近似種
13	土坑10	弥生時代中期	炭化物	不明
14	土坑11	弥生時代中期	炭化物	クリ近似種
15	土坑11	弥生時代中期	炭化物	不明
16	土坑11	弥生時代中期	炭化物	スダジイ
17	溝13	中世前期	木製品	スギ

末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から観察を同定した。

炭化物は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定した。

4、結果

樹種同定結果を表7に示す。試料17の木製品は針葉樹のスギに同定された。炭化物は、試料1・8は共に環孔材の道管配列を有する広葉樹材であり、道管壁の厚さや道管配列等から異なる種類に由来すると考えられる。しかし、遺存状態が悪く、道管内にも泥が付着して組織の特徴を観察することができなかったため、種類の同定には至らなかった。また、試料10は道管が認められることから広葉樹材であるが、小片で遺存状態が悪く、組織配列の特徴等が観察できなかったため、種類の同定には至らなかった。試料13・15は、炭化物は認められるが、組織等が全く観察できなかったため、不明とした。その他の炭化物は、針葉樹2種類（モミ属・マキ属）と広葉樹4種類（コナラ属アカガシ亜属・クリ近似種・スダジイ・ヤマグワ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

試料は年輪界および晩材部を欠く。軸方向組織は仮道管のみで構成され、垂直樹脂道および樹脂細胞は確認できない。放射組織は柔細胞のみで構成され、水平樹脂道および放射仮道管は確認できない。柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔は遺存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、垂直樹脂道は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、水平樹脂道および放射仮道管は認められない。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・マキ属 (*Podocarpus*) マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、垂直樹脂道は認められない。また、仮道管内壁にはらせん肥厚は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、水平樹脂道および仮道管は認められない。分野壁孔はヒノキ型で1-2個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で接線方向に1-2個幅で放射状に配列する。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・クリ近似種 (cf. *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

試料はいずれも年輪界で割れており、早材部の多くを欠く。早材部側の道管に比べて晩材部の道管は小径であり、早材部から晩材部にかけての道管径の変化が大きいことから環孔材と判断される。晩材部の道管は、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

スダジイと比較すると、早材部の道管径が大きく、また接線方向にも隙間なく配列する点で異なる。しかし、小片で1年分の道管配列が観察できなかったこと、複合放射組織の有無が確認できなかったこと等からコナラ節の可能性も残るため、近似種とした。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射状に配列する。早材部に比較的大きい道管

が1-2個配列したのち、急激に管径を減じて火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は2-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管の穿孔は単穿孔、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

5、考察

(1) 木製品の樹種

木製品は、長軸約31cm、短軸約3.3-3.5cmの板状を呈する。一方の側面に幅3.0-3.1cm間隔の刻みがある。また、一方の端部から約3.8cmの付近に1.5cm×3.0cmの四角い孔が開けられている。木製品の木取は、広い面が板目となる木取で、年輪数は確認した範囲で7-8本認められたが、樹芯は認められない。樹種は針葉樹のスギであった。

木製品の形状から、年輪や放射組織に沿って板状に割りとったのち、細かな加工を施したことが推定される。スギは、木理が通直で割裂性が高く、比較的容易に板状の部材を割りとることが可能である。スギが利用された背景には、このようなスギ材の加工性が関係していると考えられる。

(2) 炭化物の樹種

試料1は堅穴住居の柱穴から出土した柱根である。環孔材の道管配列を有することが確認されたが、種類の同定には至らなかった。周辺地域では、茶畑六反田遺跡で弥生時代中期末の住居跡から出土した柱材の樹種同定が行われており、アカガシ亜属、ツバキ属、ヤマグワが確認されている。アカガシ亜属は放射孔材、ツバキ属は散孔材、ヤマグワは環孔材で組織は異なるが、いずれも重硬で強度が高い材質を有する点で共通点がある。この結果に基づけば、本遺跡の環孔材についても重硬で強度が高い樹種に由来する可能性がある。

土坑では、土坑9・10・11の3基から炭化物が出土している。土坑9の炭化物は、いずれも底面よりやや浮いた状態で出土しており、試料3-8がほぼ一ヶ所からまとまって出土し、試料2がそれよりもやや離れた位置から単独で出土している。樹種は、試料2がモミ属、試料3-8はスタジイ3点、アカガシ亜属、マキ属、環孔材が各1点であった。比較的種類数が多いことが特徴である。材質をみると、アカガシ亜属とスタジイは重硬で強度が高い。モミ属は、軽軟な部類に入り、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易であるが保存性は低い。マキ属は、針葉樹としては比較的重硬で強度が高い部類に入り、加工はやや困難であるが割裂性は高い。これらの種類のうち、アカガシ亜属、スタジイ、マキ属は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する種類である。一方、モミ属は、本遺跡の立地を考慮すれば最も低標高地まで生育するモミの可能性はある。モミは、暖温帯上部から冷温帯下部にかけての中間温帯の構成種とされる(山中, 1979)。このことから、土坑9の木材は、暖温帯常緑広葉樹林の構成種を主としながら中間温帯の構成種も混じり、材質的にも重硬なものから軽軟なものまで含まれていることになる。また、土坑内でモミ属を除く強度の高い種類がほぼ一ヶ所に集中し、モミ属のみやや離れた場所から出土していることから、試料2と試料3-8とで炭化物の由来が異なる可能性もある。

一方、土坑10・11から出土した炭化物は、上屋材の可能性もあるが、用途の詳細は不明とされている。樹種は、種類不明のものがあるが、土坑10でクリ近似種2点、ヤマグワ1点、土坑11でクリ近似

種とスダジイが各1点確認された。いずれの土坑でも複数種類が認められ、クリ近似種が確認された点で共通点がある。また、クリ近似種も含めて、いずれも重硬で強度の高い木材で構成されている。土坑9の結果と比較すると、土坑11から出土したスダジイに共通点があるのみで、落葉広葉樹を主とする点、針葉樹が混在しない点などで種類構成に違いが認められる。

土坑9と土坑10・11とで種類構成が異なる背景には、各土坑の用途・機能の違い、炭化物の由来の違い等が考えられるが、現時点では詳細は不明であり、今後の検討課題として残される。また、周辺地域での類例も無いため、今後の類例蓄積も必要である。

引用文献

山中二男, 1979, 日本の植生〈補訂版〉. 築地書館, 223p.

第2節 門前上屋敷遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1、分析目的

この分析では、蛍光X線分析法により胎土中の成分（元素）量を測定し胎土の違いから、以下の検討課題について調べた。

- (1) 門前上屋敷遺跡出土弥生時代中期の土器と、茶畑第1・茶畑六反田・押平弘法堂・名和飛田の同時期の各遺跡と比較し、遺跡ごとで胎土に差異があるかどうか。
- (2) 門前上屋敷遺跡出土中世土器と、茶畑六反田・門前第2・中尾第1の同時期の各遺跡と比較し、遺跡間で胎土に違いがあるかどうか。

2、分析結果

蛍光X線分析法で測定した元素は、Si（珪素）、Ti（チタン）、Al（アルミニウム）、Fe（鉄）、Mn（マンガン）、Mg（マグネシウム）、Ca（カルシウム）、Na（ナトリウム）、K（カリウム）、P（リン）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Zr（ジルコニウム）の13元素である。このうち、表8の分析値一覧表から差がみられたのはCa、K、Rb、Sr、の4元素であった。これらの元素を用いてXY散布図を作成し検討した。

表8には、今回分析した試料の結果を載せており、弥生時代中期の壺・甕・高坏・鉢など25点、中世前期の皿・杯・鉢・甕・鍋・羽釜など25点の合計50点である。

図101K-Ca、図102Rb-Srの散布図より、弥生中期の各遺跡との比較を行った。その結果、各遺跡ともほぼ同じ胎土であった。つまり、Ca量が1.0%~2.0%、K量が0.5%~1.5%およびSr量が150ppm~400ppm、Rb量が100ppm~250ppmの領域にそれぞれ分布した。

図103K-Ca、図104Rb-Srの散布図では、門前上屋敷遺跡内での中世土器の器種別による胎土の差異について検討した。その結果、土師器の皿・杯がCa量とSr量の違いで二つの胎土（Ⅰ・Ⅱ類）に分類できた。Ⅰ類には35（皿）、37・39・44（杯）が、Ⅱ類にはそれ以外の皿・杯が分布している。また、鍋は土師質・瓦質の質に関係なくほぼ一つにまとまり、土師器の鍋がⅡ類（皿・杯）の分布域に入った。そして、羽釜・片口鉢（瓦質）・鉢（須恵器）・甕（須恵器）がCa量やSr量が少ない領域に分布し、土師質の皿・杯・鍋と胎土が異なる結果となった。

図105K-Ca、図106Rb-Srの散布図では、門前上屋敷の中世土器と茶畑六反田・門前第2・中尾第1の各遺跡出土土器と比較した。その結果、比較したすべての遺跡の土師質の杯・皿・鍋はCa量が1.0%以下、Sr量が300ppm以下に分布し、図103・104の散布図のところで述べた門前上屋敷遺跡の土師器ⅢⅠ類と識別が可能であった。

3、まとめ

門前上屋敷遺跡出土の弥生・中世土器の蛍光X線分析法による胎土分析を実施し、以下のことが明確になった。

弥生時代中期の土器で遺跡ごとに胎土を比較したところ、各遺跡とも胎土的に差異はみられなかつ

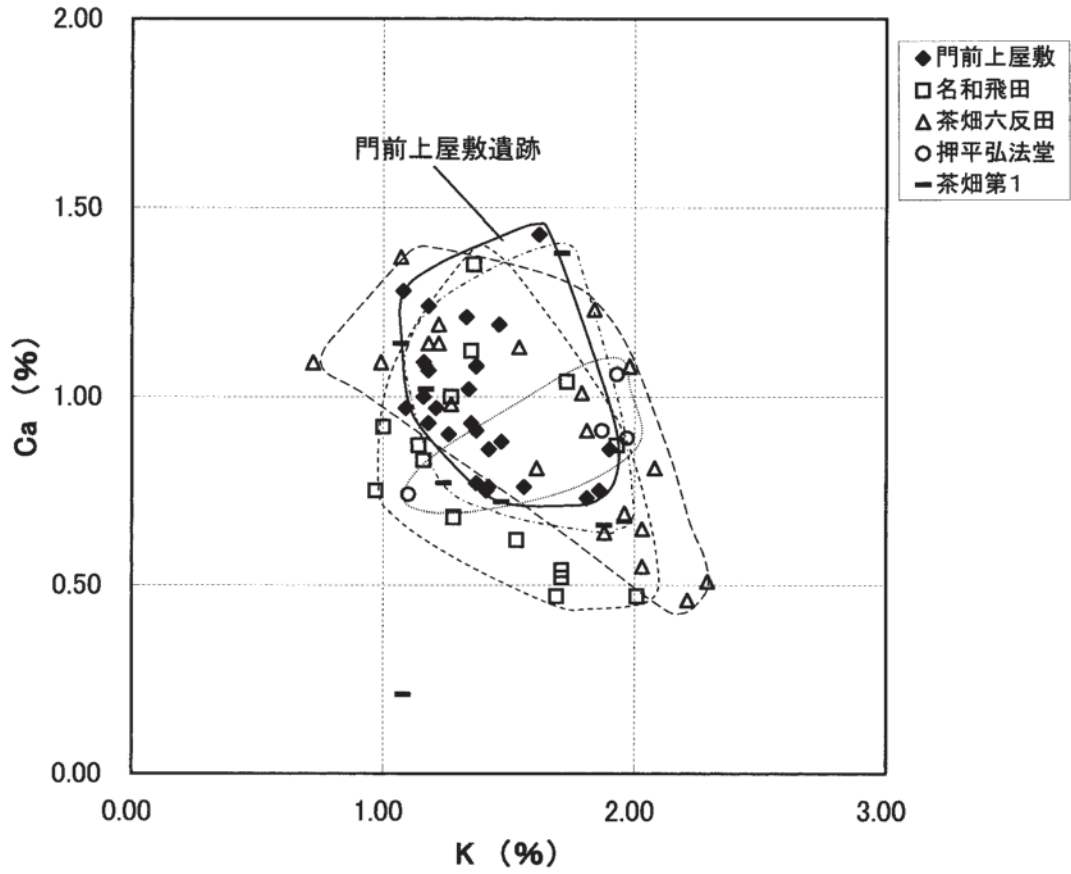


図101 弥生中期の各遺跡との比較 (K-Ca)

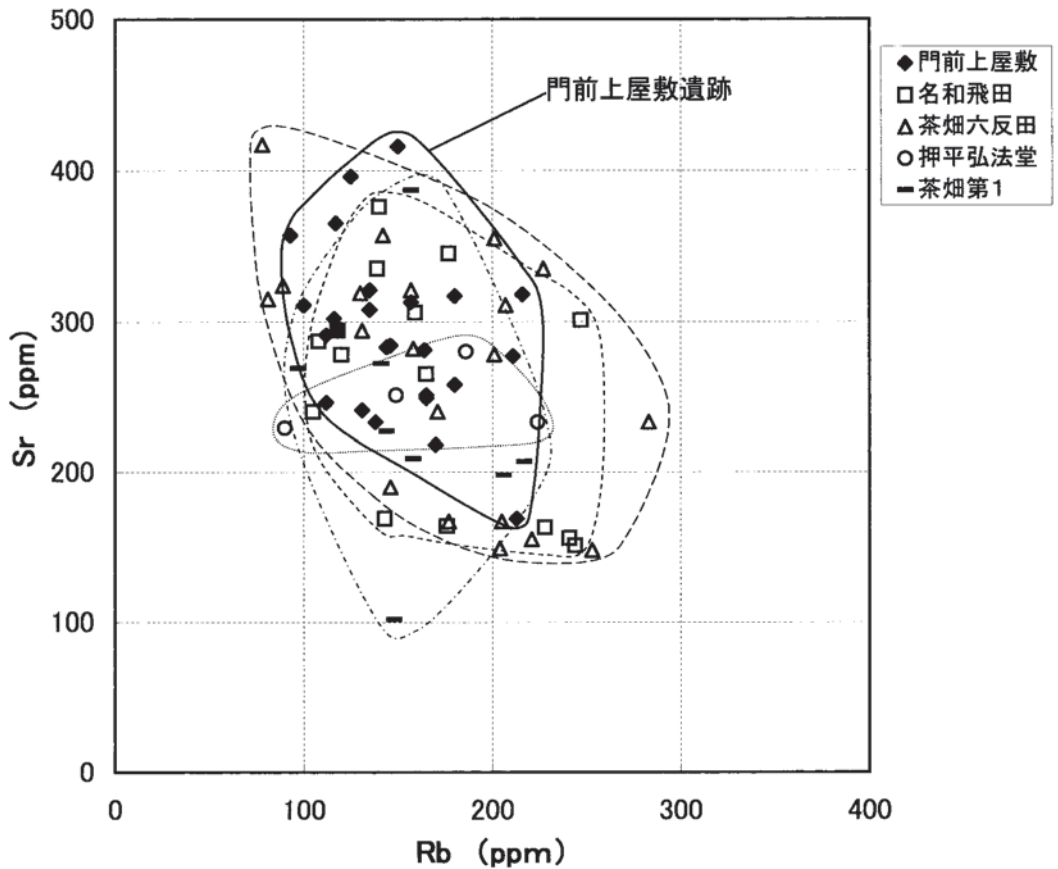


図102 弥生中期の各遺跡との比較 (Rb-Sr)

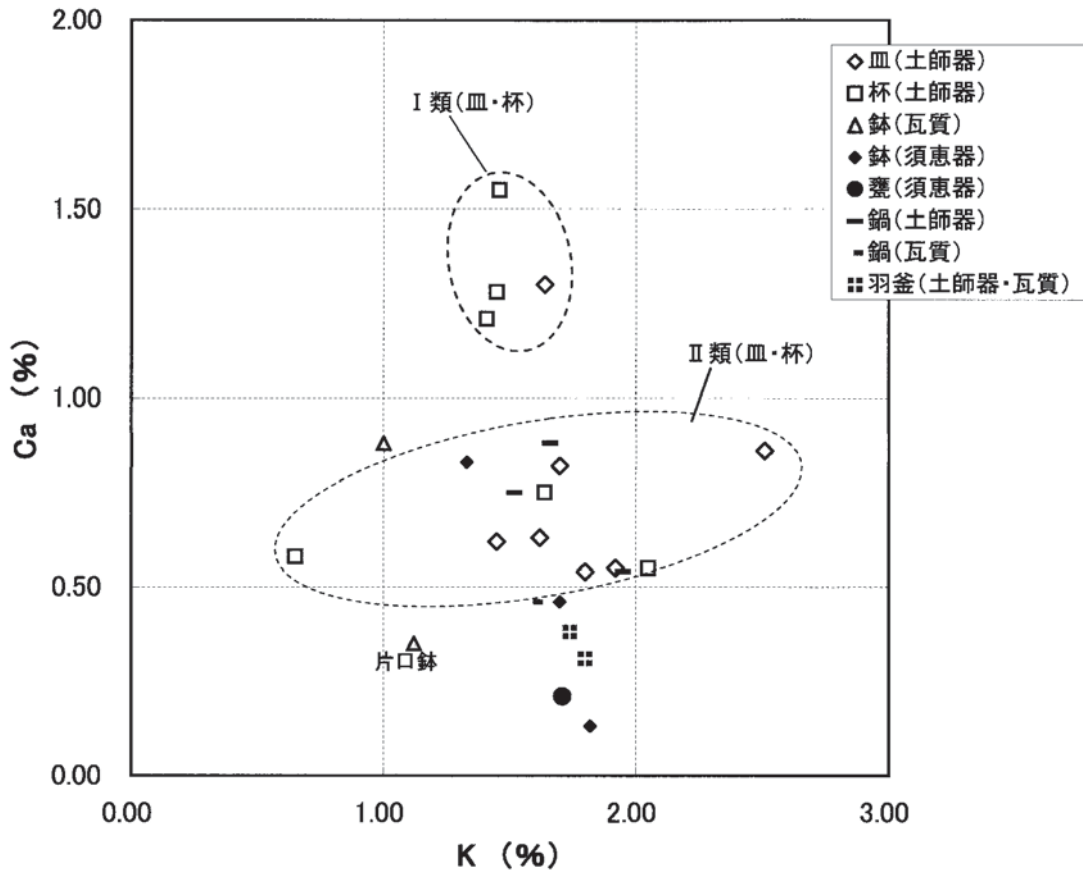


図103 中世土器の器種別による胎土比較 (K-Ca)

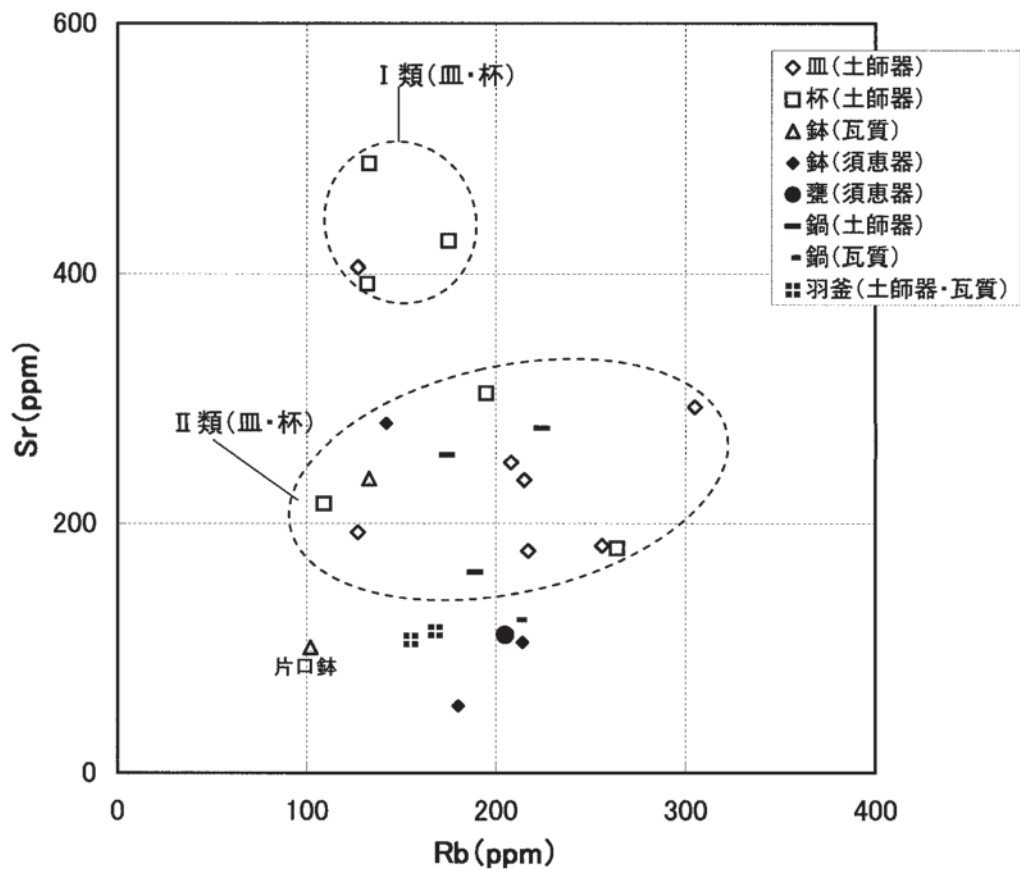


図104 中世土器の器種別による胎土比較 (Rb-Sr)

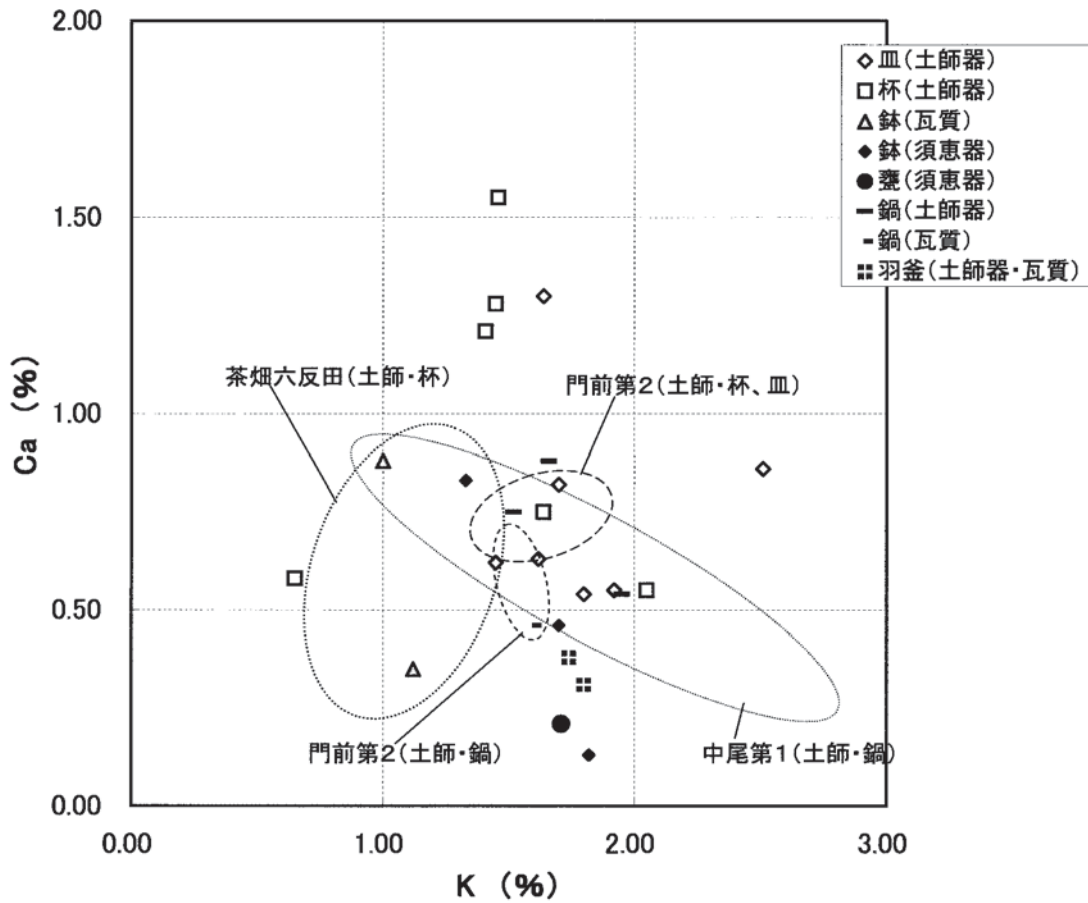


図105 中世土器（土師器）の各遺跡との胎土比較（K—Ca）

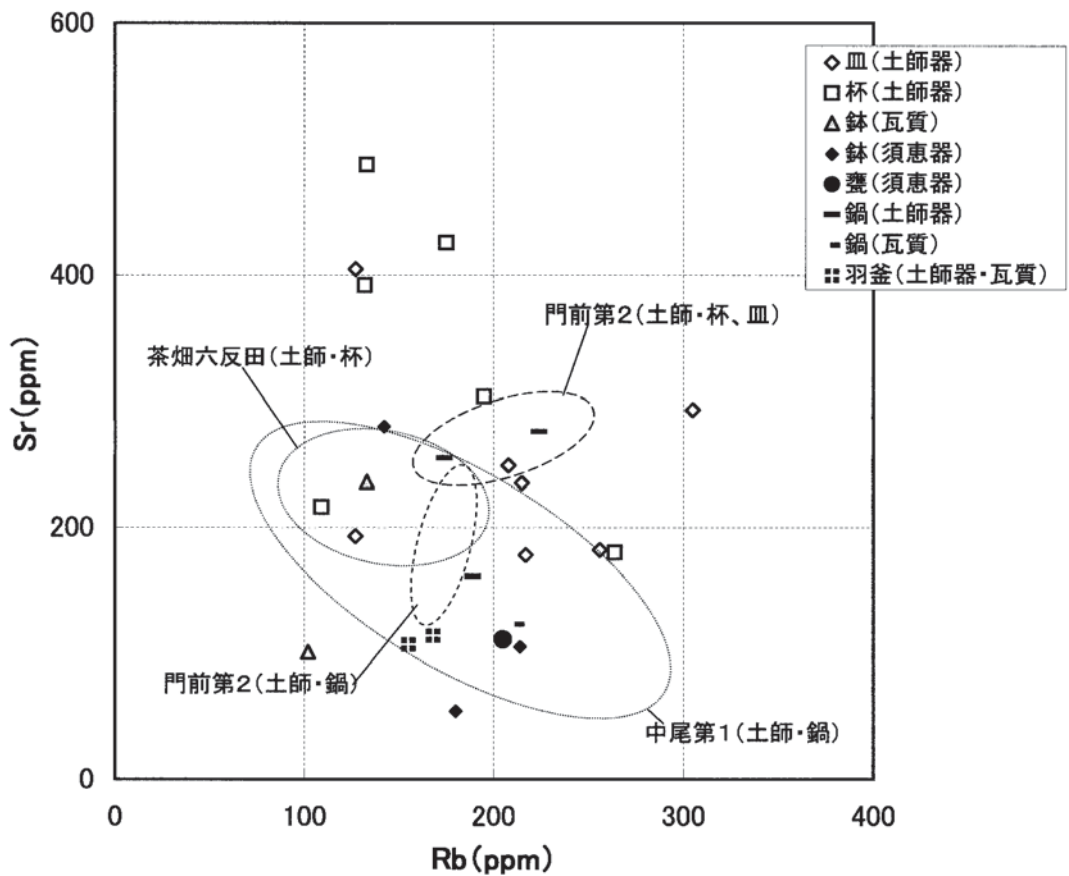


図106 中世土器（土師器）の各遺跡との胎土比較（Rb—Sr）

第3節 門前上屋敷遺跡における環境考古学分析

奈良教育大学 金原正明

古環境研究所 金原正子 岡山邦子

1、はじめに

門前上屋敷遺跡では、中世前期の溝跡堆積物の花粉分析と珪藻分析の環境考古学分析を行い、環境と植生、農耕の復元を試みた。財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターからは、分析を行う貴重な機会を頂いた。なお、本分析は、文部科学省科学研究費特定領域研究『中世考古学の総合的研究』「自然科学分析による中世の環境変動の解明と農耕変遷の究明」の一環として行った。

2、試料

試料は、門前上屋敷遺跡の3区溝9断面より採取された試料①（明白褐色土）、試料②（黒褐色土）、試料③（黒褐色土）、試料④（黒褐色土）、試料⑤（黒褐色土）、試料⑥（黒褐色土）、試料⑦（黒褐色土）、試料⑧（黒褐色土）、試料⑨（黒褐色土）、試料⑩（灰褐色土）、以上計10点である。

3、花粉分析

（1）原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

（2）方法

花粉粒の分離抽出は、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島

第4章 特論

倉 (1973) および中村 (1980) をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

(3) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉23、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉22、シダ植物孢子2形態の計50である。これらの学名と和名および粒数を表9に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図107に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。また寄生虫卵についても同定した結果、1分類群が検出された。

以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、モクセイ科、ニワトコ属-ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科

[草本花粉]

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

[シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

[寄生虫卵]

鞭虫卵

以下にこの寄生虫卵の特徴を示す。

・鞭虫 *Trichuris trichiura*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3~6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

(4) 花粉群集の特徴

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、樹木・草本花粉も比較的多い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属が優占し、カヤツリグサ科、アブラナ科が伴われる。アブラナ科は上位に向かい増加傾向を示す。ソバ属が試料④、⑦、⑧、⑨から、ササゲ属が試料③から出現する。樹木花粉ではスギ、マツ属複維管束亜属、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。樹木

表9 門前上屋敷遺跡における花粉分析結果

学名	分類群和名	3区壁面									
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
Arboreal pollen	樹木花粉										
<i>Abies</i>	モミ属			1	1			1	1	1	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属									1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1	16	4	10	3	5	6	6	6	6
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		18	16	10	1	29	25	17	3	3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	1	7	1	2	1	5	3	2	2	2
<i>Juglans</i>	クルミ属				2		1				
<i>Platycarya strobilacea</i>	ノグルミ								1		1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属							1	1		1
<i>Betula</i>	カバノキ属		1	3	1			2			
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			5	5			7			1
<i>Castanea crenata</i>	クリ		6	18	17	7	3	2	3	3	3
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1	10	21	4	4	8	12	2	3	3
<i>Fagus</i>	ブナ属						3				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	5	7	3		8	2	5	4	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		8	25	11	1	9	3	5	7	7
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1		1			1			
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ		1	1	4		4	1	1		
<i>Acer</i>	カエデ属				1						
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ		1	3	1	2					
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1		2	2		1		1		
<i>Elaeagnus</i>	グミ属			1							
Oleaceae	モクセイ科										1
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属		13		2						
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉										
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	29	40	55	6	40	63	29	15	15
Leguminosae	マメ科			1					1		
Araliaceae	ウコギ科				1						
Nonarboreal pollen	草本花粉										
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属				1						
Gramineae	イネ科	8	55	98	95	24	119	88	117	67	18
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1	2	8	12		3	2	2		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	23	28	23	16	16	41	30	37	4
<i>Polygonum</i>	タデ属				1					1	
<i>Rumex</i>	ギシギシ属		1								
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属				1			1	4	3	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		6	5	5		13	10	10	12	6
Caryophyllaceae	ナデシコ科		3		1		6	3	2	5	
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属					1					
Cruciferae	アブラナ科		11	4	11	9	9	27	20	38	3
<i>Vigna</i>	ササゲ属			1							
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属			2							
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		7	5	8	12		13	8	5	2
Apioidae	セリ亜科		4	3	6		4	12	1	3	1
Solanaceae	ナス科						1		1		
Valerianaceae	オミナエシ科						1				
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキツル				1						
Lactuoidae	タンポポ亜科		5	5	5	4	7	13	19	21	1
Asteroidae	キク亜科		8	2	9	3	3	8	3	12	
<i>Xanthium</i>	オナモミ属					1	1		2		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	4	78	108	75	46	78	135	123	111	23
Fern spore	シダ植物胞子										
Monolate type spore	単条溝胞子		28	33	21	8	16	14	10	34	25
Trilate type spore	三条溝胞子		8	19	12	6	9	11	10	13	4
Arboreal pollen	樹木花粉	5	87	108	77	19	84	60	45	33	3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	29	41	56	6	40	63	30	15	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	14	203	269	254	116	261	353	342	315	58
Total pollen	花粉総数	22	319	418	387	141	385	476	417	363	61
Pollen frequencies of 1 cm ³	試料 1 cm ³ 中の花粉密度	1.8	3.3	7.0	2.8	1.2	1.3	9.1	9.0	5.6	4.9
		×10 ²	×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ²	×10 ²	×10 ³	×10 ³	×10 ²
Unknown pollen	未同定花粉	4	12	8	13	4	6	8	5	7	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	36	52	33	14	25	25	20	47	29
Helminth eggs	寄生虫卵										
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵				1						
Total	計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	試料 1 cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
					×10						
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科が比較的高率に出現する。鞭虫卵が試料④から検出された。

4、珪藻分析

(1) 原理

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

(2) 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から1 cm³を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(3) 分類群

試料から出現した珪藻は、中－真塩性種（汽－海水生種）1分類群、貧－中塩性種（淡－汽水生種）3分類群、貧塩性種（淡水生種）85分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表10に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図108に示す。珪藻分析結果は図に示すように分帯の区分を行った。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧－中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Amphora montana, *Cocconeis placentula*, *Cymbella silesiaca*, *Diploneis* spp., *Eunotia praerupta*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula contenta*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Nitzschia palea*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia interrupta*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia* spp., *Pinnularia subcapitata*

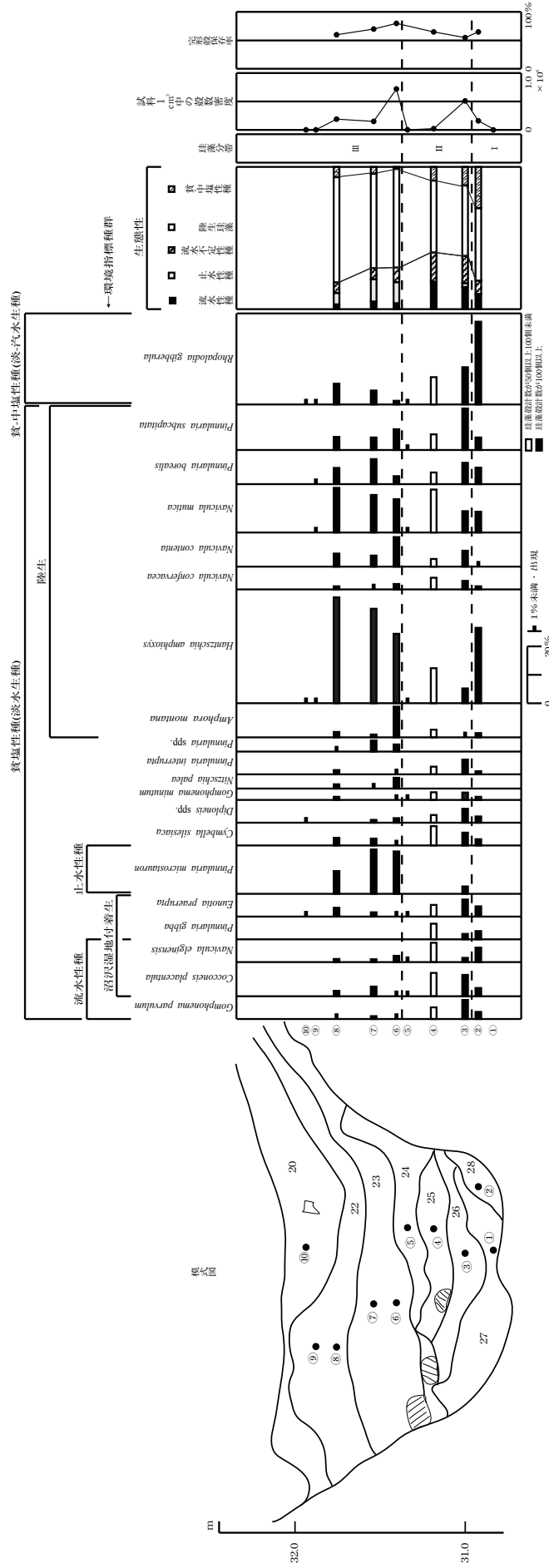


図108 門前上屋敷遺跡の3区溝9断面における主要珪藻ダイアグラム

(4) 珪藻群集の特徴

3区溝9断面の珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より3帯の珪藻分帯に分かれた。

1) I帯 (試料①、②)

貧-中塩性種 (淡-汽水生種) よりも貧塩性種 (淡水生種) の占める割合が高い。貧塩性種 (淡水生種) では陸生珪藻が優占し、*Hantzschia amphioxys*を主に、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*が出現する。貧-中塩性種 (淡-汽水生種) では*Rhopalodia gibberula*が優占する。流水性種や沼沢湿地付着生指標種群の*Gomphonema parvulum*、*Cocconeis placentula*、*Navicula elginensis*、*Pinnularia gibba*、*Eunotia praerupta*などが低率に出現する。

2) II帯 (試料③~⑤)

貧-中塩性種 (淡-汽水生種) がやや減少し、貧塩性種 (淡水生種) では陸生珪藻が優占する。下位の分帯より流水性種が微増する。陸生珪藻では*Hantzschia amphioxys*が減少し、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*が増加する。流水性種の*Gomphonema parvulum*、*Cocconeis placentula*なども少し増加する。貧-中塩性種 (淡-汽水生種) では*Rhopalodia gibberula*が下位の分帯より減少する。

3) III帯 (試料⑥~⑩)

貧塩性種 (淡水生種) の陸生珪藻が増加する。陸生珪藻は、*Hantzschia amphioxys*を主に、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata*、*Navicula contenta*が増加する。止水性種の*Pinnularia microstauron*が比較的高率に出現し、流水性種、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) は減少する。

5、考察

草本花粉が多く、周辺にはヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科を主に、チドメグサ亜科、アカザ科-ヒユ科、タンポポ亜科、キク亜科の草本が生育していた。やや多いクワ科-イラクサ科も草本の人為地を好むカナムグラとみなされ、明らかな栽培植物のソバ属も検出される。いずれもやや乾燥を好む人里植物で畑作雑草である草本であり、周辺はこれらの草本が分布しやや乾燥した人里 (集落域) やソバ、ササゲ属 (アズキなど)、アブラナ科 (アブラナなど) などの畑地であったと考えられる。

溝9は陸生珪藻が多いことから湿った環境が優勢であるが、中央の深部は滞水していたと考えられる。下部 (試料①~⑤) では流水性の珪藻がやや多く、流れる状況であり、また貧-中塩性種が出現し、塩分濃度のある生活排水が流れ込んでいたと推定される。上部 (試料⑥~⑧) では止水性種がやや多く、水が停滞しよどんだ状況が示唆され、下部と環境が異なる。

森林は、樹木花粉の占める割合が低いため、やや遠方に分布していたと考えられる。下部 (試料①~⑥) ではスギ林、コナラ属アカガシ亜属やシイ属の照葉樹林を主に、クリ林、ニヨウマツ (マツ属複維管束亜属) 林が分布し、上部 (試料⑦~⑧) では、コナラ属アカガシ亜属やシイ属の照葉樹林が減少する。

6、まとめ

門前上屋敷遺跡の中世前期の溝9堆積物の花粉分析と珪藻分析を行った結果、周辺は人里植物や畑

作雑草の性格をもつ草本が分布し、やや乾燥した人里（集落域）やソバ、ササゲ属（アズキなど）、アブラナ科（アブラナなど）などの畑地であったと考えられる。溝9は、湿った環境が優勢で中央の深部は滞水し、下部（試料①～⑤）は流れのある状況で生活排水が流れ込んでいた。上部（試料⑥～⑧）は停滞しよどんだ状況で、下部と上部で環境が異なった。森林は、やや遠方に、下部（試料①～⑥）はスギ林、コナラ属アカガシ亜属やシイ属の照葉樹林などが分布し、上部（試料⑦～⑧）になると、照葉樹林の減少が行われた。

参考文献

- 中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol, Suppl. 15, p.131-506.
- Patrick, R.eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644 p.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.
- Patrick, R.eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.
- Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.

第4節 花粉分析・植物珪酸体分析

1. 門前上屋敷遺跡の花化石群集

パレオ・ラボ 新山 雅広

1、試料

花化石群集の検討は、①層（表土）～⑧層（Ⅵ層；地山）より採取された3区の8試料（上位より3-1～3-8）および4区の7試料（上位より4-1～4-5、4-7、4-8）の合計15試料について行った。各試料は、次の通りである。①層（表土；3-1、4-1）は、暗オリーブ褐色シルト。②層（Ⅰ層；3-2、4-2）は、黒褐色砂混じりシルト質粘土。③層（Ⅱ層；3-3、4-3）は、黒褐色砂混じりシルト質粘土で小礫が混じる。④層（Ⅱ'層；3-4、4-4）、⑤層（Ⅲ層；3-5、4-5）は、黒褐色砂混じりシルト質粘土。⑥層（Ⅳ層；3-6）は、黒褐色シルト質粘土。⑦層（Ⅴ層；3-7、4-7）、⑧層（Ⅵ層；3-8、4-8）は、黒色～黒褐色シルト質粘土ないし砂混じり粘土。時代については、②～④層が近世、⑤・⑥層が中世、⑦層が弥生時代と考えられており、⑦層検出面で耕作痕が確認されている。なお、これら15試料は、植物珪酸体（プラント・オパール）分析も行われた。

2、方法

花化石の抽出は、試料約2～3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3、花化石群集の記載

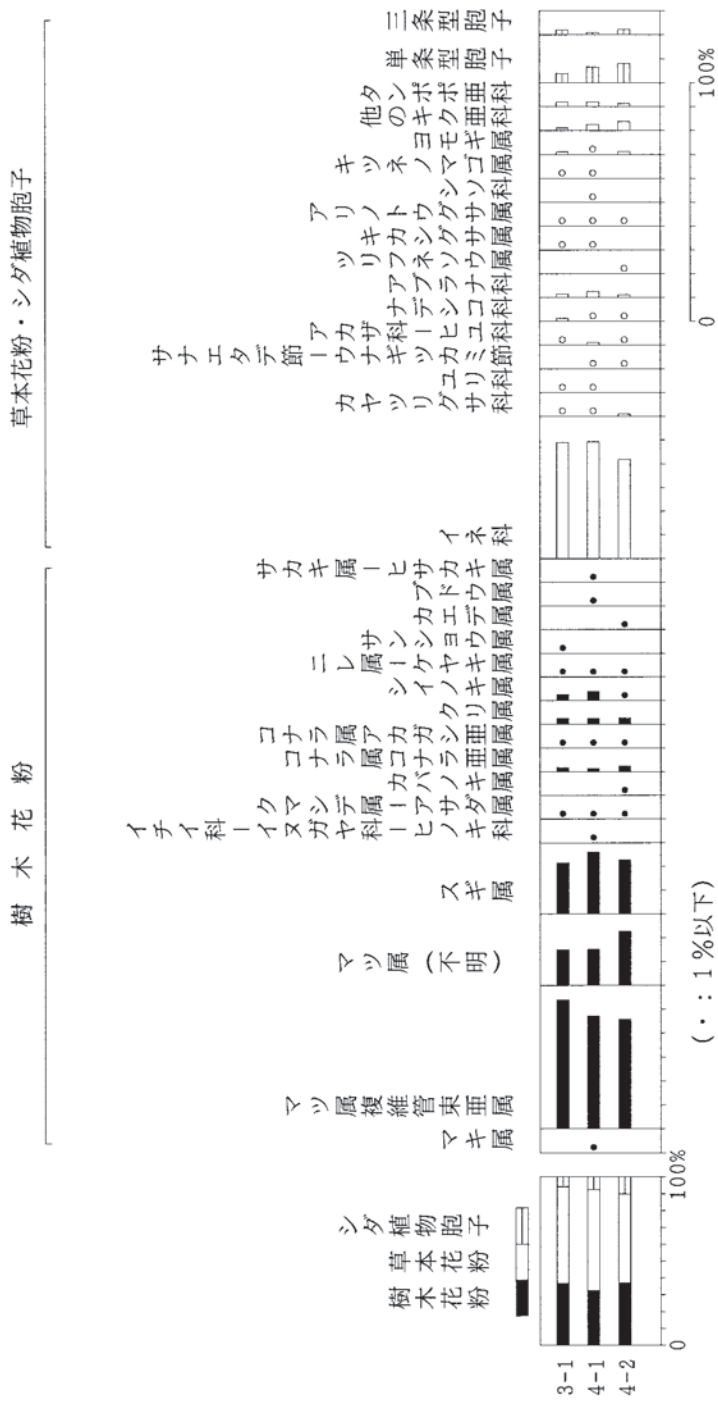
全試料で同定された分類群数は、樹木花粉16、草本花粉16、形態分類で示したシダ植物胞子2である。3-1、4-1（①層；表土）、4-2（②層；Ⅰ層）の3試料を除く各試料は、十分な花化石が産出せず、花化石分布図として示すことができなかった。3-1、4-1、4-2の花化石組成は、概ね類似しており、樹木花粉の占める割合は、30～40%前後である。その中で、マツ属複維管束亜属が50%前後で最も高率であり、次いで、スギ属が25%前後、マツ属（不明）が20%前後で出現する。他は、いずれも1%以下～4%と低率であり、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属、ニレ属-ケヤキ属などが出現する。草本花粉は、イネ科が40～50%前後と圧倒的に高率である。その他は、1%以下～4%未満と低率であり、カヤツリグサ科、ユリ科、サナ

表11 花粉化石産出一覧表

(3区試料：3-1～3-8 4区試料：4-1～4-5、4-7、4-8)

和名	学名	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5	3-6	3-7	3-8	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5	4-7	4-8
樹木																
マキ属	<i>Podocarpus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	122	1	-	-	-	-	-	-	106	101	-	-	-	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	34	-	-	-	-	-	-	-	34	50	-	-	-	-	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	49	1	-	-	-	-	-	-	59	50	2	-	-	-	-
イチイ科	T. - C.	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
クマシデ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	4	-	-	-	-	-	-	-	3	5	-	-	-	-	-
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
クリ属	<i>Castanea</i>	6	-	-	-	1	-	-	-	6	6	-	-	1	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	6	-	-	-	-	-	-	-	9	2	-	-	-	-	-
ニレ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-
サンシヨウ属	<i>Zanthoxylum</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	<i>Acer</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アトウ属	<i>Vitis</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サカキ属	<i>Cleyera-Eurya</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本																
イネ科	Gramineae	304	2	-	4	-	-	-	-	342	249	2	-	8	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	3	-	-	-	-	-	-	-	8	4	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	8	2	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	9	1	1	-	-	-	-	-	18	7	-	-	4	-	1
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotula</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	3	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	1	-	-
シソ科	Labiatae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キツネノマゴ属	<i>Justicia</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	7	-	-	-	-	-	-	-	6	8	-	-	-	-	-
他のキク科	other Tubuliflorae	7	1	-	-	-	-	-	-	18	23	-	-	1	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	12	3	1	-	-	-	-	-	14	8	-	-	1	-	-
シダ植物																
単糸型胞子	Monolete spore	24	14	7	2	3	1	-	-	46	48	1	6	8	-	5
三条型胞子	Trilete spore	13	-	-	-	-	-	-	-	7	13	-	1	2	-	1
樹木花粉	Arboreal pollen	226	2	0	0	0	1	0	0	225	220	2	0	1	0	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	357	11	2	4	0	0	0	0	416	314	2	0	15	0	1
シダ植物胞子	Spores	37	14	7	2	3	1	0	0	53	61	1	7	10	0	6
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	620	27	9	6	3	2	0	0	694	595	5	7	26	0	7
不明花粉	Unknown pollen	10	2	2	0	0	0	0	0	16	20	0	1	0	0	1

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

図109 花粉化石分布図

(3-1:①層(表土)、4-1:①層(表土)、4-2:②層(I層))

エタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属、キツネノマゴ属、ヨモギ属、他のキク亜科、タンポポ亜科などが出現する。なお、これら3試料以外で産出した花粉化石は、3－2、4－5で若干目立つ程度であり、他の試料は極めて稀か、全く産出しない（3－7、3－8、4－7）。3－2では、樹木花粉のマツ属複雑管束亜属、スギ属、草本花粉のイネ科、ソバ属、アブラナ科、タンポポ亜科など、4－5では、樹木花粉のクリ属、草本花粉のイネ科、アブラナ科、アリノトウグサ属などが僅かに産出した。

4、考察

検討した結果、十分な花粉化石を産出したのは、表土の3－1、4－1、近世の4－2のみであった。これらの組成を見ると、近世以降には、マツ林、スギ林といった針葉樹から林分が圧倒的に優勢であったと予想される。他に、落葉のクマシデ属－アサダ属、コナラ亜属、クリ属、ニレ属－ケヤキ属、常緑のアカガシ亜属、シイノキ属なども僅かながら混じってはいたが、植物相の貧弱な単調な植生であっただろう。

草本類について見ると、イネ科が高率であり、抽水植物でいわゆる水田雑草のキカシグサ属も随伴することから、水田ないし水田に類似した水位の低い湿地ないし水溜りであったと予想される。植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果では、稲作地が想定されているので、花粉分析の結果も考慮すれば、水田であったと考えて良いであろう。水田周辺の畦、路傍のような乾き気味の場所には、アカザ科－ヒユ科、アリノトウグサ属、キツネノマゴ属、ヨモギ属、他のキク亜科、タンポポ亜科などが生育していたであろう。また、十分な花粉化石は産出しなかったものの、3－2ではソバ属が産出しており、水田稲作以外にもソバ栽培が行われていたと予想される。水田脇にソバの栽培地があったか、水田の裏作としての可能性が考えられるのではないだろうか。

なお、花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。3－1、4－1、4－2以外の試料は、花粉化石の産出個数や保存状況が悪いことから、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難く、黒色味を呈することから、土壌の可能性が高いと考えられる。植物珪酸体分析では、稲作地と想定されているが、陸稲の可能性や水田であったとすれば、冬季の乾燥が著しいなどの理由で土壌化を受けており、花粉化石が良好に保存されなかったのではないだろうか。

2. 門前上屋敷遺跡の植物珪酸体

パレオ・ラボ 鈴木 茂

1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より吸収した珪酸分を葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。

発掘調査が行われた門前上屋敷遺跡において栽培の有無、栽培物の特定を試みる目的で土壌試料が採取された。以下には採取された土壌試料を用いて行った植物珪酸体分析の結果を示し、耕作痕における栽培の有無やその栽培作物について検討した。

2. 試料と分析方法

分析用試料は調査3区（試料番号3-1～3-8）および4区（試料番号4-1～4-8）の壁面で認められた各層より1試料が採取された総計15試料である。以下に各試料について簡単に記す。

3-1, 4-1（表土）は黒褐色の砂質シルト、3-2, 4-2（I層）はやや砂質の黒褐色シルト質粘土である。3-3, 4-3（II層）はややシルト質の黒褐色粘土、3-4, 4-4（II'層）もややシルト質の黒色が強い黒褐色粘土、3-5, 4-5（III層）はやや砂質の黒褐色粘土、3-6（IV層）もやや砂質の黒褐色粘土である。なお4区ではこの層が欠けている。3-7, 4-7（V層）は黒～黒褐色の粘土、3-8, 4-8（VI層）は黒褐色粘土で、赤褐色粘土塊（ローム?）が認められる。時代について、I・II層が近世、III・IV層が中世、V層が弥生時代、VI層が地山である。植物珪酸体分析はこれら15試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞に由来する珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表12）、それらの分布を図110（3区）、図111（4区）に示した。以下に示す各試料の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

3区：全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数としては、最上部の表土が約150,000個を示し最も多く、最下部のVI層（地山）が最も少なくなっている（1,600個）。また上位試料においてはイネの穎部（籾殻）に形成される珪酸体の一部破片も若干観察されている。さらに図表には示し

表12 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	層位	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
3-1	表土	153,000	0	273,800	75,300	7,200	3,600	8,400	16,700	25,100	38,300
3-2	I	89,200	1,200	203,200	50,800	2,500	2,500	3,700	12,400	23,500	44,600
3-3	II	48,900	2,300	138,600	67,600	5,800	5,800	0	8,200	9,300	37,300
3-4	II'	69,500	1,200	93,100	96,600	2,400	13,000	1,200	2,400	13,000	27,100
3-5	III	28,000	0	57,300	100,500	1,200	7,000	0	3,500	10,500	22,200
3-6	IV	34,700	0	70,600	289,600	0	26,300	0	2,400	9,600	38,300
3-7	V	24,200	0	53,600	290,700	2,600	14,000	0	0	10,200	43,400
3-8	VI	1,600	0	20,200	122,700	1,600	1,600	0	0	0	20,200
4-1	表土	112,500	0	229,800	62,200	7,200	8,400	10,800	19,200	43,100	31,100
4-2	I	119,100	0	182,300	68,200	1,200	6,200	7,400	7,400	39,700	31,000
4-3	II	53,900	1,200	153,500	86,700	9,400	4,700	5,900	8,200	32,800	45,700
4-4	II'	43,800	0	89,900	131,300	1,200	10,600	0	4,700	18,900	43,800
4-5	III	61,700	3,300	112,300	207,000	1,100	13,200	0	11,000	42,900	47,300
4-7	V	2,800	0	47,200	226,400	1,400	6,900	2,800	1,400	4,200	29,200
4-8	VI	0	0	23,100	181,700	0	7,700	0	0	9,200	13,900

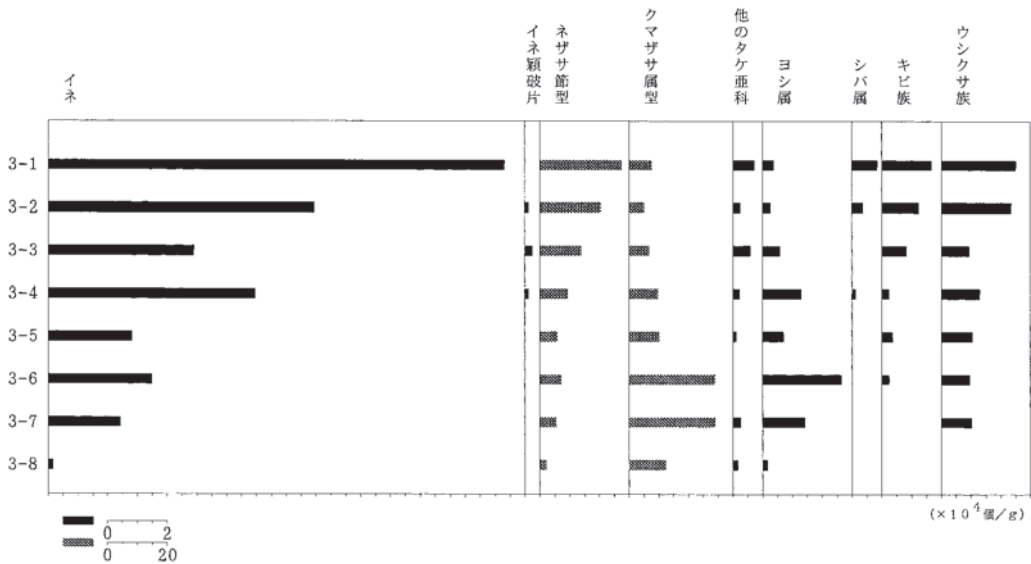


図110 3区の機動細胞珪酸体分布図

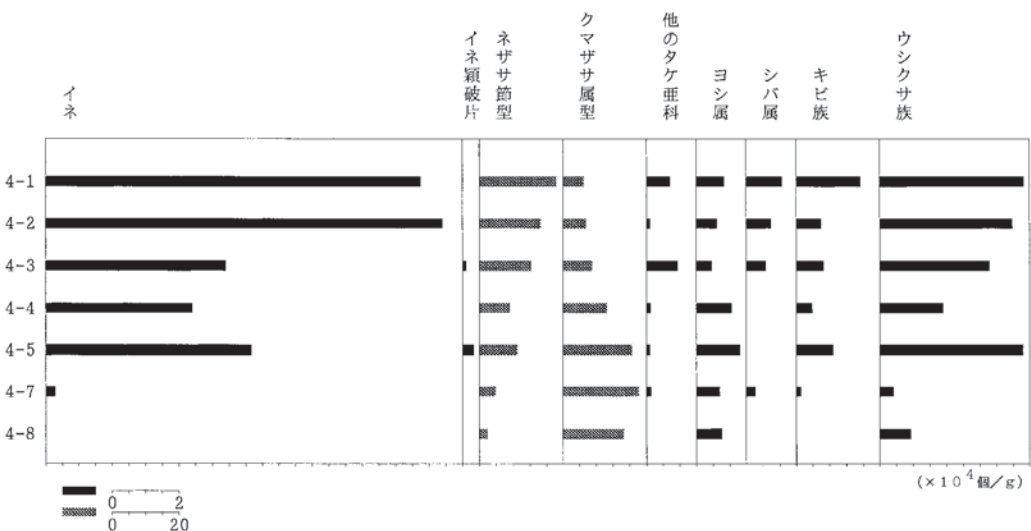


図111 4区の機動細胞珪酸体分布図

ていないが連なったイネ型の単細胞珪酸体も表土で認められている。

イネ以外ではネザサ節型とクマザサ属型が多く、そのうちネザサ節型は上位に向かい増加して最上部試料では300,000個近くに達している。同様の傾向がキビ族にも認められ、ウシクサ族やシバ属は上部2試料で多くなる傾向が示されている。一方クマザサ属型は下部試料で多く、試料3-6, 3-7では300,000個弱を示している。ヨシ属も下部で急増するものの、中・上部試料では急減している。

4区：最下部の地山試料を除きイネの機動細胞珪酸体が検出されており、上部2試料では100,000個を越え、V層の4-7では約3,000個と少なくなっている。また3区同様に試料4-3, 4-5では穎部珪酸体の破片が若干観察されている。

イネ以外ではやはりネザサ節型とクマザサ属型が多く、そのうちネザサ節型はほぼ上部に向かい増加する傾向を示しており、最上部（表土）では200,000個を越えている。ウシクサ族もほぼ同様の傾向を示しておりキビ族やシバ属も上部で多くなる傾向がみられる。またこれらは試料4-5で一つのピークをつくっている。一方クマザサ属型は下部で200,000個前後と多く、その後上部に向かって減少している。その他ヨシ属は中央部試料で100,000個を越えるが、それほど大きな変動は認められずほぼ8,000個前後を示している。

4、作物について

上記したように、ほぼ全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出された。そのうち耕作痕を覆う4区Ⅲ層（試料4-5）や3区Ⅳ層（試料3-6）では一つのピークをつくって多産している。ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。これに従うと耕作痕を覆う4区Ⅲ層や3区Ⅳ層より上位すなわち中世以降では稲作が行われていた可能性は高いと植物珪酸体分析からは判断される。なお花粉分析においてソバ属が検出され、先の稲作とともにソバの栽培も行われていた可能性が推測されている。

3区においてはさらに下位の弥生時代層（3-7）からも多量のイネの機動細胞珪酸体が検出されている。しかしながら4区の弥生時代層（4-7）では約3,000個と5,000個に達していない。このように検出個数的には稲作が行われていた可能性は高いと判断されるが、4区ではその可能性が低いと判断されることからこの稲作は部分的に行われていたのではないかと思われる。一方で、この弥生時代層の上面には耕作痕が形成されており、稲作が行われていた可能性が高い。この遺構の構築や稲作にともなう攪乱によりイネの機動細胞珪酸体が上位よりもたらされたことも考えられる。これは地山層（試料3-8）のイネについても同様である。こうしたことから弥生時代における稲作については遺構の検出等さらに検討が必要であろう。

5、遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が上部に向かい増加しており、ケネザサと考えられるネザサ節型のササ類が遺跡周辺の開けた日のあたるところに多く生育するようになったとみられる。また同じようなところでの生育が考えられるススキやチガヤなどのウシクサ族もネザサ節型と同様の産出傾向を示しており、遺跡周辺

で多く見られるようになっていったと推測され、ケネザサーズスキ群集といった草地在遺跡周辺に形成され拡大していったとみられる。

クマザサ属型は下部試料において多く検出され、耕作痕を境に減少している。このクマザサ属型のササ類（スズダケやミヤコザサなど）は主に森林の下草的存在での生育が考えられる。このクマザサ属型の減少が耕作痕、すなわち耕作（稲作？）の開始直後から減少傾向を示していることから、減少は耕作にともなう古代人の活発な活動に起因していると推察される。すなわち耕作にともなう住居の構築や農耕具の作成による木材利用で周辺の森林が破壊され、その下草として生育していたクマザサ属型のササ類も強く影響を受け減少していったと推測される。

ヨシ属は池沼や湿地などの水域や、陸域では地下水位の高いところでの生育が考えられ、このヨシ属が全試料から検出されている。そのうち耕作痕前後の層でやや多く検出されており、耕作（稲作？）にともないヨシ属が生育しやすい環境が一時的に形成されたものと思われる。

キビ族が上部で比較的多く検出されている。このキビ族にはアワ、ヒエ、キビといった栽培種も含まれるが、イネと似たような産出傾向を示していることからここでは稲作にともなう雑草類と考える。やはり上部で認められるシバ属も近世頃になって農道などに生育地を拡大したものと思われる。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—。考古学ジャーナル，227，p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（*Oryza*）属植物における機動細胞珪酸体の形状—。考古学と自然科学，11，p.9-20.

第5章 まとめ

第1節 中世前期の遺物について

1、はじめに

これまで中世前期の土器変遷については、鳥取県においては八峠興氏による一連の検討以外にはない（註1）。しかし八峠氏の変遷案は、貿易陶磁器を主体とした時間軸を設定し、それに共伴する在郷土器を並べており、土器の型式的な変遷についてはほとんど触れられていない。

今回の調査では中世前期の遺構がまとまって検出され、そこから量は多くないが土器を中心とした遺物が出土した。遺構はとくに5・7区において切り合いがあり、また層位的な上下関係も確認されるなどその変遷が明らかとなっている。そこで小稿では、本遺跡から出土した遺物を比較することでその変遷についてみていく。ただ、非常に資料数が限られているため、周辺の良好な一括資料を合わせ比較し、変遷案を提示したい。

2、門前上屋敷遺跡出土資料

本調査地は溝が多く、必ずしも良好な一括性をもつものではないが、ある程度の傾向性が認められると考える。まず遺構の切り合い、および層位的関係性からみた変遷については後節で詳述されているためここでは省くが、6段階が設定されている（表13）。このうちまとまって遺物が出土している、5・7区の資料を取り上げ以下に検討する。

遺構から出土したもののうち量的には皿が主体を占める。それらを見ると、口径が7.6cm前後のもの8.5~9.0cmの大きく2法量に分けられる。大型のものをみても、7区では溝8出土の2点（169・170）は器高が1.5cmに対し、溝9の175は1.8cmとやや高い。5区でも土坑25出土（144）が1.4cmで、土坑24（142）が1.9cmと高いように、時期が降るとともに器高が高くなる傾向が見出せる。また小型のものは地区内での比較はできないが、5区柵列2（200）や溝15（189）は器高1.2cmに対し、7区溝4（162）・溝9（171）は1.5cmほどとやはり高い。さらに底径を比較すると6.0~6.4cmが5.0~5.4cmへと縮小しており、これが前後関係を示すと考えられる。

以上を整理すると、杯は完形に復元しうる資料がないため検討することはできないが、皿については口縁の大きさにいくつかあること、それぞれの径に対して、器高は時期が降るとともに高くなり、底径は小さくなる傾向が見出せた。

3、他遺跡出土資料との比較

上記のように門前上屋敷遺跡出土資料から抽出した傾向を、同時期と考えられる資料についてみていく（図112）。また、形態分類を以下のように設定する。

〈皿〉

口径の大きさから、7.6cm前後のもの（Ⅰ類）、8.2cm前後のもの（Ⅱ類）、8.8cm前後のもの（Ⅲ類）に大別できる。さらに口縁形態から、内湾気味のもの（a類）、直線的に外傾、および外反するもの（b類）に分ける。なお、今回は底部切り離しが糸切り、およびヘラ切りのもののみを扱う。手づくねのものはまとまった資料がないため検討しなかった。

〈杯〉

器高が4cm前後と低いものをⅠ類、5cm前後の高いものをⅡ類とし、体部中位で「く」字状に屈

曲するもの（a類）、体部から口縁にかけて直線的に外傾、および外反するもの（b類）、体部が丸みをもつもの（c類）に分ける。

まず、本遺跡の位置する西伯耆において類例を探すと、第2段階に位置づけた柵列2（1）と形態・法量的に類似するものが、米子市錦町第1遺跡土器溜資料である（註2）。皿ではI b・II b類があり、底部はヘラ切りのものがみられる。また、底部器壁が厚く、平高台状をなす。杯では本遺跡（2）がI a類、錦町第1（6）はI b類に相当する。

皿において底径が小さくなり、器高が高くなるものという傾向をみていくと、次段階（II期）に位置づけられるのが名和町茶畑六反田遺跡P 800（註3）、および同町荒田遺跡SD01（註4）である。I類がないが、II a・b類、III a類がみられ、杯ではI a・b、II a類がある。さらに本遺跡土坑24（14）はII b類で器高が高いことから、新しい様相（III期）とできよう。そしてこれに類するのが中山町細工塚II遺跡SX01である（註5）。I b類とIII類より大型の皿が出土している。この段階の杯はわからない。

IV期の資料は名和町押平弘法堂遺跡SK11である（註6）。皿はI a・b類、II b類、III a類と法量は各種が揃う。また17・19のように、底部が平高台状に厚くなっているのが目立つ。これは切り離しがヘラによるもののため、錦町第1遺跡例と同様なのであろう。杯はa類から退化したようなI c類（20）があり、21（II c類）はII期の荒田遺跡例（12）よりも全体的に縮小している。これよりさらに小型化したものが、米子市青木遺跡HSX69である（註7）。皿は器高こそ低くなっているものの、底径はさらに小さくなっている。杯はI c類、皿はII a類のみがまとまって出土している。

以上の変遷を形態毎に整理すると、皿I b類がI期において器高1.2cm、底径6.3cm前後のものがIII期には1.8cmと5.5cm、IV期には1.9cmと4.5cmほどになっている。II・III類においても同様に、器高が高くなり、かつ底径が縮小するという傾向がみられる。一方杯では、I・II類とも全体的に縮小（小型化）する傾向が看取できよう。

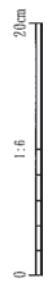
さて、上記のような変遷を東伯耆の資料でみると、湯梨浜町長瀬高浜遺跡SF74（註8）がI期、あるいは杯I類の底径がI期のものより小さいことから、II期に近い時期とできるかもしれない。次に倉吉市大日寺遺跡整地層土器集中区・溝状遺構出土資料となる（註9）。皿はI b、II a・b、III aの各類、杯はI b、II a・b類がみられる。33は底部回転糸切りで、柱状高台状となる。倉吉市宮ノ下1号土坑は手づくねの皿・杯を主体とするが皿II a類が伴い（註10）、その形態と法量から大日寺遺跡資料と同時期と考えられる。IV期相当の倉吉市打塚遺跡土壇状盛土内資料（註11）は、皿がI a・b、II b、III a類と各法量あり、押平弘法堂遺跡例と近似する。また杯はI b類で、器高がIII期と同じながら口・底径は縮小する。

表13 門前上屋敷遺跡 中世前期遺構・遺物変遷表

遺物変遷		I 期	II 期	III 期	IV 期	V 期
遺構変遷	第1段階	第2・3段階		第4段階	第5段階	第6段階
上段		①・②：溝2・4・5、柵列1		③：土坑18	④：土坑15～17	
		①：溝6・8	②：溝7・9			
下段	①：土坑22・25	②・③：溝15・16、柵列2		④：土坑24・26～28	⑤：土坑30～32	⑥溝13→溝14

西伯普	III					杯			貿易陶磁器
	I 類 a類	I 類 b類	II 類 a類	II 類 b類	III 類 a類	I 類 a類	I 類 b類	II 類 a類	
I 期	1, 4	5				2, 6			3
II 期		7, 8	9			10, 11		12	
III 期	13	14			15				
IV 期	16, 17	18	19			20		21	
V 期		24				25			22, 23
東伯普									
II 期	26, 27					28, 29			
III 期	30	31, 32	33			34		35	
IV 期	37, 38	39	40			41			

図112 中世前期遺物変遷図



4、年代の問題

以上のように変遷案を示してきたが、八峠氏は小稿で検討した資料をⅡ期後半～Ⅲ期（12c後半～13c）に位置づけ、その変遷を大日寺遺跡・打塚遺跡→茶畑六反田遺跡→押平弘法堂遺跡→宮ノ下遺跡→広瀬廃寺池跡という順で並べている（註12）。このうちⅢ期前半にある茶畑六反田遺跡例を白磁Ⅳ類並行、中葉～後半の押平弘法堂遺跡SK11には青磁劃花文碗、同安窯系皿が伴い、これらは大宰府における年代観（註13）とは大きな開きがある。

ところで、瀬戸内を中心とした畿内から九州にかけては、瓦器碗や吉備系土師器碗が広く分布する。これらは太平洋側の土佐においても一定量が出土しており（註14）、相互に年代を摺り合せる資料となっている。しかし山陰側をみると、これらが出土する遺跡は非常に少なく、それが年代を貿易陶磁器に依拠せざるを得ない状況を生み出している。

井上寛司氏によれば、山陰日本海（西日本海）水運が「体制的な基幹的交通手段」として成立するのは11～12世紀とする（註15）。また、正嘉2（1258）年作成の伯耆国東郷莊下地中分絵図に3艘の帆掛け船が描かれており、頻繁な往来がすでにこの時期にあったことを窺わせる（註16）ように、博多から若狭・小浜、さらに北ないしはそこから京都へというルートが確立されていたと考えられる。また12世紀には製錬炉地下構造の大型化などによって、出雲・伯耆などの中国山間部を中心に鉄が量産されるようになり（註17）、こうした鉄生産を背景として流通が活発化したのであろう。

このような中、瓦器碗や吉備系土師器碗がみられない一方、貿易陶磁器は一定量みられることから考えて、博多を経由して比較的早くこの地域にこれらが運ばれたということも十分あり得るのではないだろうか。そこで仮説の域を全く出ないものではあるが、Ⅰ期を門前上屋敷遺跡第2段階で白磁Ⅵ類皿が出土していることから11世紀末～12世紀初とし、Ⅴ期を青木遺跡例で伴う勝間田焼系甕から13世紀前半、Ⅱ～Ⅳ期を12世紀としておきたい。

5、おわりに

以上、本遺跡出土資料の分析を足がかりとして、伯耆における中世前期の土器変遷についてみてきた。今回は皿・杯しか検討できておらず、鍋・甕については全く触れられなかった。これらについても本稿で検討した皿・杯類との共伴関係、および型式分類をし、その変遷についてみていかなければならず、今後の大きな課題である。

また、年代についても言及したが、鈴木康之氏が草戸千軒町遺跡で一括廃棄資料を分析され、耐久性の高い陶磁器などは本来考えられている年代よりも遅れてくる傾向を見出されている（註18）。この点からみても、貿易陶磁による変遷や年代決定が危うく、壊れやすく消費ペースの速い土師器により編年を組んでいく必要があることは明らかである。

今回の変遷案もまだ咀嚼しきれしていない部分が多く、検討の余地は大いにある。小稿がひとつのステップとして、今後の研究の一助となれば幸いである。なお、本稿をなすにあたって、八峠 興、西尾克己、佐伯純也、辻 信広の各氏にはお世話になった。記して感謝いたします。（中森）

（註1）八峠 興 1997「鳥取県における土師器皿の展開について」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
1998「山陰における中世土器の変遷について－供膳具・煮炊具を中心として－」
『中近世土器の基礎研究』ⅩⅢ
2004「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅧ

（註2）平木裕子編 1996『錦町第1遺跡』米子市教育文化事業団

第5章 まとめ

- (註3) 八峠 興ほか編 2001『茶畑六反田遺跡ほか』鳥取県教育文化財団
(註4) 辻 信広編 2004『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
(註5) 西尾秀道編 1998『細工塚遺跡』Ⅱ 中山町教育委員会
(註6) 註3に同じ
(註7) 青木遺跡発掘調査団編 1978『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 鳥取県教育委員会
(註8) 西村彰滋ほか編 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅵ 鳥取県教育文化財団
(註9) 森下哲哉編 1993『大日寺遺跡群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
(註10) 名越 勉ほか編 1977『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
(註11) 真田廣幸編 1984『打塚遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
(註12) 八峠2004

なお、倉吉市広瀬廃寺池跡を手づくね土器を含むまとまった資料として八峠氏は評価されているが、手づくね以外のものを検討した結果、かなり資料に時期差をもつことがわかった。このことはすでに百瀬正恒氏も指摘されておられるが、このため今回は位置づけを行なわなかった。

百瀬正恒 1998「倉吉市広瀬廃寺の遺構と遺物」『中世土器研究』88号

- (註13) 宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡』ⅩⅤ 太宰府市教育委員会
(註14) 池澤俊幸 2004「土佐における広域分布品の様相」橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通－行き交うヒトとモノ』高志書院
(註15) 井上寛司 1991「中世西日本海地域の水運と交流」森 浩一編『日本海と出雲世界』海と列島文化第2巻 小学館
(註16) 黒田日出男 1986『姿としぐさの中世史』平凡社
(註17) 角田徳幸 2004「中国地方における古代末から中世の精錬鍛冶遺跡」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集』
(註18) 鈴木康之 2002「考古資料からみた中世集落の消費活動－草戸千軒町遺跡における資料形成過程の分析－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集

「土器実測図出典」

- 1～3、14：門前上屋敷遺跡
4～6 　：錦町第1遺跡土器溜
7～9 　：茶畑六反田遺跡P800
10～12 　：荒田遺跡SD-01
13～15 　：細工塚Ⅱ遺跡SX01
16～23 　：押平弘法堂遺跡SK11
24・25 　：青木遺跡HXS69
26～29 　：長瀬高浜遺跡SF74
30～36 　：大日寺遺跡整地層土器集中区
37～41 　：打塚遺跡土壇状盛土内

第2節 門前上屋敷遺跡における集落の変遷

1. はじめに

門前上屋敷遺跡は鳥取県西部にあたる名和町に所在し、名和川左岸河岸段丘上の平坦面に位置する。縄文時代から近世の遺構・遺物を検出した。名和川の対岸には名和飛田遺跡、本遺跡西側の丘陵上には門前第2遺跡がある。遺跡の消長を比較した結果、両遺跡とも本遺跡との関連性が窺える（表14）。本稿では、本遺跡の消長を遺跡周辺の状態も合わせてまとめることにする。

2. 集落の変遷

門前上屋敷遺跡を中心に、各時代ごとの様子をまとめる。

〈縄文時代〉

調査地で検出した土坑7基のうち、土坑3・4・5は底面ピットをもつ、いわゆる落とし穴状遺構である。土坑3からは前期末（大歳山式）の縄文土器が出土している。土坑7は後期前葉の廃棄土坑と思われる。人頭大の大礫と混在して縁帯文土器（崎ヶ鼻式）が出土した。調査地から早期末の深鉢、中期（里木I式）の深鉢、突帯文土器なども出土している。

門前第2遺跡では、早期（黄島式）の土器が伴う配石遺構群が検出された。名和飛田遺跡では、縄文土器が多量に出土した。早期から晩期にかけて継続的に出土する。特に早期末から前期初頭は密である。調査地周辺では早期の住居は見つかっていないが、縄文時代早期末以降、継続して集落が営まれるものと推察される。なお、本遺跡北西約1.2kmには南川遺跡があり、後期初頭の石囲炉をもつ住居跡が検出されている。

〈弥生時代中期〉

調査地内から後葉の竪穴住居4棟、土坑5基を検出した。竪穴住居1は主柱穴から炭化材が出土し、広葉樹が使用されていたことが確認できた。土坑9では、底面やや上に焼土層とともに炭化物が出土した。土坑9に近接する同規模の土坑10・11からも炭化物が出土している。土坑9と土坑10・11では炭化物の樹種構成に若干の違いがあることが指摘された（第4章第1節）。土坑3基から炭化物が出土したことから、土坑を覆う蓋または簡易な上屋が存在し焼失した可能性も考えられるが、想定域を出ない。また、土坑10からは小型の被熱粘土塊2点（註1）が出土した。小型被熱粘土塊の出土により、周辺に焼成土坑が存在する可能性が考えられる。土坑9は焼土層が検出されているが、壁面・底面に被熱した痕跡は認められず、焼成土坑としては積極的に評価できない。

当該期の遺構は、河岸段丘上平坦面中央部に土坑5基が集中し、その土坑群を中心として、南側に点在するように竪穴住居1・2・4が位置する。よって、集落内は計画的な土地利用がされていたことが窺え、当該期の集落構造を解明するうえで貴重な資料である。なお、竪穴住居3は土坑群に切られることから、他の竪穴住居3棟とは若干の時期差がある可能性がある。

表14 門前上屋敷遺跡周辺集落消長表

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			古代	中世		近世		
	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期		前期	後期	前期	後期	
門前上屋敷遺跡																	
名和飛田遺跡																	
門前第2遺跡																	

遺物のみ 遺構・遺物少 遺構・遺物多



図113 弥生時代中期の遺構概念図

周辺の状況は、名和飛田遺跡では後葉の竪穴住居2棟・竪穴3棟が検出された。本遺跡と名和飛田遺跡では、竪穴住居2、3棟で1つの集落単位をなすものと想定され、類似する。両遺跡の集落は隣接した位置関係から密接な関係をもった集団と推察される。

名和町内では前葉の集落は見つかっていないが、中葉以降遺跡数が増加する。茶畑山道遺跡は中葉・後葉の拠点集落である。中葉段階では、独立棟持柱を持つ大型の掘立柱建物を中心に構成される。また、蛇の川の対岸にあたる茶畑第1遺跡では後葉に集落が卓越する。竪穴住居のほか、大小の掘立柱建物により構成され、中期後葉から後期末に比定される独立棟持柱を持つ掘立柱建物も検出されている。茶畑山道・茶畑第1両遺跡周辺には、後葉の竪穴住居などが検出された茶畑六反田遺跡、後葉の土壌墓群が検出された押平弘法堂遺跡がある。これらの遺跡は茶畑山道遺跡から直線距離で約0.7km以内の隣接した位置関係にあり、有機的な繋がりをもつ可能性が高いと思われる。大型の掘立柱建物が建てられた特殊な空間を中心に、一般構成員の集落と墓域が存在したものと想定される。

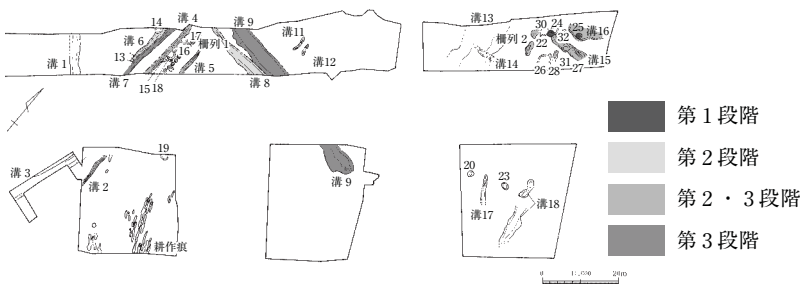


図114 中世前期遺構変遷図 (第1～3段階)

一般構成員の集落である茶畑六反田遺跡から検出された竪穴住居は、3区に1棟、5区に2棟であり、本遺跡と名和飛田遺跡の集落単位と類似する。茶畑山道遺跡は本遺跡から直線距離で西に約1.6km離れるが、本遺跡と名和飛田遺跡は同時期の集落であることから、何

らかの繋がりがあろう。なお、本遺跡と茶畑第1・茶畑六反田・押平弘法堂・名和飛田の各遺跡から出土した中期の土器を胎土分析し比較を行ったが、差異はみられなかった（第4章第2節）。

〈中世前期〉

遺構は河岸段丘平坦面の上段にあたる3・4・6・7区、下段にあたる2・5区に存在する。土坑20基、溝18基、柵列2基、耕作痕を検出し、本遺跡では当該期の遺構が最も密である。調査地は上段、下段ともに、大小の溝と柵列により東西南北に整然と区画される。遺物は、土器類を中心に出土し、土師器皿・杯類をはじめ貿易陶磁器も含まれる。また、馬鋤・鉄滓などの鉄関連遺物、木製の編み台も出土している。

当該期の遺構は切り合いが多いことから、その関係性を精査し変遷案をまとめた（表13）。上段は切り合いが確認できている7区、下段は5区を中心に検討し、上段は④段階、下段は⑥段階の変遷を確認した。なお、直交する位置関係にある溝と柵列や、土坑15～17のように等間隔に位置し関連性の高いと判断した遺構は同一の遺構群として扱った。上段と下段の遺構を比較検討した結果、溝と柵列により構成される遺構群が廃棄された後に、土坑群が掘削される共通の段階があることがわかった。よって、上段と下段の遺構は繋がりが深いものと判断でき、溝と柵列の掘削が開始される上段①・②段階と下段②・③段階が並行するものと想定した。溝と柵列により構成された遺構群の中には、並行する溝8と溝9、溝6と溝7のように切り合いがあるものがみられ、本来的には2段階程度の変遷があり、第2・3段階と設定した。第4段階は溝と柵列が廃棄され土坑が掘削され始める段階で、第5段階は第4段階の土坑群より新しい土坑群で構成されている。下段に検出した土坑22は溝15に切られ、土坑25が溝16に切られることから、この土坑2基に関しては溝が掘削される以前の土坑群と判断し、第1段階とした。また、溝13・14は第5段階の土坑群廃棄後の遺構であり、第6段階とした。各段階の年代観は本章第1節を参照していただきたい。

第2・3段階の遺構群である溝8・9（東西主軸）は溝2・4～7、柵列1（南北主軸）と直交する位置関係にある。溝8・9は時期幅をもつが、位置関係と埋土の色調・堆積状況から関連性が高い遺構と判断した。溝8は溝9の古段階と想定している。このうち溝9は、最大幅2.70m、最深部1.97mを測る大溝である。埋土②⑤層からは鞭虫卵が検出され、埋土②④～②⑧層は生活排水が流れ込み、水流のある中で堆積したものと確認された（第4章第3節参照）。よって、調査地内からは当該期の建物跡は検出していないが、調査地周辺に居住域が存在するものと推察される。溝9の東端は削平され、西端は調査地外に延びるため、検出できたのは遺構の一部である。下段の溝15・16（東西主軸）と柵列2（南北主軸）も直交する位置関係にあることから、調査地周辺には区画が連続して存在する可

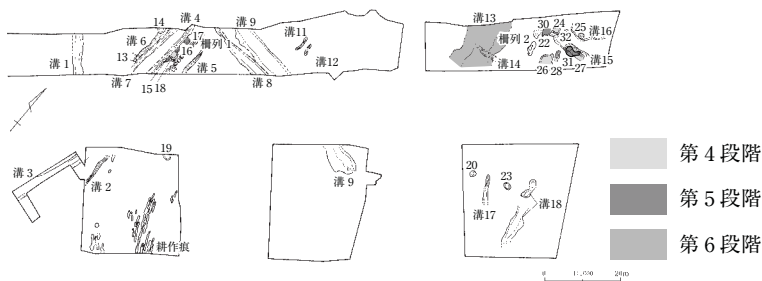


図115 中世前期遺構変遷図（第4～6段階）

可能性がある。溝9と溝2・5に囲まれる範囲を1区画と想定すると、区画の規模は東西、南北ともに一辺が約25m～30m程度になるものと思われる。溝9のような大溝が掘削されること、貿易陶磁器が出土していることを考えれば、一般の集落というよりは有力者の居住域（屋敷地）と

想定したい。

当該期の土器を胎土分析した結果、Ⅰ類とⅡ類に分類された（第4章第2節）。Ⅱ類が分布する領域には門前第2・中尾第1両遺跡出土の中世土器も含まれるが、Ⅰ類が分布する領域は本遺跡出土の土器のみで構成される。Ⅰ類に相当するものはすべて第2・3段階の溝6・9、柵列2出土で、興味深い結果である。また、須恵器の鉢・甕がまとまる傾向にあり、産地が同じである可能性が指摘された。今後、消費地出土資料の比較と産地の特定が望まれる。

調査地の主な字名は河岸段丘上段は若宮、下段は倉垣である。調査地南側に上屋敷・西側には下屋敷があり、上屋敷・下屋敷は現在の集落とほぼ重なる。また、比較的規模が大きい溝9東端付近では、堀切橋が名和川に架かる。字名がどの時代の状況をどの程度反映したものか判断できないが、屋敷地が存在する可能性がある本遺跡との関係は興味深い。なお、溝8・9は現代の用水路と並行することから、中世前期の土地区画が現代まで続いている可能性は高いと思われる。

周辺の遺跡としては、荒田、茶畑六反田、押平弘法堂、門前礎石群などの遺跡がある。出土遺物の比較から、荒田・茶畑六反田遺跡は本遺跡第4段階、押平弘法堂遺跡・門前礎石群は第5段階にほぼ並行する。本遺跡と荒田遺跡・門前礎石群は直線上（北西－南東方向）に位置し、標高が高い本遺跡から荒田遺跡まで見通す立地にある。本遺跡から1.5kmの荒田遺跡は土壙墓と想定される遺構が検出され、0.5kmの距離にある門前礎石群は6間×3間の礎石建物が想定される遺跡である。

〈中世後期から近世〉

中世後期の遺構は検出されていないが、貿易陶磁器などが出土した。門前第2遺跡では溝が検出されている。茶畑六反田遺跡では畑跡が検出され、集落から耕作地への転換が確認された。

近世前期の溝19・20は並行し、中世前期の溝8・9が埋没後掘削される。近世後期の土坑33～35は切り合い、堆積状況も類似する。墓壙もしくは井戸と想定している。

3、まとめ

簡単ではあるが、調査結果をまとめた。本遺跡では弥生時代中期と中世前期の集落が最も卓越する。特に中世前期の調査結果は当該期の集落構造を考える上で貴重な資料となった。また、現代まで中世前期の土地区画が踏襲された可能性が高いことがわかった。おそらく、中世後半には集落域が耕作地へと転換され現代に至ると思われる。

最後になりましたが、山上雅弘氏には中世の集落構造についてご教示頂き、大変お世話になりました。記して感謝致します。 (森本)

註1：土坑10出土被熱粘土塊の大きさ 遺物No.872：埋土中層出土（長軸約2.5cm×短軸約2.3cm×厚さ約2.3cm）
遺物No.899：検出面出土（長軸約2.7cm×短軸約2.5cm×厚さ約1.8cm）

参考文献

- 北 浩明ほか 編 2005 『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団
中森 祥 編 2005 『門前第2遺跡（菖蒲田地区）』鳥取県教育文化財団
辻 信広 編 1999 『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会
西川 徹 編 2004 「茶畑第1遺跡」『茶畑遺跡群（第1分冊）』鳥取県教育文化財団
中森 祥 編 2004 『茶畑六反田遺跡（0・5区）』鳥取県教育文化財団
八峠 興・岡野 雅則ほか 編 2002 『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団
辻 信広 編 2004 『名和町内遺跡発掘調査報告書』名和町教育委員会
富長源十郎 編 1997 『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会

圖 版



1 遺跡周辺の地形（南東から）



2 遺跡周辺の地形（北から）



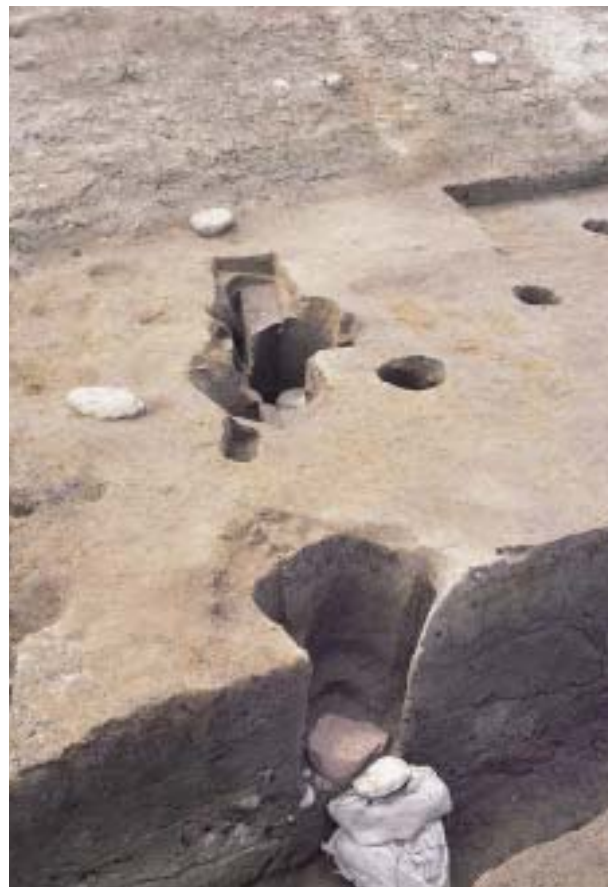
溝9 礫出土状況（東から）



1 B17~19グリッド周辺V層上面検出遺構群（北から）

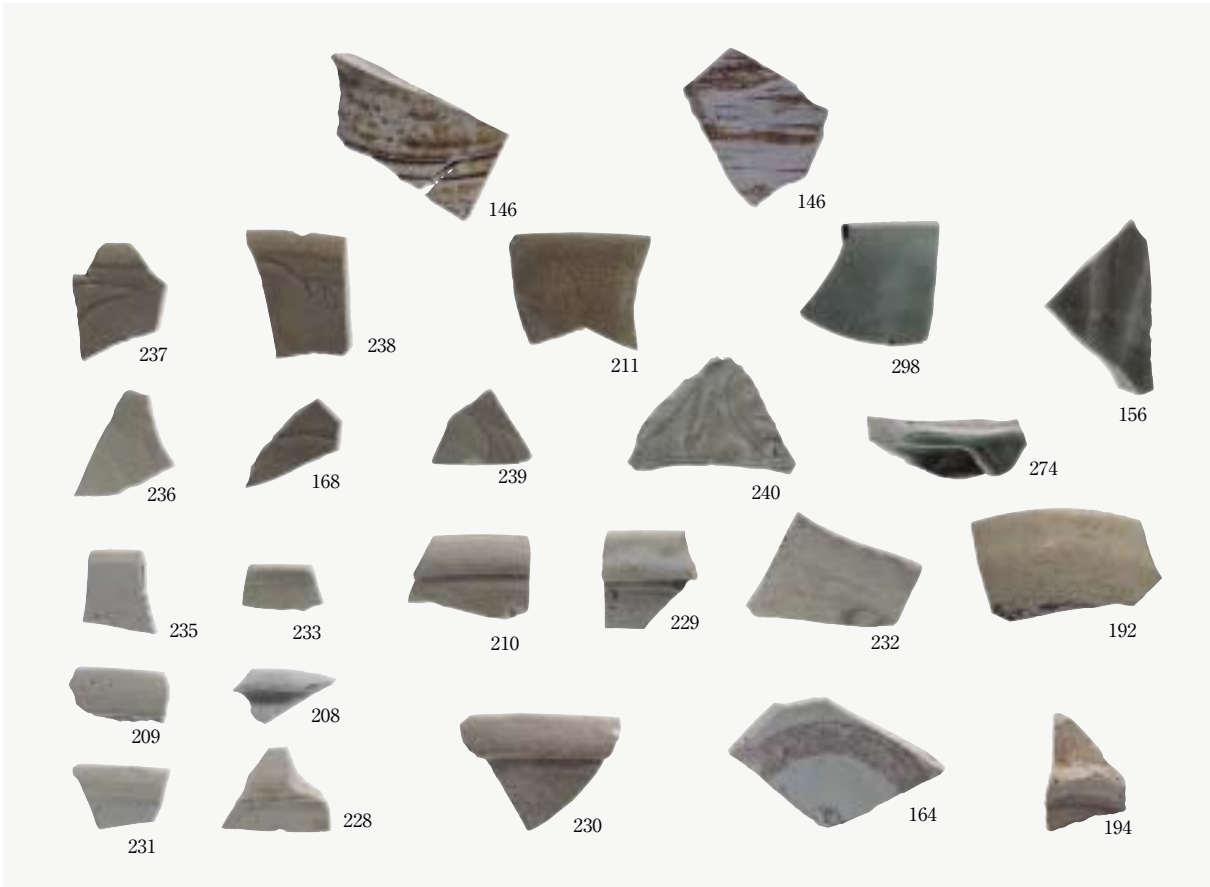


2 溝8・9（西から）



3 柵列2 礎盤石出土状況（北から）

図版4



1 中世前期貿易陶磁器



2 中世後期貿易陶磁器



調査地内出土遺物（中世後期）





1 調査地周辺の地形（北西から）



2 調査地周辺の地形（東から）

図版8



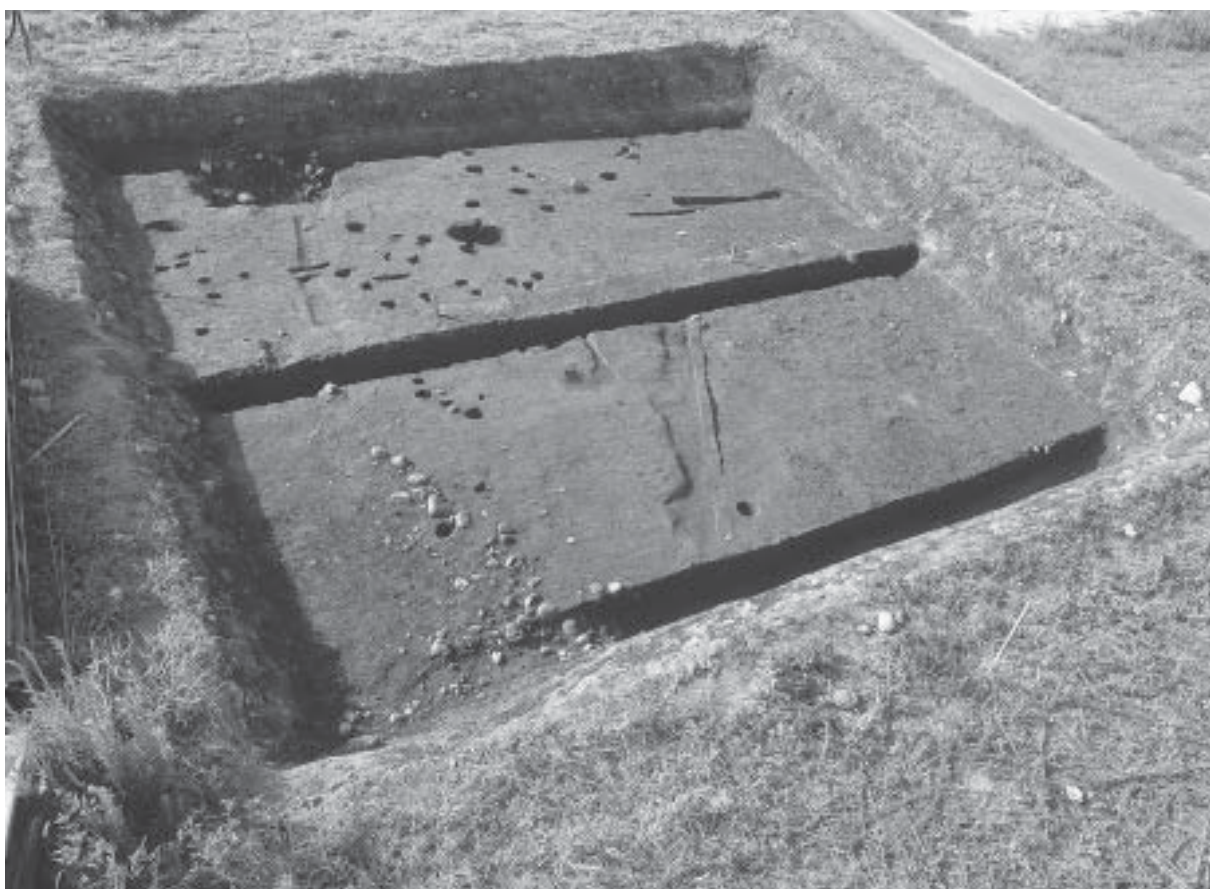
1 調査地周辺の地形（東から）



2 1区完掘状況（南西から）



1 1区北壁土層断面（南から）



2 2区完掘状況（南から）



1 5区完掘状況（南から）



2 3区完掘状況（北西から）



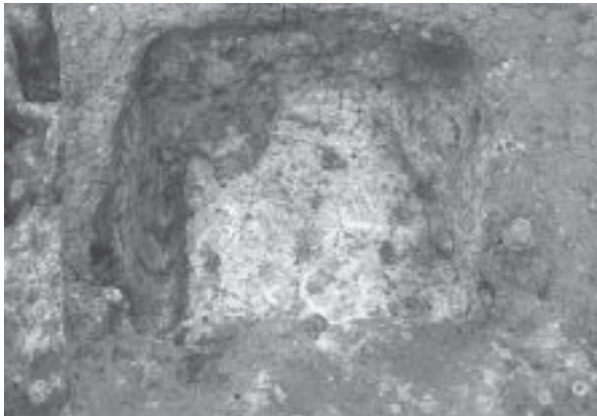
1 4区完掘状況（西から）



2 6区完掘状況（南から）



7区完掘状況（南西から）



1 土坑1 (南西から)



2 土坑1 礫出土状況 (南西から)



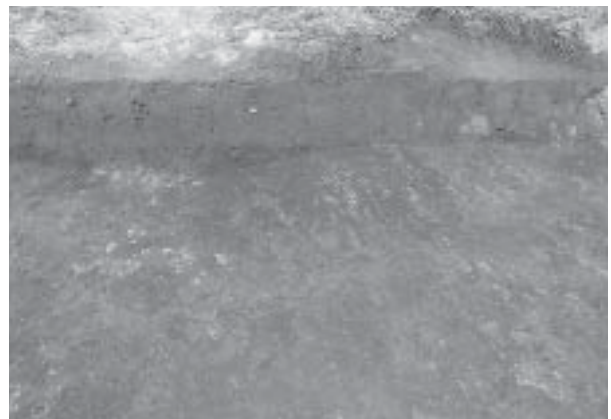
3 土坑1 壁溝土層断面 (南から)



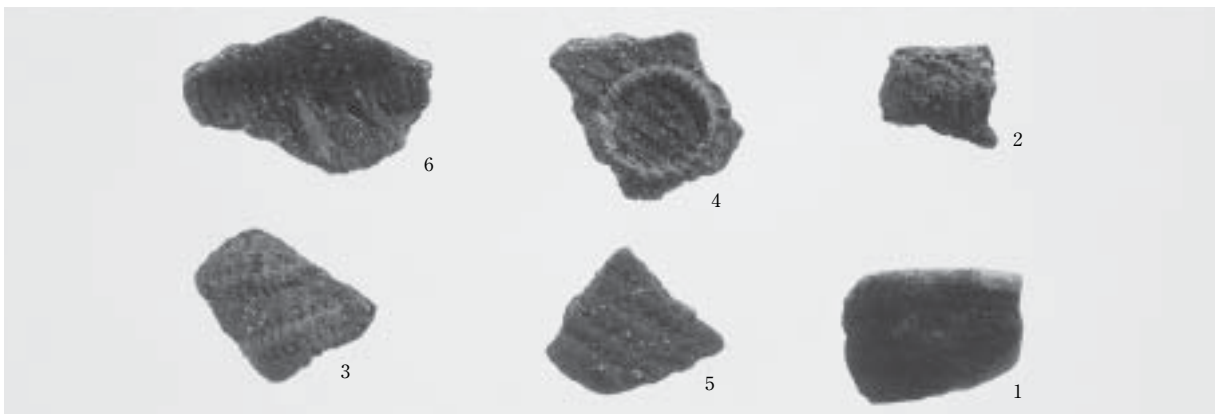
4 土坑1 土層断面 (東から)



5 土坑3 (南から)

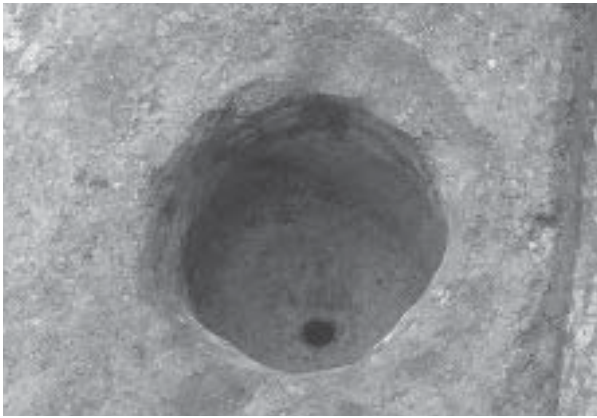


6 土坑3 検出状況 (南西から)

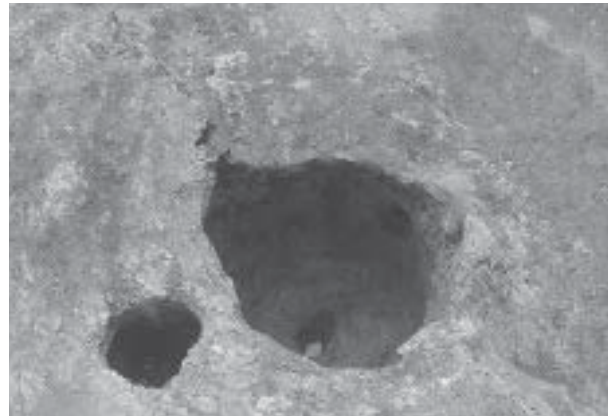


7 土坑1・3 出土遺物

図版14



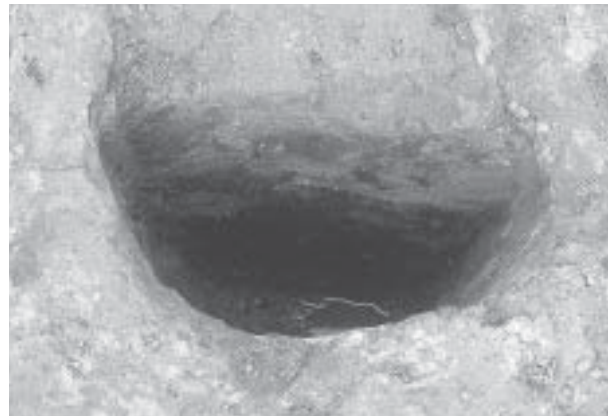
1 土坑4 (南東から)



3 土坑5 (西から)



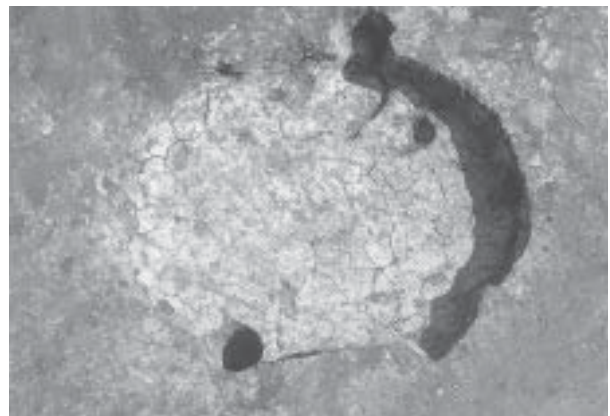
2 土坑4 土層断面 (南東から)



4 土坑5 土層断面 (西から)



5 土坑6 土層断面 (南東から)



6 土坑7 (北から)



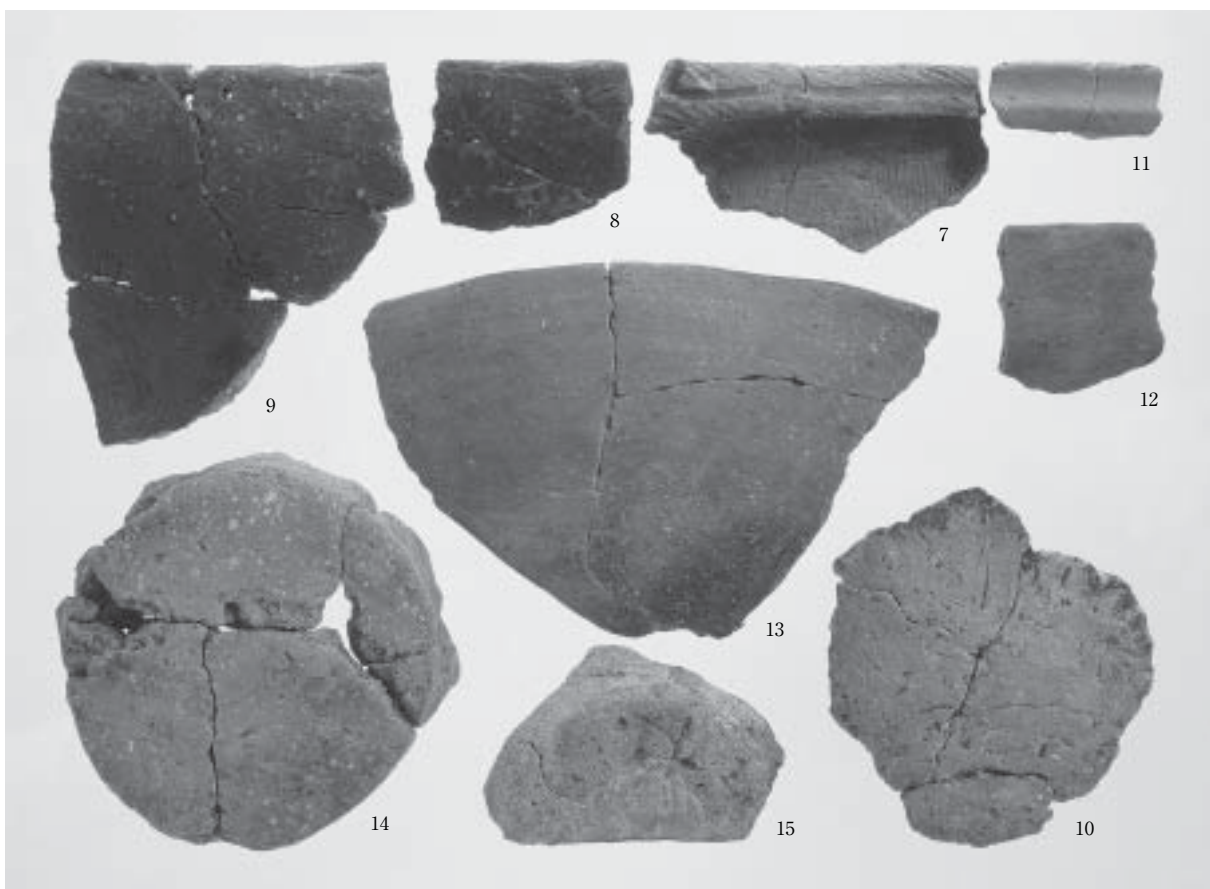
7 土坑7 検出状況 (北東から)



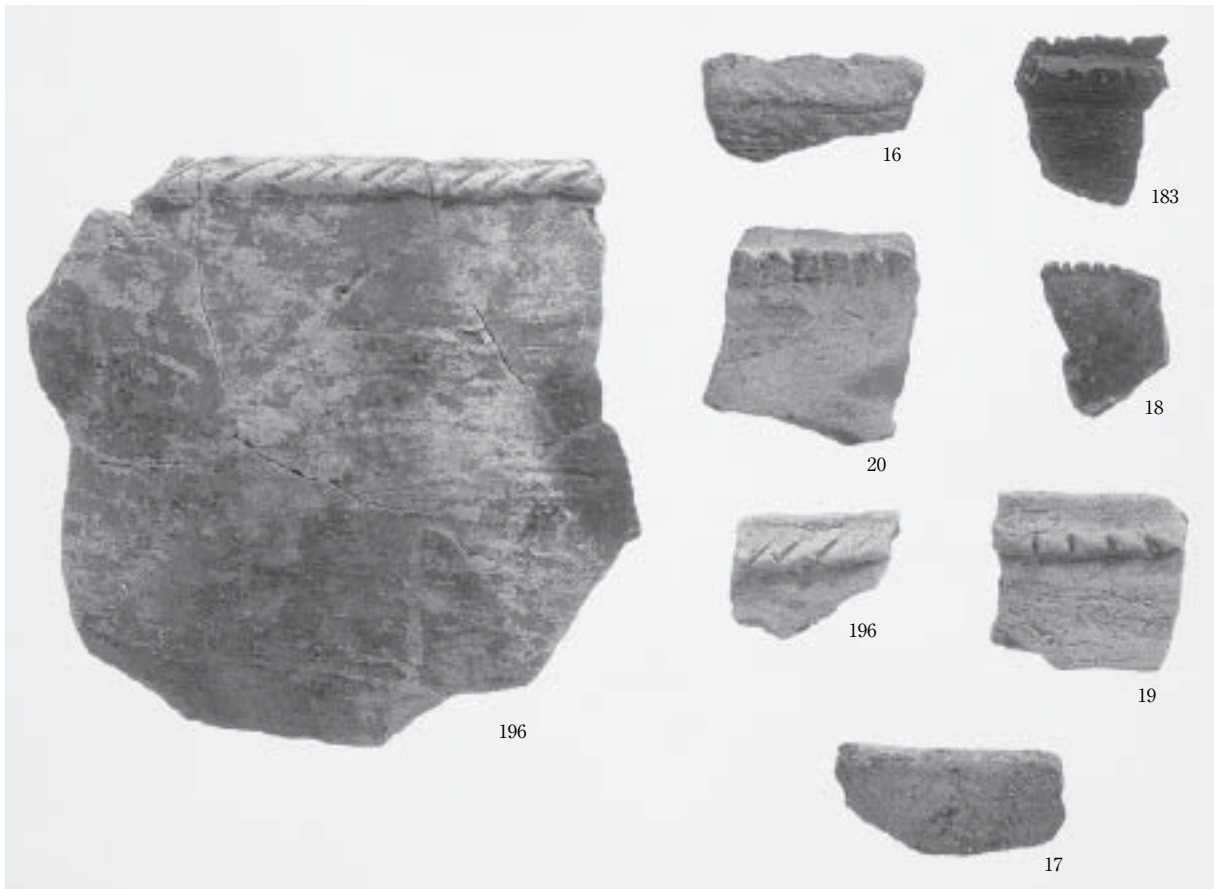
8 土坑7 土層断面 (西から)



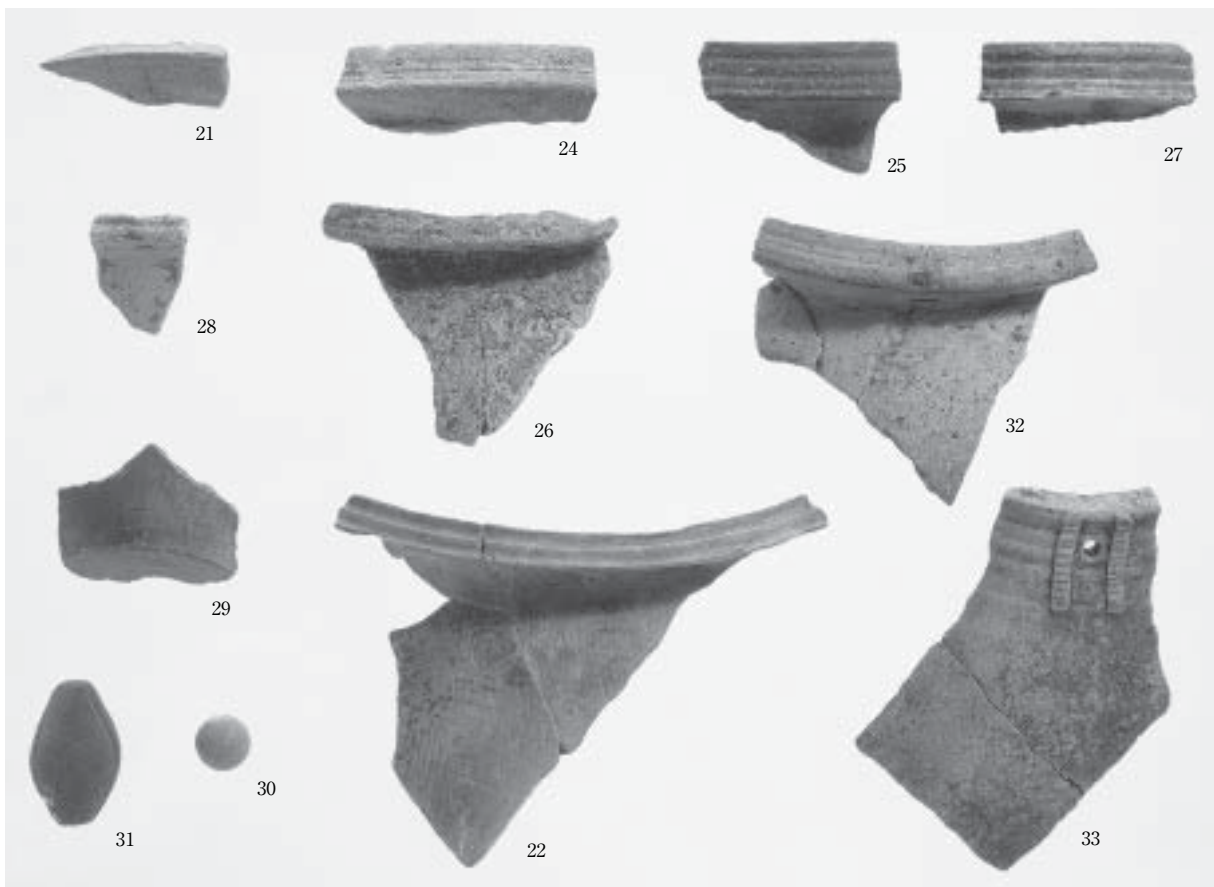
1 土坑7 遺物出土状況（西から）



2 土坑7 出土遺物



1 調査地内出土遺物（縄文時代）



2 竪穴住居1・2・4出土遺物



1 調査地周辺の地形（南東から）



2 調査地周辺の地形（西から）



3 土坑9・10・11（南西から）



4 竪穴住居1（南西から）



1 竪穴住居1 (北東から)



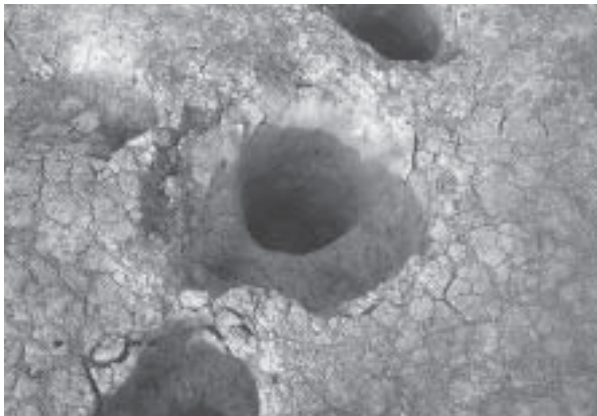
2 竪穴住居1 土層断面 (南から)



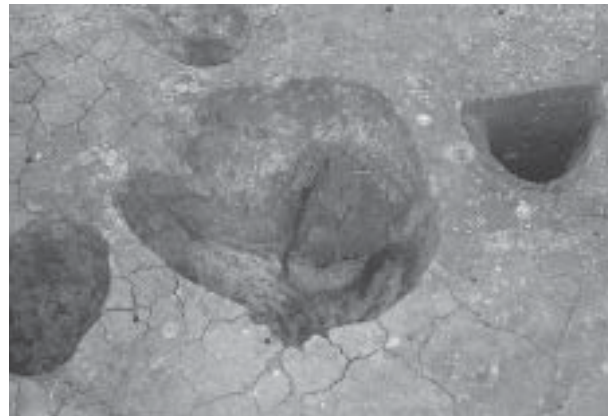
1 豎穴住居1 P2 遺物出土状況 (南西から)



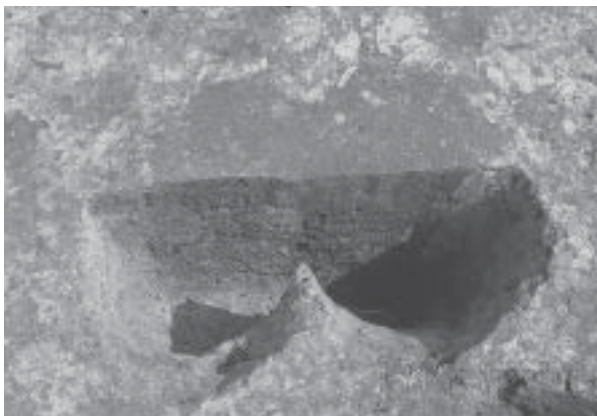
2 豎穴住居1 P2 炭化材(炭1)出土状況(南西から)



4 豎穴住居1 P2 完掘状況 (南から)



3 豎穴住居1 P2 炭化材(炭1)出土状況(南西から)



7 豎穴住居1 P3・6 土層断面 (南から)



5 豎穴住居1 P1 土層断面 (北東から)



8 豎穴住居1 P5 土層断面 (南から)



6 豎穴住居1 P1 遺物出土状況 (北東から)



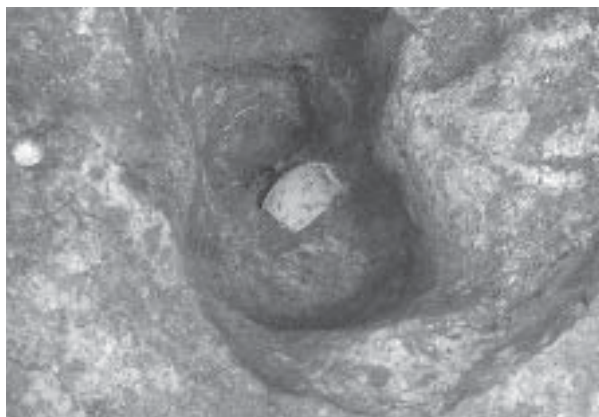
1 竪穴住居 4 a (北から)



2 竪穴住居 4 b (北東から)



1 豎穴住居4 土層断面（北西から）



3 豎穴住居4 P1出土遺物（北西から）



2 豎穴住居4 P2土層断面（南西から）



4 豎穴住居4出土遺物



5 豎穴住居2（北から）



1 竪穴住居2 土層断面（西から）



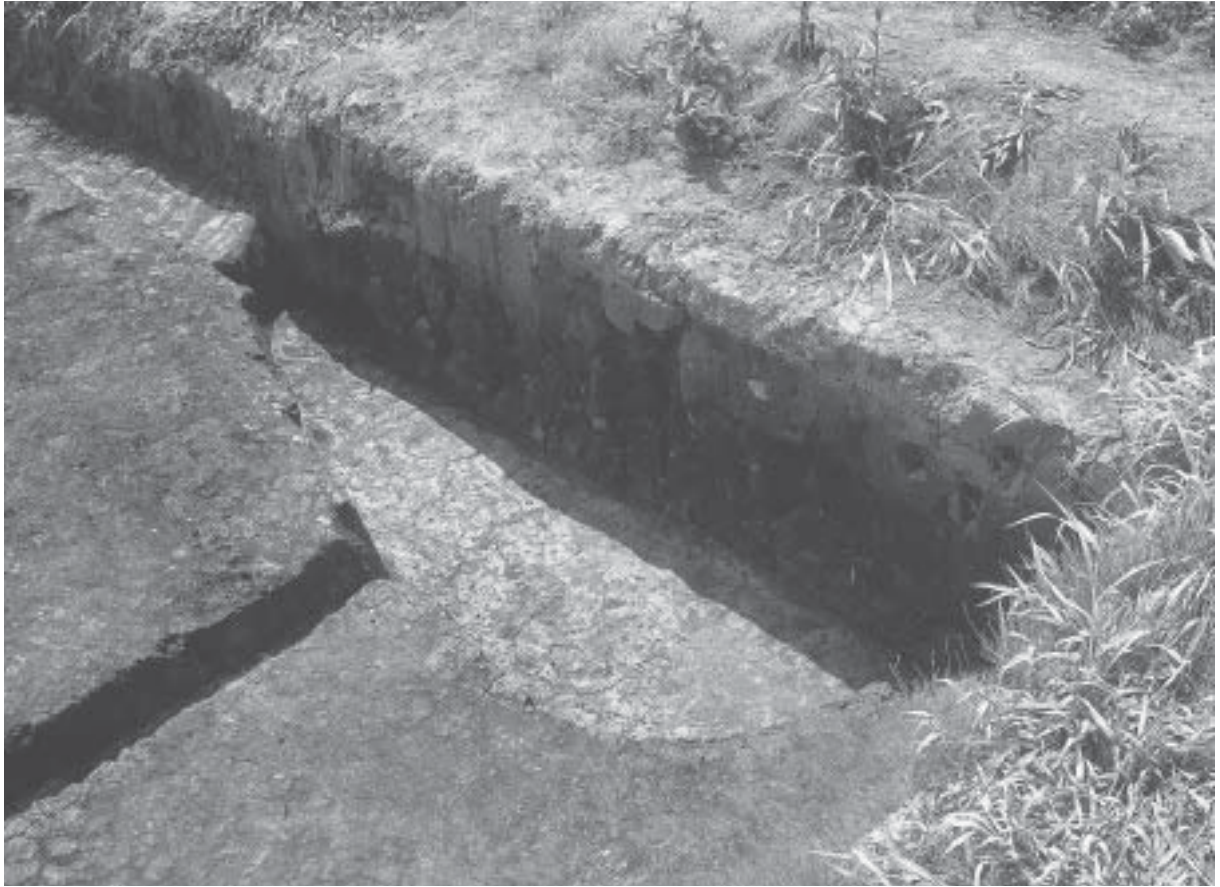
2 竪穴住居2 遺物出土状況（南西から）



3 竪穴住居3 P4土層断面（北東から）



4 竪穴住居3（北から）



1 土坑8 (東から)



2 土坑8 土層断面(南から)



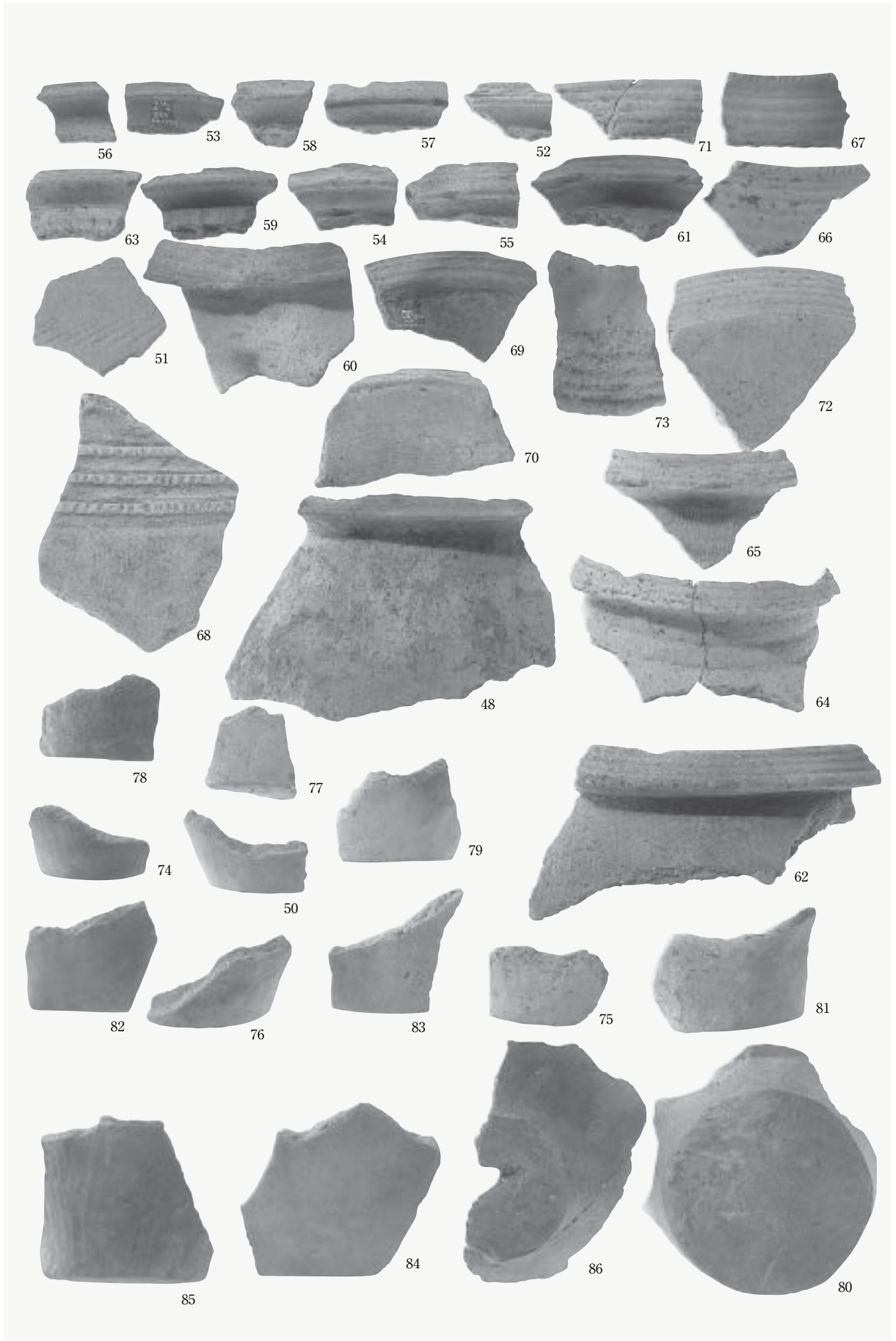
3 土坑8 遺物出土状況(南から)



4 土坑8 遺物出土状況(北東から)



土坑 8 出土遺物



土坑10出土遺物



1 土坑10 ⑤層遺物出土状況（東から）



4 土坑10出土遺物



2 土坑10 土層断面（東から）



3 土坑10 ④層炭化物出土状況（北から）



1 土坑11 遺物出土状況（南から）



2 土坑11（北西から）



4 土坑11 遺物出土状況（南西から）



3 土坑11 土層断面（北東から）



5 土坑11 炭化物（炭16）出土状況（南東から）



1 土坑9・10（北から）



2 土坑9 焼土検出状況（北西から）



1 土坑9 炭化物(炭3・4・6)出土状況(北から)



2 土坑9 炭化物(炭2)出土状況(北東から)



3 土坑9 炭化物出土状況(北東から)



5 土坑9 遺物出土状況(東から)



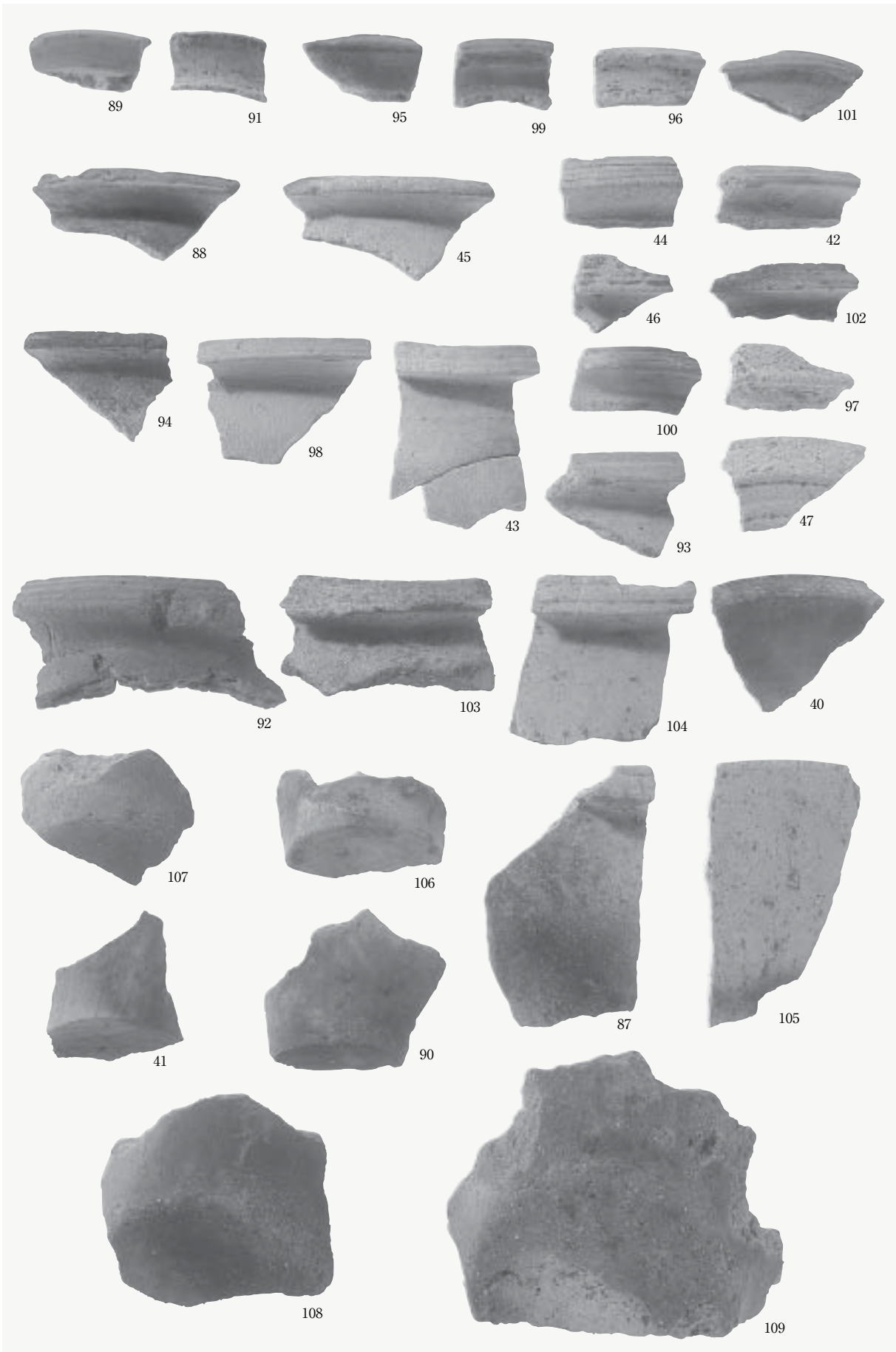
4 土坑9 炭化物出土状況(北西から)

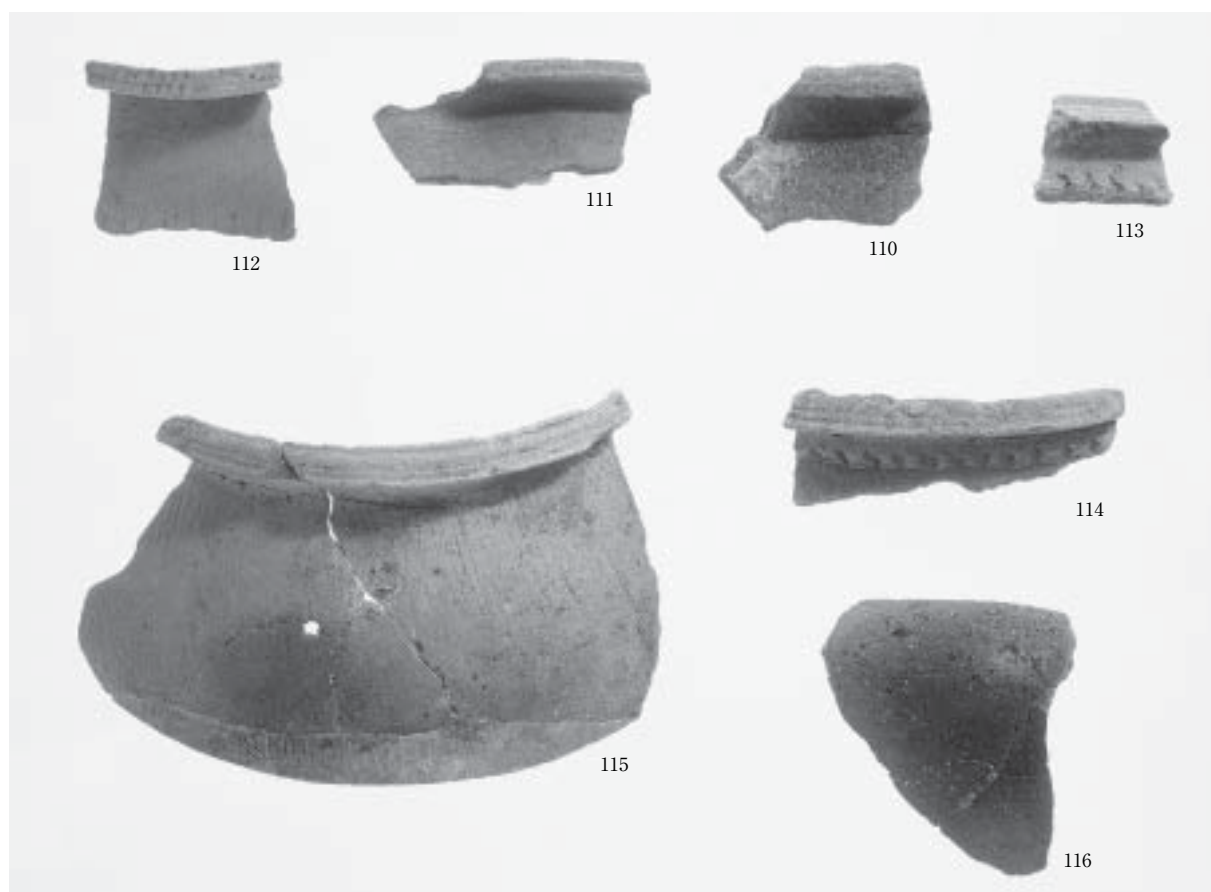


6 土坑9 土層断面(南東から)



7 土坑12 遺物出土状況(北から)





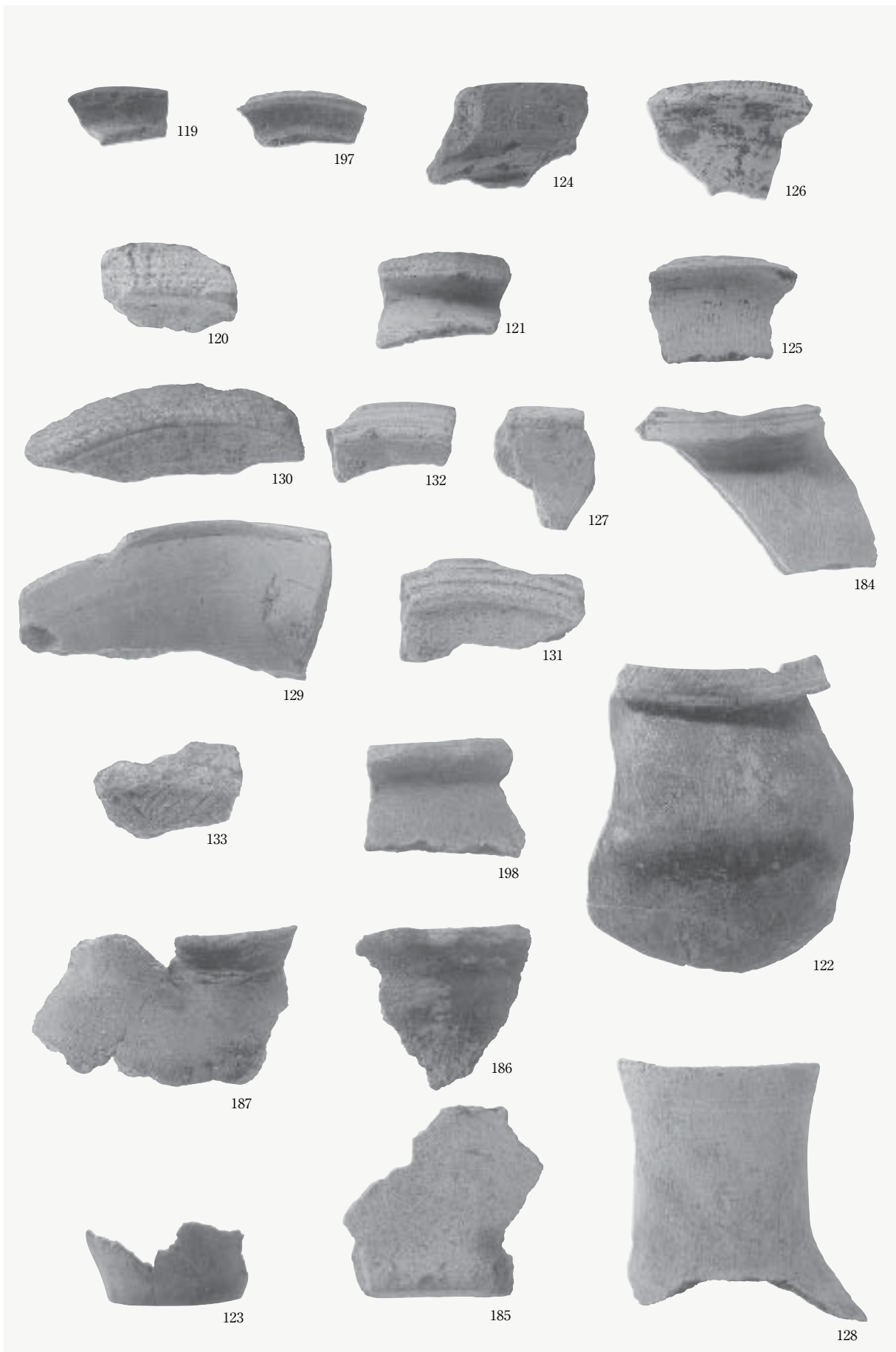
1 土坑12出土遺物 (1)



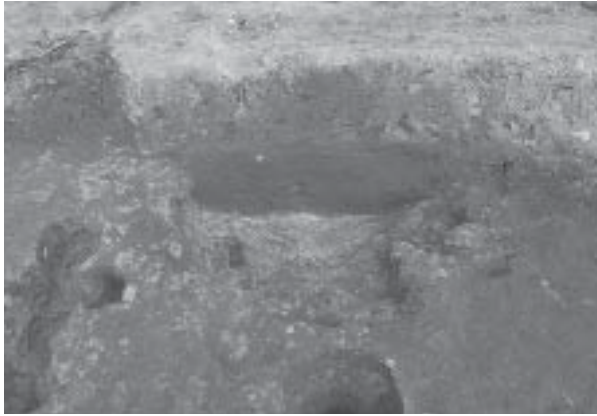
2 土坑12出土遺物 (2)



3 土坑12出土遺物 (3)



調査地内出土遺物（弥生時代中期～古墳時代）



1 土坑14 (南東から)



2 土坑14 遺物出土状況 (北から)



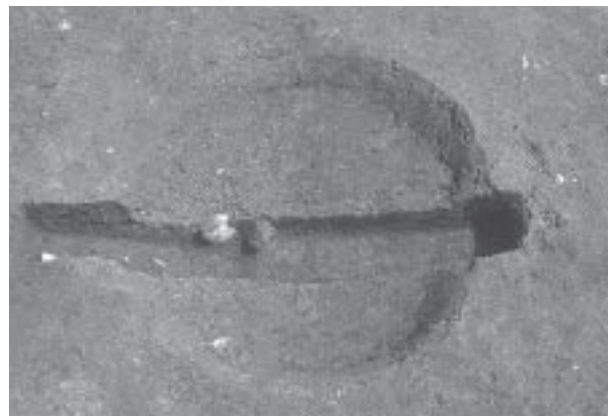
4 土坑14出土遺物 (2)



3 土坑14出土遺物 (1)



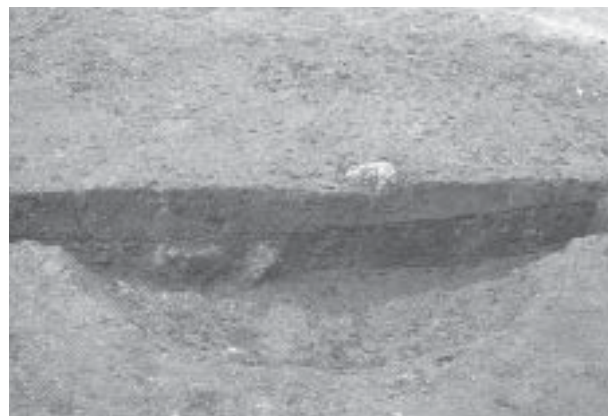
5 土坑13 (北東から)



7 土坑16 (南から)



6 土坑15 (東から)



8 土坑16 土層断面 (南から)

図版34



1 土坑17 (東から)



3 土坑18 (南から)



2 土坑17 土層断面 (東から)



4 土坑18 土層断面 (南から)



5 P377 (南東から)



6 土坑19 (北東から)



7 土坑19 土層断面 (北東から)



8 土坑19 遺物出土状況 (北東から)



1 土坑20 (北から)



3 土坑21 (北から)



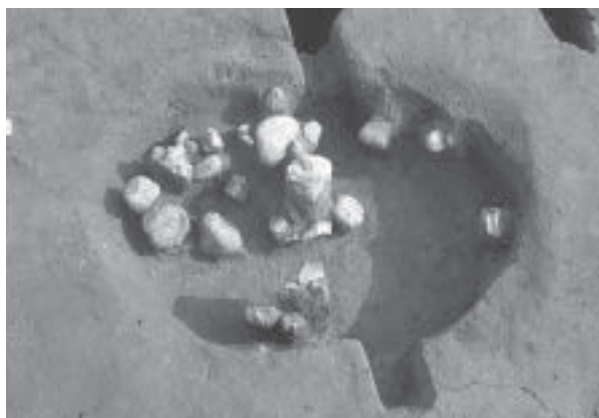
2 土坑20 土層断面 (北から)



4 土坑21 土層断面 (北から)



5 土坑23 (北から)



6 土坑23 遺物出土状況 (北から)

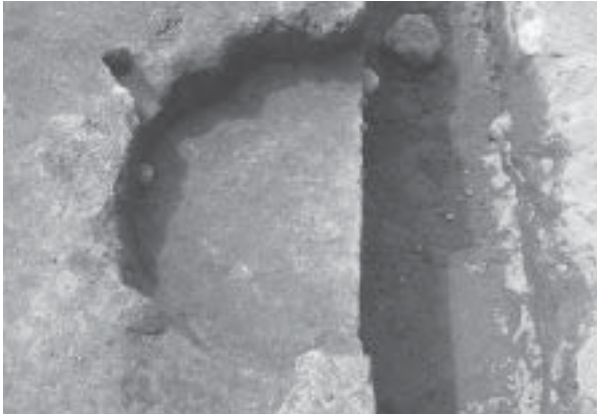


7 土坑23 遺物出土状況 (北東から)



8 土坑23 土層断面 (西から)

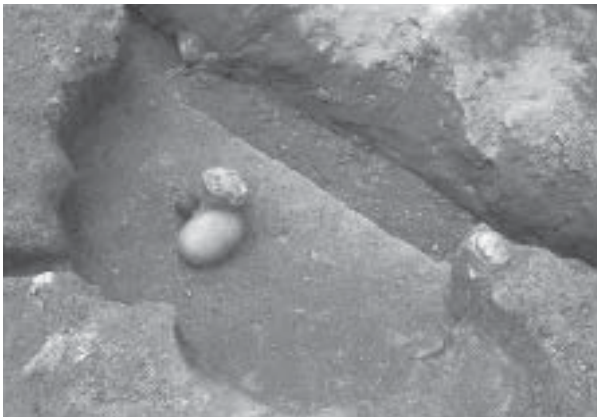
図版36



1 土坑24 (北東から)



3 土坑25 (東から)



2 土坑24 遺物出土状況 (東から)



4 土坑25 土層断面 (東から)



5 C7・8グリッド周辺遺構検出状況 (北西から)



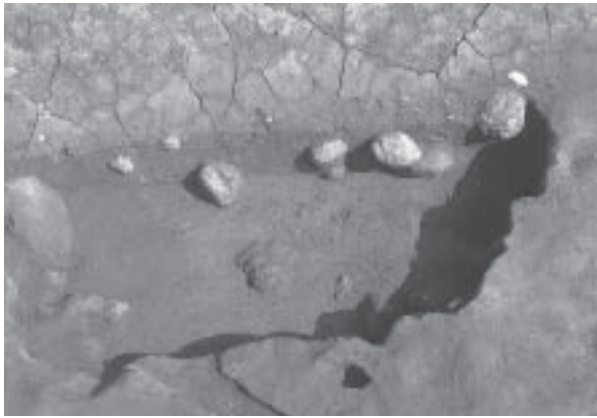
6 土坑31遺物出土状況 (北西から)



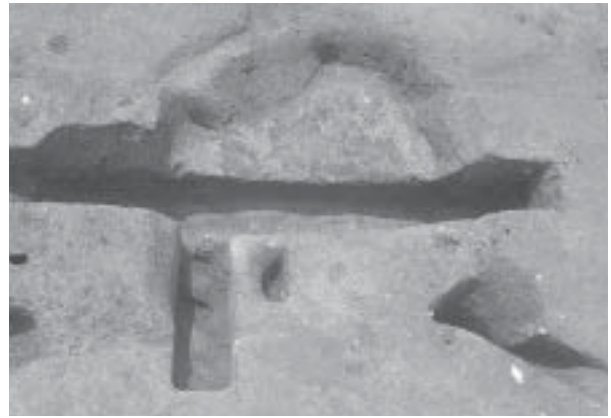
7 土坑29 (北西から)



8 土坑29 土層断面 (北西から)



1 土坑26 (北西から)



4 土坑28 (北から)



2 土坑26 遺物出土状況 (北西から)



5 土坑28 遺物出土状況 (北から)



3 土坑26 土層断面 (北から)



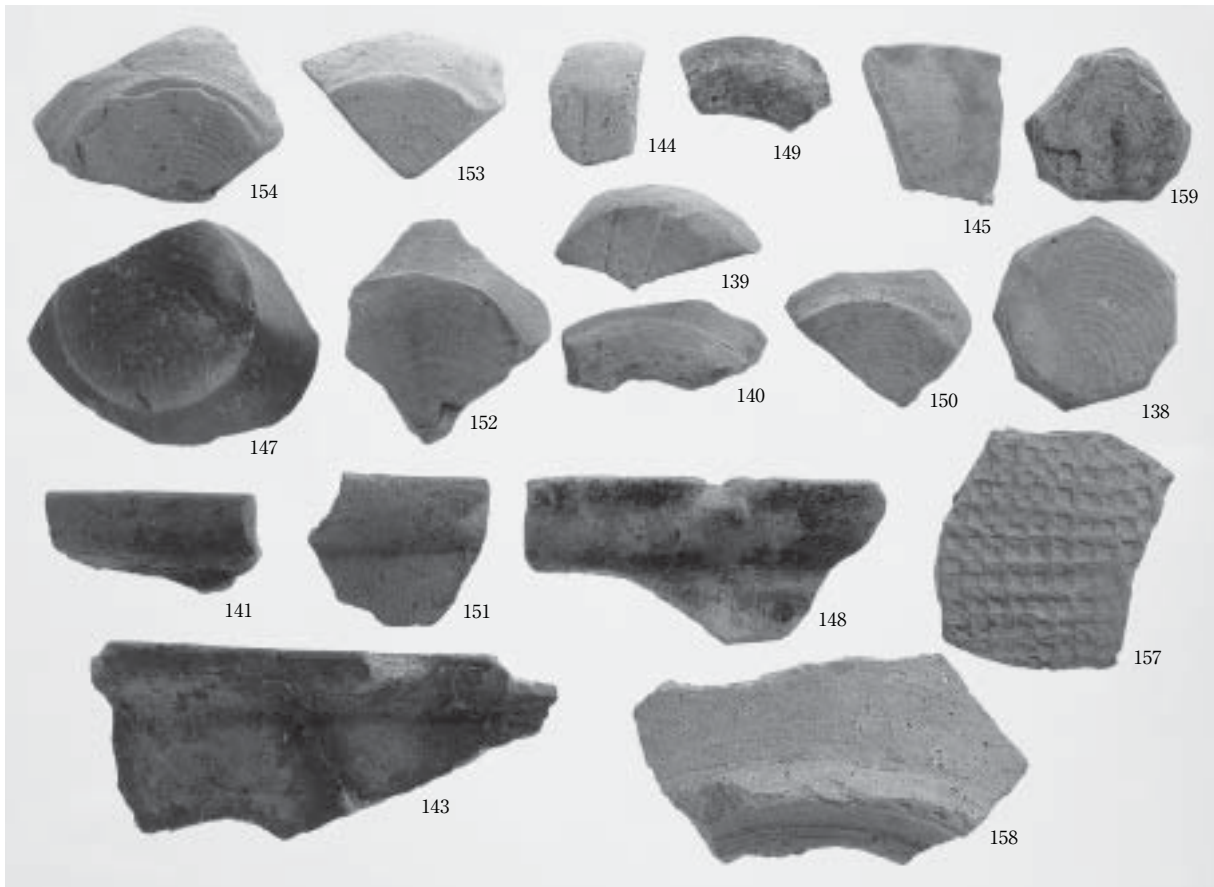
6 土坑28 土層断面 (北から)



7 土坑27 遺物出土状況 (北から)



8 土坑24・31出土遺物



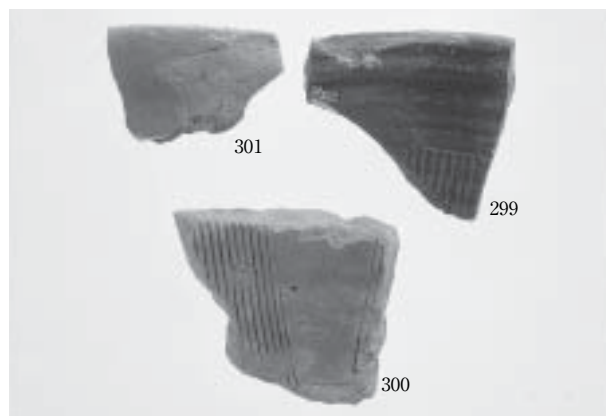
1 土坑（中世前期）出土遺物



2 溝20（東から）



3 溝20 礫出土状況（東から）



4 溝20出土遺物



2 溝2 (北から)



1 溝2・3 (北から)



3 溝1 土層断面 (南東から)



4 溝1 検出状況 (南東から)



5 溝1 (南東から)



V層上面検出遺構群（南から）



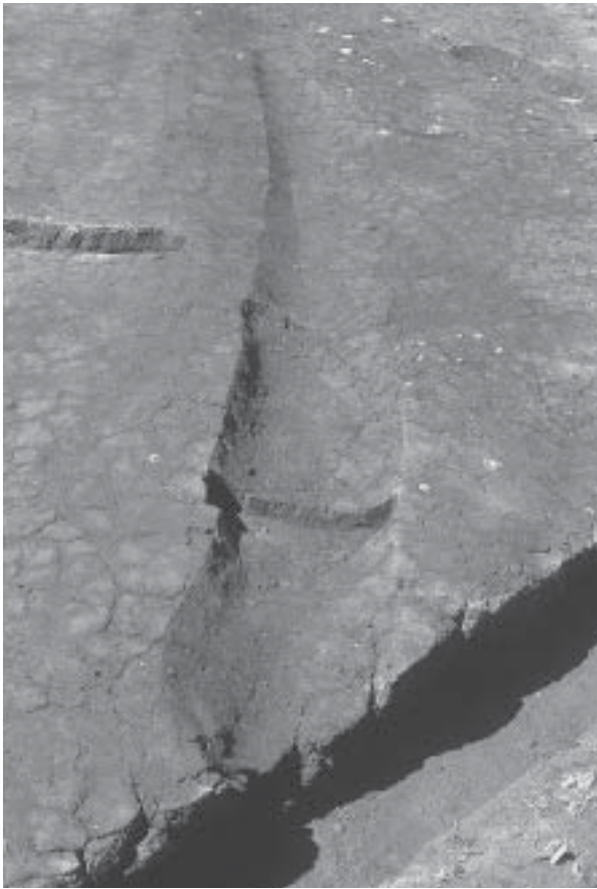
1 B17~19グリッド周辺V層上面検出遺構群 (北から)



2 溝4 (北から)



3 溝6・7 (南から)



1 溝5 (南から)



2 柵列1 (南から)



3 溝8 土層断面 (東から)



4 溝8 土層断面 (東から)



1 溝8・9周辺の地形（東から）



2 溝8・9（西から）



溝9（3区） 磔検出状況（東から）



1 溝9 (3区) (東から)



2 溝9 (7区) (西から)



3 溝9 (3区) 土層断面 (南西から)



4 溝9 (7区) 土層断面 (東から)



5 溝9 (7区) 検出状況 (西から)



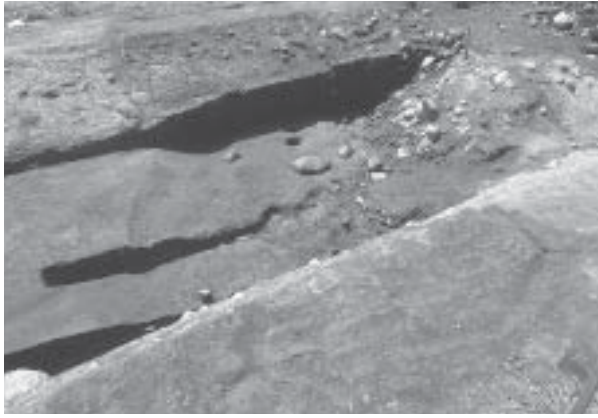
1 溝15 (東から)



2 溝16 (東から)



3 溝15 土層断面 (西から)



1 溝13 (北から)



2 溝13 検出状況 (南東から)



3 溝13 遺物出土状況 (北から)



4 溝13 遺物出土状況 (南から)



5 溝13 自然木出土状況 (南東から)



6 溝13 自然木出土状況 (南東から)

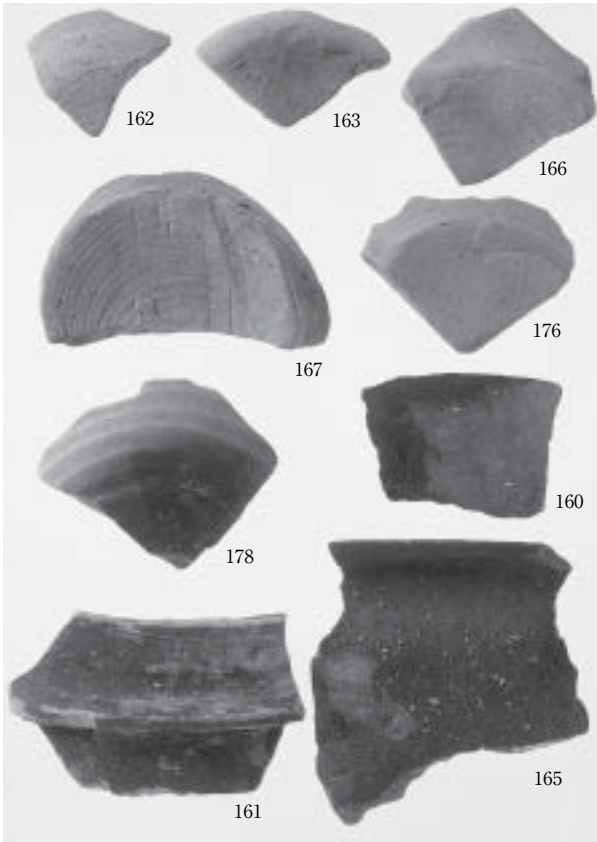


7 溝13 土層断面 (北から)

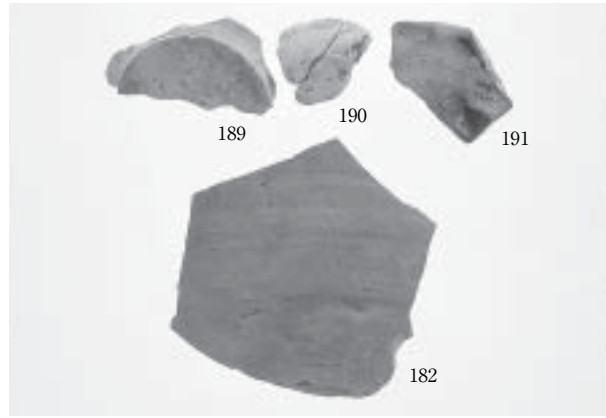


8 溝13出土木製品

図版48



1 溝1・3・4・6・9出土遺物



4 溝13・15出土遺物



5 溝13出土遺物(1)



2 溝8出土遺物



6 溝13出土遺物(2)



3 溝9出土遺物



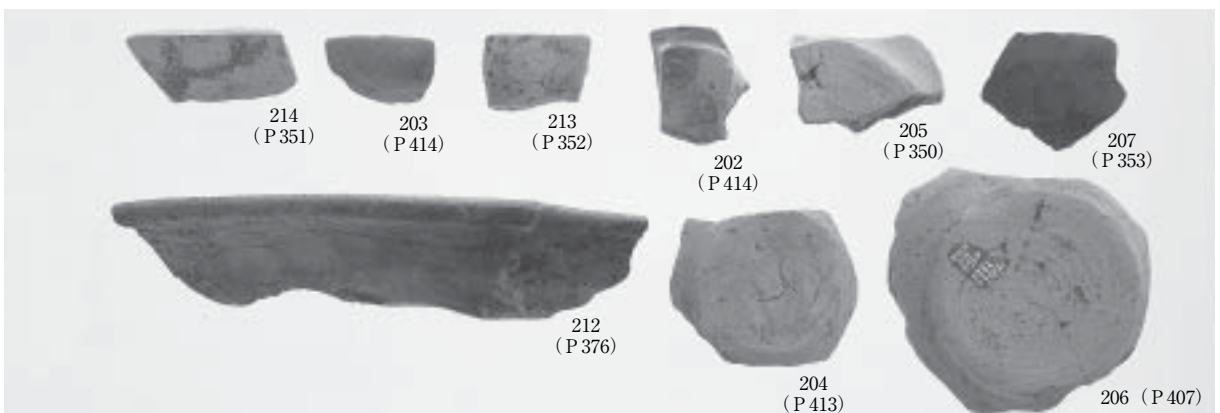
1 耕作痕 検出状況 (南東から)



2 耕作痕 土層断面 (南から)



3 耕作痕 (西から)



4 ピット (中世前期) 出土遺物

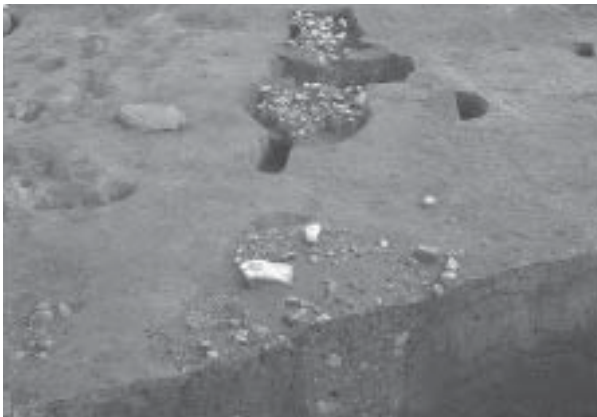
※ () 内は出土ピット番号



1 柵列2 礎盤石出土状況（北から）



2 柵列2（北から）



3 柵列2 礫出土状況（北から）



4 柵列2 礫出土状況（北東から）



5 柵列2 P1土層断面（北西から）



1 柵列2 P2土層断面(北から)



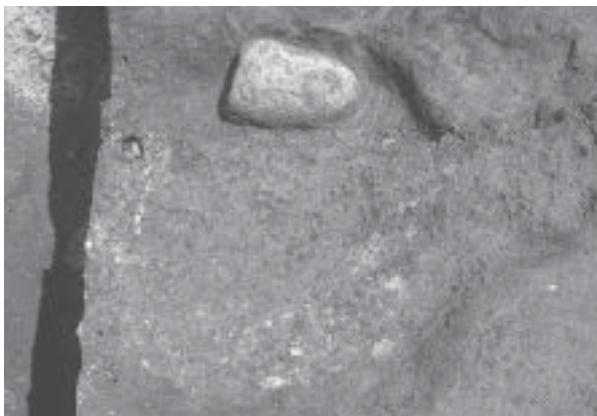
2 柵列2 P2土層断面(北西から)



3 柵列2 P2土層断面(北から)



4 柵列2 P2礎盤石出土状況(北から)



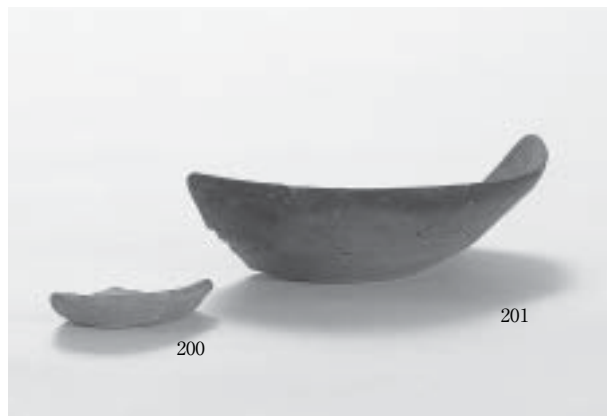
5 柵列2 P1礎出土状況(南西から)



6 柵列2 P1遺物出土状況(東から)



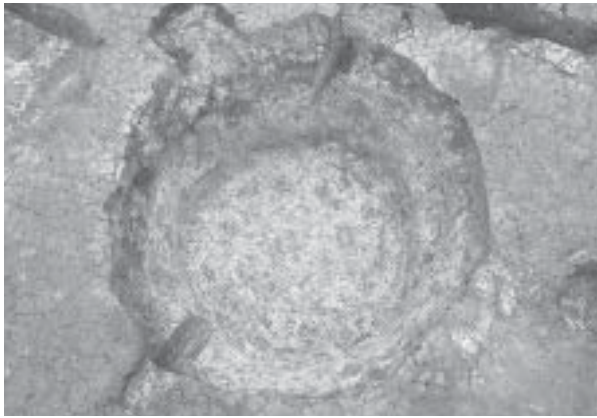
7 柵列2 P1礎盤石出土状況(南から)



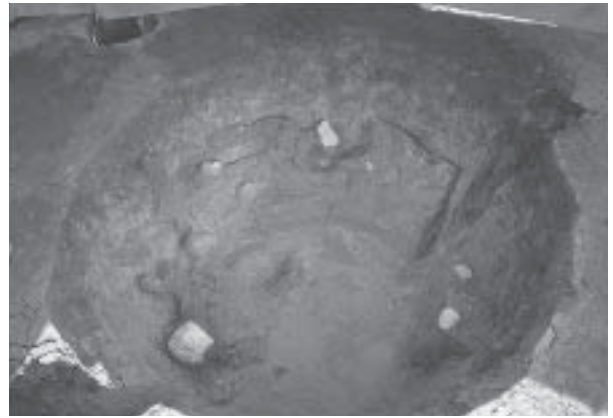
8 柵列2出土遺物



調査地内出土遺物（中世前期）



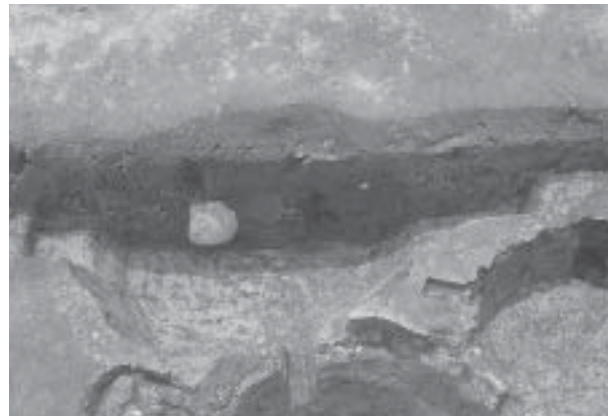
1 土坑33 (西から)



2 土坑33 遺物出土状況 (東から)



3 土坑33・34 土層断面 (東から)



4 土坑34 (北西から)



5 土坑35 (西から)



6 土坑35 土層断面 (東から)



7 調査地内出土石器 (1)



8 調査地内出土石器 (2)



1 調査地内出土石器 (3)



2 調査地内出土石器 (4)



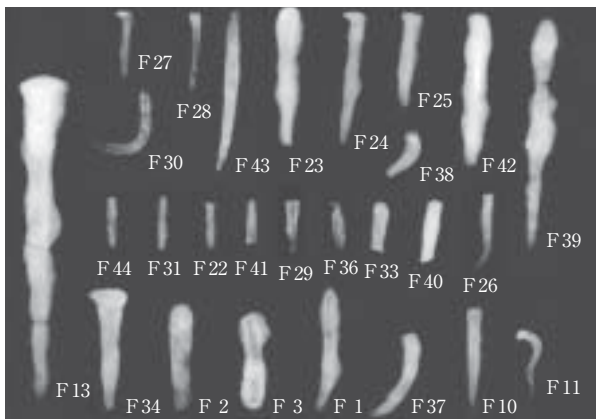
3 調査地内出土石器 (5)



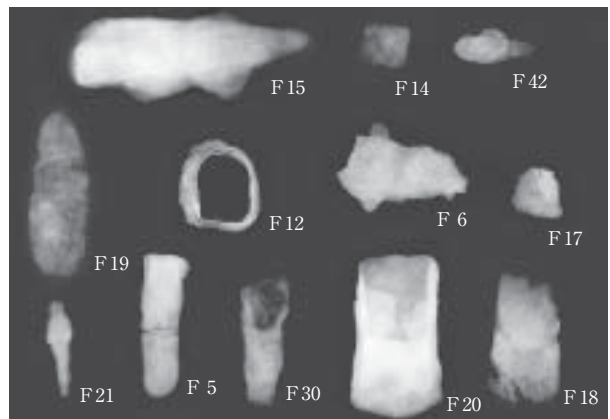
1 調査地内出土石器 (6)



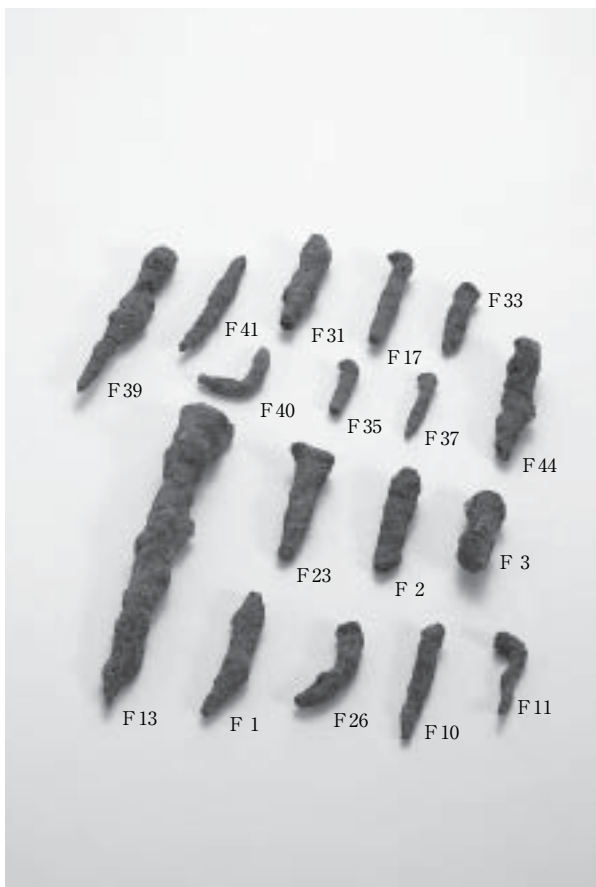
2 調査地内出土鉄関連遺物 (1)



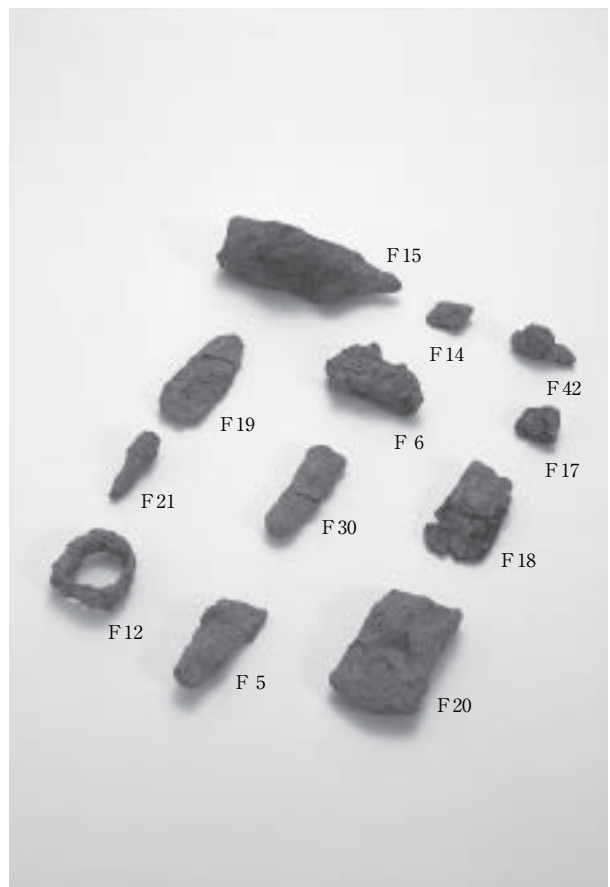
3 調査地内出土鉄関連遺物 X線 (1)



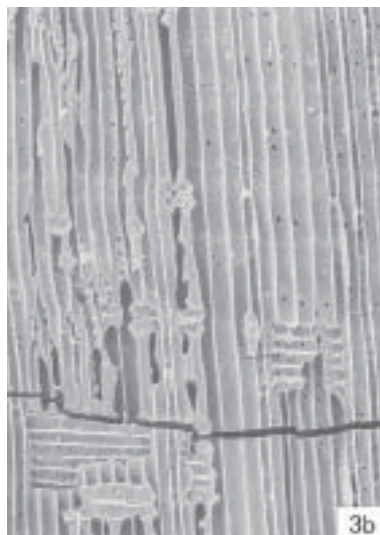
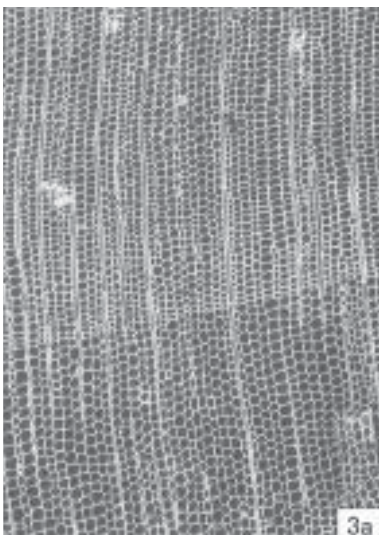
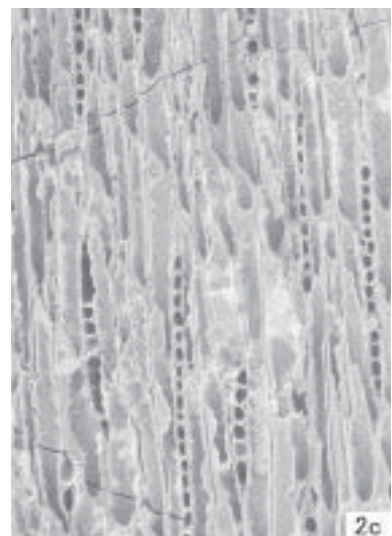
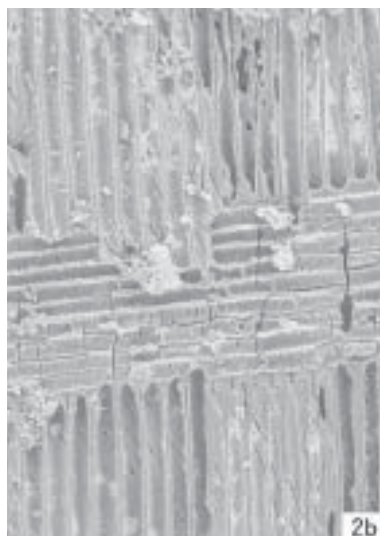
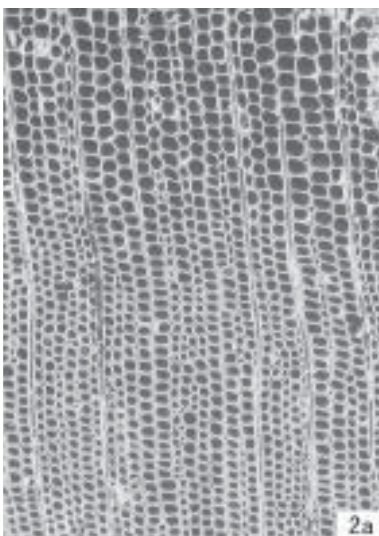
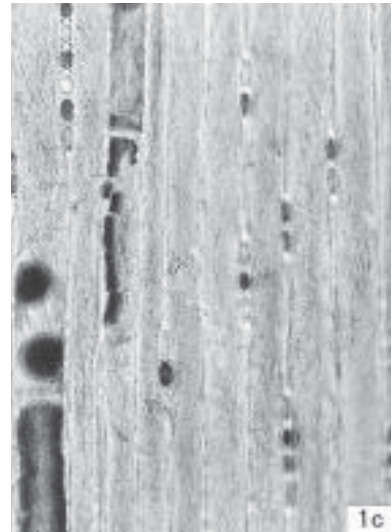
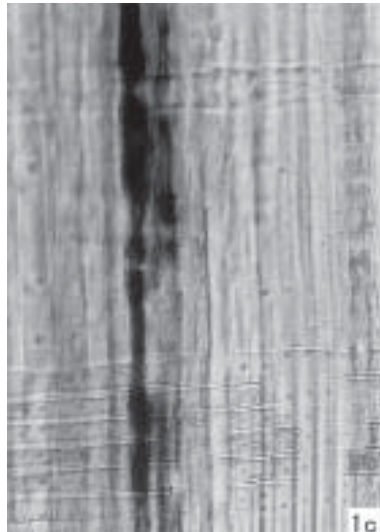
4 調査地内出土鉄関連遺物 X線 (2)



5 調査地内出土鉄関連遺物 (2)

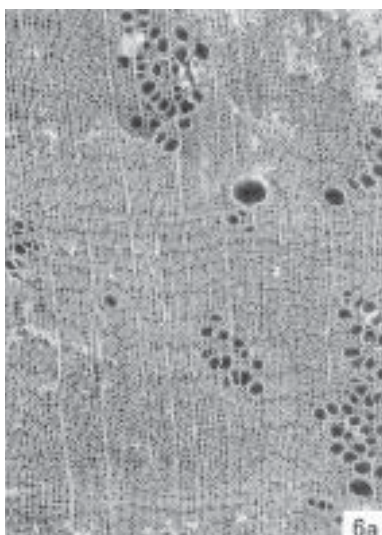
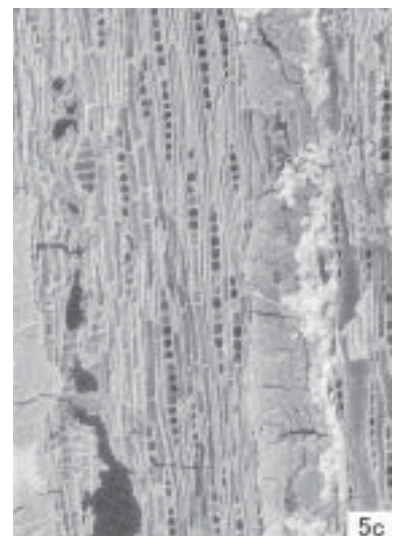
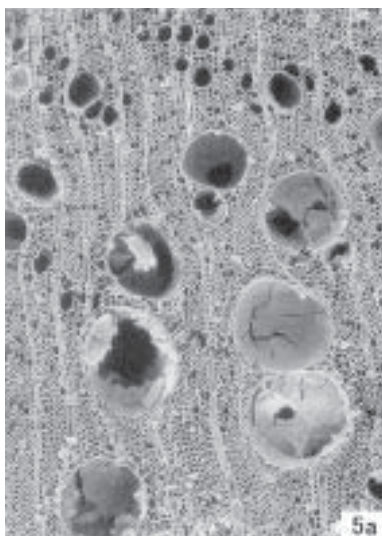
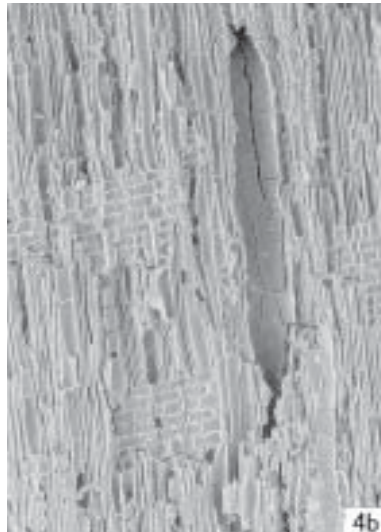
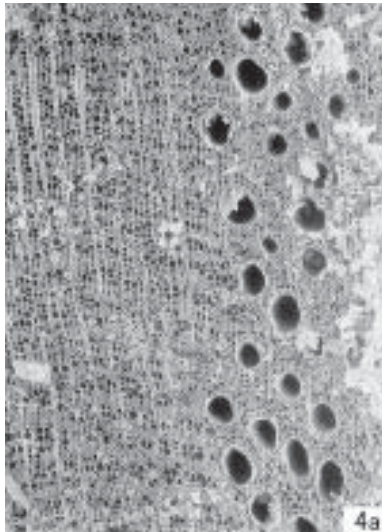


6 調査地内出土鉄関連遺物 (3)



- 1. スギ (試料17)
- 2. モミ属 (試料2)
- 3. マキ属 (試料5)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

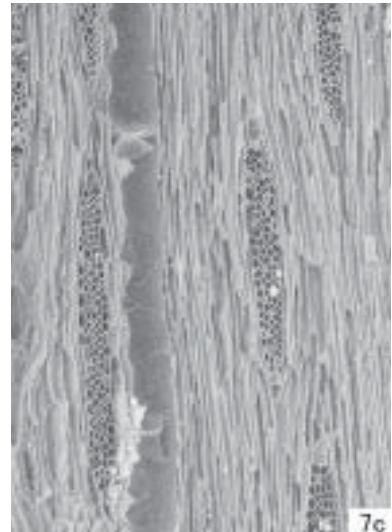
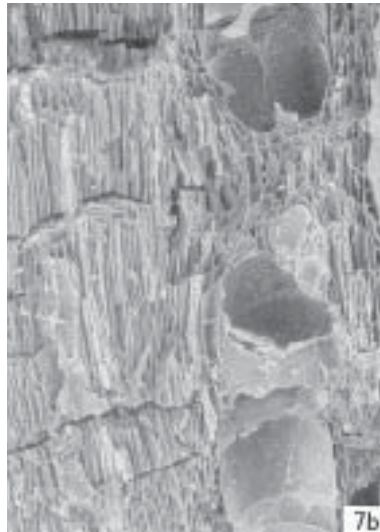
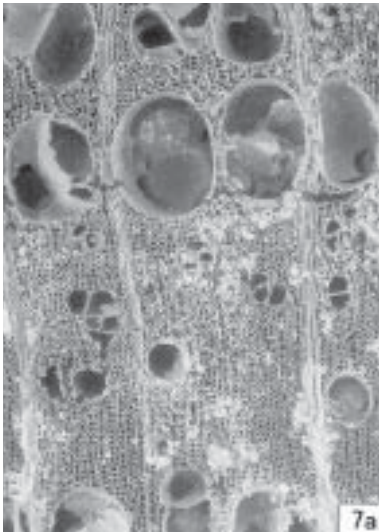
200 μ m : 1a
 100 μ m : 1b,c
 200 μ m : 2-3a
 100 μ m : 2-3b,c



- 4. コナラ属アカガシ亜属 (試料3)
- 5. クリ近似種 (試料9)
- 6. スダジイ (試料6)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c

図版58



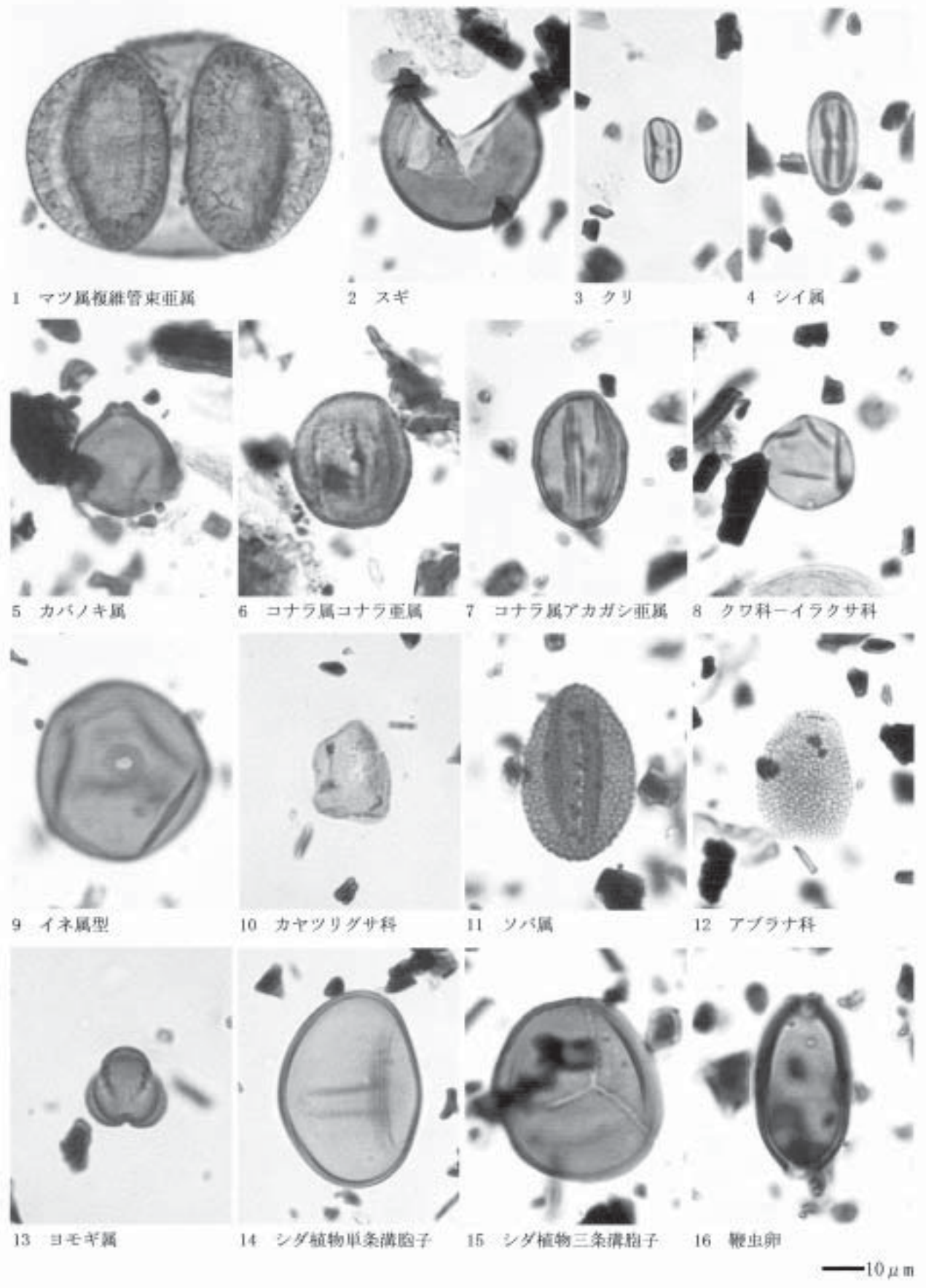
7. ヤマグワ (試料11)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目

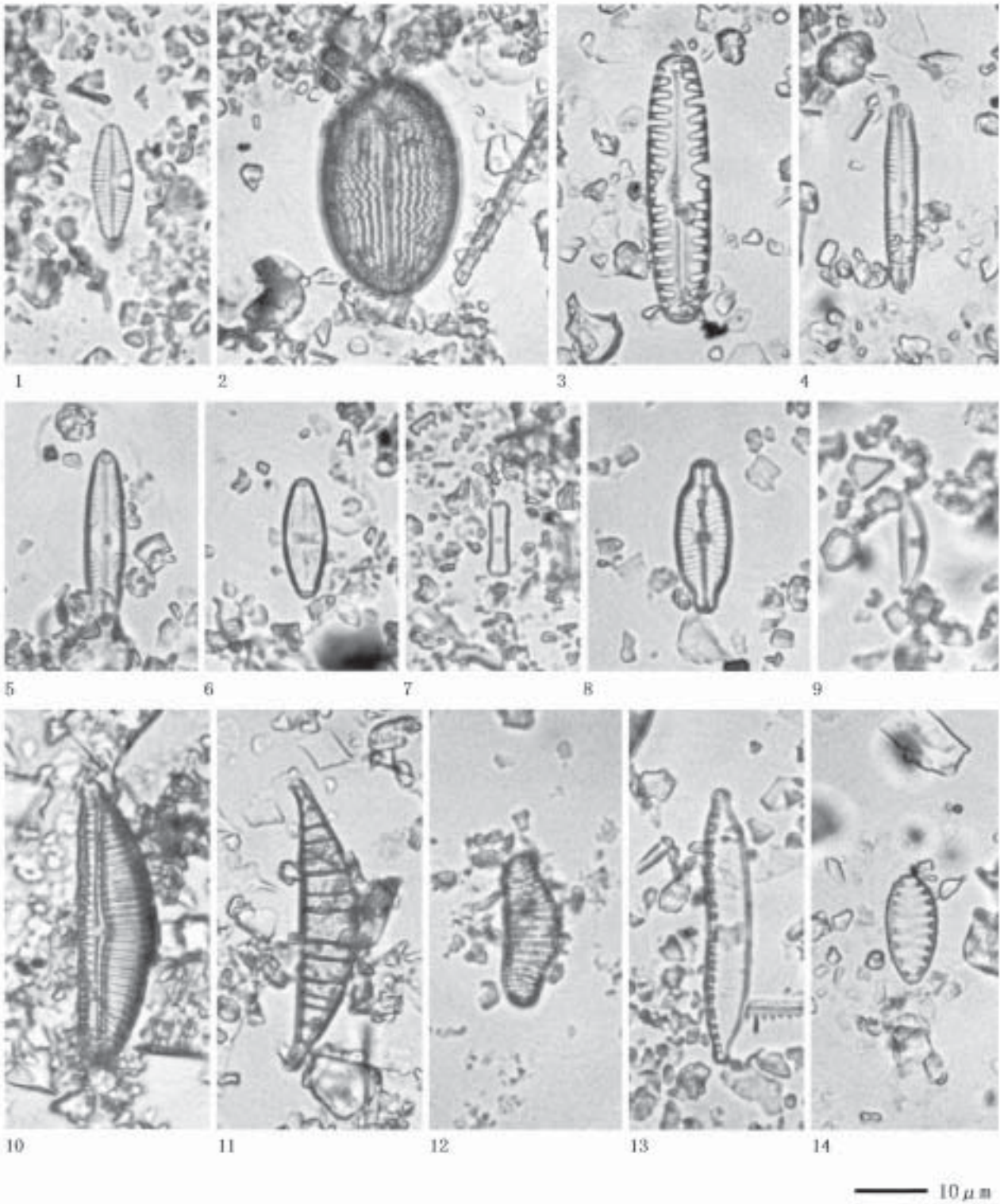
200 μ m:a

200 μ m:b,c

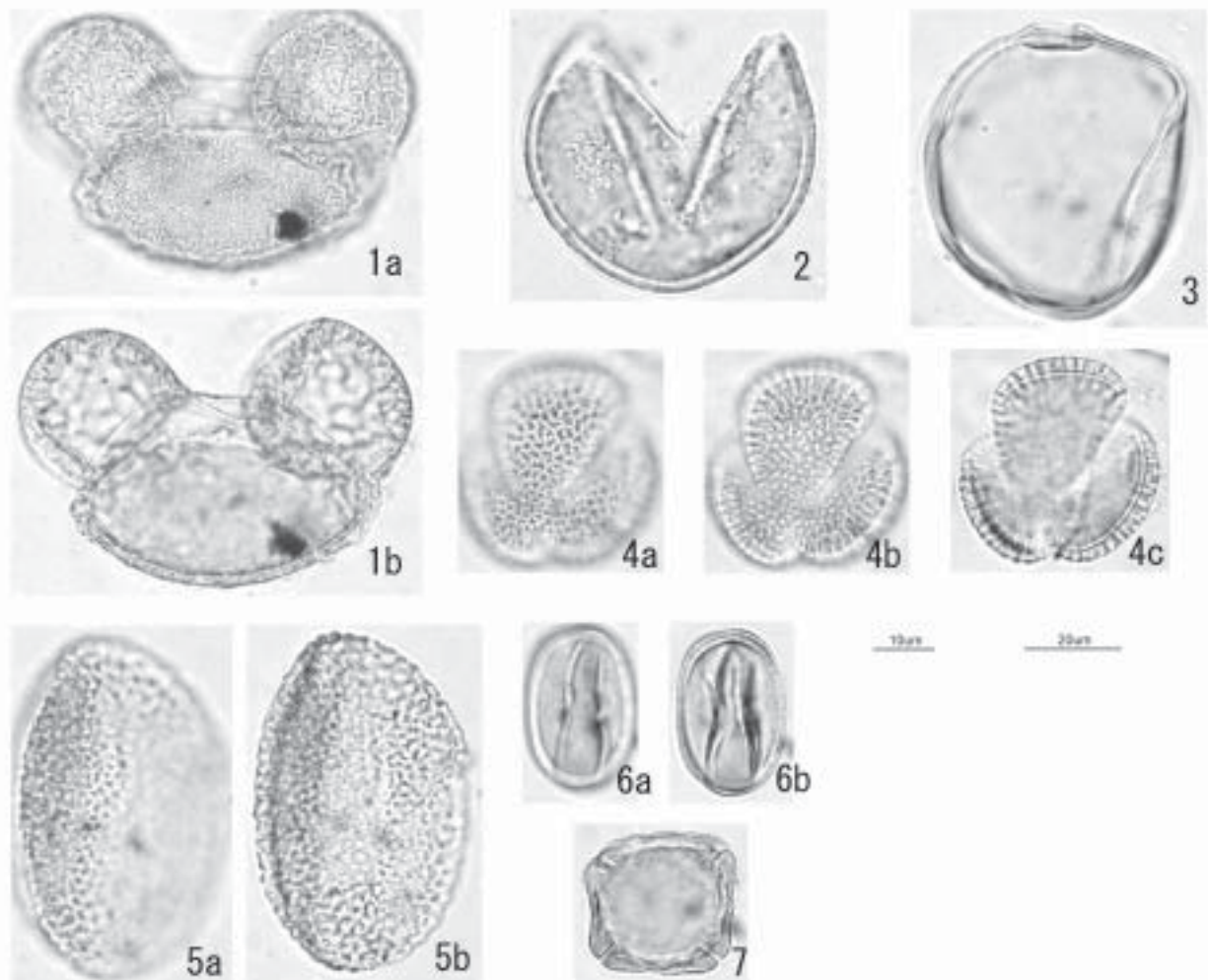
木材・炭化材 (3)



門前上屋敷遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵

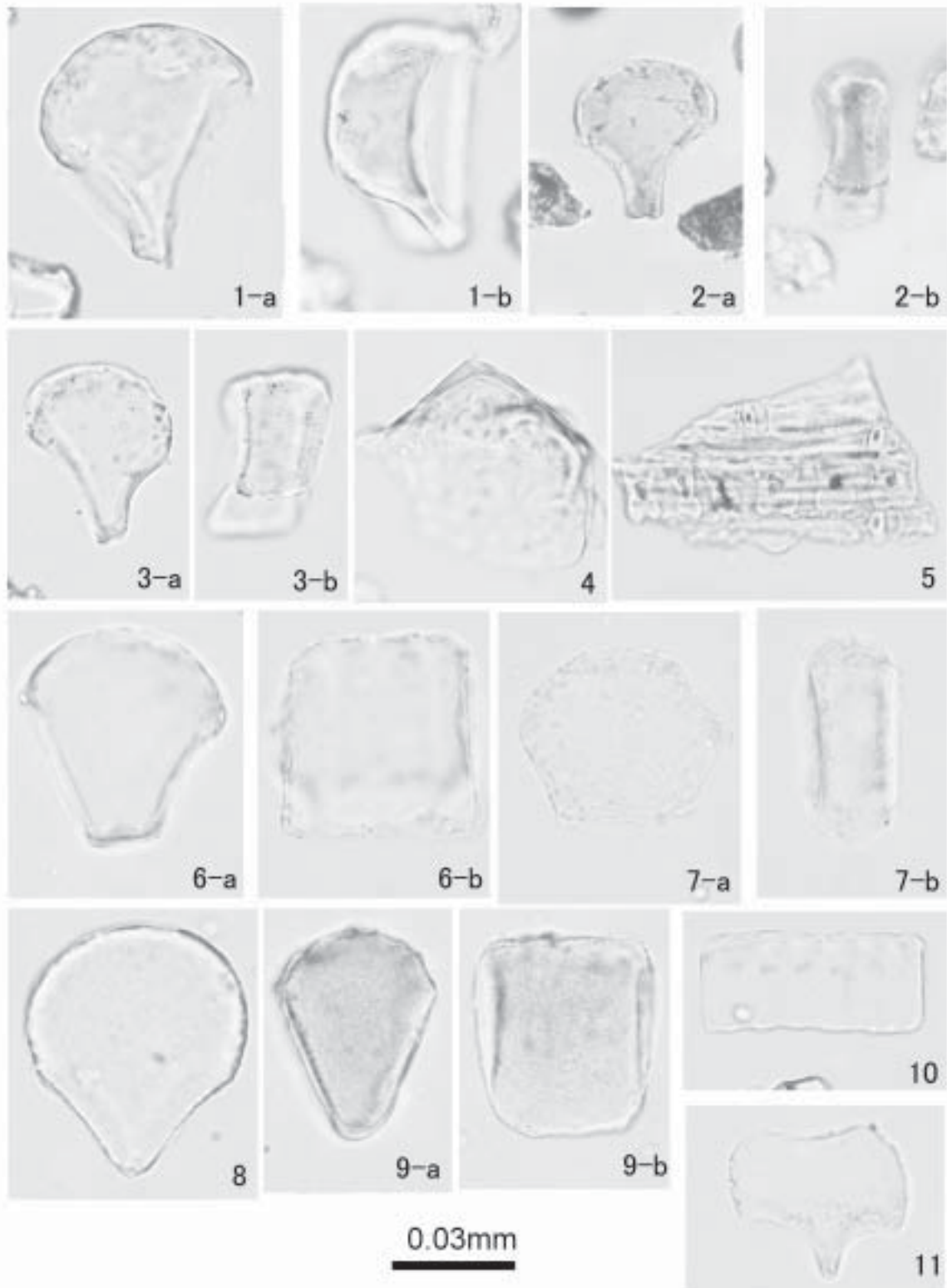


1. *Achnanthes lanceolata* 2. *Cocconeis placentula* 3. *Pinnularia borealis* 4. *Pinnularia subcapitata*
 5. *Pinnularia microstauron* 6. *Navicula mutica* 7. *Navicula contenta* 8. *Navicula elginensis* 9. *Amphora montana*
 10. *Cymbella silesiaca* 11. *Rhopalodia gibberula* 12. *Eunotia proerupta* 13. *Hantzschia amphioxys* 14. *Sirirella ovata*



1. マツ属複維管束亜属、試料3-1、PAL. MN 2181
2. スギ属、試料4-1、PAL. MN 2186
3. イネ科、試料4-1、PAL. MN 2185
4. アブラナ科、試料4-1、PAL. MN 2184
5. ソバ属、試料3-2、PAL. MN 2183
6. キカシグサ属、試料3-1、PAL. MN 2180
7. アリノトウグサ属、試料3-1、PAL. MN 2182

産出した花粉化石 (scale bar 10 μm : 2~7、20 μm : 1)



1~3 : イネ (a: 断面、b: 側面) 1 : 3-6、2 : 3-8、3 : 4-5
 4 : イネ穎部破片 4-5 8 : ヨシ属 (断面) 3-6
 5 : イネ型単細胞珪酸体 3-1 9 : ウシクサ族 (a: 断面、b: 側面) 4-3
 6 : ネザサ節型 (a: 断面、b: 側面) 3-3 10 : キビ族 (側面) 4-3
 7 : クマザサ属型 (a: 断面、b: 裏面) 3-3 11 : シバ属 (断面) 4-2

報告書抄録

ふりがな	もんぜんかみやしきいせき							
書名	門前上屋敷遺跡							
副書名	一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XI							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	105							
編著者名	森本倫弘							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005年（平成17年）3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もんぜんかみやしきいせき 門前上屋敷遺跡	とっとりけんさいはくぐん 鳥取県西伯郡 なわちようおおあざもんぜん 名和町大字門前 あざわかみや 字若宮1304ほか	31387	314	35° 29' 29"	133° 30' 03"	20040405 ～ 20040831	2466m ²	一般国道9号（名和淀江道路）の改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
門前上屋敷遺跡	集落	縄文時代	土坑7		縄文土器 石器		—	
		弥生時代中期	竪穴住居4 土坑5		弥生土器 土製品 被熱粘土塊 石器		—	
		中世前期	土坑20 溝18 柵列2 耕作痕		土師器 陶磁器 木器 鉄器		東西及び南北方向に 延びる溝	
		近世	土坑3 溝2		陶磁器 鉄器			

鳥取県教育文化財団調査報告書105

一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ
鳥取県西伯郡名和町

門前上屋敷遺跡

発 行 2005年3月25日
編 集 財団法人鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680-0151 鳥取市国府町宮下1260
電 話 (0857) 27-6717
発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団
印 刷 今井印刷株式会社